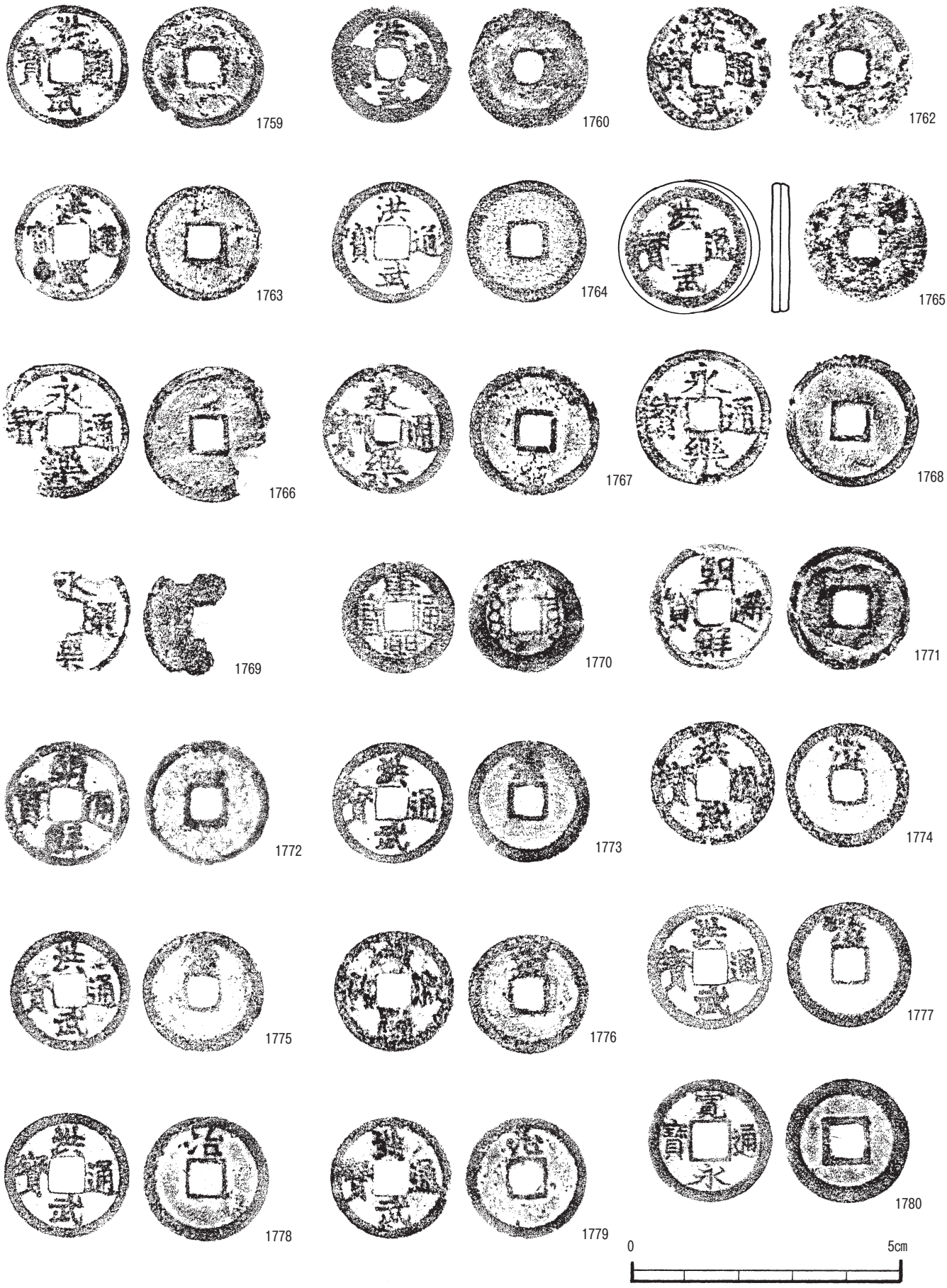
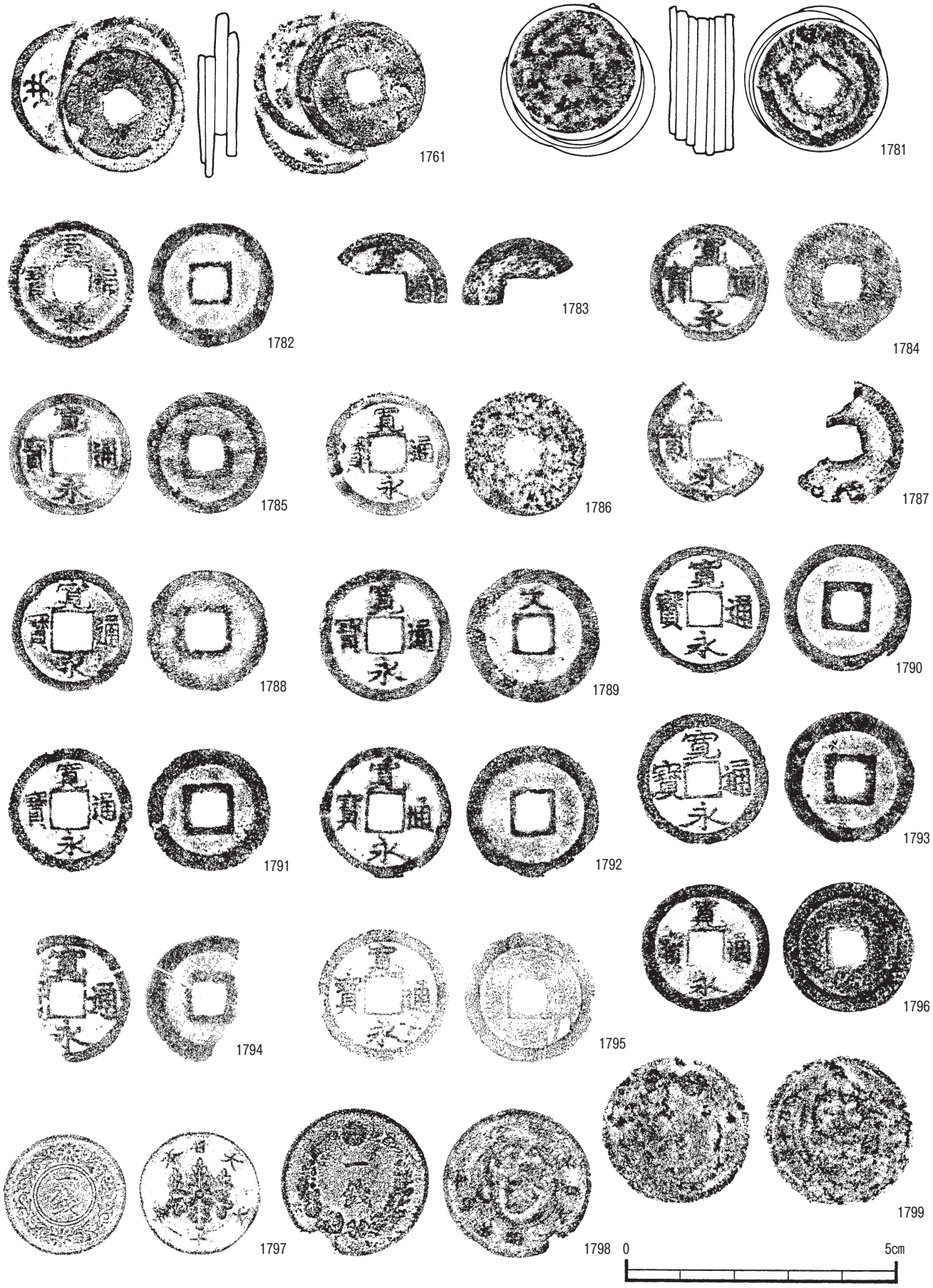

1759
1760
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1780
0
5cm

第276図　古銭４


1761
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799
0
5cm

第277図　古銭５

掘立柱建物跡出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第127図	701	掘立12号 柱穴6	A-25		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	9.4	7.3	1.6	底部糸切り　13ｃ～14ｃ代
第139図	709	掘立30号 柱穴10	G-7		土師器	皿	橙色	ナデ	ナデ	8.3	6.0	1.8	口縁部煤付着

方形竪穴建物状遺構内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第142図	712	竪穴建物１号	B・C-31		白磁	皿	灰白色	透明釉	外面腰部～外底面　露胎 口禿げ	10.2	6.2	2.4		13c後半～ 14c前半	Ⅲ類Ⅸ類　Ｆ期
	713	竪穴建物１号	B・C-31		青磁	椀	灰白色	青磁釉 灰褐色	残存部全面施釉	16.2	－	－	龍泉窯系	13c前後～ 前半	Ｅ期　Ⅱ類
	714	竪穴建物１号	B・C-31		滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－			外面煤付着
第144図	716	竪穴建物２号	D-24		白磁	皿	灰白色	透明釉 灰色	残存部全面施釉　口禿げ	9.6	－	c		13c後半～ 14c前半	Ⅸ類　Ｆ期
	717	竪穴建物２号	D-24		中国陶器	天目碗	暗灰黄色	天目釉 黒褐色	外面腰部以下露胎	－	－	－	中国	13c～14c	

方形竪穴建物状遺構内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第144図	715	竪穴建物２号	D-24		土師器	坏	橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	8.6	2.8	13C後半～14c初頭　太宰府Ⅸ期相当 消失家屋
第145図	718	竪穴建物４号	A'-21		土師器	皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.0	10.0	2.7	見込みに指ナデ
第150図	723	竪穴建物９号	C・D-19		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	9.7	7．4	1.2	

かまど跡内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第153図	725	かまど３号	E-29		炻器	擂鉢	にぶい 赤褐色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	森田E群
第156図	727	かまど６号	E-28	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.6	－	－		16c	森田E群
	728	かまど７号	E-27・28	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	13.0	－	－	龍泉窯系	15c後半	上田B類
第166図	737	かまど20号	G・F-16	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉　口禿げ	11.3	－	－		13c後半～ 14c前半	白磁Ⅸ類F期
	738	かまど20号	G・F-16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	浅黄橙色	－	－	－	－	－		15c～16c	
第171図	740	かまど28号	C-15,D-15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	15c前半	上田C類

かまど跡内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第166図	731	かまど20号	F・G-16		土師器	皿	(内)灰黄色 (外)浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.5	5.1	1.6	底部糸切り
	732	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.8	－	－	
	733	かまど20号	F・G-16		土師器	坏	(内)黒褐色 (外)灰色	ヘラナデ	ヘラナデ	12.7	－	－	
	734	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	坏	(内)浅黄橙色 (外)淡黄色	ナデ	ナデ	13.3	8.5	3.6	底部糸切り
	735	かまど20号	F・G-16		土師器	坏	にぶい 黄橙色	ナデ	ナデ	－	8.0	－	
	736	かまど20号	F・G-17	Ⅱ	土師器	坏	浅黄橙色	ナデ	ナデ	12.6	8.0	3.4	
	739	かまど21号	G-16		土師器	皿	明黄褐色	ナデ	ナデ	－	6.4	－	

製鉄関連遺構出土遺物　観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第173図	742	製鉄３号	D-17		土製品	鞴の羽口	灰黄色	－	－	最大長 17.1	最大径 9.3	－	－		
第174図	744	製鉄６号	F-16		土製品	鞴の羽口	灰白色	－	－	最大長 6.5	－	－	－		

製鉄関連遺構出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第173図	741	製鉄３号	G-17		土師器	皿	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	7.6	5.2	1.0	底部糸切り
第174図	743	製鉄６号	F-16	Ⅱ	土師器	皿	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	7.8	2.6	1.2	

土坑内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第175図	745	土坑３号	B・C-31・32		白磁	椀	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	－	7.2	－		11C後半～ 12C前半	Ⅳ類C期
第176図	748	土坑７号	D-27		青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	－	2.5	－	龍泉窯系	12c中頃～ 後半	Ⅰ類2b　D期
	749	土坑７号	D-27	Ⅱ	中国陶器	天目碗	にぶい橙色	褐釉	外面腰部以下露胎	11.4	－	－			
第177図	751	土坑10号	B-25		中世須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	東播磨系	12c後半	

土坑内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第178図	754	土坑13号	E-18		白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	6.6	－	景徳鎮窯系	16c後半	森田E
	755	土坑13号	E-18		瓦質土器	火鉢	褐灰色	－	－	－	－	－	樺万丈系	15c～16c	
第180図	758	土坑16号	D-17		瓦質土器	捏鉢	灰白色	－	－	－	－	－	樺万丈	14cか？	
	761	土坑18号	C-16		青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	－	5.0	－		14C初頭～後半	Ⅳ類元
第181図	762	土坑19号	D-15		白磁	皿	灰白色	透明釉	外面腰部以下露胎	10.6	－	－		15c後半～16c代	森田D
	763	土坑20号	F-12		青磁	椀	鈍い灰褐色	青磁釉	畳付から高台内面露胎	14.3	6.2	7.3	龍泉窯系	15c後半	上田C類　雷文帯にラマ式蓮弁　見込み花文スタンプ
	764	土坑20号	F-12		青磁	稜花皿	明赤褐色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	14.0	5.0	3.9	龍泉窯系	15c後半	
第182図	765	土坑22号	F-10		青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系		上田B　類
	766	土坑23号	G-10		青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.2	－	龍泉窯系	12c中頃～後半	1類D期　見込みに片彫りで草花状（あるいは雲文状）の簡略化された文様を施す

土坑内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第176図	747	土坑６号	D-28		土師器	皿	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ	7.6	5.3	1.5	底部糸切り
第179図	756	土坑15号	B-16		土師器	坏	浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.3	5.2	2.5	底部糸切り
第180図	757	土坑16号	D-17		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	11.8	8.8	2.8	
	760	土坑17号	D-16		土師器	皿	明赤褐色	ナデ	ヘラケズリ	8.0	5.0	2.0	底部糸切り

溝状遺構内出土遺物　観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）		備考
								最大長	最大径	
第175図	746	土坑４号	B-31		土製品	土錘	浅黄橙	3.8	1.65	

土坑墓内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第184図	772	土坑墓４号	D-31		白磁	輪花皿	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	9.4	3.6	2.3	不明	16c代	
第187図	777	木棺墓７号	C-25		白磁	輪花皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	8.7	4.0	2.7			Ⅲ類Ⅷ類
第193図	807	土坑墓14号	D-14		青磁	坏	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.2	－	－	龍泉窯系	13c中頃～14c初頭	坏Ⅳ類　F期
第195図	816	木棺墓17号	G-9		青花	碗	灰色	透明釉	残存部全面施釉	12.0	－	－	漳州窯系	16c末～17c初頭	

土坑墓内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第185図	775	土坑墓25号	B-30		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.6	6.8	1.6	
	776	土坑墓25号	B-30		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.8	9.0	3.2	13c前半～中葉
第195図	814	木棺墓17号	G-9		土師器	小皿	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	9.8	6.4	2.2	側面に２か所　穿孔あり
	815	木棺墓17号	G-9		土師器	坏	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	9.1	2.8	内面煤付着

礫，土器集積遺構出土遺物

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第197図	821	礫・土器集中・出土遺構	D・E-18		滑石製品	鍋	－	－	－	26.1	11.8	8.2			

ピット内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第199図	822	ピット６号	B-31	Ⅰ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		11c後半～12c前半	Ⅳ類C期
	823	ピット６号	B-31，C-29，D-28	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	16.4	6.3	7.1		12c中頃～後半	椀Ⅴ類D期
	824	ピット６号	B-31		白磁	椀	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	16.3	6.2	5.9	龍泉窯系	12c中頃～後半	Ⅷ-2　D期
	825	ピット６号	B-31	Ⅰ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		12c中頃～後半	ⅤまたはⅥ類D期 見込みに短い櫛目文
	828	ピット９号	D-30		滑石製品	転用品	－	－	－	8.80	7.70	2.70			法量は最大長・最大幅・最大厚
	830	ピット11号	D-29		滑石製品	－	－	－	－	4.0	3.4	1.3	－	－	－
第200図	841	ピット21号	B-24		青磁	椀	灰黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.8	6.5	6.0	龍泉窯系	12c中頃～後半	Ⅰ-2a　D期　見込みに劃花文
	842	イコウ22号	D-24		滑石製品	転用品	－	－	－	2.50	2.00	2.00			法量は最大長・最大幅・最大厚
	846	ピット27号	C-27，D-23	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	7.9	－	－	龍泉窯系	12c中頃～後半	D期
	847	ピット28号	A'-21，C-26	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	外底面露胎	13.0	5.0	3.3	龍泉窯系	12c中頃～後半	Ⅰ-2　D期　見込みにスタンプ文
	848	ピット29号	D-20	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－		15c～16c	849と同一個体
	849	ピット29号	D-20・21	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－		〃	848と同一個体
	850	ピット30号	C-20		滑石製品	転用品	－	－	－	2.00	1.48	1.50			法量は最大長・最大幅・最大厚
	853	ピット33号	D-19		青花	皿	にぶい黄褐色	透明釉	高台内面露胎　見込みに輪状に釉剥ぎ	10.0	4.0	2.0	漳州窯	16c末～17c初頭	貫入　碁笥底

ピット内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第199図	827	ピット８号	C-31		土師器	坏	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	9.0	6.6	1.2	底部糸切り
	829	ピット10号	E-29		土師器	坏	橙色	ナデ	ナデ	12.0	8.0	2.8	底部糸切り
	831	ピット12号	D-29		土師器	坏	橙色	ナデ	ナデ	7.0	4.0	1.9	底部糸切り
	832	ピット13号	E-28		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	9.2	4.7	1.4	底部糸切り
	833	ピット14号	D-28		黒色土器B類	皿	黒	ナデ	ミガキ	10.0	62.0	1.6	底部糸切り
	836	ピット17号	D-28		土師器	坏	浅黄橙色	ナデ	ナデ	7.8	6.0	1.8	底部糸切り
	839	ピット19号	A-24		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	－	6.4	－	
第200図	840	ピット20号	A-25		土師器	皿	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	13.0	8.7	2.8	底部糸切り　13c代半ば
	844	ピット25号	E-23		土師器	坏	（内）橙色 （外）明赤褐色	ナデ	ナデ	10.1	5.0	2.8	底部糸切り
	845	ピット26号	F-24		土師器	坏	明赤褐色	ナデ	ナデ	7.6	4.0	2.1	底部糸切り
	852	ピット32号	E-21		土師器	皿	（内）橙色 （外）浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.0	6.5	1.2	底部糸切り
第201図	859	ピット39号	C-16		土師器	皿	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	8.8	6.8	1.6	底部糸切り

溝状遺構内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第202図	866	溝４	D-37		瓦	平瓦	灰黄色	－	－	－	－	－	中国	11c後半～12c前半	C期
第203図	887	溝７	A-27・28		炻器	擂鉢	暗褐色	－	－	22	8.8	10.1	備前	15c前半	
第204図	889	溝10	C・D-25		中世須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈		
	890	溝11	D-25		中国陶器	鉢	灰赤色	－	－	22.0	－	－	中国	13c代	
第205図	891	溝13	E-22		青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.6	－	景徳鎮窯	16c後半	
	892	溝13	E-22		青花	碗	淡黄色	白濁した透明釉	畳付～高台内面露胎	－	5.0	－	漳州窯	16c末～17c初頭	
	893	溝13	D-22		青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み輪状に釉剥ぎ	13.0	5.0	4.9	漳州窯	16c末～17c初頭	
	894	溝13	E-22	Ⅲ	青花	皿	浅黄色	白濁した透明釉	外面腰部　高台内面露胎	12.0	－	－	漳州窯系	16c末～17c初頭	碁笥底
第206図	898	溝19	B・C-15		白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉　口禿げ	15.2	－	－			Ⅴ類？
	899	溝20	A-16		中国須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈		
	900	溝20	A-16		中国須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈		
	901	溝20	A-16		瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	G期以降
第207図	906	溝21	G-13		青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.4	－			
	907	溝21	G-13		青磁	椀	淡黄色	青磁釉	畳付～高台内底面露胎	－	5.8	－			
	908	溝21	F-12		青磁	椀	灰黄色	青磁釉	高台内面露胎	－	6.0	－			
	909	溝21	E-25，F-12	Ⅱ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	10.4	5.4	3.1	龍泉窯系	13c中頃～14c初頭	Ⅲ類　F期
	910	溝21	G-13		青磁	稜花皿か？	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	－	5.0	－	不明	15c後半	
	911	溝21	F-12		青磁	盤	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	－	13.6	－	龍泉窯系		
	912	溝21	G-13		瓦質土器	擂鉢	暗灰黄色	－	－	－	12.0	－	備前		
	913	溝23	E-5		青磁	坏		青磁釉	－	12.4	4.6	3.7	龍泉窯系	13c中頃～14c初頭	Ⅲ類　F期
	914	溝23	F-7		炻器	擂鉢	暗赤色	－	－	28.0	13.5	9.2	備前	15c後半	

溝状遺構内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第203図	867	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	9.6	6.0	1.2	
	868	溝７	一括		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.2	4.4	1.1	
	869	溝７	一括		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.0	5.6	1.1	
	870	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.0	5.8	1.2	
	871	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.2	6.0	1.1	
	872	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.0	4.8	1.4	
	873	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.7	9.0	3.7	
	874	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.4	
	875	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.4	
	876	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.2	
	877	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.2	9.0	3.6	
	878	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.4	
	879	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.8	7.6	3.2	
	880	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	8.0	3.6	
	881	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.6	8.0	3.6	
	882	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	14.0	9.0	3.6	
	883	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	7.0	－	
	884	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	8.0	－	
	885	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	7.4	－	
	886	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	9.0	－	
第206図	897	溝19	B・C-15		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.8	6.3	1.6	底部糸切り
第207図	903	溝21	F-12		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	7.0	5.0	1.5	
	904	溝21	E-12		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	7.6	6.0	1.2	
	905	溝21	E-12		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	8.8	6.8	1.7	底部糸切り

溝状遺構内出土遺物　観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）		備考
								最大長	最大径	
第205図	895	溝13	D～F-22		土製品	土錘	黄灰	4.4	1.0	
第206図	902	溝20	F-7		土製品	土錘	浅黄橙	3.75	1.6	

中世土師器観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
第208図	915	土師器	Ⅲ	G-16	Ⅱ	口縁～底部	8.6	5.8	1.6	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り
	916	土師器	Ⅲ	A-28	Ⅲ	口縁～底部	9.0	5.8	1.4	ナデ	ナデ	(内)暗灰黄色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	917	土師器	Ⅲ	A-28	Ⅲ	口縁～底部	9.1	5.8	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	918	土師器	Ⅲ	F-16	Ⅱ	口縁～底部	8.6	5.8	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	919	土師器	Ⅲ	B-31	Ⅲ	口縁～底部	8.8	7.0	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	920	土師器	坏	D-12	Ⅱ	口縁～底部	8.7	5.9	2.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	921	土師器	坏	D-32	Ⅰ	口縁～底部	8.0	5.0	2.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	922	土師器	Ⅲ	G-17	Ⅱ	口縁～底部	8.5	5.6	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	923	土師器	Ⅲ	D-16	－	口縁～底部	－	7.6	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	924	土師器	坏	D-6	Ⅲ	口縁～底部	7.7	5.1	1.9	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り
	925	土師器	Ⅲ	A-12	－	口縁～底部	8.4	6.6	1.4	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り　スス付着
	926	土師器	Ⅲ	A-25	Ⅲ	口縁～底部	9.3	7.0	1.9	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り　スス付着
	927	土師器	Ⅲ	D-7	Ⅲ	口縁～底部	8.5	6.6	1.4	ナデ	ナデ	淡黄色	底部糸切り
	928	土師器	Ⅲ	F-16	Ⅱ	口縁～底部	8.0	6.0	1.1	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り
	929	土師器	Ⅲ	B-16	Ⅲ	口縁～底部	7.8	6.0	1.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	930	土師器	坏	－	－	口縁～底部	14.8	10.0	4.2	ナデ	ナデ	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい橙色	底部糸切り　スス付着
	931	土師器	坏	F-30	Ⅱ	口縁～底部	11.0	7.4	3.0	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	932	土師器	坏	F-15・16	Ⅱ	口縁～底部	12.4	6.8	3.4	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り
	933	土師器	坏	D-31	Ⅱ	口縁～底部	13.0	7.9	3.1		ナデ	明黄褐色	底部糸切り
	934	土師器	坏	F-17	Ⅱ	口縁～底部	13.1	8.9	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	935	土師器	坏	D-7	Ⅲ	口縁～底部	13.6	8.4	2.9	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	936	土師器	坏	－	－	口縁～底部	13.6	8.0	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	937	土師器	坏	－	－	口縁～底部	11.6	7.4	3.2	ナデ	ナデ	(内)にぶい黄橙色 (外)浅黄色	底部糸切り
	938	土師器	坏	B-15	－	口縁～底部	12.4	7.9	3.5	ナデ	ナデ	(内)浅黄橙色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	939	土師器	坏	C-15	Ⅲ	口縁～底部	12.4	8.4	3.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	940	土師器	坏	A-31	Ⅲ	口縁～底部	13.0	8.6	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	941	土師器	坏	C-15	Ⅲ	口縁～底部	12.2	8.6	3.0	ナデ	ナデ	(内)浅黄橙色 (外)黄橙色	底部糸切り
第209図	942	黒色土器	椀	B-31	Ⅱ	底部	－	7.2	－	ミガキ	ナデ	(内)黒褐色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り　スス付着
	943	黒色土器	坏	C-28	Ⅲ	口縁～底部	15.4	6.5	4.7	ミガキ	ミガキ	(内)黒色 (外)にぶい黄褐色	底部糸切り　スス付着
	944	黒色土器	椀	C-20	Ⅱ	口縁～底部	11.6	4.8	3.1	ナデ	ナデ	(内)黒褐色 (外)黄褐色	底部糸切り
	945	黒色土器	椀	B-36	Ⅱ	底部	－	8.4	－	ミガキ	ナデ	(内)黒色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	946	黒色土器	椀	A-28	Ⅲ	底部	－	6.6	－	ミガキ	ミガキ	(内)黒色 (外)橙色	底部糸切り
	947	黒色土器	坏	－	－	口縁～底部	11.6	8.8	1.4	ミガキ	ミガキ	黒色	底部糸切り
	948	黒色土器	坏	－	－	口縁～底部	10.8	7.0	2.0	ミガキ	ミガキ	黒色	底部糸切り
	949	赤色土器	椀	C-32	Ⅱ	底部	13.2	7.8	3.6	ナデ	ナデ	(内)明赤褐色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	950	土師器	坏	B-26	Ⅲ	口縁～底部	7.4	4.9	2.3	ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)浅黄橙色	底部糸切り　スス付着
	951	土師器	坏	E-30	Ⅱ	口縁～底部	8.0	5.0	2.1	ナデ	ナデ	(内)にぶい橙色 (外)浅黄橙色	底部糸切り
	952	土師器	Ⅲ	F-25	Ⅱ	口縁～底部	9.0	6.0	1.1	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り　スス付着
	953	土師器	坏	D-8	Ⅲ	口縁～底部	8.2	4.6	2.1	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り
	954	土師器	Ⅲ	D-16	Ⅱ	口縁～底部	7.6	6.0	1.3	ナデ	ナデ	(内)にぶい黄橙色 (外)橙色	底部糸切り
	955	土師器	坏	E-24	Ⅱ	口縁～底部	7.2	4.5	1.8	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り
	956	土師器	Ⅲ	G-16	Ⅱ	口縁～底部	8.0	5.6	1.4	ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り

土錘観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm)		胎土の色調	備考
						最大長	最大径		
第210図	957	土製品	穿孔土器	D-32	Ⅲ	5.0	1.05	橙色	
	958	土製品	穿孔土器	C-32	Ⅲb	4.8	0.8	明黄褐色	
	959	土製品	穿孔土器	C-32	Ⅲa	3.8	1.2	にぶい褐色	
	960	土製品	穿孔土器	F-18		2.8	1.2	浅黄橙色	
	961	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	4.3	1.2	灰白色	
	962	土製品	土錘	C-29	Ⅱ	3.6	1.15	浅黄色	
	963	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.7	0.9	橙色	
	964	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	3.35	0.9	橙色	
	965	土製品	土錘	C-9	Ⅲ	4.15	1.05	赤褐色	
	966	土製品	土錘	E-13	Ⅱ	4.85	1.1	黒色	
	967	土製品	土錘	B-24	Ⅱ	3.9	1.25	にぶい黄橙色	
	968	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	3.2	0.8	にぶい赤褐色	
	969	土製品	土錘	G-17	Ⅳ	4.6	1.15	淡黄色	
	970	土製品	土錘	E-29	Ⅱ	4.2	0.95	暗赤灰色	
	971	土製品	土錘	G-17	Ⅱ	4.1	1.1	橙色	
	972	土製品	土錘	A'-29	Ⅲ	3.7	1.1	灰黄色	
	973	土製品	土錘	D-20	Ⅱ	3.95	1.1	にぶい黄橙色	
	974	土製品	土錘	E-24	Ⅱ	4.35	1.1	灰黄色	
	975	土製品	土錘	C-27	Ⅱ	4.5	1.4	(外)灰白色 (内)にぶい黄褐色	
	976	土製品	土錘	D-27	Ⅱ	4.3	1.1	明赤褐色	
	977	土製品	土錘	A'-29	Ⅲ	6.1	1.5	灰白色	
	978	土製品	土錘	E-22	Ⅱ	5.55	1.0	浅黄色	
	979	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	6.7	1.4	浅黄色	
	980	土製品	土錘	F-25	Ⅱ	4.95	1.25	灰黄褐色	
第211図	981	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	4.4	1.4	にぶい黄橙色	
	982	土製品	土錘	A-24	Ⅲ	4.9	1.55	にぶい黄橙色	
	983	土製品	土錘	B-34	Ⅲb	3.9	1.3	にぶい赤褐色	

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm)		胎土の色調	備考
						最大長	最大径		
第211図	984	土製品	土錘	E-17		4.7	1.5	灰白色	
	985	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	3.25	1.7	にぶい褐色	
	986	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.8	1.85	にぶい褐色	
	987	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	3.8	1.8	にぶい黄橙色	
	988	土製品	土錘	A'-26	Ⅲ	4.0	1.65	(外)にぶい褐色 (内)明黄褐色	
	989	土製品	土錘	F-26	Ⅳ上	4.0	1.8	橙色	
	990	土製品	土錘	G-14	Ⅱ	3.8	1.3	灰黄色	
	991	土製品	土錘	F-18	Ⅱ	4.45	1.7	橙色	
	992	土製品	土錘	D-31	Ⅱ	4.7	1.55	橙色	
	993	土製品	土錘	A'-28	Ⅲ	3.8	1.6	にぶい黄橙色	
	994	土製品	土錘	E-29	Ⅱ	3.8	1.85	(外)にぶい褐色 (内)にぶい黄橙色	
	995	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.95	1.6	にぶい黄橙色	
	996	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.9	1.45	橙色	
	997	土製品	土錘	E-15	Ⅱ	4.9	2.05	橙色	
	998	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.25	1.35	にぶい黄橙色	
	999	土製品	土錘	A'-28	Ⅲ	3.65	1.8	にぶい黄橙色	
	1000	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	3.8	1.65	にぶい黄橙色	
	1001	土製品	土錘	C-27	Ⅱ	2.2	2.2	にぶい褐色	
	1002	土製品	土錘	D-25	Ⅱ	5.0	2.4	黒褐色	
	1003	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	4.1	2.6	(外)暗灰色 (内)緑灰色	
	1004	土製品	土錘	E-24	Ⅱ	4.3	2.65	黒色	
	1005	土製品	土錘	B-22	Ⅱ	6.4	2.75	にぶい黄橙色	
	1006	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	5.5	1.9	淡黄色	
	1007	土製品	土錘	D-32	Ⅲ	8.8	3.2	にぶい褐色	
	1008	土製品	土錘	F-23・24		5.5	3.25	黒褐色	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第212図	1009	D-35	Ⅰ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	腰部以下露胎	-	9.0	-	越州窯系	A期　8c末期～10c中頃	越Ⅰ-5類	見込みに胎土目跡
	1010	B-33	-	青磁	椀	浅黄色	青磁釉	残存部全面施釉	21.0	-	-	越州窯系	A期　8c末期～10c中頃	椀Ⅱ類	
	1011	E-30	Ⅰb	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	-	5.6	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰa類	
	1012	E-6	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.8	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ-1b類	
	1013	A-16 B-16	Ⅱb Ⅲ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ-1c類	
	1014	D-14	Ⅲ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ類	
	1015	D-14	Ⅲ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ類	内面に点描文
	1016	C・D-31 E-31	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	15.2	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅱ類	
	1017	-	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	15.2	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅱ類	
	1018	B-24 E-24	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅱ類	
第213図	1019	D-7	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面胴部以下露胎	19.2	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	内面に櫛状施文具の花文
	1020	D-25 G-14	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	内面に櫛状施文具の花文
	1021	E-28	Ⅳ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	
	1022	C-37	Ⅲb	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	
	1023	A-17	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	
	1024	-	-	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	17.4	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-1類	
	1025	表採	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.4	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1026	D-14	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1027	A-23	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.6	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1028	C-9	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.0	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
第214図	1029	C-36・37	Ⅱa Ⅲa Ⅲb	青磁	椀	浅黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.0	5.0	6.9	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1030	B-9 C-8	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	18.0	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-3類	
	1031	B-13	Ⅱb	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	17.6	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-3類	
	1032	表採	-	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.2	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-3類	
	1033	D-4	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面高台脇～高台内面露胎	15.4	5.6	6.2	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	分割線のみ
	1034	D-22	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.2	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	
	1035	D-21	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.0	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	見込みに茸状模様の片彫り
	1036	C-14	Ⅳ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.0	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	
	1037	D-27	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	
	1038	-	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-6b類	
	1039	C-12	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.2	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-6a類	
	1040	表採	-	青磁	椀	にぶい赤褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.0	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに「金玉満堂」の印文
第215図	1041	D-30	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.1	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに「金玉満堂」の印文
	1042	E-31	Ⅲ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	16.6	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1043	表採	-	青磁	椀	灰色	青磁釉	口唇部釉剥ぎ	-	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1044	F-17	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.4	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1045	D-18	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1046	G-4	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1047	D-16	Ⅱ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.2	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	
	1048	表採	-	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.6	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに片彫り蓮花文
	1049	-	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.8	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに片彫り蓮花文
	1050	F-26	Ⅱ下	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.0	-	龍泉窯系	E期　13c前後～前半	椀Ⅱ-a類	
	1051	-	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.4	-	-	龍泉窯系	E期　13c前後～前半	椀Ⅱ-a類	見込みに草花文様の印文
	1052	D-28 F-26	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.2	-	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-a類	見込みに草花文様の印文
	1053	D-23	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	-	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1054	E-15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.0	-	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1055	C-32	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	-	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1056	-	-	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.6	-	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1057	B-37	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.2	-	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
第216図	1058	A'-30	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.2	5.8	6.6	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1059	A-24	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	17.0	3.6	5.9	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1060	C-15 F-25	Ⅱ Ⅴ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.4	4.8	6.7	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1061	C-21	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.4	4.8	6.4	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1062	E-22	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.6	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1063	表採	-	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.2	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1064	D-18	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.4	-	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1065	D-15	Ⅱ	青磁	椀	褐灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	15.4	6.0	7.8	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ-イ類	見込みに草花文様の印文
	1066	D-22 E-22	Ⅰb Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.0	-	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ-イ類	見込みに草花文様の印文
	1067	E-29	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	-	4.6	-	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	高台内面に他器の一部付着 見込みに草花文様の印文
	1068	C-30	-	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	5.2	-	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	見込みに草花文様の印文
	1069	E-18 F-16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	6.0	-	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	
第217図	1070	F-25	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	-	-	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	
	1071	E-20・26	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.8	-	-	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第217図	1072	E-20・26・27 F-23・24・26	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	15.2	5.6	7.0	龍泉窯系	G期 14c初頭～後半	椀Ⅳ類	見込みに草花文
	1073	－	－	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.8	－	龍泉窯系	G期 14c初頭～後半	椀Ⅳ類	見込みに草花文
	1074	B-15 A・B-15	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	龍泉窯系	G期 14c初頭～後半	椀Ⅳ類	
	1075	F-12	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	－	5.6	－	福建省	G期 14c初頭～後半	福建省産	
	1076	F・G-18	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1077	表採	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.0	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1078	D-21	Ⅰb	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1079	D-15	Ⅱa	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	13.6	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1080	D-7	Ⅳ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	－	6.4	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	内面に陽刻
第218図	1081	F-17	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	高台内面露胎	－	5.2	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	見込みに草花文様の印文
	1082	F-27	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1083	E-30	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1084	C-20	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1085	－	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1086	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1087	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.6	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1088	E-29・30	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1089	E-15	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1090	D-27	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.8	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1091	D-35	Ⅰ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.4	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1092	G-14	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1093	D-28	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1094	C-13	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1095	C-12 E-13・14・15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1096	F-25	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.2	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1097	D-15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1098	D-7	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1099	G-16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	内面にラマ式蓮弁
	1100	C-15	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	内面にラマ式蓮弁
	1101	E-28	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	18.6	－	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	
第219図	1102	F-19	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	13.2	6.4	6.0	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	見込みに草花文様の印文
	1103	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	－	5.9	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	見込みに草花文様の印文
	1104	F-30	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	－	6.6	－	龍泉窯系	G～J期 14c初前後～16c前・中	上田C類	見込みに草花文様の印文 高台内面に他器の一部付着
	1105	F6～18	－	青磁	椀	浅黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	15.2	5.8	7.1	福建省	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	見込みに草花文様の印文
	1106	B・C-28 D-30	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内面露胎	17.4	6.4	7.7	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	見込みに草花文様の陽刻
	1107	F-8	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	15.4	6.8	7.5	福建省か？	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	内面に草花文様の陽刻
	1108	D-29・30 F-30	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎見込み円状に釉剥ぎ	15.2	5.8	7.4	龍泉窯	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1109	D-20	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	13.4	5.4	7.0	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1110	表採	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	13.4	5.4	6.4	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1111	B-30 E-17	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内面露胎見込み円状に釉剥ぎ	17.0	5.8	7.6	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1112	F-25	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	13.4	5.4	6.5	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1113	F-26	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	12.8	4.5	4.7	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
第220図	1114	E-26	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1115	E-23	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1116	D-7	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	－	－	龍泉窯系	G～H期 14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1117	E-24	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	－	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1118	F-25・26	Ⅳ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	12.2	4.2	4.9	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1119	C-22 E-21・22	Ⅰb Ⅱ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1120	F-19	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	－	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1121	D-27	Ⅱ	青磁	椀または皿	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.2	－	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1122	F-19	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	－	4.9	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	見込みに草花文
	1123	C-29	－	青磁	椀	褐灰色	青磁釉	高台内面露胎	－	5.1	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1124	B-15	表採	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	4.2	－	龍泉窯系	H～I期 14c後・末～15c後	上田E類	
	1125	B-21	Ⅲ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面腰部以下露胎	10.0	－	－	同安窯系	D期 12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-1a類	
	1126	－	－	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面腰部以下露胎	－	4.8	－	同安窯系	D期 12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-1b類	
	1127	－	－	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	－	4.7	－	同安窯系	D期 12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-1b類	
第221図	1128	－	－	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	10.4	4.0	1.8	同安窯系	D期 12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-1b類	
	1129	D-24	－	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	9.9	3.6	2.0	同安窯系	D期 12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-1b類	
	1130	C-32	Ⅲb	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面底部釉掻き取り	－	5.4	－	同安窯系	D期 12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-1b類	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第221図	1131	G-5	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面底部釉掻き取り	-	4.4	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-2b類	
	1132	B-30 E-31	Ⅱ Ⅲ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面底部釉掻き取り	-	4.4	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-2b類	
	1133	-	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面釉掻き取り	9.0	5.8	2.6	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-2b類	
	1134	E-31	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面釉掻き取り	-	6.2	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-2b類	
	1135	-	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	口唇部釉剥ぎ	10.6	5.8	1.6	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安皿Ⅰ-2b類	
	1136	B-31	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面釉剥ぎ	12.8	3.6	2.7	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	皿Ⅰ類	見込みに櫛目の草花文
	1137	B-29	-	青磁	皿	浅黄色	青磁釉	外底面釉剥ぎ	-	3.6	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	皿Ⅰ類	
	1138	C-13	-	青磁	皿	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	9.8	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	皿Ⅰ類	
	1139	D-16	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面釉剥ぎ	-	4.7	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	皿Ⅰ類	見込みに櫛目の草花文
第222図	1140	-	-	青磁	皿	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	14.0	7.0	3.0	龍泉窯系	G期　14c初頭～中頃	皿Ⅳ類	
	1141	E-15	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	12.4	6.0	2.9	福建省	G期　14c初頭～中頃	福建省産青磁皿	赤化部分(見込・高台内面)
	1142	D-16	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	12.6	8.0	3.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1143	F-27	Ⅱ・Ⅲ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	11.8	7.0	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1144	C-28	Ⅲ	青磁	皿	灰色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	12.0	6.0	2.7	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1145	D-28	Ⅱ	青磁	皿	浅黄色	青磁釉	高台内面露胎	12.6	7.6	4.0	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1146	F-26	Ⅰb	青磁	皿	灰色	青磁釉	高台内面露胎	13.6	7.3	3.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1147	F-18	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	12.8	5.8	4.0	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	見込みに草花文の印文
	1148	D-9	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	8.2	4.4	2.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1149	B・C-30	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	10.8	5.7	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	見込みに草花文の印文
	1150	E-28	Ⅲ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	10.8	5.4	3.3	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	見込みに草花文の印文
	1151	D-13	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	10.4	5.0	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
第223図	1152	F-24	Ⅱ	青磁	綾花皿	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	10.6	5.0	2.9	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	見込みに草花文の印文
	1153	D-7	Ⅲ	青磁	綾花皿	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	12.0	5.5	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	見込みに草花文の印文
	1154	C-4	Ⅲ	青磁	綾花皿	灰褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	12.6	5.8	3.3	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	見込みに草花文の印文
	1155	D-16	-	青磁	綾花皿	灰色	青磁釉	高台内面露胎	11.6	5.6	3.4	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	双魚文 水銀朱(高台内面)
	1156	D-7	-	青磁	綾花皿	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	10.2	5.1	3.0	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1157	D-19	Ⅲ	青磁	綾花皿	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	7.4	2.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	
	1158	F-17	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	底部露胎	-	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	碁笥底
	1159	F-19	Ⅱ	青磁	皿	灰色	青磁釉	底部露胎	11.6	4.6	3.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	碁笥底
	1160	G-17	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	底部釉剥ぎ	-	7.2	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代皿	碁笥底
	1161	-	-	青磁	浅型椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	15.8	6.0	3.2	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	浅型椀Ⅰ類	
	1162	D-32	Ⅲa	青磁	小椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	11.8	-	-	龍泉窯系	E期　13初頭～前半	小椀Ⅱ-b類	
	1163	B-28	Ⅲ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	-	5.4	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	小椀Ⅲ類	赤色に発色（高台周辺釉掻き取り部分）
	1164	C-18	Ⅱ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	-	4.8	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	小椀Ⅲ類	
	1165	-	-	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	3.8	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	小椀Ⅲ類	
	1166	F-9	Ⅱ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	10.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代小椀	
	1167	E-30	Ⅲ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代小椀	
	1168	-	-	青磁	坏	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面釉剥ぎ	-	5.4	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	坏Ⅲ類	赤色に発色（高台周辺釉掻き取り部分）
	1169	E-14・15 F-18	Ⅱ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	10.8	6.0	3.2	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	坏Ⅳ類	
	1170	E-28・29	Ⅱ Ⅲ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	11.0	5.6	3.1	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代坏	
第224図	1171	D-16	Ⅱ	青磁	坏	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	12.2	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代坏	
	1172	-	-	青磁	坏	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代坏	
	1173	-	-	青磁	盤	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に二条釉剥ぎ	22.0	9.0	4.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	口縁部稜花
	1174	D-29・30	Ⅲ Ⅳ	青磁	盤	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	28.0	17.6	5.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1175	G-11	Ⅱ	青磁	盤	灰色	青磁釉	底部釉剥ぎ	-	9.6	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	碁笥底
	1176	E-30	Ⅱ	青磁	盤	灰色	青磁釉	底部釉剥ぎ	-	10.4	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	碁笥底
	1177	F-25	Ⅱ下	青磁	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	29.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1178	E-30・31 F-30	Ⅰb Ⅱ	青磁	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	25.2	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1179	E-28	表採	青磁	盤	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	30.6	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1180	表採	-	青磁	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	口縁部稜花
	1181	C-20	Ⅱ	青磁	盤	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	折口皿
第225図	1182	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-		A期　8c末期～10c中頃	椀Ⅰ類	玉縁口縁部
	1183	C-27・28 D-28	Ⅱ Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	5.9	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅱ-4a類	
	1184	F-20	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	6.4	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅱ類	
	1185	A-23 B-29	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	16.4	7.4	5.7		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1186	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	13.6	5.7	6.4		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1187	A'-18	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	胴部以下露胎	16.0	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1188	F-25	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	15.6	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1189	C-34	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	-	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1190	A・D-30	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	16.0	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1191	C-19	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	14.8	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1192	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	7.0	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1193	B-16	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部下位露胎	17.2	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2a類	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第225図	1194	A・B-16	Ⅱb Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	5.8	-		C期 11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2b類	
	1195	E-30	Ⅰb	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	5.8	-		C期 11c後半～12c前半	椀Ⅴ類	
	1196	B-30	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	16.6	5.9	7.4		C期 11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2a類	
	1197	D-2	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	18.8	-	-		C期 11c後半～12c前半	椀Ⅴ類	
第226図	1198	D-27	Ⅱ Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	17.4	5.8	6.2		C期 11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2a類	
	1199	B-30	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～底部露胎	17.0	-	-		D期 12c中頃～後半	椀Ⅴ-4b類	内面に劃花文
	1200	D-25	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	6.2	-		D期 12c中頃～後半	椀Ⅴ-4b類	
	1201	D-31	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	13.8	5.2	4.2		C期 11c後半～12c前半	椀Ⅵ-1a類	
	1202	D-31	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.6	-	-	龍泉窯系	C期 11c後半～12c前半	椀Ⅶ-b類	口縁部輪花
	1203	D-7	-	白磁	椀	褐黄色	透明釉	腰部以下露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	-	7.0	-		D期 12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1204	E-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	-	6.2	-		D期 12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1205	F-8	-	白磁	椀	浅黄色	透明釉	腰部以下露胎	-	-	-		D期 12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1206	B-30	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	18.6	-	-	龍泉窯系	D期 12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1207	D-30	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	-	-		D期 12c中頃～後半	椀Ⅷ-1類	
	1208	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	-	-	-		F期 13c後半～14c前半	椀Ⅸ類	
	1209	C-24	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	14.2	-	-		F期 13c後半～14c初頭	椀Ⅸ類	
	1210	D-15	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	15.4	-	-		F期 13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ類	
	1211	F-16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	13.6	-	-		F期 13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ類	
	1212	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿 畳付～高台内面は粗い	-	5.3	-		F期 13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ-2類	
	1213	D-22	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	高台内面露胎 口禿	-	4.8	-		F期 13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ類	
第227図	1214	D-22	表採	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	19.4	-	-		I・J期 15c中頃～16c中頃	森田E類	
	1215	D-18	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	-	6.0	-	龍泉窯系	G期以降 14c初頭～	森田B・C類	
	1216	B-13	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	14.3	5.6	4.8		G期以降 14c初頭～	-	
	1217	E-24	Ⅲ	白磁	椀	浅黄橙色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	-	6.2	-		G期以降 14c初頭～	森田D類	
	1218	F-26	Ⅰb	白磁	椀	淡黄色	透明釉	腰部下位露胎	-	5.9	-		G期以降 14c初頭～	森田C類	
	1219	C-24	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-		G期以降 14c初頭～	森田C類	
	1220	D-20	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	-	-	-		C期 11c後半～12c前半	皿Ⅱ1-b類	口縁部断面三角形の玉縁
	1221	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	8.9	4.2	2.2		D期 12c中頃～後半	皿Ⅲ-1類	
	1222	E-20	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	10.2	4.8	2.7		D期 12c中頃～後半	皿Ⅲ-1類	
	1223	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	9.6	5.0	2.4		D期 12c中頃～後半	皿Ⅲ類	
	1224	D・E-25	Ⅲ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.0	4.3	2.4		D期 12c中頃～後半	皿Ⅲ類	
	1225	C-32	Ⅲ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	9.3	4.4	2.7		D期 12c中頃～後半	皿Ⅲ-2類	
第228図	1226	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台外面露胎	10.6	3.4	3.1		C期 11c後半～前半	皿Ⅵ-1a類	
	1227	-	-	白磁	皿	黄浅橙色	透明釉	残存部全面施釉	11.0	-	-		C期 11c後半～前半	皿Ⅵ-1a類	
	1228	D-31	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.4	-	-		D期 12c中頃～後半	皿Ⅷ-1b類	ヘラ描き草花文
	1229	B-29	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	9.0	1.7	2.2	龍泉窯	D期 12c中頃～後半	皿Ⅷ類	
	1230	D-31	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	口禿	9.4	6.2	1.7		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1a類	
	1231	B-16 B・C-17	Ⅲ	白磁	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ 口禿	9.2	6.0	1.8		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1a類	口縁部に黒色の付着物
	1232	D-30	-	白磁	皿	白色	透明釉	底部露胎 口禿	10.0	7.6	1.8		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1b類	
	1233	E-23	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	底部露胎 口禿	10.6	6.2	2.1		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1b類	
	1234	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	底部露胎 口禿	10.6	7.0	1.9		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1b類	
	1235	-	-	白磁	皿	淡黄色	透明釉	底部露胎 口禿	11.6	8.0	2.4		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1b類	外面の施釉が粗く凸凹
	1236	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	底部露胎 口禿	11.4	6.4	3.2		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-c類	
	1237	D-29	Ⅱ	白磁	皿	灰黄色	透明釉	底部露胎 口禿	11.6	-	-		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1d類	
	1238	D-23	Ⅱ	白磁	皿	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	11.4	-	-		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1d類	
	1239	A-30	Ⅲ	白磁	皿	灰白色	透明釉	底部円状に釉剥ぎ 口禿	11.3	6.0	3.3		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1d類	
	1240	D-30	-	白磁	皿	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	10.6	6.0	3.3		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1d類	
	1241	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	10.8	-	-		F期 13c中頃～14c初頭	皿Ⅸ-1b類	
	1242	-	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.7	4.4	2.4		H期 14c後半～15c前半	森田D群	割高台 四か所の目跡
	1243	E-17	Ⅱ	白磁	皿	淡黄色	透明釉	腰部～高台内面露胎	9.5	4.1	2.4		H期 14c後半～15c前半	森田D群	割高台 四か所の目跡
	1244	G-15	-	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	7.5	3.4	2.8		H期 14c後半～15c前半	森田D群	割高台 四か所の目跡
第229図	1245	D-15	Ⅱa	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	9.4	4.8	2.2		H期 14c後半～15c前半	森田D群	割高台 五か所の目跡1
	1246	E-31	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.9	4.5	2.9		H期 14c後半～15c前半	森田D群	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第229図	1247	C-29	－	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.6	3.6	3.2		H期　14c後半～15c前半	森田D群	
	1248	E-24	Ⅲ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.1	3.4	3.5		H期　14c後半～15c前半	森田D群	見込みに四か所の目跡
	1249	D-29・30	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.5	4.0	3.1	福建省	H期　14c後半～15c前半	森田D群	露胎部分は黒色
	1250	D-30	－	白磁	皿	淡黄色	透明釉	高台～高台内面露胎	8.4	3.6	2.9		H期　14c後半～15c前半	森田D群	
	1251	F-20	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.2	6.8	3.2		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ群	
第229図	1252	F-6	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.4	4.6	3.2		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ群	
	1253	E-7	－	白磁	皿	灰白色	透明釉	高台～高台内面露胎	11.0	4.6	2.7		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1254	F-17	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.0	5.2	2.5		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱb群	
	1255	R-17	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.5	4.7	2.9		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1256	E-30	－	白磁	綾花皿	灰黄色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	9.0	3.6	3.3		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1257	－	－	白磁	綾花皿	黄浅色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ群	
	1258	E-30	Ⅲ上	白磁	綾花皿	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.7	4.8	3.0		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1259	－	－	白磁	綾花皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ類	
	1260	E-18	Ⅱ	白磁	綾花皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E類	
	1261	F-19	Ⅱ	白磁	白磁坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.8	6.2	3.1		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ類	
	1262	E-30	Ⅱ	白磁	白磁坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.0	4.9	2.1		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ類	
	1263	F-25	Ⅰb	白磁	多角坏	淡黄色	透明釉	腰部以下露胎	－	－	－		H期以降　14c後・末～	明代坏	
	1264	E-24	Ⅱ	白磁	多角坏	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	－	3.2	－		H期以降　14c後・末～	明代坏	
第230図	1265	B・C-29	－	青磁	壺	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.2	－	－				
	1266	D-16・22 F-25	Ⅰb	白磁	壺	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－				水注か？
	1267	F-25	Ⅱ	青磁	小型壺	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－				
	1268	D-35	－	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系			耳壺
	1269	F-8	Ⅱ	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	5.0	－	－	龍泉窯系			
	1270	表採	－	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	9.6	－	－				耳壺
	1271	C・D-22	Ⅰb	青磁	大型瓶	灰白色	青磁釉	底部外面～高台内面露胎	－	8.0	－				
	1272	E-3 F-4	Ⅱb	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	－	3.8	－				
	1273	－	－	青磁	鉢	にぶい黄橙色	青磁釉	内面露胎	10.6	－	－				
	1274	E-16	Ⅱ	青磁	鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－				
	1275	－	－	白磁	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.8	－	－				
	1276	E-9	Ⅱ	白磁	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	12.8	－	－				
	1277	F-16 F・G-17	Ⅱ	青磁	鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	－	－				
	1278	F-21	－	白磁	鉢	明黄褐色	透明釉	外面腰部～底部露胎	8.4	4.4	4.1				
	1279	D-28	－	白磁	鉢？	灰白色	－	－	－	－	－				口縁部に5㎜程度の穴
第231図	1280	B-29	Ⅱ	青磁	燭台	灰色	青磁釉	上面施釉	3.4	庇径 6.8	1.5	龍泉窯系			
	1281	F-25	Ⅱ	青磁	香炉	浅黄色	青磁釉	内面・高台内面露胎	－	－	－				三足
	1282	－	－	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面中位以下露胎	－	－	－				
	1283	D-26	－	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面中位以下露胎 畳付～高台内面露胎	6.5	3.8	4.8				三足
	1284	D-28	Ⅲ	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	7.6	－	－				三足
	1285	F-17	Ⅱ	白磁	香炉	浅黄色	透明釉	残存部全面施釉	10.0	－	－				
	1286	D-35	－	白磁	香炉	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.0	－				割高台
	1287	－	－	白磁	坏	灰白色	透明釉	内面見込み輪状に釉剥ぎ 畳付釉剥ぎ	6.3	2.6	3.0				
	1288	－	－	白磁	坏	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	6.6	－	－				
	1289	－	－	白磁	坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	6.8	2.4	4.4				
	1290	E-25	Ⅱ	白磁	坏	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	5.0	－	－				
	1291	F-26	Ⅰb	白磁	坏	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－				
	1292	F・G-26	表採	青白磁	蓋	灰白色	青白磁釉	内面露胎	2.9	庇径 5.2	1.2				上面に草花文を型押し
	1293	C-15	Ⅳ	青白磁	蓋	灰白色	青白磁釉	内面露胎	4.0	庇径 6.6	1.1				上面に草花文を型押し
	1294	－	－	青白磁	蓋	灰白色	青白磁釉	内面露胎	7.8	庇径 10.0	－				上面に菊座状の文様
	1295	D-20	Ⅱ	青白磁	合子蓋	灰白色	青白磁釉	身受け部・内面露胎	7.8	－	－				
	1296	D-24	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	外底面露胎 蓋との接合面を釉剥ぎ	－	4.8	－				
	1297	E-29	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	蓋受け部を釉剥ぎ 腰部～底面露胎	－	3.6	－				
	1298	C-24	Ⅲ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	腰部～底面露胎 蓋との接合面を釉剥ぎ	5.2	3.2	1.7				
	1299	D-23	Ⅲ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	外面露胎	－	7.0	－				
	1300	D・E-22	Ⅲ	青白磁	皿	白色	翡翠釉	畳付～高台内面露胎	6.0	3.4	1.2	景徳鎮窯			稜花皿
第232図	1301	F-17	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.4	－	－	漳州窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	貫入
	1302	F-17	Ⅱ	青花	碗	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	13.2	－	－	漳州窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	貫入
	1303	F-18	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.2	－	－	景徳鎮窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	稜花碗
	1304	E-18	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	
	1305	－	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.6	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1306	C-7	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.4	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1307	E-30	Ⅰb	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.0	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1308	D・E-4	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.7	－	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第232図	1309	F-8	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	－	5.2	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1310	表採	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.2	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1311	F-3・4	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1312	D・E-4	－	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1313	E-21・23	Ⅰb Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.0	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
第233図	1314	C・D-5	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.7	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1315	C・D-21	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.0	－	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに花卉文
	1316	C-29 D-30	Ⅲ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.8	－	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに花卉文
	1317	E-25 F-22・24	Ⅱ Ⅱ下	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.4	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1318	B-24	Ⅲ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.6	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1319	－	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	－	5.4	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1320	E-19	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	－	4.8	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1321	D-10	－	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	15.4	－	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1322	D-7	－	青花	碗	浅黄橙色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み輪状に釉剥ぎ	－	5.0	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1323	F-23	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1324	C-31 D-19 E-19	Ⅱ Ⅲb	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 内面見込釉剥ぎ	12.6	4.2	4.3	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1325	F-19	Ⅱ	青花	碗	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.4	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1326	－	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	6.6	－	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗D群	
	1327	F-19	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.6	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗D群	
	1328	E-29	Ⅰb	青花	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.6	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
第234図	1329	D-7 E-7	Ⅱ	青花	碗	浅黄褐色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み輪状に釉剥ぎ	12.8	4.6	5.9	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	外面に唐草文
	1330	F-7	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.0	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	見込みに山水人物 高台内面に「萬福攸同」
	1331	E-17	Ⅱ	青花	碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.0	4.6	5.3	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1332	E-27 F-23・24	Ⅳ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.4	4.0	5.7	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	高台内面に梵字
	1333	D-23	－	青花	碗	灰白色	透明釉	高台脇～高台内面露胎	－	4.2	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1334	D-19	Ⅱ	青花	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.6	－	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1335	B-30	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.8	－	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1336	E-21	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.8	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1337	D-9	－	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.6	－	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1338	F-22	Ⅱ	青花	碗	浅黄色	透明釉	残存部全面施釉	16.6	－	－	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1339	－	－	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.0	－	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1340	E-24	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1341	B-35・36	－	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.2	4.6	5.9	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1342	E-30	Ⅰb Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	漳州窯	16c～17c初頭	－	
	1343	D-35	－	青花	碗	にぶい黄橙色	透明釉	見込み釉剥ぎ	16.8	－	－	漳州窯	16c～17c初頭	－	
	1344	F-19	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み輪状に釉剥ぎ	14.2	5.6	4.9	漳州窯	16c～17c初頭	－	
	1345	C-35	Ⅰ	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.1	4.2	3.2	漳州窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	
	1346	E-35	－	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.0	6.6	2.6	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに獅子
第235図	1347	表採	－	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.0	6.2	2.7	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに獅子
	1348	G-8	－	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.4	6.1	2.7	漳州窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに獅子
	1349	D-35	Ⅰ	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	9.6	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	
	1350	D-18 E-20	Ⅱ	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	8.2	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに十字花文
	1351	D-20	－	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	6.8	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	
	1352	E-9	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	8.0	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに十字花文
第236図	1353	D-4	－	青花	皿	白色	透明釉	底部釉剥ぎ	11.6	3.6	3.1	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに人形化した文字
	1354	表採	－	青花	皿	灰白色	透明釉	底部露胎	－	4.8	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	高台脇に砂付着 碁笥底 見込みに人形化した文字
	1355	表採	－	青花	皿	灰白色	透明釉	底部露胎	10.1	4.2	2.7	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに人形化した文字
	1356	E-35	－	青花	皿	灰白色	透明釉	底部露胎	－	4.4	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに人形化した文字
第236図	1357	F-8	－	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.4	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 外面底部に砂目痕
	1358	表採	－	青花	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	－	3.2	－	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底
	1359	D-19 E-19	Ⅲ	青花	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	13.2	5.6	3.4	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに十字花文
	1360	B-37	－	青花	皿	白色	透明釉	畳付き釉剥ぎ	－	12.8	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿F群	つば皿
	1361	－	－	青花	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	8.4	4.6	1.9	漳州窯	16c末期～17c初頭		碁笥底
	1362	A-30	－	青花	皿	浅黄色	透明釉	腰部～高台内面露胎 内面下部露胎	9.4	5.8	1.9	漳州窯	16c末期～17c初頭		
	1363	F-17	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	高台内面露胎	－	5.2	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1364	E-19 G-16	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	高台内面露胎	－	6.4	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
第237図	1365	B-36	－	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.8	4.0	2.9	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		稜花皿 見込みに蓮花文
	1366	F-3	－	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	分類	備考
第237図	1367	表採	－	青花	小皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1368	表採	－	青花	小皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1369	－	－	青花	大皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	20.6	12.1	4.3	漳州窯	16c末期～17c初頭		やや青みがかった釉薬
	1370	F-8	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		口縁部稜花
	1371	表採	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	14.0	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		畳付に砂付着
	1372	F-16・17	Ⅱ・Ⅲ	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	26.2	－	－	漳州窯	16c末期～17c初頭		
	1373	D-22	Ⅱ	青花	大皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18.8	10.6	3.4	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
第238図	1374	E-8	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	19.7	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1375	C・D-22	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	11.5	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1376	－	－	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	13.5	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		赤絵
	1377	A-36・37	－	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		呉須赤絵
	1378	－	－	青花	皿	白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		赤絵
	1379	－	－	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		赤絵　1376と同一個体
	1380	E-20	Ⅲ	青花	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1381	－	－	青花	鉢	灰白色	透明釉	高台内面露胎	－	6.2	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		見込みに「喜」
	1382	－	－	青花	蓋	白灰色	透明釉	見受け部釉剥ぎ	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1383	A-36	－	青花	蓋	にぶい橙色	透明釉	見受け部釉剥ぎ 白化粧土ぬり	11.6	－	－	漳州窯	16c末期～17c初頭		
	1384	D-35	Ⅲ	青花	徳利	灰色	透明釉	外面全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm） 口径	底径	器高	産地※	時期	備考
第239図	1385	E-31	－	中国陶器	天目碗	灰褐色	黒釉	外面胴部以下露胎	－	－	－	－		
	1386	E・F-18	Ⅱ	中国陶器	天目碗	にぶい黄橙色	黒釉	外面腰部以下露胎	－	－	－	－		
	1387	A・B-36・37 A-37	Ⅱ Ⅲ	中国陶器	天目碗	灰黄褐色	黒釉	外面腰部以下露胎	10.4	4.4	5.8	－	15c～16c	
	1388	－	－	中国陶器	天目碗	浅黄色	黒釉	外面腰部以下露胎	13.0	－	－	－		
	1389	E-24, F-24・25	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰白色	黒釉	外面腰部以下露胎	12.0	－	－	建窯		
	1390	G-3	Ⅰb	中国陶器	天目碗	暗灰黄色	黒褐釉	外面腰部以下露胎	11.1	－	－	－		
	1391	－	－	中国陶器	天目碗	黒色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.0	－	－		
	1392	A-16・28	Ⅲ	中国陶器	天目碗	黄灰色	黒釉	外面腰部～底部内面露胎	－	4.0	－	－	15c～16c	
	1393	F・G-17	表	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	－	3.8	－	－	15c	
	1394	E-27・28	－	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒褐色釉	残存部全面施釉	－	－	－	－		
	1395	－	－	中国陶器	天目碗	灰白色	黒褐色釉	外面腰部下位露胎	－	－	－	－		
	1396	A・B-36・37, D-31	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰黄色	褐釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.4	－	－	15c～16c	
	1397	－	－	中国陶器	天目碗	灰色	黒褐釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.4	－	－	15c～16c	
第240図	1398	－	－	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	外面露胎	－	－	－	C群	11c後半～12c代	口唇部に目跡あり
	1399	－	－	中国陶器	盤	灰色	黄釉	口唇部釉掻き取り	－	－	－	C群	11c後半～12c代	口唇部に目跡あり
	1400	C・D-36	－	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	口唇部釉掻き取り 内面露胎	－	－	－	C群	13c代	口唇部に目跡あり
	1401	C-35	－	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	残存部全面施釉	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1402	F-15	Ⅱ	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	口唇部～外面釉剥ぎ	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1403	E-22	Ⅱ	中国陶器	盤	橙色	黄釉	外面露胎	24.8	－	－	C群	11c後半～12c代	盤Ⅱ－1
	1404	F-11	Ⅲ	中国陶器	盤	灰色	黄釉	外面露胎	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1405	D-31	Ⅱ	中国陶器	盤	灰褐色	黄釉	外面露胎	－	21.6	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1406	D-15	Ⅲ	中国陶器	盤	灰色	白化粧土に黄釉	外面露胎	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1407	B-34	Ⅱ	中国陶器	盤	浅黄色	白化粧土に黄釉	外面露胎	－	40.0	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1408	D-22	Ⅱ	中国陶器	盤	浅黄色	黄釉	残存部全面施釉	22.0	－	－	－	－	口唇部に目跡あり
	1409	－	－	中国陶器	盤	灰色	黄釉	残存部全面施釉	18.9	－	－	－	15c下限くらい	口唇部に目跡あり
	1410	E-8	－	中国陶器	盤	灰褐色	黄釉	口唇部釉掻き取り	35.0	－	－	－	－	
第241図	1411	C-29～31 D-31	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰赤色	－	－	37.8	－	－	C群	13c代	鉢Ⅰ－1ｂ類
	1412	F-18, G-16・18	Ⅱ	中国陶器	鉢	黄灰色	灰白色釉	口縁部内外施釉	29.6	12.5	14.2	C群	12c中頃～後半	鉢Ⅰ－2a類
	1413	C-23	Ⅲ	中国陶器	鉢	褐灰色	－	－	24.2	8.3	9.3	C群	13c代	鉢Ⅰ－1b類
	1414	A-28	Ⅲ	中国陶器	鉢	灰褐色	褐色釉	残存部全面施釉	22.8	－	－	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅲ－1類 口唇部・外面腰部に目跡あり
	1415	B-21	Ⅲ	中国陶器	鉢	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	15.3	7.9	13.7	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅲ-2類 口唇部・外面腰部に目跡あり
	1416	－	－	中国陶器	鉢	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	23.0	－	－	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅲ類 口唇部・外面腰部に目跡あり
	1417	F-16	Ⅱ	中国陶器	鉢	橙色	褐釉か？	外面腰部下位露胎	20.4	－	－	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅵ類
	1418	B-30, C-30・34, E-31	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰黄褐色	褐釉	残存部全面施釉	27.2	7.6	12.5	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅵ類
第242図	1419	C-15	Ⅲ	中国陶器	水注	にぶい黄褐色	透明釉	口唇部釉掻き取り	10.4	－	－		11c後半～12c代	水注Ⅳ 口唇部・口縁内面に目跡あり
	1420	D-27	Ⅲ	中国陶器	水注	橙色	黄褐色釉	残存部全面施釉	10.4	－	－		11c後半～12c代	
	1421	B-15	Ⅱb	中国陶器	耳壺か水注	にぶい黄橙色	透明釉	残存部全面施釉	16.0	－	－		11c後半～12c代	耳壺Ⅴか水注Ⅳ
	1422	F-29	－	中国陶器	水注か？	灰褐色	褐釉	残存部全面施釉	10.2	－	－	B群か？	11c後半～12c代	
	1423	E-28	－	中国陶器	取手	浅黄色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－		11c後半～12c代	

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第242図	1424	E-27	Ⅱ	中国陶器	取手	橙色	－	－	－	－	－		11c後半～12c代	
	1425	C-27	Ⅲ上	中国陶器	注口	灰黄色	鉄釉	内面露胎	－	－	－		11c後半～12c代	
	1426	D-24	－	中国陶器	注口	灰黄色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－		11c後半～12c代	
	1427	E-29	Ⅰb	中国陶器	耳壺	灰褐色	暗茶褐色釉	残存部全面施釉	16.1	－	－	C群	13c中葉以降～	Ⅲ類
	1428	－	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	褐釉	残存部全面施釉	11.8	－	－	C群	11c後半～12c代	ⅢまたはⅣ類
	1429	C-27	Ⅲ	中国陶器	耳壺	灰褐色	黄褐色釉	口唇部釉掻き取り	11.8	－	－		12c代か？	Ⅴc類
	1430	E-24	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰色	褐釉	口唇部釉掻き取り	14.3	－	－		13c代	ⅩⅡ類
	1431	F-17	Ⅱ	中国陶器	耳壺	黄橙色	灰黄色釉に茶灰色釉	残存部全面施釉	10.0	－	－		13c代	耳壺Ⅵ類
	1432	D-32	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰褐色	黄白色釉に茶灰色釉	残存部全面施釉	9.6	－	－		13c代	Ⅵ-1類　口縁内面に目跡あり
	1433	D-8	Ⅲ	中国陶器	耳壺	黄橙色	灰黄色釉に茶灰色釉	残存部全面施釉	－	－	－		13c代	耳壺Ⅵ類
	1434	D-5	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	灰黄色釉	残存部全面施釉	9.0	－	－		13c代	耳壺Ⅵ類
	1435	C-30	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	10.6	－	－		13c代	口唇部に目跡あり　耳壺Ⅵ類
	1436	D-26	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	14.2	－	－		13c代	耳壺Ⅶ類　口唇部に目跡あり
	1437	A-14・15，E-17	Ⅱ	中国陶器	耳壺	にぶい黄橙色	褐釉	残存部全面施釉	14.4	－	－		13c代	口唇部に目跡あり 耳壺Ⅶ類か？
第243図	1438	A・B-20	－	中国陶器	耳壺	灰色	黒釉	外面施釉 口唇部釉掻き取り	9.8	－	－		14c以降	
	1439	D-29,E-30・31	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰白色	褐釉	外面施釉 口唇部釉掻き取り	10.2	－	－	BまたはC群	14c以降	1440と同一個体
	1440	F・G-18	Ⅱ	中国陶器	耳壺	褐灰色	鉄釉	外底面露胎	－	8.0	－	BまたはC群	14c以降	1439と同一個体
	1441	－	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	12.0	－	－		14c以降	
	1442	F-4	Ⅰb	中国陶器	耳壺	にぶい褐色	－	－	－	－	－		14c以降	
	1443	F-17	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰白色	黄褐色釉	残存部全面施釉	－	－	－		14c以降	
	1444	D-22	Ⅱ	中国陶器	耳壺	明赤褐色	黄褐色釉	内面頸部下位露胎	11.4	－	－	C群か？	14c中葉以降	1445と同一個体 外面に目跡あり
	1445	－	－	中国陶器	耳壺	明赤褐色		内面・外面腰部下位露胎	－	10.2	－	C群か？	14c中葉以降	1444と同一個体
	1446	－	－	中国陶器	耳壺	灰黄色	黒釉	残存部全面施釉	19.7	－	－		14c中葉以降	
	1447	C-28	Ⅱ	中国陶器	耳壺	赤褐色	緑褐色釉	口唇部釉掻き取り	7.8	－	－		13c～14c代	
	1448	E-8	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰白色	褐釉	口唇部釉掻き取り	22.6	－	－		13c代	
	1449	E-15	Ⅱ	中国陶器	耳壺	褐色	灰黄色釉	口唇部釉掻き取り	－	－	－	－	－	
	1450	D-26	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	灰褐色	暗緑色釉	口唇部釉掻き取り	6.8	－	－		13c代	口唇部に目跡あり　Ⅰ類か？
	1451	E-22	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	にぶい黄橙色	灰黄色釉	残存部全面施釉	5.8	－	－	C群か？	13c代	Ⅰ類
	1452	－	－	中国陶器	無耳壺	にぶい黄橙色	褐釉	残存部全面施釉	8.5	－	－		13c代	Ⅰ類
	1453	D-28	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	にぶい橙色	浅黄色釉	残存部全面施釉	12.6	－	－		13c代	Ⅰ類
	1454	E-23	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	橙色	－	－	15.0	－	－	B群か？	13c～14c	Ⅴ類か？
	1455	－	－	中国陶器	無耳壺	灰褐色	黄灰色釉	口唇部釉掻き取り	10.8	－	－	B群か？	13c～14c	Ⅴ類か？
	1456	B-13	Ⅱ下	中国陶器	無耳壺	灰褐色	黒褐色釉	口唇部釉掻き取り	9.6	－	－	－	13c～14c	Ⅴ類　口唇部貝目あり
	1457	E-22・23，D-21・22	Ⅰb，Ⅱ，Ⅲ	中国陶器	無耳壺	灰褐色	明黄褐色釉～透明釉	外底面露胎	10.0	11.2	30.0	－	13c～14c	壺Ⅶ類大型　内面にタタキ目跡
第244図	1458	－	－	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	－	－	8.0	－	－	－	
	1459	A-21	Ⅲ	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	－	－	9.0	－	－	－	
	1460	E-28	Ⅲ	中国陶器	水注または壺	灰色	－	－	－	9.0	－	－	－	
	1461	D-21・22	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	残存部露胎	－	9.4	－	－	－	
	1462	E-18・20	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	－	－	10.0	－	－	－	外面下位面取り
	1463	E-30	Ⅰb	中国陶器	鉢または壺	灰色	灰釉	残存部全面施釉	－	8.0	－	B群	－	B群の鉢Ⅲ・Ⅵ類か四耳Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ類
	1464	－	－	中国陶器	水注または壺	橙色	鉄釉	外面腰部～ 底部・内面露胎	－	10.8	－	－	－	
	1465	－	－	中国陶器	水注または壺	暗灰黄色	－	－	－	12.0	－	－	－	
	1466	D-18,E-18，F-16・18	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰色	褐釉	外面腰部下位露胎	－	11.5	－	－	14c以降	C群に近い　盤Ⅱ類か？
	1467	E-15・16・18・19,D-19	Ⅲ	中国陶器	水注または壺	黄灰色	鉄釉	残存部全面施釉	－	15.4	－	－	14c以降	外底面に目跡あり
	1468	E-22,D-22	Ⅱ，Ⅰb	中国陶器	水注または壺	灰色	鉄釉	内面・外面腰部下位露胎	－	13.6	－	－	14c～15c	
	1469	－	－	中国陶器	水注または壺	橙色	－	－	－	10.4	－	－	－	
	1470	A・B-36・37	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰黄色	灰白色釉	外底面・内面露胎	－	11.4	－	－	14c以降	
第245図	1471	B-37	Ⅲ	中国陶器	甕	にぶい褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅰ類
	1472	C・D-21・22	－	中国陶器	甕	灰色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅰ類
	1473	D-35	Ⅲ	中国陶器	甕	灰褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅰ類
	1474	－	－	中国陶器	甕	にぶい赤褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅱ類
	1475	E-6	Ⅲ	中国陶器	甕	にぶい橙色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅴ類
	1476	B-21	Ⅲ	中国陶器	甕	明赤褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅲ類
第246図	1477	F-22	Ⅲ	中国陶器	甕	明赤褐色	淡黄色釉	内底面・外底面露胎	－	26.0	－	C群	13c代	
	1478	D-15	Ⅲ	中国陶器	甕	褐灰色	灰黄色釉	外底面露胎	－	28.0	－	C群	13c代	
	1479	A′-17	Ⅲ	中国陶器	甕	褐灰色	－	－	－	－	－	C群	13c代	
第247図	1480	－	－	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1484と同一個体
	1481	D-36	Ⅲa	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花
	1482	F-6	Ⅱ	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1483と同一個体
	1483	F-4	Ⅲ	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1482と同一個体
	1484	－	－	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1480と同一個体
	1485	－	－	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花・渡畑2の1351と接合
	1486	E-18,F-16	Ⅱ	中国陶器	盤	灰白色	緑釉	残存部全面施釉	26.0	－	－	華南	15c～16c	華南三彩 372・373と同一個体

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第247図	1487	－	－	中国陶器	盤	灰白色	緑釉	外底面露胎	－	－	－	華南	15c～16c	華南三彩 372・375と同一個体
	1488	F-19	Ⅱ	中国陶器	盤	灰白色	緑釉	外面腰部下位～外底面露胎	－	16.2	－	華南	15c～16c	華南三彩 1486・1487と同一個体
	1489	B-37	－	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	－	－	－	－	－	緑釉に鉄絵
	1490	B-37・38	Ⅲ上	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	－	－	－	－	－	緑釉に鉄絵
	1491	B-37	Ⅲ	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	－	－	－	－	－	緑釉に鉄絵
	1492	D-19・20・21，E-18・19・20，F-19・20	Ⅱ	中国陶器	瓶または壺	浅黄色	黄釉	内面肩部下位露胎	5.4	－	－	－	14c以降	
	1493	C-29	Ⅲ	中国陶器	Ⅲ	黄灰色	褐釉か？	残存部全面施釉	－	－	－	－	－	黒土による花文の象嵌か？
	1494	－	－	中国陶器	小壺	にぶい黄色	白象嵌に褐釉	内面露胎	－	－	－	－	－	
	1495	D-31	Ⅱ	中国陶器	小壺か？	灰黄色	鉄釉	内面肩部下位露胎	－	－	－	C群	－	
	1496	－	－	中国陶器	－	灰白色	透明釉	内面露胎	－	－	－	－	－	
	1497	E-3，F-4	Ⅰb	中国陶器	－	灰白色	透明釉	内面露胎	－	－	－	－	－	
	1498	B-26	Ⅲ	中国陶器	碗	にぶい黄褐色	黄褐色釉	残存部全面施釉	13.9	－	－	－	－	
	1499	－	－	中国陶器	仏像か？	灰白色	褐釉	頭髪部のみ施釉	－	－	－	－	14c以降か？	
第248図	1500	D-26，E-25	Ⅴ	朝鮮陶器	鉢	灰色	白象嵌・黒象嵌に透明釉	残存部全面施釉	19.4	－	－	高麗	14c末～15c？	森田Ⅱb
	1501	D-31，E-32	Ⅰb，Ⅱ	朝鮮陶器	碗	灰白色	白象嵌に透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	李朝	15c～16c	
	1502	E-20	Ⅱ	朝鮮陶器	碗	灰色	灰釉	畳付釉掻き取り	－	3.8	－	李朝	15c～16c	見込み・畳付に目跡あり
	1503	A・B-36	－	朝鮮陶器	徳利	灰白色	黒釉	残存部全面施釉	5.4	10.0	19.5	李朝	13c後半～	外底面に目跡あり
	1504	D-35	Ⅰ	朝鮮陶器	壺か？	黒褐色	－	－	－	－	－	朝鮮	－	
	1505	D-25	Ⅲ	ベトナム陶器 青花	Ⅲ	灰白色	透明釉	胴部～底部露胎	15.4	－	－	ベトナム	15c～16c	
第249図	1506	F-4	Ⅱ下	瓦器	椀	灰色	－	－	14.6	5.2	5.0	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1507	F-4	Ⅱ下，Ⅲ	瓦器	椀	灰白色	－	－	13.8	4.5	4.4	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1508	F-4	Ⅱ	瓦器	椀	灰白色	－	－	－	－	－	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1509	F-4	Ⅲ	瓦器	椀	灰色	－	－	－	－	－	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1510	F-4	Ⅱ下	瓦器	椀	灰白色	－	－	－	4.3	－	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1511	F-4	Ⅱ	瓦器	椀	灰黄色	－	－	－	5.4	－	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1512	A-30	－	瓦器	Ⅲ	灰色	－	－	9.6	4.5	1.9	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1513	F-4	Ⅱ	瓦器	Ⅲ	灰色	－	－	5.2	3.8	1.5	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1514	F-5	Ⅱ	瓦器	Ⅲ	灰色	－	－	8.8	－	－	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1515	F-19	Ⅱ	瓦器	Ⅲ	灰白色	－	－	8.4	－	－	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
第250図	1516	E-22	Ⅱ	中世須恵器 （東播系）	捏鉢	灰色	－	－	36.8	－	－	東播系	12c～14c代	
	1517	－	－	中世須恵器 （東播系）	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	東播系	12c～14c代	
	1518	E-30	－	中世須恵器 （東播系）	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	東播系	12c～14c代	
	1519	F-24	Ⅰb	中世須恵器 （東播系）	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	東播系	12c～14c代	
	1520	F-31	Ⅱ	中世須恵器 （東播系）	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	東播系	12c～14c代	
	1521	－	－	中世須恵器 （東播系）	捏鉢	灰黄色	－	－	－	10.0	－	東播系	12c～14c代	
	1522	E-22，F-25	Ⅱ	カムィヤキ	甕	灰色	－	－	16.6	－	－	徳之島	13c代	
	1523	－	－	カムィヤキ	甕	にぶい黄褐色	－	－	16.0	－	－	徳之島	13c代	
	1524	－	－	カムィヤキ	甕	灰褐色	－	－	18.6	－	－	徳之島	13c代	
	1525	C-34	－	カムィヤキ	甕	にぶい黄褐色	－	－	16.9	－	－	徳之島	13c代	
	1526	D-7，E-13・18	Ⅱ，Ⅲ	カムィヤキ	壺	にぶい褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1527	A-25	表	カムィヤキ	壺	灰褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1528	E-3，F-4	Ⅰb	カムィヤキ	壺	灰褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1529	－	－	カムィヤキ	壺	灰褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
第251図	1530	B-30	－	カムィヤキ	壺	にぶい赤褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1531	C-27	Ⅱ	カムィヤキ	壺	にぶい赤褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1532	－	－	カムィヤキ	甕または壺	にぶい黄褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1533	－	－	カムィヤキ	甕または壺	にぶい黄褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1534	C-27	Ⅱ	カムィヤキ	甕または壺	灰色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1535	C-22，E-25	Ⅱ，Ⅲ	カムィヤキ	甕または壺	にぶい赤褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1536	E-27	－	カムィヤキ	甕または壺	にぶい黄褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1537	－	－	カムィヤキ	甕または壺	にぶい赤褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1538	－	－	カムィヤキ	甕または壺	灰黄褐色	－	－	－	－	－	徳之島	13c代	
	1539	D-6	Ⅲ	カムィヤキ	壺	にぶい褐色	－	－	－	15.0	－	徳之島	13c代	
	1540	E-27	Ⅲ	カムィヤキ	甕	にぶい赤褐色	－	－	－	18.0	－	徳之島	13c代	
第252図	1541	D-24・30，E-24	Ⅱ	中世須恵器 （樺万丈）	捏ね鉢	灰色	－	－	22.0	9.0	10.1	樺万丈	13c代	
	1542	B・C-30，C-31・32	Ⅱ，Ⅲ	中世須恵器 （樺万丈）	捏ね鉢	灰色	－	－	26.0	10.7	10.6	樺万丈	13c代	
	1543	D-22	－	中世須恵器 （樺万丈）	捏ね鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈	13c代	
	1544	C・D-21・22	Ⅰ	中世須恵器 （樺万丈）	甕	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈	13c代	
	1545	E-15	Ⅱ	中世須恵器 （樺万丈）	甕	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈	13c代	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第252図	1546	C-15	Ⅱb	中世須恵器（樺万丈）	甕	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈	13c代	
	1547	A'-17	Ⅱ	中世須恵器（樺万丈）	甕	灰色	－	－	－	19.0	－	樺万丈	13c代	
第253図	1548	B-34	Ⅲ	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1549	A-1415	－	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1550	E・F-30	Ⅱ	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1551	－	－	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1552	C-27	Ⅲ	中世須恵器	壺	灰褐色	－	－	－	22.5	－	－	13c代	
第254図	1553	F-20	Ⅱ	陶器	天目碗	灰白色	褐釉	外面腰部～高台内面露胎	10.9	4.2	5.9	瀬戸	15c～16c	
	1554	E-18,F-18	Ⅱ	陶器	黄天目碗	灰黄色	褐釉	残存部全面施	－	－	－	瀬戸	15c～16c	
	1555	D-21・22	Ⅰ	陶器	卸皿	灰白色	透明釉	外面露胎	－	8.4	－	瀬戸	13c代	
	1556	C・D-21・22	Ⅱ	陶器	卸皿	灰白色	透明釉	外面露胎	－	10.2	－	瀬戸	13c代	
	1557	－	－	陶器	卸皿	灰黄色	透明釉	外底面露胎	－	－	－	瀬戸	13c代	
	1558	C-12,D-13・15,E-15,F-16	Ⅱ,Ⅲ	陶器	瓶子	灰白色	灰緑色釉	内面露胎	－	－	－	瀬戸	13c代	
	1559	D-32	Ⅱ	炻器	甕	灰色	－	－	－	－	－	常滑	13c前半	口縁帯1.5cm　５型式
	1560	A'-30,C-29,D-30	Ⅲ	炻器	甕	灰黄色	－	－	48.0	－	－	常滑	13c前半	口縁帯1.5cm　５型式
	1561	D-32・35	Ⅰ	炻器	甕	灰褐色	－	－	－	－	－	常滑	13c第３四半期	口縁帯2.0cm　６a型式
第255図	1562	D-35・36	Ⅰ	炻器	甕	灰色	－	－	37.2	－	－	常滑	13c第４四半期	口縁帯2.5cm　６b型式
	1563	A-17	Ⅱ	炻器	甕	灰色	－	－	－	－	－	常滑	14c前半	口縁帯3.0cm　７型式
	1564	G-16・17	Ⅱ	炻器	甕	灰黄色	－	－	－	－	－	常滑	14c前半	口縁帯4.0cm　７型式
	1565	D-22,G-16	Ⅱ	炻器	甕	灰黄色	－	－	－	22.0	－	常滑	－	
第256図	1566	F-19・21・22	Ⅱ	炻器	壺	赤褐色	－	－	11.5	－	－	備前	14c代	
	1567	E-18	－	炻器	壺	赤褐色	－	－	15.2	－	－	備前	14c代	
	1568	A-14・15	－	炻器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	備前	14c代	
	1569	A'-17	Ⅱ	炻器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	備前	14c代	
	1570	E-15・16,F-17	Ⅱ	炻器	壺	赤褐色	－	－	15.3	－	－	備前	14c代	
	1571	C-30,E-30	－	炻器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
第257図	1572	A-14・15	－	炻器	壺	灰白色	－	－	48.8	－	－	備前	14c代	
第258図	1573	G-14・15	Ⅱ	炻器	擂鉢	灰赤色	－	－	－	－	－	備前	14c後半	
	1574	E-30	Ⅱ	炻器	擂鉢	暗灰黄色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
	1575	F-8,G-8	－	炻器	擂鉢	橙色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
	1576	G-13	Ⅱ	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	31.2	17.2	10.5	備前	15c前半	
	1577	B-12	－	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
	1578	－	－	炻器	擂鉢	にぶい褐色	－	－	26.6	11.9	10.4	備前	15c前半	
	1579	－	Ⅱ	炻器	擂鉢	黄灰色	－	－	32.8	－	－	備前	15c前半	
第259図	1580	－	－	炻器	擂鉢	明赤褐色	－	－	30.0	－	－	備前	15c第２四半期	
	1581	C-26・28,D-28 F-26・27	Ⅰb,Ⅱ	炻器	擂鉢	明赤褐色	－	－	25.6	15.2	12.0	備前	15c第２四半期	
	1582	C-29・30,E-30	－	炻器	擂鉢	橙色	－	－	25.8	－	－	備前	15c後半	
	1583	F・G-18	－	炻器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－	備前	15c後半	
	1584	D-30,E-30・31	Ⅰb,Ⅱ	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	33.4	－	－	備前	15c後半	
	1585	E-21・26	Ⅱ	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	28.0	－	－	備前	15c後半	
第260図	1586	C・D-21・22	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	29.6	13.4	12.1	－	15c～16c	
	1587	E-29・30	Ⅰb,Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	－	30.0	17.2	11.8	－	15c～16c	
	1588	－	－	瓦質土器	擂鉢	灰黄色	－	－	26.8	13.6	12.1	－	15c～16c	
	1589	F-19・20	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	明褐色	－	－	23.6	－	－	－	15c～16c	
第261図	1590	E-18	－	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1591	D・E-4	－	瓦質土器	擂鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1592	C-22	－	瓦質土器	擂鉢	灰白色	－	－	16.6	10.1	5.5	－	15c～16c	
	1593	－	－	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	22.2	－	－	－	15c～16c	
	1594	－	－	瓦質土器	擂鉢	灰褐色	－	－	－	16.4	－	－	15c～16c	
	1595	D-26,E-26	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	17.2	－	－	15c～16c	
	1596	B・E-15	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	10.6	－	－	15c～16c	
	1597	－	－	瓦質土器	擂鉢	暗灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1598	F-26	－	瓦質土器	擂鉢	灰黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
第262図	1599	B・C・E-30	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	明黄褐色	－	－	29.8	－	－	－	15c～16c	
	1600	C・D-22	－	瓦質土器	茶釜	にぶい黄橙色	－	－	14.6	－	－	－	15c～16c	煤付着
	1601	F-19・20	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	灰黄色	－	－	14.4	－	－	－	15c～16c	指頭痕あり　煤付着
	1602	F-16	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	灰色	－	－	17.0	－	－	－	15c～16c	指頭痕あり　胴部に連点文
	1603	－	－	瓦質土器	茶釜	灰白色	－	－	25.0	－	－	－	15c～16c	
	1604	E-30	－	瓦質土器	茶釜	灰白色	－	－	23.6	－	－	－	15c～16c	煤付着
	1605	F-20	Ⅱ	瓦質土器	茶釜蓋	浅黄色	－	－	11.0	庇径14.8	2.5	－	15c～16c	煤付着
第263図	1606	E-6,F-5	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	－	－	33.4	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文　煤付着
	1607	C-29,D-30,E-30	Ⅱ,Ⅲ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文　煤付着
	1608	F-23	－	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1609	E-30	－	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第264図	1610	E-22	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	明黄褐色	－	－	52.6	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文　煤付着
	1611	D-15	Ⅱ，Ⅱa，Ⅲ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1612	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	橙色	－	－	36.6	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1613	F-18	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黄灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1614	E-19，F-20	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄褐色	－	－	34.6	－	－	－	15c～16c	
	1615	－	－	瓦質土器	火鉢	にぶい黄色	－	－	29.0	－	－	－	15c～16c	
	1616	A・B-36・37	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1617	F-19	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面殻具刺突か？
	1618	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
第265図	1619	－	－	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文・殻具刺突か？
	1620	D-7	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	浅黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1621	A・B-35・36	－	瓦質土器	火鉢	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1622	－	－	瓦質土器	火鉢	淡黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1623	C-21	Ⅰb	瓦質土器	火鉢	褐灰色	－	－	－	23.0	－	－	15c～16c	
	1624	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	浅黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1625	－	－	瓦質土器	火鉢	灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1626	C-22	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	－	－	－	33.6	－	－	15c～16c	
	1627	C-29・F-28	－	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1628	F-20	Ⅱ	瓦質土器	火鉢蓋	橙色	－	－	12.2	10.6	4.1	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1629	E-8	Ⅱ	瓦質土器	火鉢蓋	黄灰色	－	－	8.8	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1630	－	－	瓦質土器	蓋	橙色	－	－	34.0	－	－	－	15c～16c	外面・内面底部に煤付着
第266図	1631	D-35	Ⅲ	土製品	かまど	にぶい橙色	－	－	－	－	25.5	－	15c～16c	煤付着
	1632	B-35，D-35	Ⅲ	土製品	かまど	橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	「喜助」の銘あり
第267図	1633	E-24	Ⅱ	土製品	脚	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1634	－	Ⅲ	土製品	脚	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1635	G-17	Ⅱ	土製品	脚	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1636	D-30	Ⅲ	土製品	脚	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1637	－	－	土師質土器	焙烙	にぶい橙色	－	－	28.8	－	－	－	15c～16c	外面に煤付着
	1638	E-30	－	土師質土器	焙烙	橙色	－	－	31.0	－	－	－	15c～16c	外面に煤付着
	1639	D-18	Ⅱ	土師質土器	焙烙	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	焙烙の取手　外面に煤付着
	1640	D-35	Ⅰ	土師質土器	坏	浅黄橙色	－	－	12.0	7.4	4.6	－	15c～16c	外面に煤付着
	1641	E-3，F-4	Ⅰb	土師質土器	敲具か？	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1642	－	－	瓦質土器	メンコ	にぶい黄色	－	－	－	最大径7.0	最大厚1.2	－	15c～16c	
	1643	E-16	Ⅱ	瓦質土器	ほうじゅ蓋	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	つまみ径1.7cm
	1644	D-19	Ⅱ	瓦質土器	ほうじゅ蓋	灰白色		－	－	－	－	－	15c～16c	つまみ径1.7cm
第268図	1645	D-35	Ⅲb	瓦	丸瓦	黄褐色	－	－	最大長6.2	最大幅4.3	厚み1.7	中国	12c後半	(上面)布目圧痕 (下面)縄目タタキ後ナデ
	1646	A・B-36・37	表	瓦	丸瓦	にぶい黄橙色	－	－	最大長6.7	最大幅6.2	厚み1.4	中国	12c後半	(上面)布目圧痕 (下面)縄目タタキ後ナデ"
	1647	A-29	Ⅲ	瓦	平瓦	淡黄色	－	－	最大長11.6	最大幅7.5	厚み1.2	中国	12c後半	(上面)布目　(下面)縄目
	1648	－	－	瓦	平瓦	灰白色	－	－	最大長9.8	最大幅10.4	厚み1.0	中国	12c後半	(上面)布目　(下面)縄目
	1649	－	－	瓦	平瓦	褐黒色	－	－	最大長9.1	最大幅5.6	厚み0.9	中国	12c後半	(上面)布目　(下面)縄目
	1650	D-37	Ⅳ	瓦	平瓦	灰色	－	－	最大長8.3	最大幅5.0	厚み1.1	中国	12c後半	(上面)布目　(下面)縄目
	1651	C-37	表	瓦	平瓦	にぶい黄橙色	－	－	最大長7.4	最大幅7.8	厚み1.3	中国	12c後半	(上面)布目　(下面)縄目
	1652	D-36	表	瓦	平瓦	灰色	－	－	最大長9.7	最大幅10.6	厚み1.3	中国	12c後半	(上面)ヘラナデ (下面)布目後ナデ"
	1653	C-22	－	瓦	平瓦	にぶい橙色	－	－	最大長11.1	最大幅9.7	厚み2.5	－	－	(上面)木目
第269図	1654	－	－	滑石製品	鍋	－	－	－	25.0	20.5	9.0	－	12c代	
	1655	E-24	－	滑石製品	鍋	－	－	－	16.6	－	－	－	12c代	
	1656	A-24	Ⅱa	滑石製品	鍋	－	－	－	18.8	13.2	18.2	－	12c代	外面煤付着
	1657	B-15	Ⅲ	滑石製品	鍋	－	－	－	41.0	－	－	－	13c～14c	
	1658	F-26	Ⅲ	滑石製品	鍋	－	－	－	31.8	－	－	－	13c～14c	外面煤付着
第270図	1659	－	－	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1660	D-32	Ⅱ	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1661	G-17	－	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1662	D-31	Ⅱ	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1663	E-30	－	滑石製品	鍋	－	－	－	－	23.8	－	－	－	外面煤付着
	1664	E-28	Ⅳ	滑石製品	鍋	－	－	－	－	19.6	－	－	－	外面煤付着
	1665	E-29	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	6.15	6.1	2.5	－	－	
	1666	A-16	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	8.5	4.6	1.9	－	－	
	1667	－	－	滑石製品	転用品	－	－	－	6.95	3.7	1.7	－	－	
	1668	D-30	－	滑石製品	転用品	－	－	－	5.9	4.6	2.8	－	－	
	1669	C-29	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.3	6.0	2.2	－	－	
	1670	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.3	4.8	1.8	－	－	
第271図	1671	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.4	1.3	1.4	－	－	
	1672	E-19	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.8	2.2	1.5	－	－	
	1673	D-24	Ⅱ下	滑石製品	転用品	－	－	－	6.1	2.9	1.4	－	－	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									最大長	最大幅	最大厚			
第271図	1674	A-26	－	滑石製品	転用品	－	－	－	6.4	2.9	1.2	－	－	
	1675	A-24	Ⅲ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.15	1.9	1.9	－	－	
	1676	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	6.8	2.55	1.8	－	－	
	1677	F-19	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	8.05	3.1	2.5	－	－	
	1678	D-16	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	3.7	2.1	1.4	－	－	
	1679	E-21	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	2.85	2.8	1.4	－	－	
	1680	D-31	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	4.2	2.55	1.4	－	－	
	1681	D-17	－	滑石製品	転用品	－	－	－	3.2	1.6	1.9	－	－	
	1682	B-33	Ⅰb	滑石製品	転用品	－	－	－	2.1	1.3	1.3	－	－	
	1683	E-32	Ⅰb	滑石製品	転用品	－	－	－	4.9	4.6	1.4	－	－	外面煤付着
	1684	A-28	Ⅲ	滑石製品	転用品	－	－	－	6.8	3.7	2.0	－	－	
	1685	－	－	滑石製品	転用品	－	－	－	11.1	7.5	2.3	－	－	
	1686	－	－	滑石製品	転用品	－	－	－	5.5	3.4	2.3	－	－	
第272図	1687	B-25	Ⅲ上	石製品	砥石	－	－	－	28.1	6.6	6.0	－	－	
	1688	C-30	－	石製品	砥石	－	－	－	7.4	7.4	2.1	－	－	
	1689	C-23	Ⅱ	石製品	砥石	－	－	－	9.1	3.8	2.2	－	－	
	1690	－	－	石製品	砥石	－	－	－	8.2	4.4	3.4	－	－	
	1691	E-27	Ⅱ	石製品	砥石	－	－	－	5.0	4.2	3.1	－	－	
	1692	C-36	Ⅲb	石製品	砥石	－	－	－	7.2	7.6	1.3	－	－	
	1693	E-32	Ⅱ	石製品	砥石	－	－	－	7.3	3.2	1.9	－	－	
	1694	B-16	Ⅲ	石製品	砥石	－	－	－	6.7	3.4	1.5	－	－	
	1695	D-23	Ⅲ	石製品	砥石	－	－	－	14.1	5.1	1.5	－	－	

遺構内出土古銭

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径（cm）
45	46	古代土坑6	○○元寶	－	破片	－
46	48	古代土坑墓1	咸平元寶	998年	北宋・真宗	2.4
	49	古代土坑墓1	紹聖元寶	1094年	北宋・哲宗	2.4
	50	古代土坑墓1	景德元寶	1004年	北宋・真宗	2.4
47	51	古代土坑墓3	○○○寶	－	破片	2.1
48	55	古代ピット5	皇宋通寶	1038年	北宋・仁宗	2.2
	57	古代ピット7	皇宋通寶	1038年	北宋・仁宗　篆書	2.2
	60	古代ピット10	元豊通寶	1078年	北宋・神宗　行書	2.2
	61	古代ピット11	元祐通寶	1086年	北宋・哲宗　篆書	2.3
49	64	古代ピット13	乾元重寶	758年	唐・粛宗　当十銭	2.3
	65	古代ピット14	熙寧元寶	1068年	北宋・神宗　視認不可	2.2
	66	古代ピット15	熙寧元寶	1068年	北宋・神宗	2.2
	67	古代ピット16	元豊通寶	1078年	北宋・神宗　篆書	－
	68	古代ピット17	天聖元寶	1023年	北宋・仁宗	2.3
	69	古代ピット18	祥符元寶	1009年	北宋・神宗	2.3
	73	古代ピット22	嘉祐元寶	1056年	北宋・仁宗	2.3
	75	古代ピット24	太平通寶	976年	北宋・太祖	2.4
	76	古代ピット25	景祐元寶	1034年	北宋・仁宗　真書	2.3
	79	古代ピット28	太平通寶	976年	北宋・太祖	2.2
	80	古代ピット29	景德元寶	1004年	北宋・真宗	2.4
	81	古代ピット30	太平通寶	976年	北宋・太祖	2.2
	82	古代ピット31	開元通寶	960年	南唐　視認不可	2.1
	－	古代ピット32	聖宋元寶？	1101年	徽宗 「宗」と「元」の破片	－
129	702	中世掘立15	不明	－		2.3
	703	中世掘立15	不明	－		2.1
	－	中世掘立15	不明	－		－
131	704	中世掘立18	開元通寶	960年	南唐	2.5
	705	中世掘立18	祥符通宝	1009年	北宋・真宗　祥符元寶と同じ	2.3
	706	中世掘立18	天聖元寶	1023年	北宋・仁宗　篆書	2.4
	707	中世掘立18	元祐通寶	1086年	北宋・哲宗　行書	2.4
	708	中世掘立18	天豊通寶	1078年	北宋・神宗　篆書	2.2
137	－	中世掘立26	不明	－		－
140	710	中世掘立31	政和通寶	1111年		2.3
	711	中世掘立31	洪武通寶	1368年		2.2
148	719	中世竪穴建物6	大○通寶	－		2
	720	中世竪穴建物6	不明	－		－
149	722	中世竪穴建物7	天○通寶	－		2.3
150	724	中世竪穴建物10	皇宋通寶	1038年	北宋・仁宗	2.3
154	726	かまど集中凹地	熙寧元寶	1068年	北宋・神宗　篆書	2.3
159	729	かまど跡11	不明	－	７枚重	2.2
	730	かまど跡11	不明	－	７枚重	2.3
176	750	中世土坑8	不明	－	土坑	1.9

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径（cm）
177	－	中世土坑9	不明	－	小片	－
	752	中世土坑11	元豊通寶	1078年	北宋・神宗　篆書	2.3
180	759	中世土坑16	祥符元寶	1009年		2.2
183	767	中世土坑墓1	洪武通寶	1368年		2.2
	768	中世土坑墓1	洪武通寶	1368年		2.3
	769	中世土坑墓1	洪武通寶	1368年		2.3
	770	中世土坑墓2	加治木銭	－	背治　２枚重	2.3
	－	中世土坑墓2	加治木銭	－	背治	－
	771	中世土坑墓3	加治木銭	－	背治　７枚重	2.3
184	773	中世土坑墓4	不明	－		2.4
	774	中世土坑墓4	洪武通寶	1368年	２枚重　布痕付着	2.5
187	778	中世土坑墓7	洪武通寶	1368年	背浙	2.2
	779	中世土坑墓7	洪武通寶	1368年	５枚重	2.1
188	780	中世土坑墓8	洪武通寶	1368年	７枚重	2.1
189	781	中世土坑墓9	洪武通寶	1368年		2.2
	782	中世土坑墓9	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.1
	783	中世土坑墓9	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.1
	784	中世土坑墓9	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.1
	785	中世土坑墓9	洪武通寶	1368年		2
	786	中世土坑墓9	洪武通寶	1368年	２枚重	2
190	787	中世土坑墓10	洪武通寶＋？ ＋朝鮮通寶	朝鮮通寶： 1423年	３枚重	2.1
	788	中世土坑墓10	洪武通寶	1368年		2.2
	789	中世土坑墓10	洪武通寶	1368年	２枚重	2
	790	中世土坑墓10	洪武通寶	1368年		2.1
191	791	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	792	中世土坑墓11	不明	－	３枚重	2.1
	793	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2
	794	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	795	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	796	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	797	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年	小片	2.1
	798	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	799	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2
	800	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		－
	－	中世土坑墓11	不明	－	銅屑　文章表記のみ	－
	－	中世土坑墓11	不明	－	小片　文章表記のみ	－
192	801	中世土坑墓12	鉄銭	－	３枚重	2.1
	802	中世土坑墓12	洪武通寶	1368年		2
	803	中世土坑墓12	洪武通寶	1368年		2
	－	中世土坑墓12	不明	－		－
	804	中世土坑墓13	？	－	２枚重	2.1
	805	中世土坑墓13	朝鮮通寶＋？３枚	朝鮮通寶： 1423年	４枚重	2.1

遺構内出土古銭

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径(cm)
192	806	中世土坑墓13	洪武通寶	1368年		2.1
193	808	中世土坑墓14	政和通寶	1111年	北宋・徽宗	2.2
194	809	中世土坑墓16	洪武通寶２枚+？1	1368年	３枚重	2.1
194	810	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	2.1
	811	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	－
	812	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	2.1
	813	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	2.1
195	817	中世土坑墓17	洪武通寶+？４	1368年	５枚重	2.1
	818	中世土坑墓17	洪武通寶+？１	1368年	２枚重	2.1
196	819	中世土坑墓18	洪武通寶	1368年		2.1
	820	中世土坑墓18	洪武通寶	1368年		2.1
199	826	中世ピット7	不明	－		2.1
	834	中世ピット15	洪武通寶	1368年		2.2
	835	中世ピット16	淳祐元寶	1241年	南宋・理宗	2.4
	837	中世ピット18	大中通寶	1361年	明・朱元璋	2.2
	838	中世ピット18	洪武通寶	1368年		2.2
113	－	中世ピット23	不明	－		－
200	－	中世ピット24	洪武通寶	1368年	「武」・「通」のみ確認	－
	851	中世ピット31	祥符元寶	1009年	北宋・真宗	2.4
	854	中世ピット34	永楽通寶	1408年	明・成祖	2.1
	855	中世ピット35	洪武通寶	1368年		2.3

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径(cm)
200	856	中世ピット36	元祐通寶	1086年	北宋・哲宗　行書	2.2
201	857	中世ピット37	太平通寶	976年		2.2
	858	中世ピット38	太平通寶	976年		2.2
	864	中世ピット44	洪武通寶	1368年		2
	865	中世ピット45	不明	－	「通」のみ確認	－
205	896	溝14	皇宋通寶	1038年		2.4
313	－	近世土坑1	洪武通寶	1368年	鉄分多　破片	－
314	1807	近世土坑8	祥符元寶	1009年	北宋・真宗	2.3
	1808	近世土坑8	永楽通寶	1480年	明・成祖(永楽帝)	2
	－	近世土坑8	不明	－	文章表記のみ	－
	－	近世土坑8	不明	－	鉄銭　文章表記のみ	－
315	1809	近世土坑墓1	洪武通寶	1368年	鉄分多し	2.3
	1810	近世土坑墓2	寛永通寶	－	３枚重	2.3
317	1812	近世土坑墓6	洪武通寶	1368年		2.2
	1813	近世土坑墓6	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.2
	1814	近世土坑墓6	洪武通宝	1368年		2.2
318	－	近世土坑墓8	不明	－		－
	1815	近世土坑墓9	不明	－	５枚重	2.1
280	－	近世ピット5	不明	－	鉄分多　破片	－
326	1860	近世溝3	寛永通寶	－	江戸時代	2.2
328	1872	近世自然流路1	○○通寶	－		－

出土古銭(一般)

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
273	1696	－	表	開元通寶	南唐　960年	真書	2.4
	1697	C-28	Ⅲ	開元通寶	南唐　960年	破片	－
	1698	C-16	Ⅱ	開元通寶	南唐　960年	真書	2.3
	1699	－	表	開元通寶	南唐　960年	真書	2.2
	1700	CD-29	Ⅱ	宋通元寶	北宋960年		2.5
	1701	F-19	Ⅱ	太平通寶	北宋　976年		2.4
	1702	D-23	Ⅲ	太平通寶	北宋　976年		2.4
	1703	－		太平通寶	北宋　976年		2.4
	1704	F-22	Ⅱ下	至道元寶	北宋　995年	篆書　太祖	2.3
	1705	E-22	Ⅱ	至道元寶	北宋　995年	真書	2.4
	1706	E-34	Ⅲ	祥符元寶	北宋　1009年	真宗	2.45
	1707	F-23	Ⅱ下	天聖元寶	北宋　1023年		2.4
	1708	C-23	Ⅲ	景祐元寶	北宋　1034年	真書　仁宗	2.5
	1709	E-16	Ⅱ	皇宋通寶	北宋　1038年	真書　仁宗	2.45
	1710	G-6	Ⅱ	皇宋通寶	北宋　1038年	真書	2.4
	1711	D-21	Ⅲ	皇宋通寶	北宋　1038年	篆書	2.4
	1712	G-17	Ⅳ	皇宋通寶	北宋　1038年	篆書	－
	1713	D-24	Ⅲ	至和元寶	北宋　1054年	真書　仁宗	2.4
	1714	C-13	Ⅲ	嘉祐通寶	北宋　1056年	真書　仁宗	2.45
	1715	G-16	Ⅱ	治平元寶	北宋　1064年	篆書　英宗	2.35
	1716	－	表	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書	2.3
274	1717	D-28	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書	2.35
	1718	CD-29	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	真書	2.35
	1719	G-6	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書　破片	2.5
	1720	D-24	Ⅲ	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書	2.4
	1721	D-17	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	真書	2.35
	1722	F-16	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	真書	2.3
	1723	D-15	Ⅱa	熙寧重宝	北宋　1071年	折二銭	2.9
	1724	D-25	Ⅲ	元豊通寶	北宋　1078年	行書　神宗	2.5
	1725	F-28	大溝内	元豊通寶	北宋　1078年	行書	2.45
	1726	D-12	表	元祐通寶	北宋　1086年	篆書　行書	2.3
	1727	E-13	畠畝間	紹聖元寶	北宋　1094年	行書	2.35
	1728	D-23	Ⅱ下	紹聖元寶	北宋　1094年		2.35
	1729	D-28	Ⅲ	紹聖元寶	北宋　1094年	行書	2.4
	1730	D-24	Ⅲ	元符通寶	北宋　1098年	行書　哲宗	2.45
	1731	G-17	Ⅱ	元符通寶	北宋　1098年	篆書	2.4
	1732	－	表	大観通寶	北宋　1107年		2.5
	1733	－	表	大観通寶	北宋　1107年		2.5
	1734	G-17	Ⅱ	政和通寶	北宋　1111年	分楷	2.4
	1735	G-17	Ⅳ	政和通寶	北宋　1111年	篆書	2.3
	1736	D-29		正隆元寶	金　1157年		2.45
	1737	E-9	表	洪武通寶	明　1368年		2.2
275	1738	－	表	洪武通寶	明　1368年	２枚重	2.3
	1739	A-30	表	洪武通寶	明　1368年	溝内	2.3
	1740	－	表	洪武通寶	明　1368年		2.2

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
275	1741	D-15	Ⅱa	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1742	A-30	Ⅲ	洪武通寶	明　1368年	背一銭	2.2
	1743	D-19	Ⅱa	洪武通寶	明　1368年	破片	2.4
	1744	E-19	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1745	F-24	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年	背北平	2.3
	1746	E-23	Ⅱb	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1747	D-23	Ⅱb	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1748	D-20	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1749	F-11	Ⅱ上	洪武通寶	明　1368年	背下福	2.3
	1750	D-28	Ⅲ	洪武通寶	明　1368年		2.35
	1751	D-23	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年		2.35
	1752	D-23	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年		2.4
	1753	D-23	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年	背浙	2.3
	1754	E-18	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年	劣化　鉄分多	2.2
	1755	C-29	Ⅲ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1756	F-21	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年	破片	2.2
	1757	E-19	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1758	G-6	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
276	1759	E-20	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1760	E-29	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1761	EF-16	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年	５枚重 １枚は小片	2.4
	1762	B-36	表	洪武通寶	明　1368年		2.35
	1763	D-23	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1764	一括	表	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1765	－	表	洪武通寶	明　1368年	２枚重	2.3
	1766	D-15	Ⅱa	永楽通寶	明　1408年		2.5
	1767	Z-21	表	永楽通寶	明　1408年		2.45
	1768	C-20	Ⅱ	永楽通寶	明　1408年		2.5
	1769	D-15	Ⅱ	永楽通寶	明　1408年	破片	－
	1770	B-34	溝内	康熙通寶	清　1662年	背：「宝泉」満州文字	2
	1771	F-23	Ⅱ	朝鮮通宝	朝鮮　1423年	真書	2.3
	1772	－	表	朝鮮通宝	朝鮮　1423年	真書	2.2
	1773	－	表	加治木銭		背治	2.3
	1774	E-9	Ⅱ	加治木銭		背治	2.3
	1775	D-19	表	加治木銭		背治	2.25
	1776	F-23	Ⅱ	加治木銭		背治	2.3
	1777	一括	表	加治木銭		背治	2.3
	1778	－	表	加治木銭		背治	2.3
	1779	F-20	Ⅱ	加治木銭		背治	2.2
	1780	D-14	Ⅰb	寛永通寶	1636年～		2.3
277	1781	－	表	寛永通寶	1636年～	７枚重	2.3
	1782	D-35	Ⅲ	寛永通寶	1636年～		2.3
	1783	D-37	表	寛永通寶	1636年～		－
	1784	B-37	Ⅱ	寛永通寶	1636年～		2.2

出土古銭(一般)

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
277	1785	B-34	Ⅱ	寛永通寶	1636年～		2.25
	1786	-	表	寛永通寶	1636年～		2.3
	1787	E-37	溝内	寛永通寶	1636年～		-
	1788	D-37	表	寛永通寶	1636年～		2.2
	1789	-	表	寛永通寶	1636年～		2.45
	1790	F-30	Ⅰb	寛永通寶	1636年～		2.4
	1791	D-34	Ⅰ	寛永通寶	1636年～		2.3
	1792	F-35	表	寛永通寶	1636年～		2.4

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
277	1793	-	表	寛永通寶	1636年～		2.4
	1794	-	表	寛永通寶	1636年～		-
	1795	A-28	-	寛永通寶	1636年～		2.3
	1796	C-37	-	寛永通寶	1636年～		2.2
	1797	-	表	桐１銭青銅貨	1922年～	大正11年	2.3
	1798	F-31	表	一銭			2.7
	1799	-	表	竜１銭銅貨			2.75

出土古銭（一般・非掲載分）

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	直径(cm)
非掲載	1	-	表	○和○寶	-
非掲載	2	-	表	２枚重	2.3
非掲載	3	-	表	小片・摩耗のため判読不可	-
非掲載	4	C-20	Ⅱ		-
非掲載	5	E-14	カクラン	鉄分多し	-
非掲載	6	F-4	Ⅰb	鉄分多し	-
非掲載	7	E-25	Ⅱ	破片	-
非掲載	8	F-19	Ⅱ		-
非掲載	9	F-19	Ⅱ	永○通○(永楽通寶1587　永昌通寶1644　永歴通寶1644)	-
非掲載	10	E-21	Ⅱ下	鉄分多し	-
非掲載	11	E-22	Ⅱ	○元通寶(開元通寶960　慶元通寶1195　至元通寶1350)	-
非掲載	12	D-28	Ⅱ	小片	
非掲載	13	E-15	Ⅱ	破片	-
非掲載	14	E-18	Ⅱ	２枚重	2.35
非掲載	15	G-6	Ⅰb	破片	-
非掲載	16	E-24	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	17	E-25	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	18	E-25	Ⅱ	破片	-
非掲載	19	D-24	Ⅲ	表面摩耗	-
非掲載	20	E-22	Ⅱ	破片　○○○寶	-
非掲載	21	F-21	Ⅱ	破片　○○○寶	-
非掲載	22	D-17	Ⅱ	天○元寶 (天漢元寶917　天聖元寶1023　天慶元寶1111　天盛元寶1158　天慶元寶1194)	-
非掲載	23	E-25	Ⅱ	洪武通寶？	-
非掲載	24	D-13	Ⅲ	破片	-
非掲載	25	F-21	Ⅱ	小片	-
非掲載	26	E-20	Ⅱ	破片	-
非掲載	27	E-20	Ⅱ	劣化	

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	直径(cm)
非掲載	28	D-25	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	29	E-29	Ⅰb	小片	-
非掲載	30	F-31	-	劣化	
非掲載	31	E・F-16	Ⅱ	小片	
非掲載	32	F-23	Ⅲ	破片	-
非掲載	33	G-16・17	溝内	劣化	2.2
非掲載	34	G-17	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	35	G-17	Ⅱ	○○元寶or○元○寶	-
非掲載	36	D-16	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	37	D-15	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	38	C-20	Ⅲ	表面摩耗	-
非掲載	39	D-28	Ⅲ	破片	-
非掲載	40	G-17	溝内	破片	-
非掲載	41	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	42	B-34	Ⅲb	小片	-
非掲載	43	E-35	表	表面摩耗	-
非掲載	44	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	45	D-23	Ⅱ	小片	-
非掲載	46	E-31	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	47	-	表	小片	
非掲載	48	F-16	Ⅱ	小片　鉄分多し	-
非掲載	49	F-16	Ⅱ	小片	
非掲載	50	D-23	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	51	E-15	Ⅱ	5枚付着　鉄分多し	-
非掲載	52	E-20	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	53	D-18	Ⅱ	劣化	-
非掲載	54	F-31	泥炭	祥符通寶　非掲載	-
非掲載	55	E-23	Ⅱb	洪武通寶　破片　非掲載	-

３　近世の調査

（１）調査の概要

調査は近世の調査においても，10m四方のグリッドを基本に，調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり，層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握，出土遺物の層認定に非常に苦慮した。表土直下の近世は，現代の耕作，掘削工事等の影響でさらに調査を厳しいものとした。また，多数のピットが検出されたため，掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め，整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は，出土遺物を中心に，埋土などを検討して認定を行った。

（２）出土遺物の分類方法

近世の出土遺物のうち陶磁器においては，1580年代か19世紀代の資料を近世の遺物として報告する。

遺物の分類方法としては，まず磁器，陶器，金属製品の３つに大分類し，さらに種別，器種に細分類した。また，器形や産地（判別できるもの）についても考慮しながら分類を行った。（以下参照）

磁器（白磁・色絵を含む）

碗・小坏・皿・鉢・蓋（食膳具），瓶・仏具

陶器

碗・皿・鉢（食膳具），蓋（浅鉢形以外のもの），水注，土瓶，徳利，片口・鉢・擂鉢・鍋・釜（調理具），蓋（浅鉢形のもの）・甕・壺（貯蔵具），灯明具，仏具，その他

金属製品

陶磁器の産地，年代の記載については，文章内で述べたものもあるが，基本的には観察表内に掲載した。

年代・編年については，以下の文献，報告書を参考にしたが，生産年代と使用年代等を考慮して定めた。

『九州陶磁の編年』2000　九州近世陶磁学会
『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　九州編』2006　九州近世陶磁学会　渡辺芳郎
『薩摩川内市　平佐焼窯跡群の考古学的研究』2007　鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室

（３）遺構

近世の遺構は，掘立柱建物跡２棟，焼土跡３基，製鉄関連遺構19基，土坑８基，土坑墓11基，礫集積遺構４か所，古道５条，溝８条，自然流路２条が検出された。ピットは多数検出され，根石などの構造物が確認できるもの以外は，掲載遺物のあるもののみ遺構配置図で平面形を図示するに留めた。

掘立柱建物跡（第304図）

掘立柱建物跡は，A-30，31区において２間×２間，２間×３間の２棟が検出された。調査区内において，現河川から，より内陸側に位置している。

掘立柱建物跡１号（第304図）

A-30区で検出された。規格が２間×２間の建物で，梁行約３m，桁行約3.8mの規模をもち，床面積11.4㎡となる。柱穴は径30cm前後のものが大半を占める。柱穴１は，掘立柱建物跡２号の柱穴と切り合っており，径85cm前後と大きいが，図中左側に見えるわずかな段差部分が当該建物の柱穴部分となる。掘立柱建物跡２号と切り合い関係にあるが，切り合う柱穴以外の柱穴検出レベルから，時間的前後関係については１号が先行すると考えられる。また同柱穴から遺物が出土している。

出土遺物（第304図）

遺物は柱穴１内より苗代川系の陶片が出土した。甕等の胴部片は図化できなかった。遺物は片口と甕の口縁部が出土した。1801は片口である。薄くシャープなつくりのものである。1802は甕である。口縁端部はＴ字状を呈する。口唇部には貝目が残る。

掘立柱建物跡２号（第304図）

A-30,31区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約3.9m，桁行約６mの規模をもち，床面積23.4㎡となる。建物西側の梁行間の柱穴を１本欠く。柱穴は径40cm前後が平均となる。前述のとおり掘立柱建物跡１号と柱穴８が切り合っているが，図中右側のやや大きな底面部分が当該掘立柱建物跡の柱穴部分となる。柱穴８から遺物が出土している。

出土遺物（第304図）

1803は柱穴８から出土した，肥前磁器の染付碗である。

焼土跡（第305図）

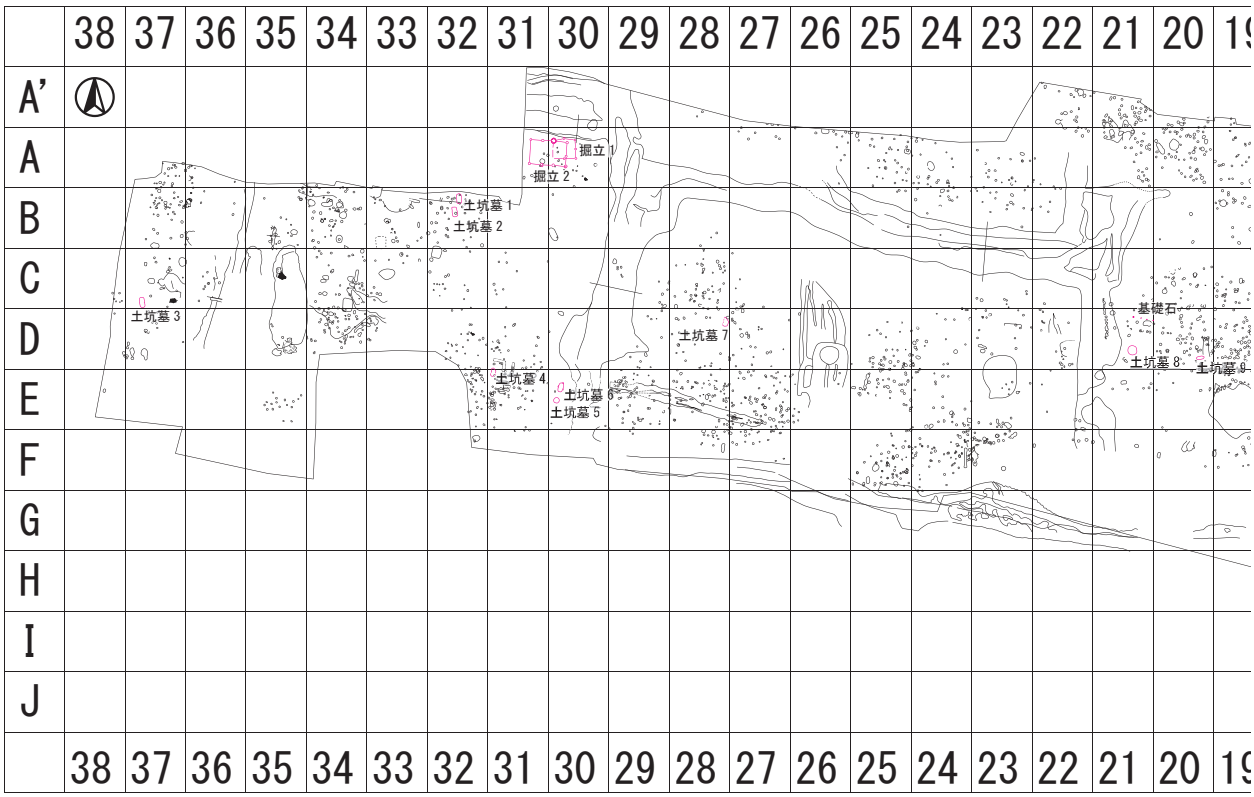
焼土跡は調査区内に点在し，F-7区，C-15区，E-38区の３箇所で見つかっている。鉄滓などが認められず，製鉄とは関係ないと思われるもの，所属時期不明のものを一括した。

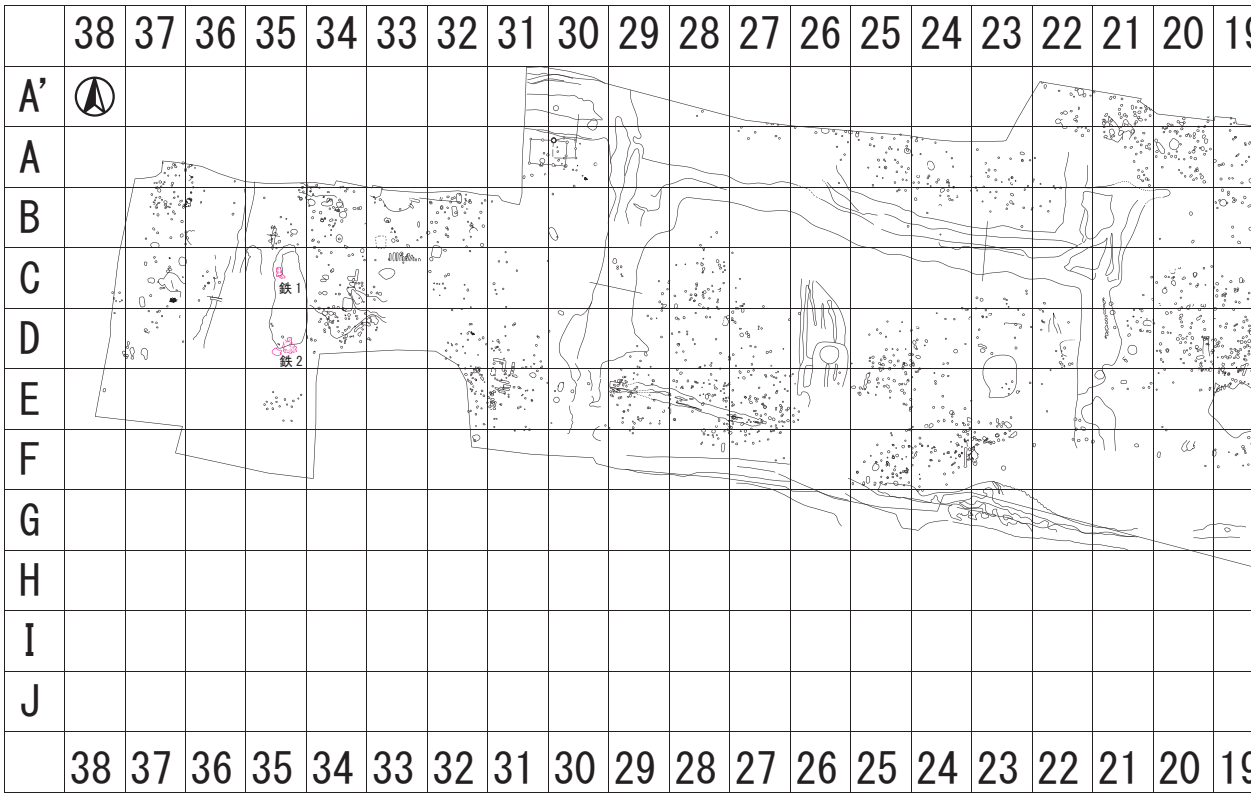
焼土跡１号（第305図）

E-38区で検出された。平面形は長軸0.6m，短軸0.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは２cmほどしかなく，埋土はやや粘性を帯びた砂で炭化物，焼土がみられるが，強い焼成は受けていない。

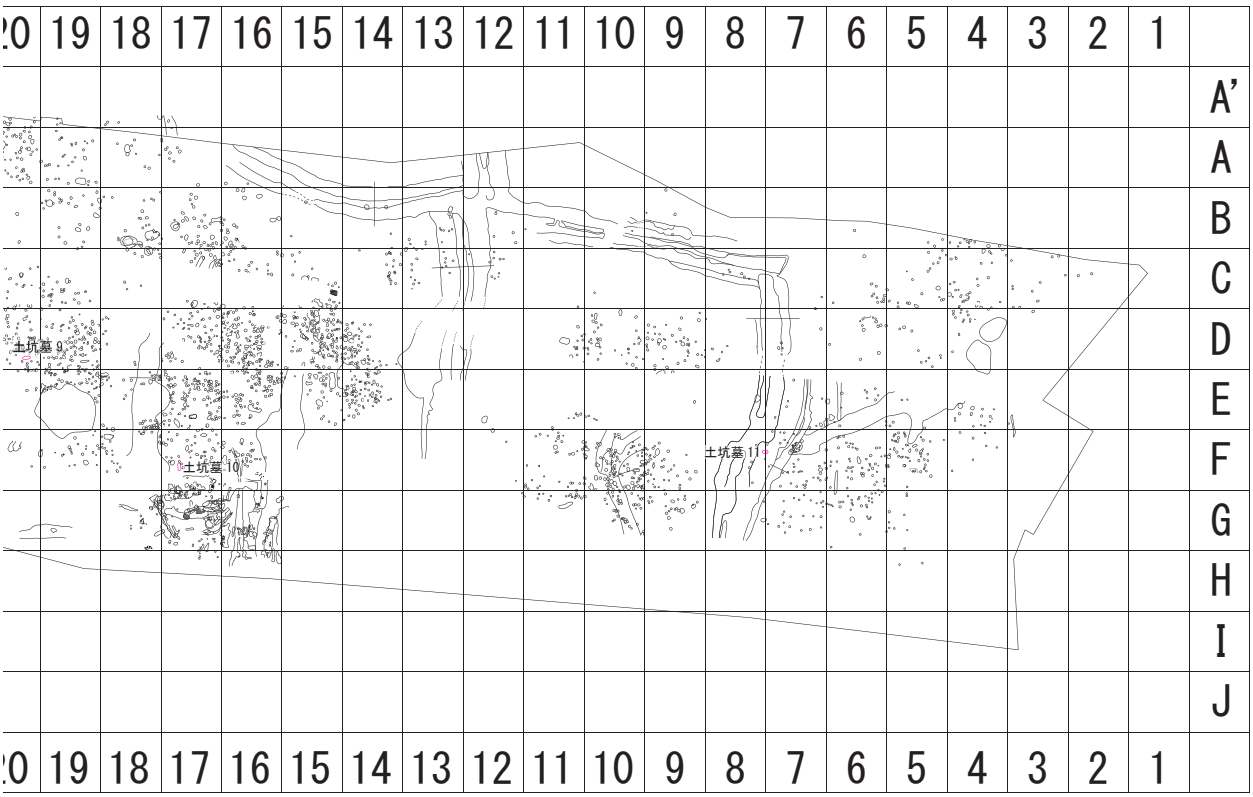
焼土跡２号（第305図）

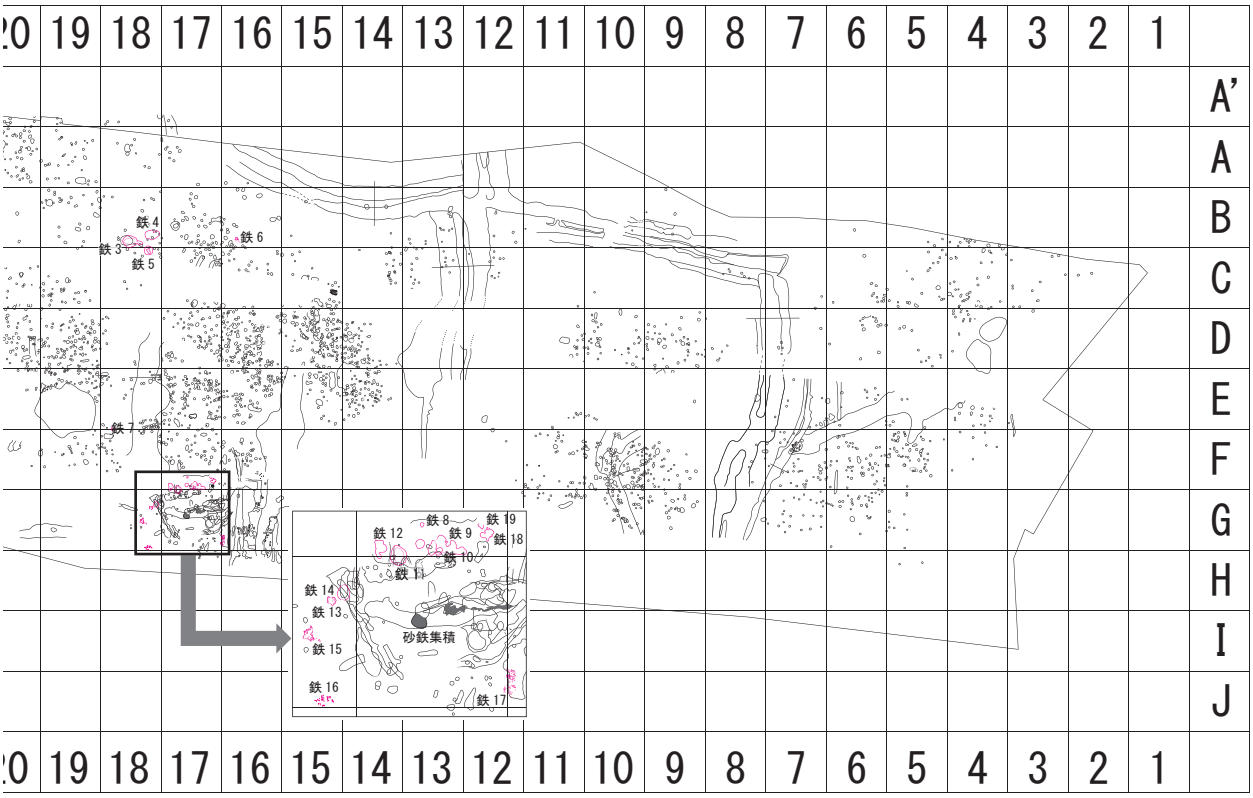
C-15区で検出された。平面形は長軸1.2m，短軸0.7mの長方形を呈し，検出面からの深さ0.1mほどである。遺構は，後年の耕作により破壊されており，焼土が筋状に３列残る。埋土に炭化物を多く含み，焼成を強く受けた様子が伺え，炉であった可能性も考えられる。



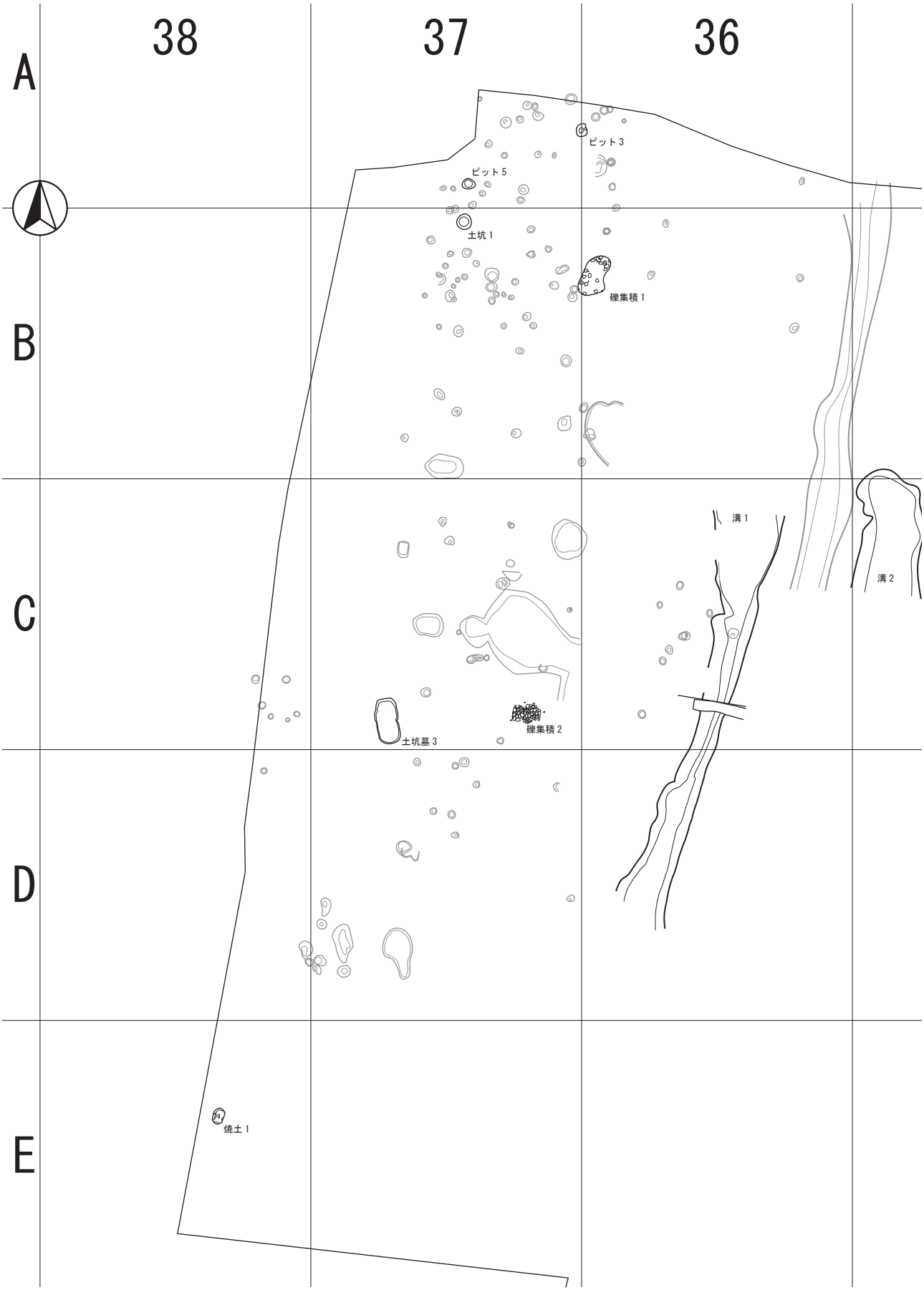


第278図　近世全体遺構図 1

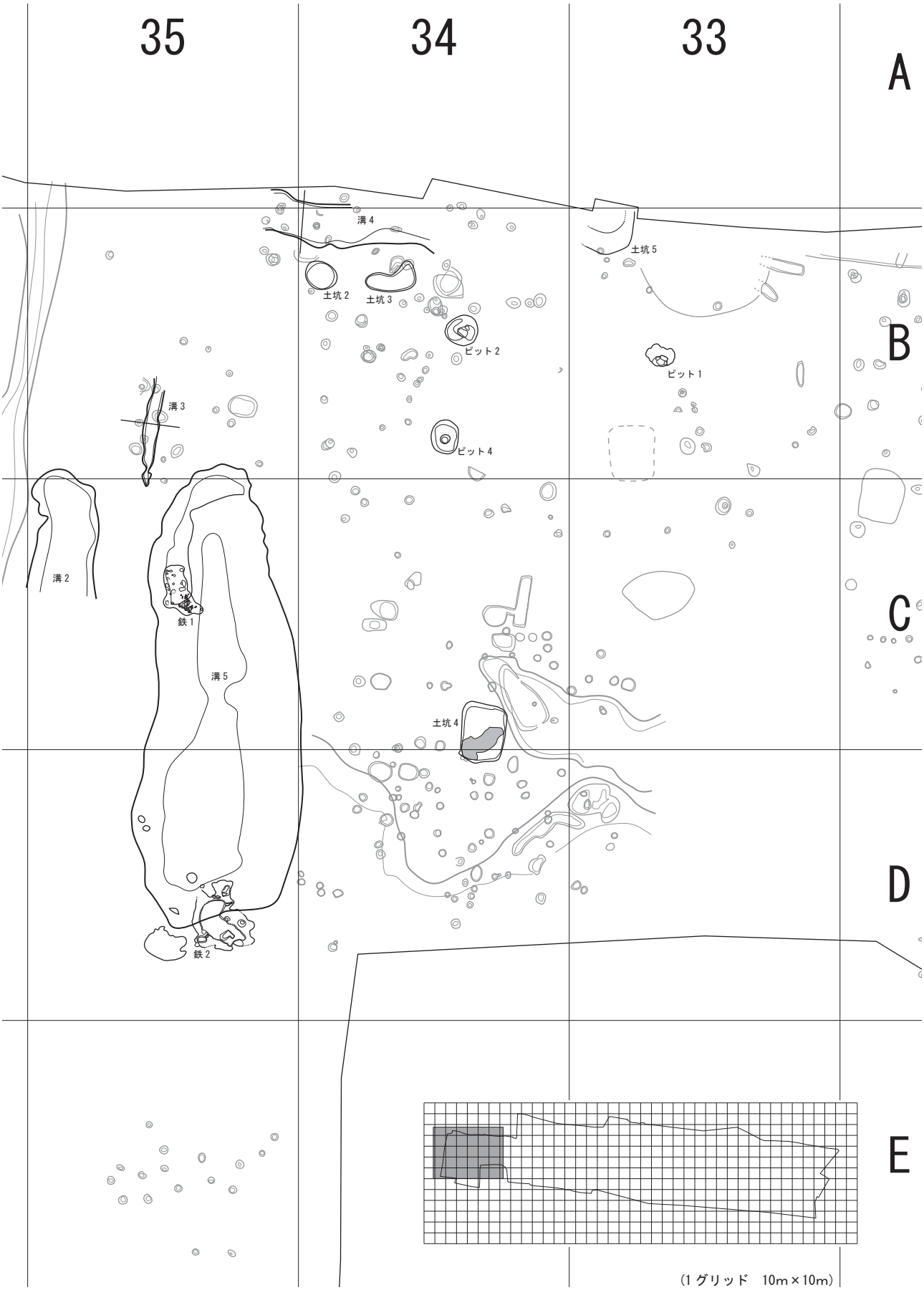




第279図　近世全体遺構図２



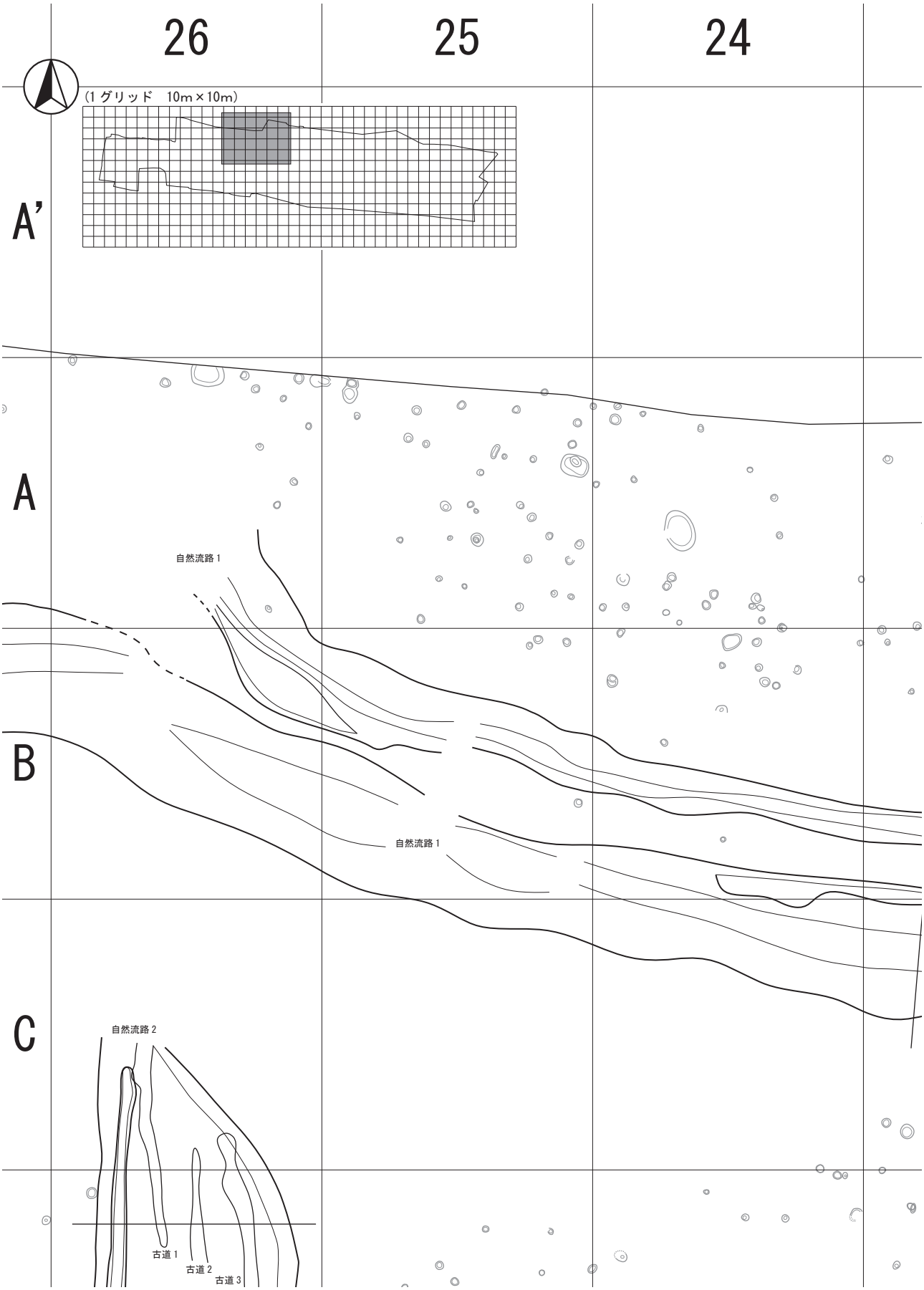
第280図　近世遺構配置図1



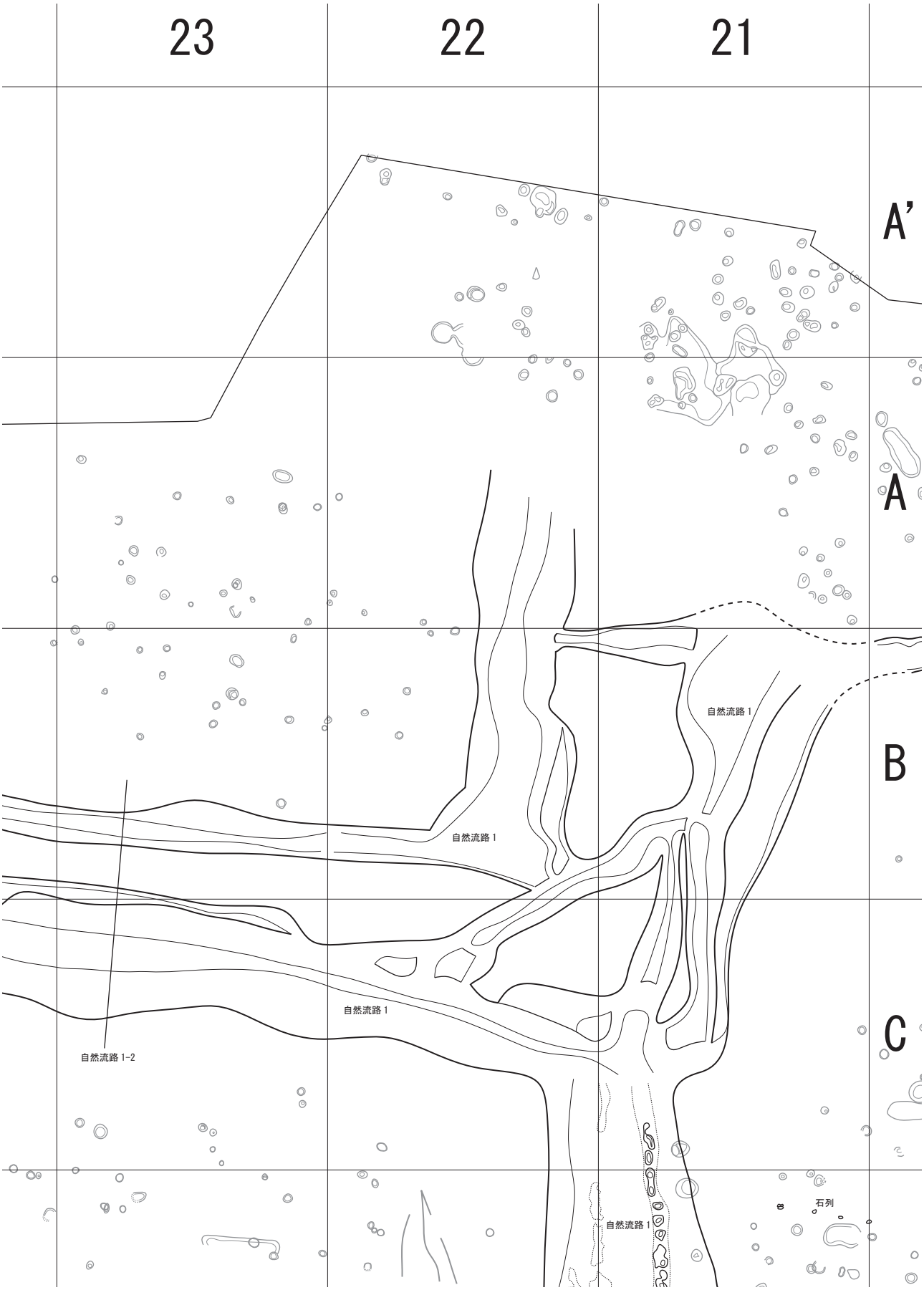
第281図　近世遺構配置図２

第282図　近世遺構配置図３

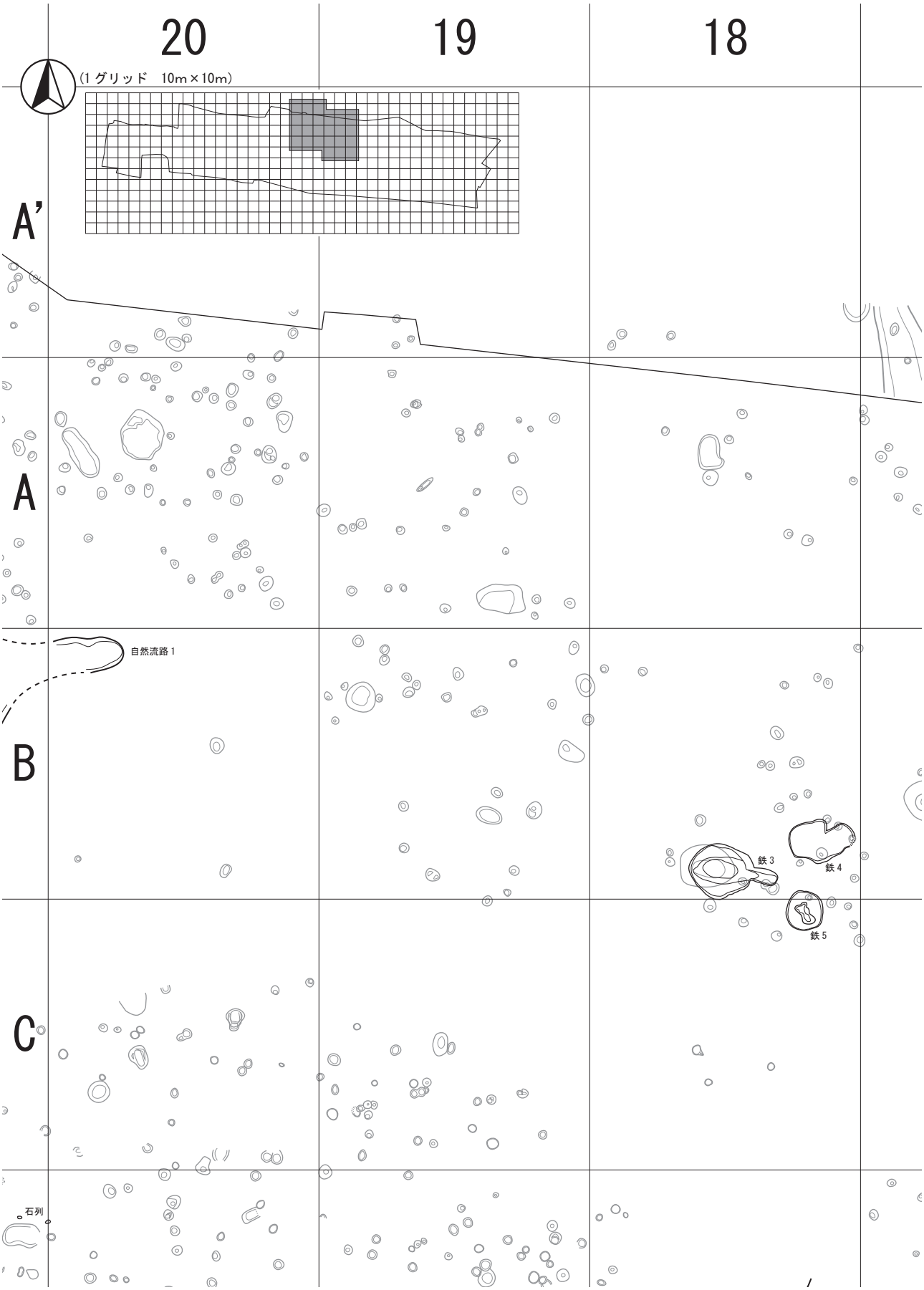
第283図　近世遺構配置図４



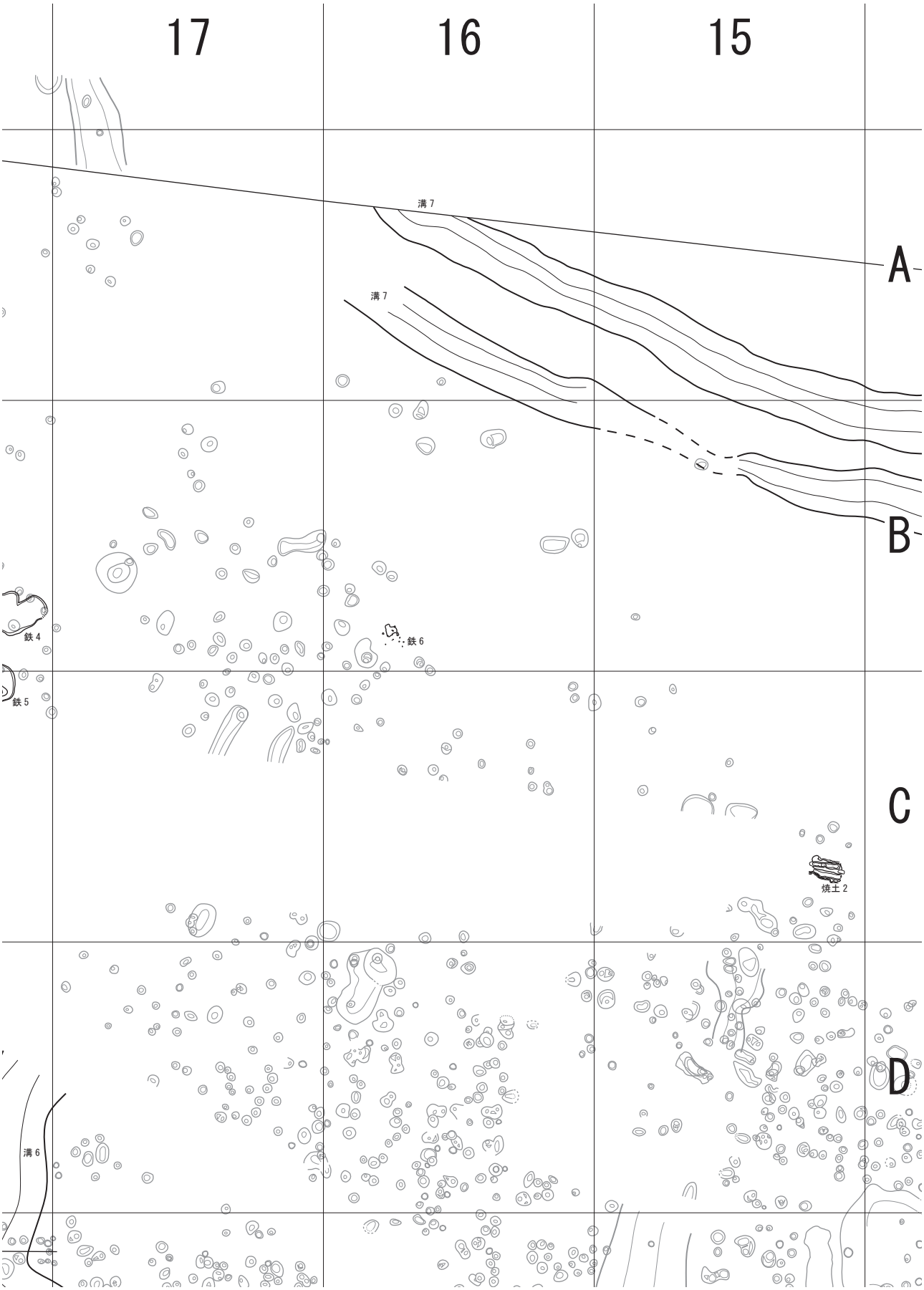
第284図　近世遺構配置図５



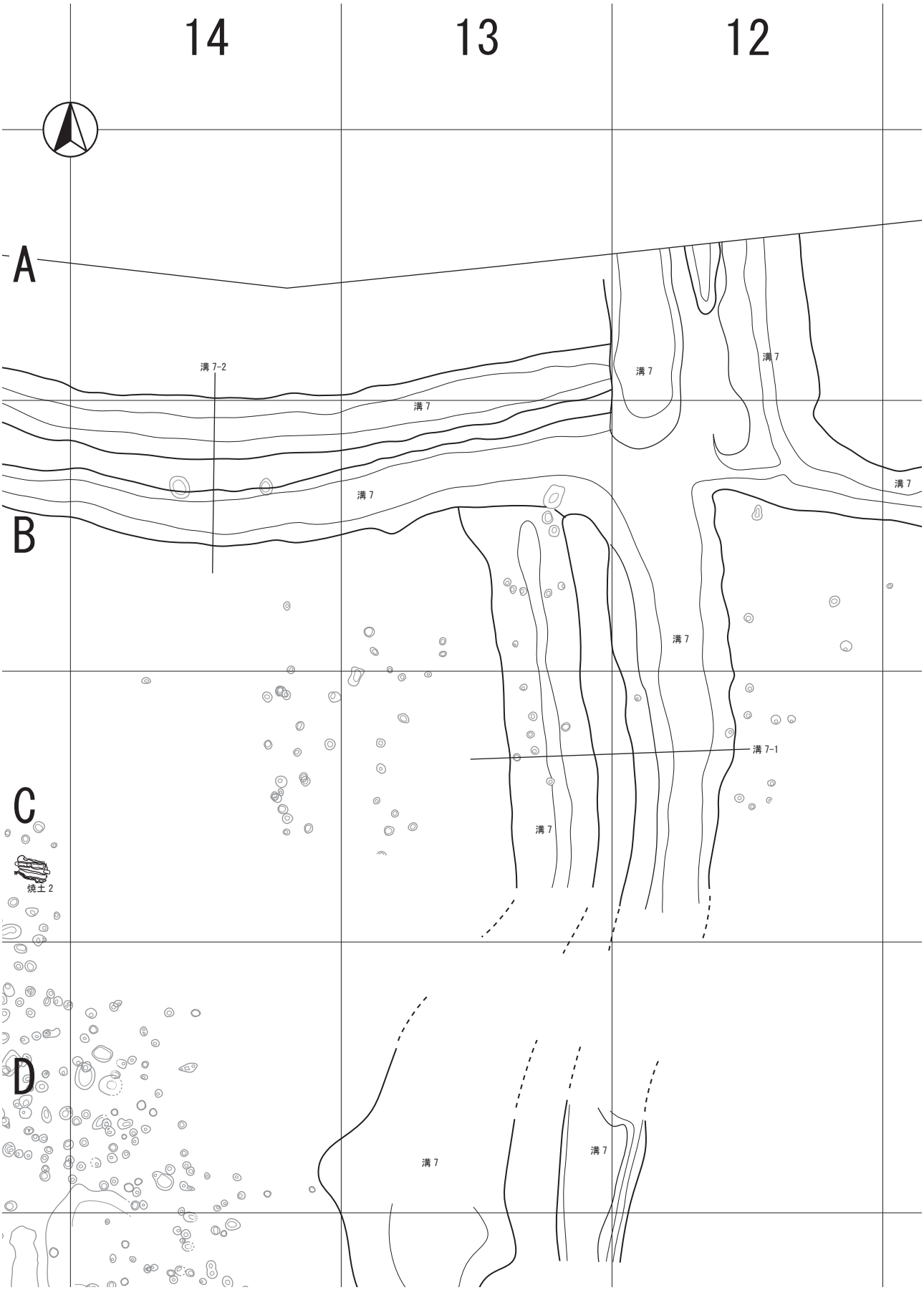
第285図　近世遺構配置図６



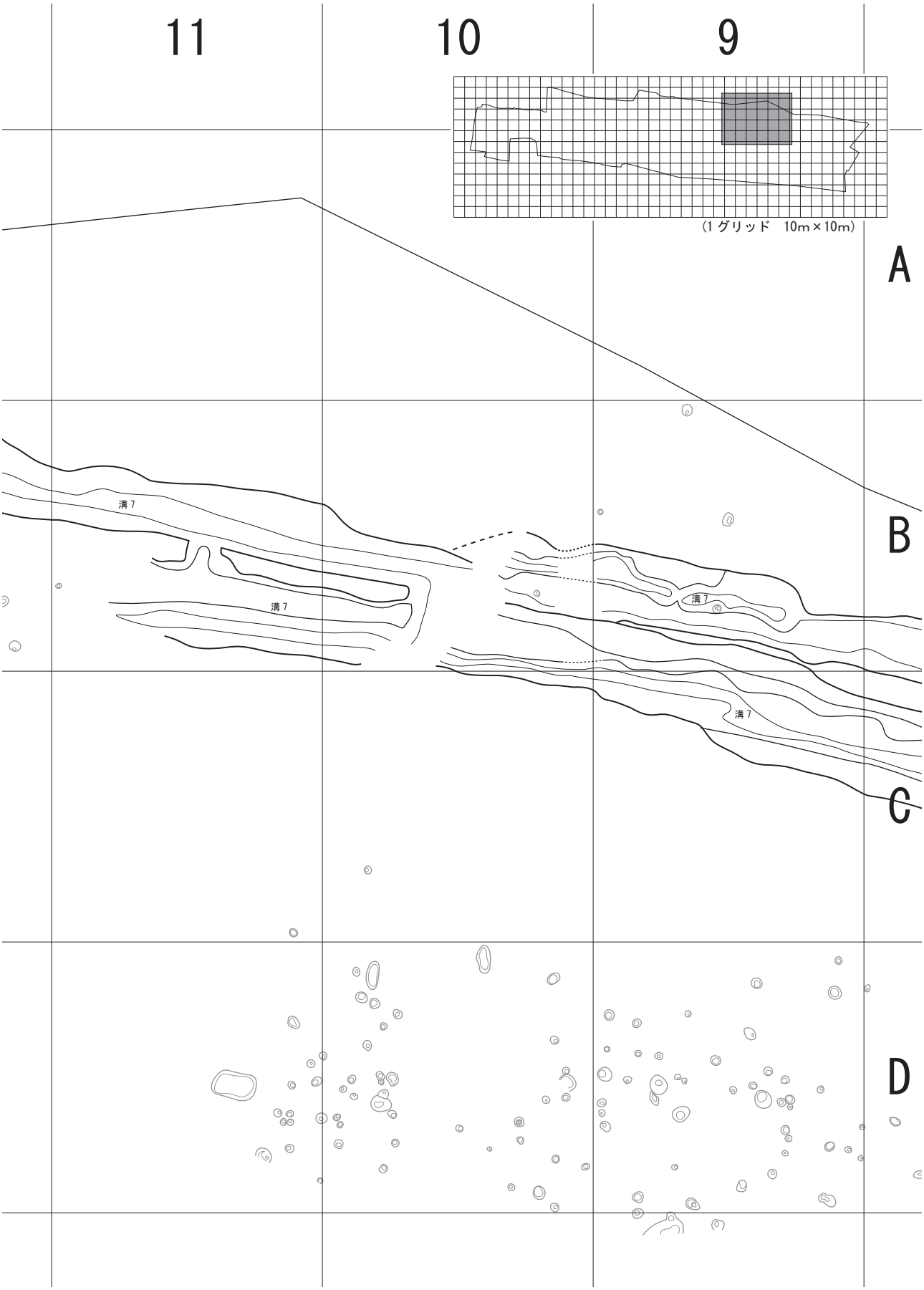
第286図　近世遺構配置図７



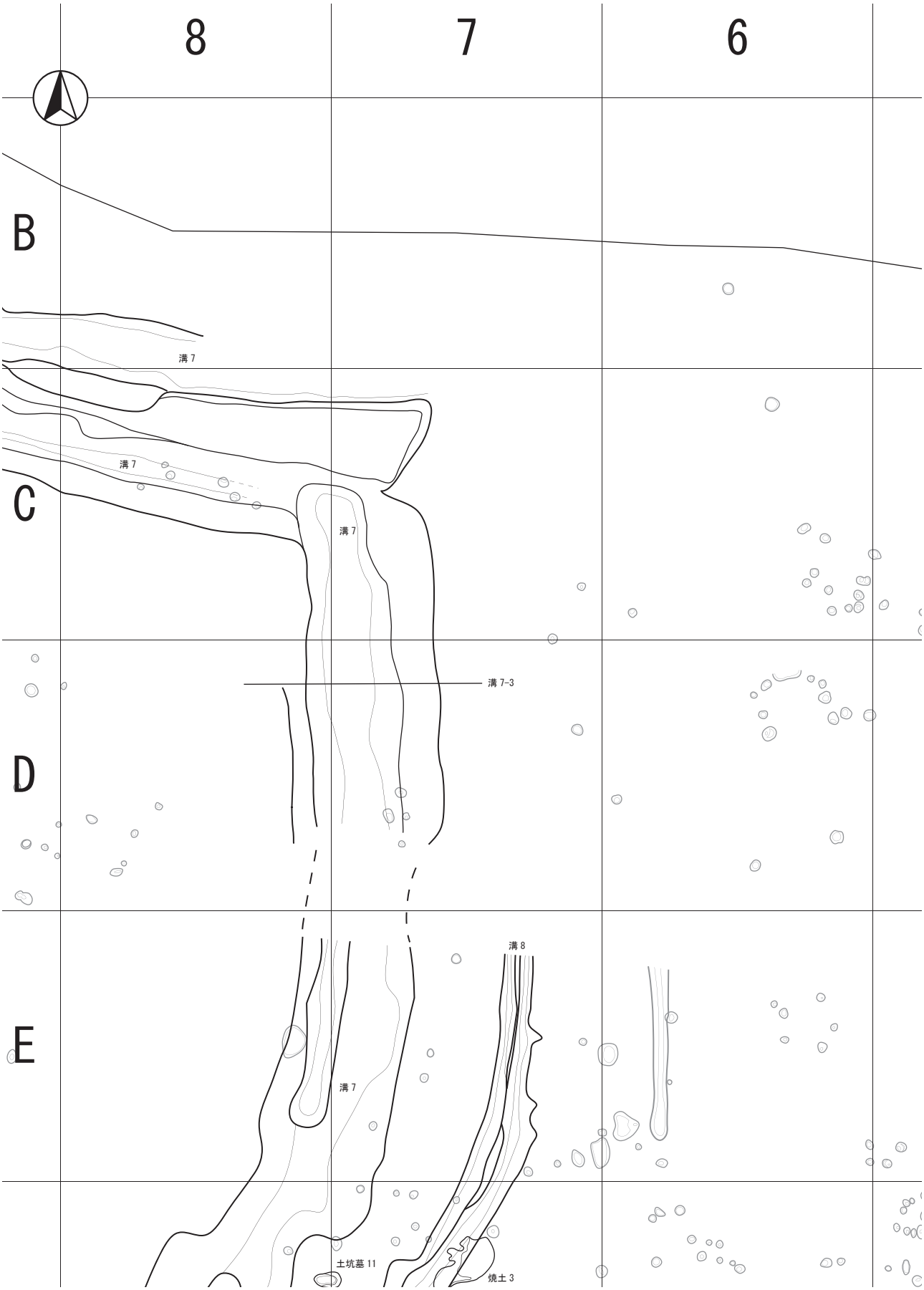
第287図　近世遺構配置図８



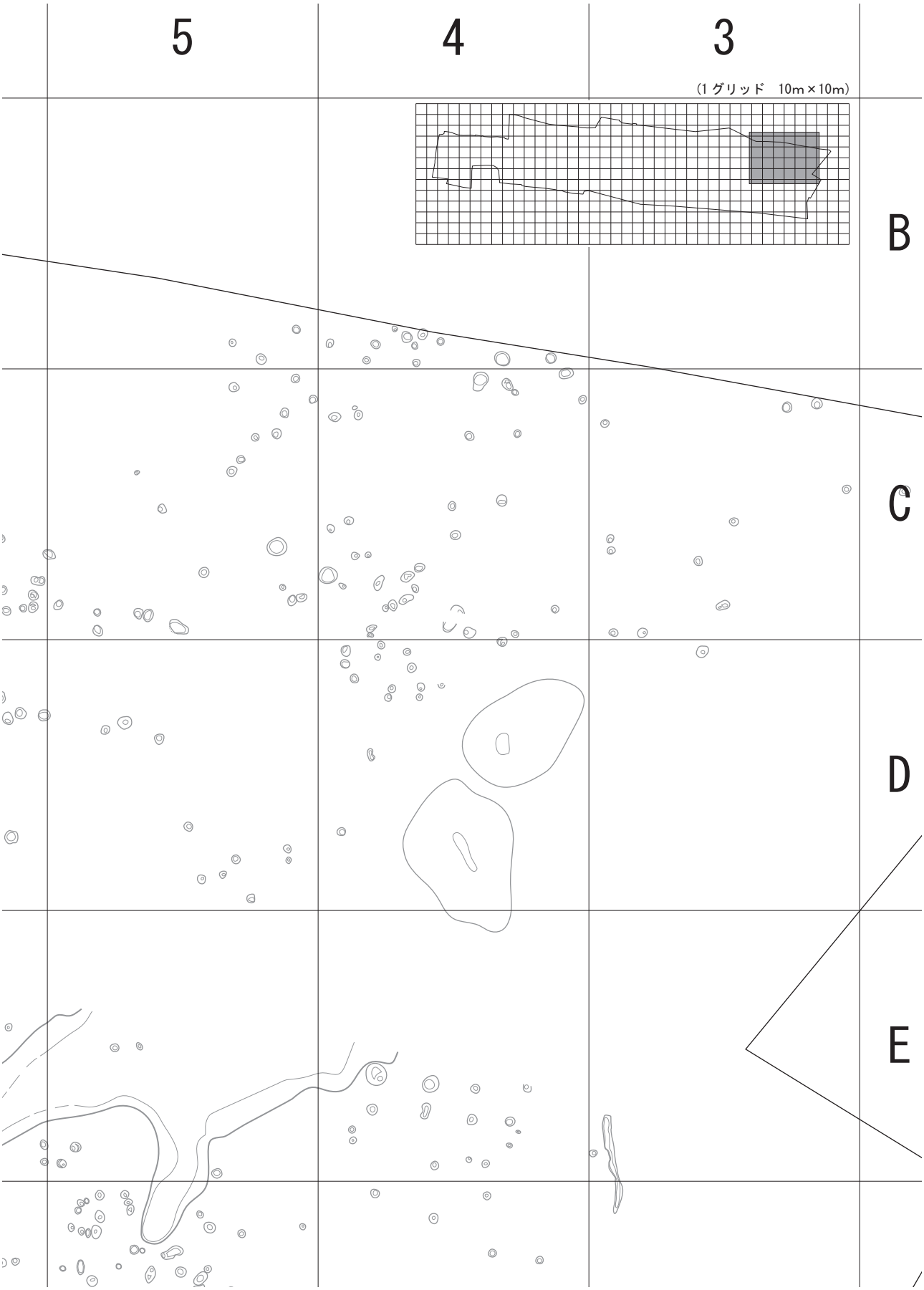
第288図　近世遺構配置図９



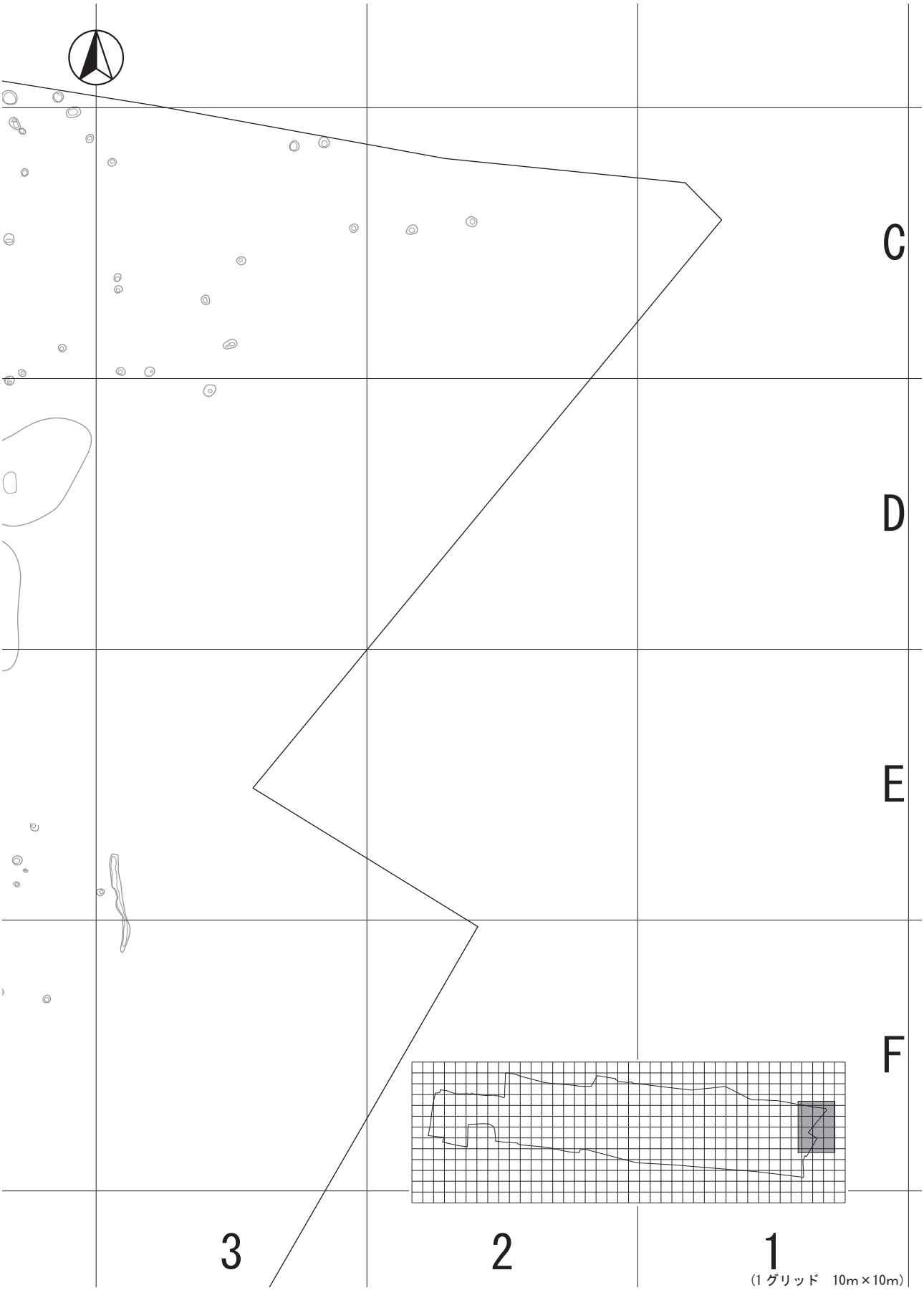
第289図　近世遺構配置図10



第290図　近世遺構配置図11

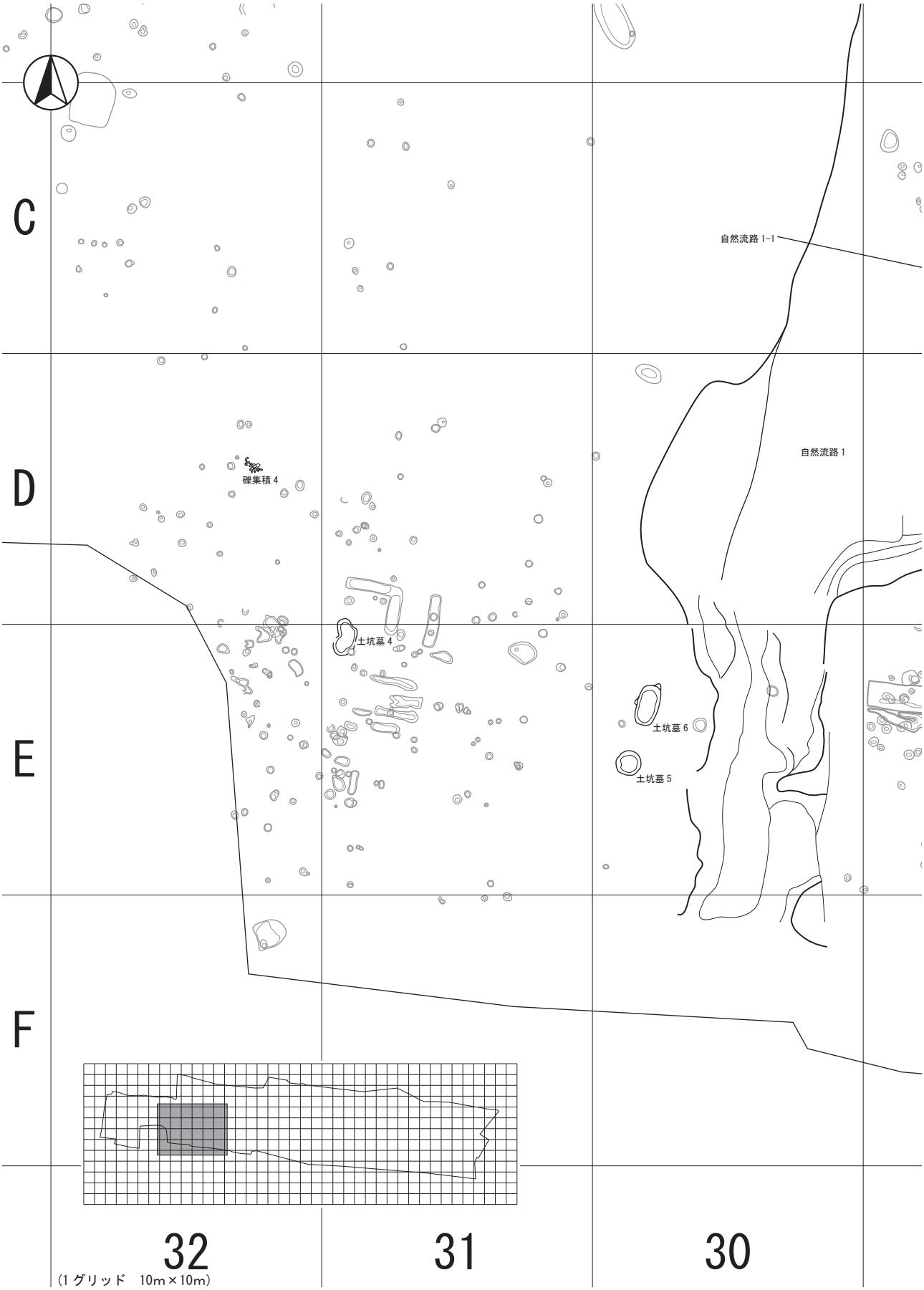


第291図　近世遺構配置図12

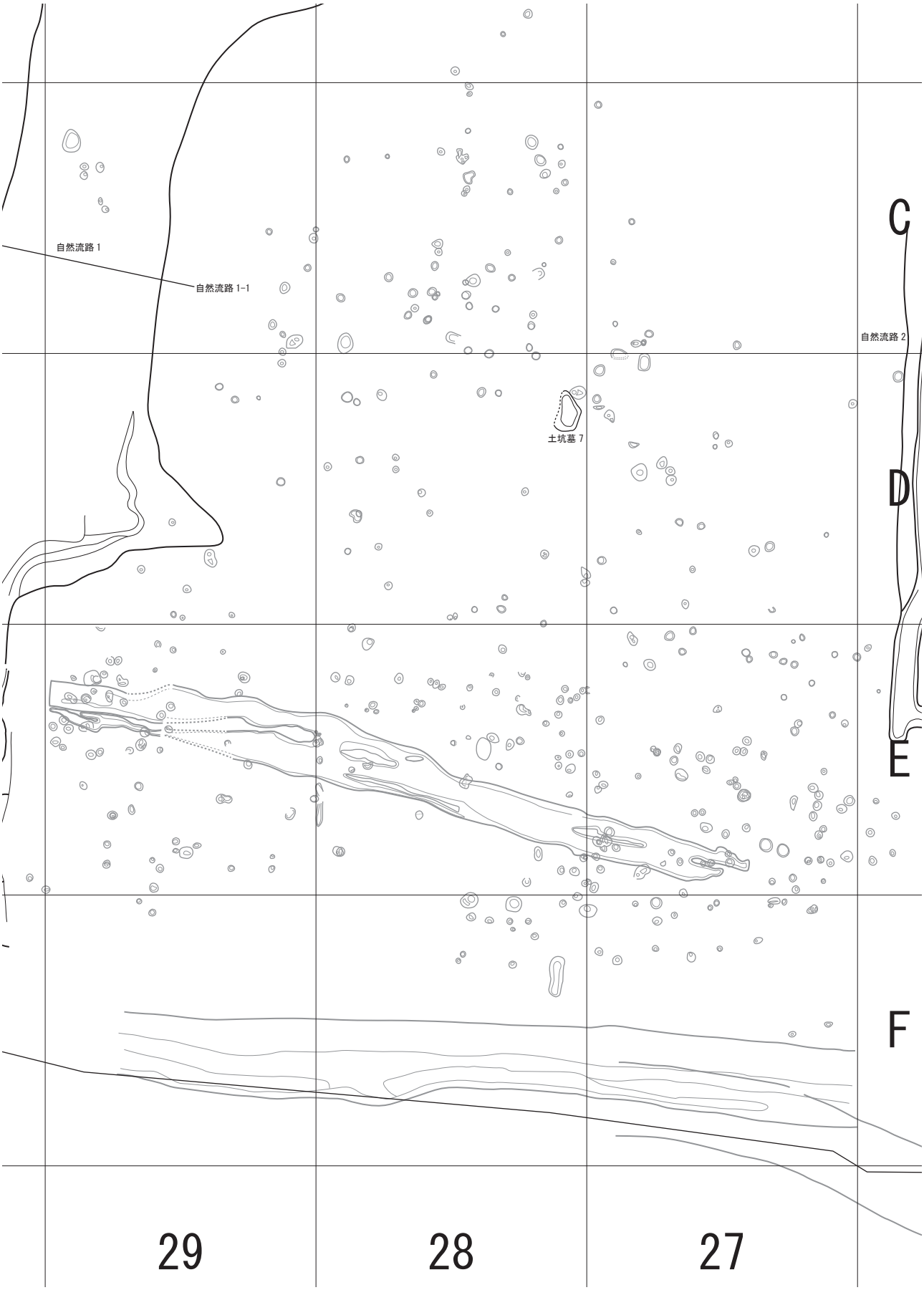


第292図　近世遺構配置図13

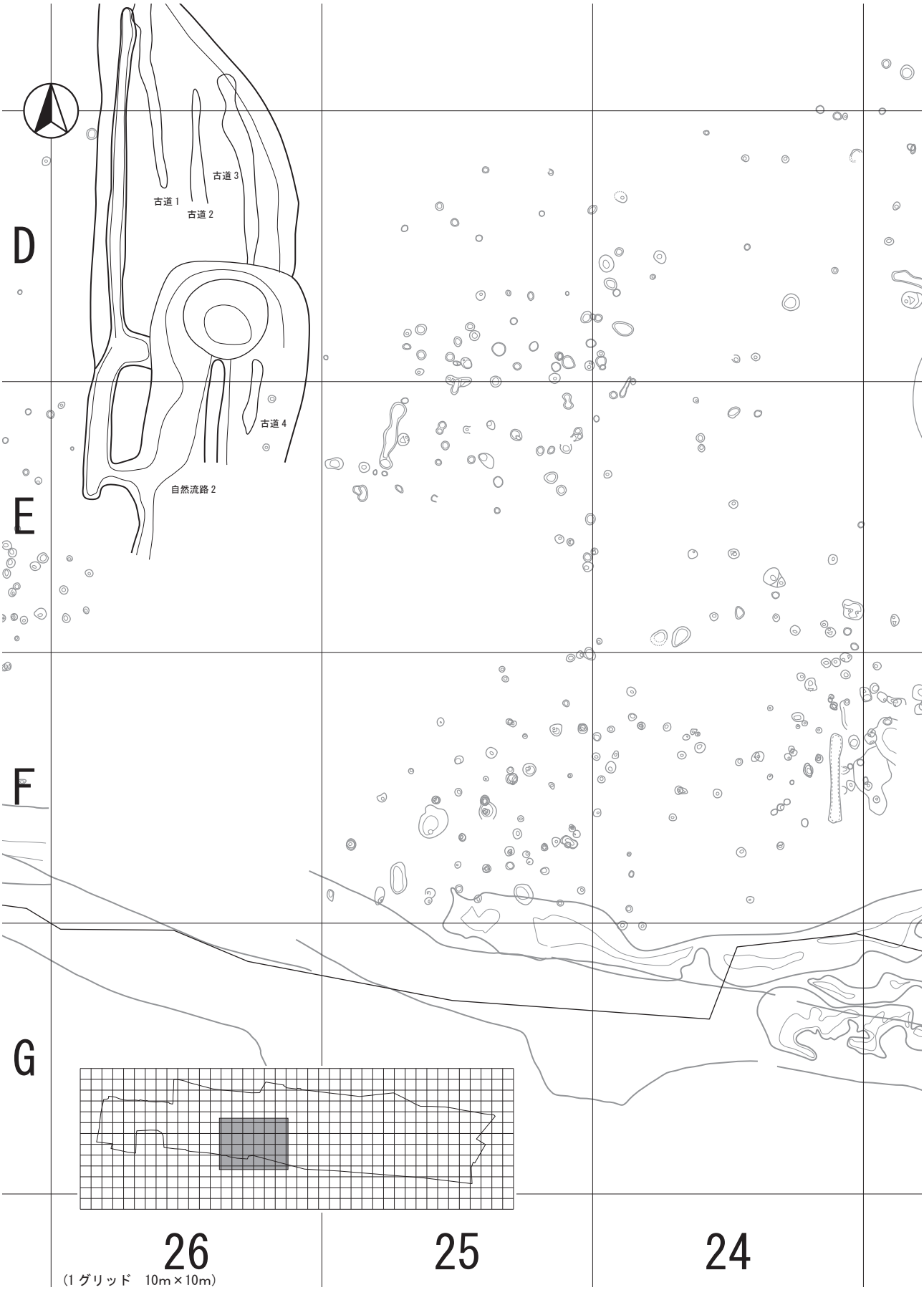
第293図　近世遺構配置図14



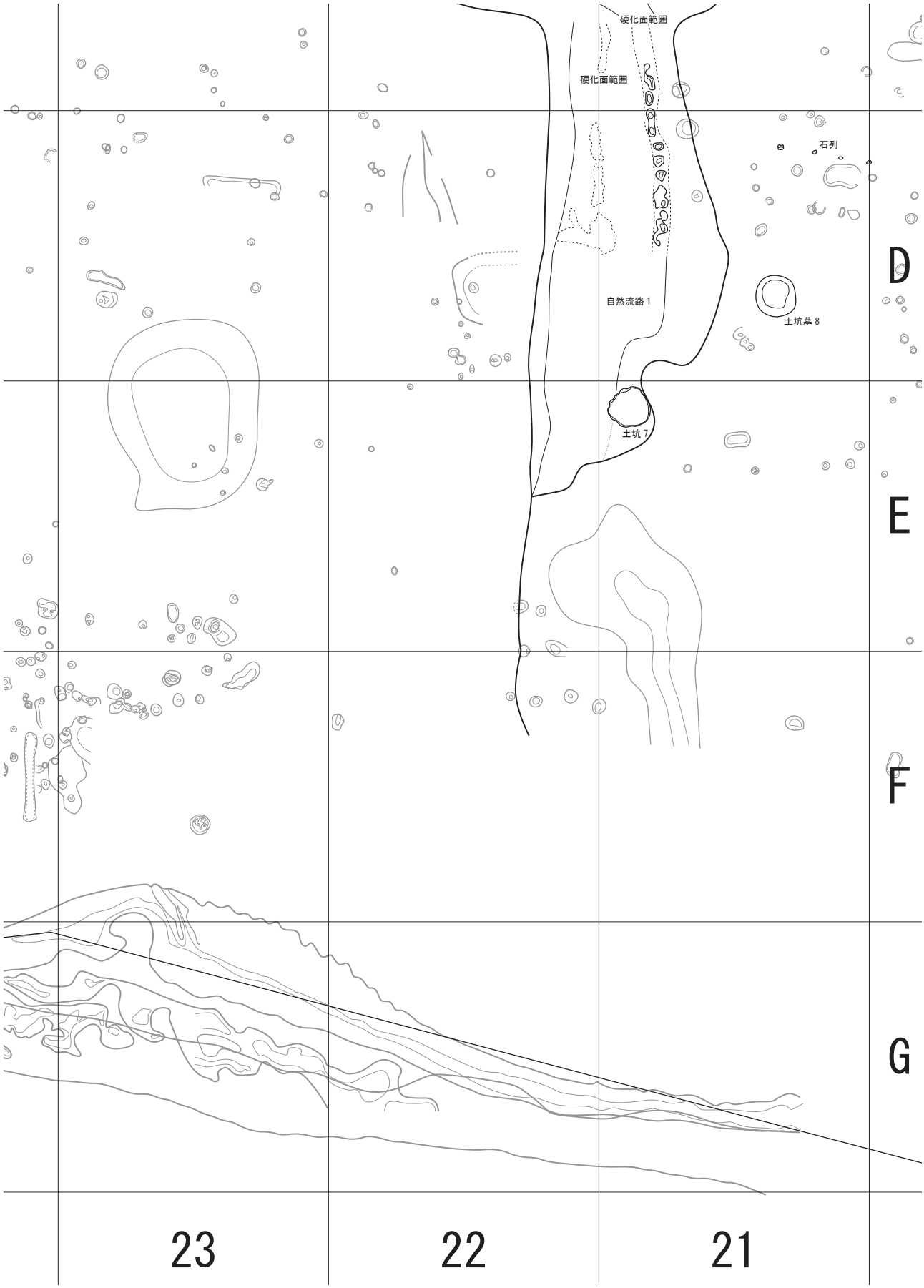
第294図　近世遺構配置図15



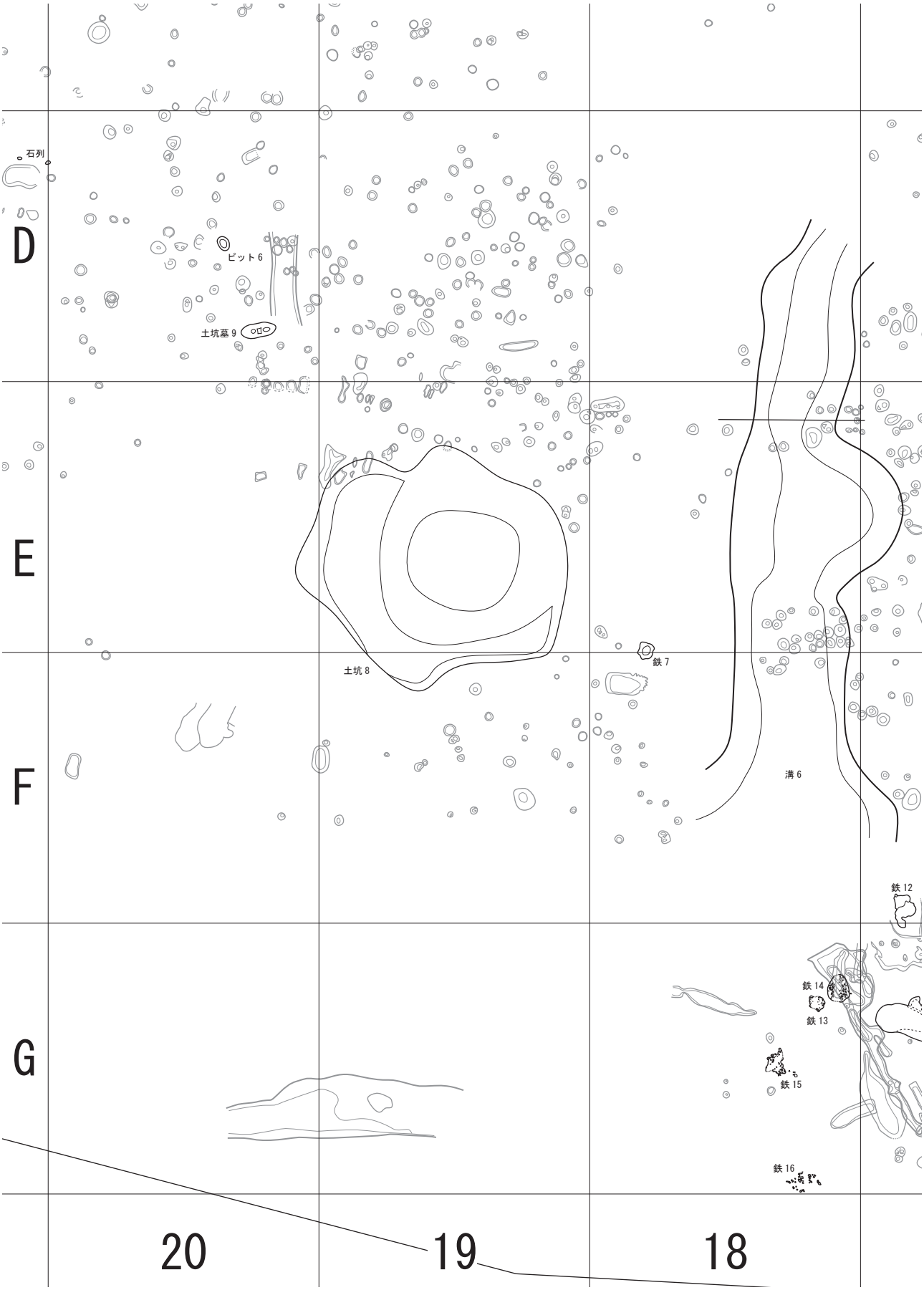
第295図　近世遺構配置図16



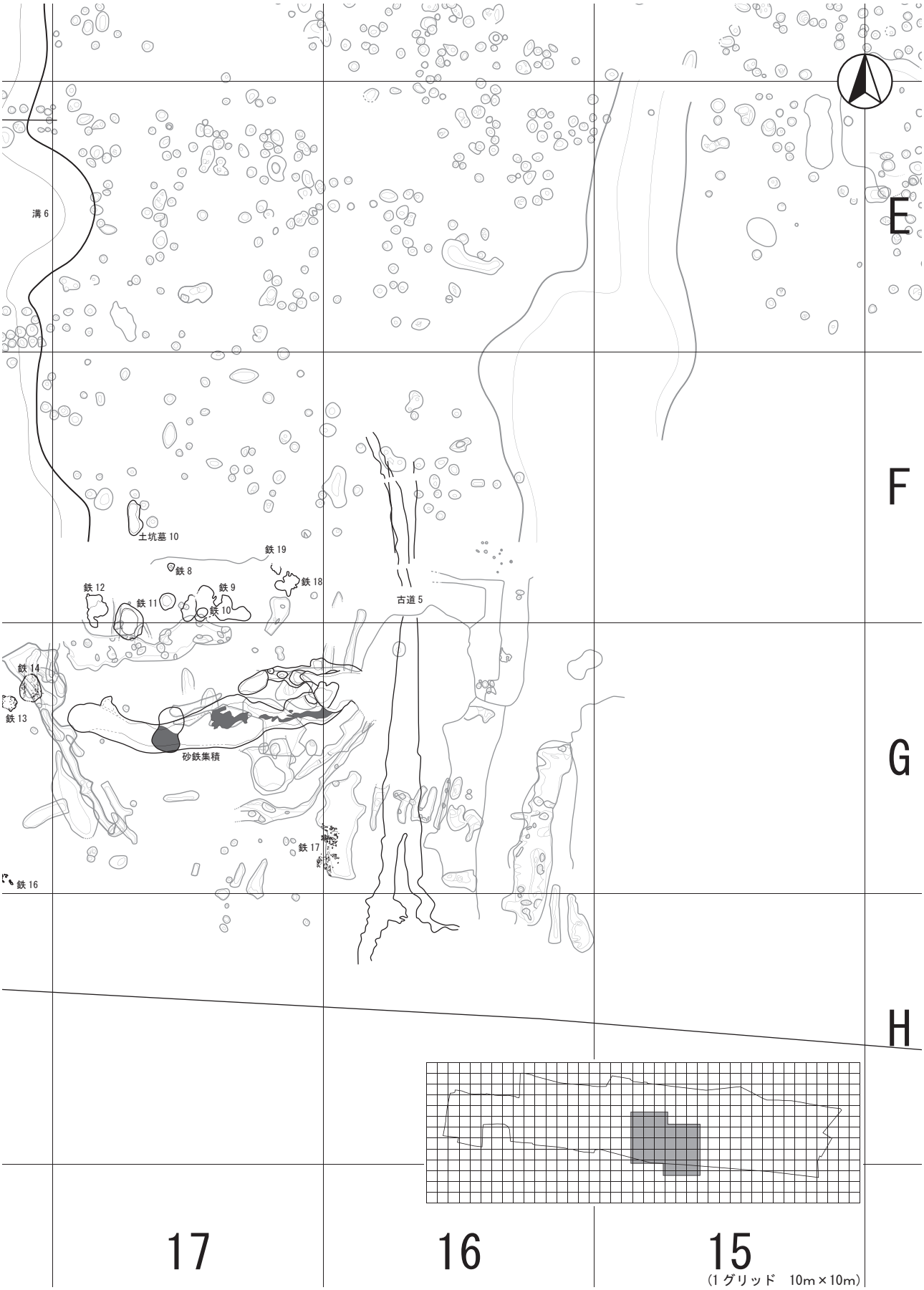
第296図　近世遺構配置図17



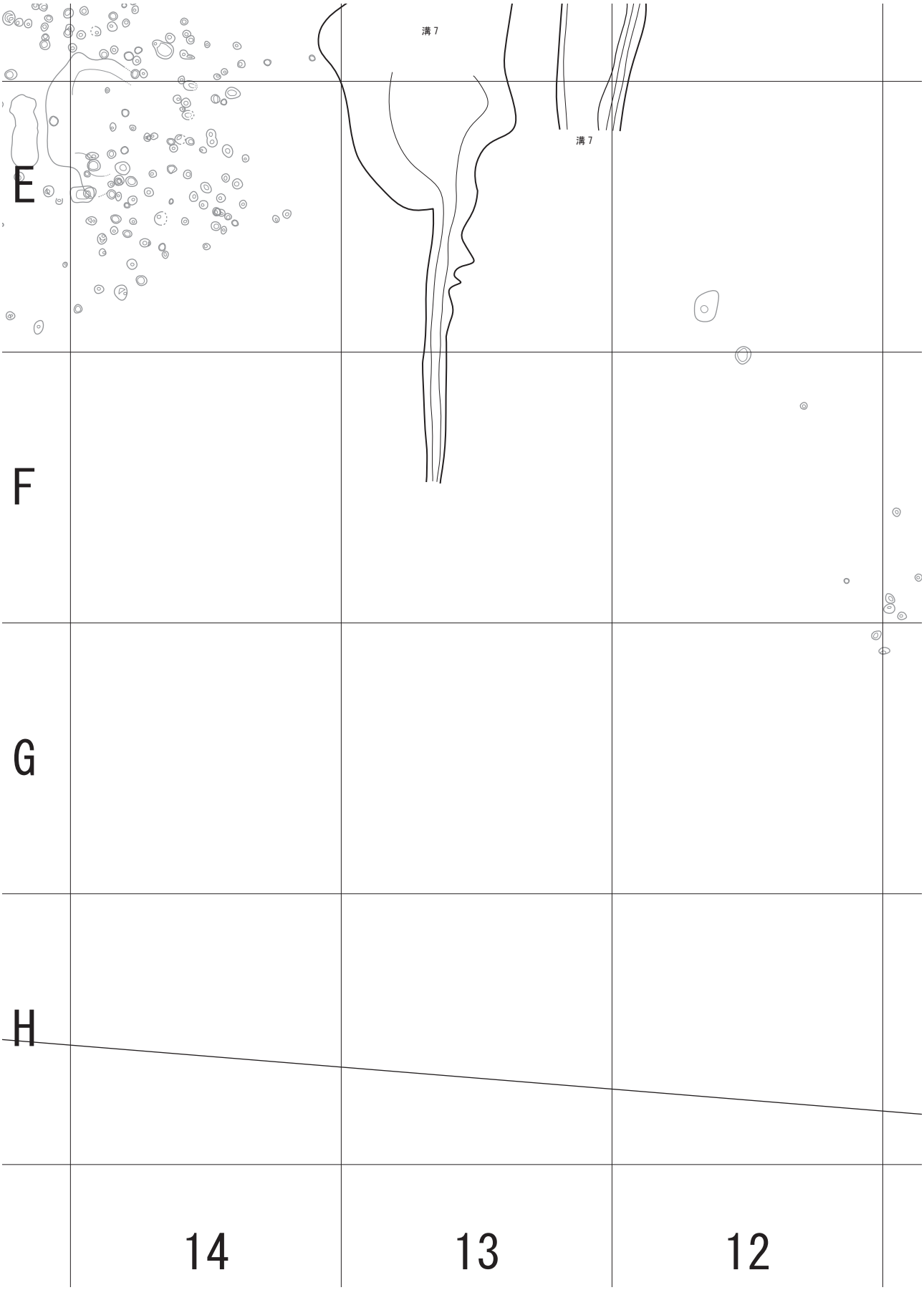
第297図　近世遺構配置図18



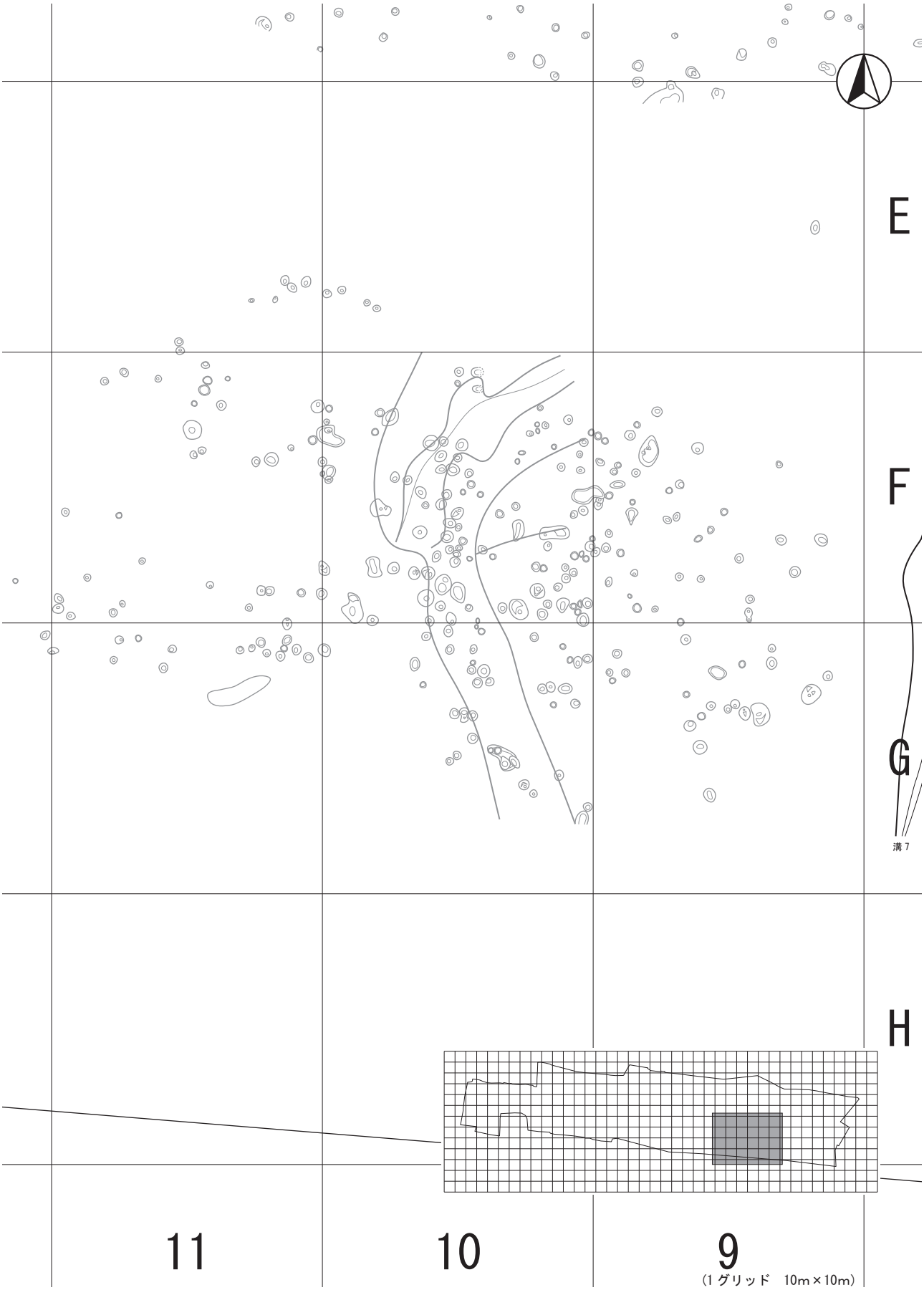
第298図　近世遺構配置図19



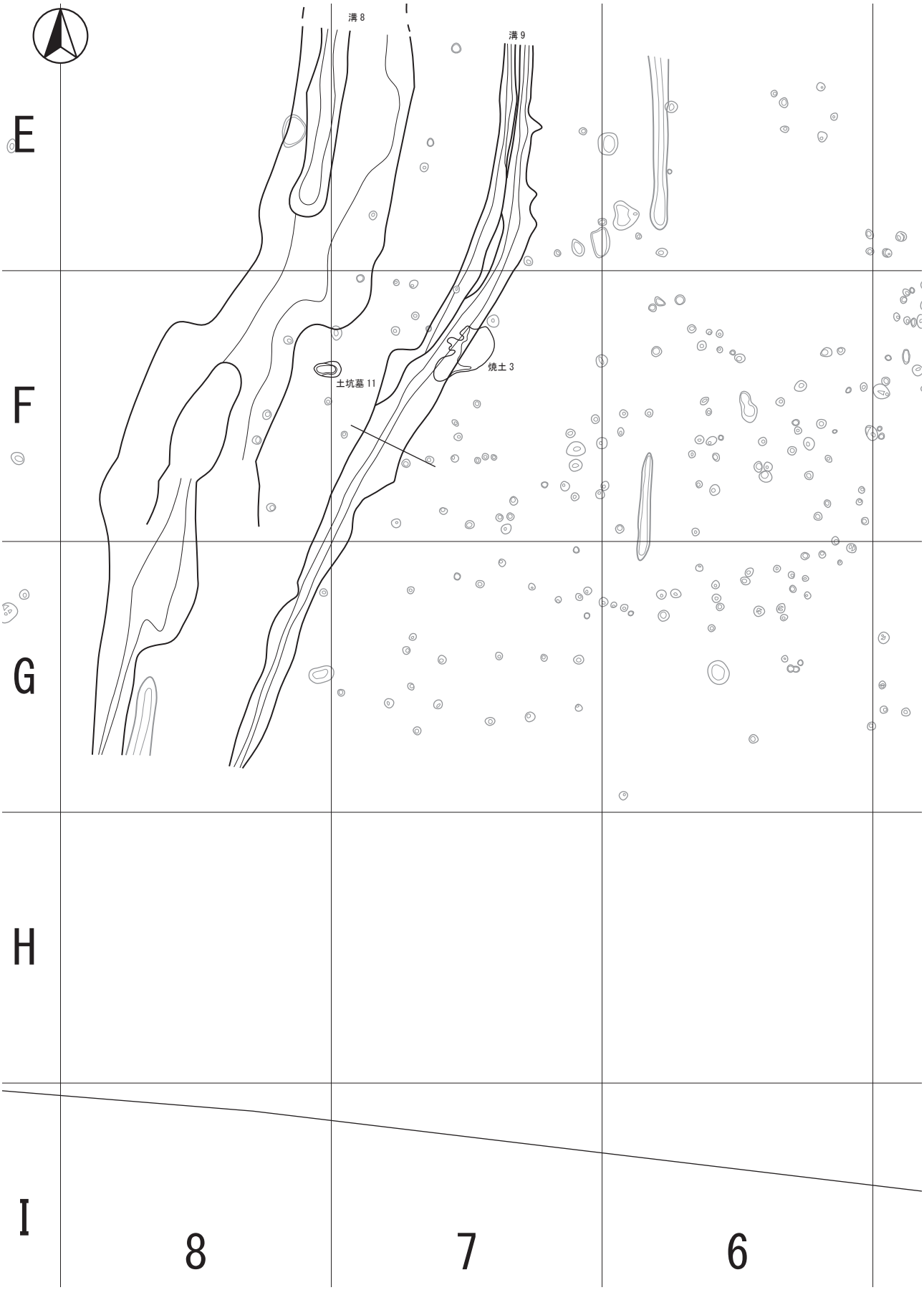
第299図　近世遺構配置図20



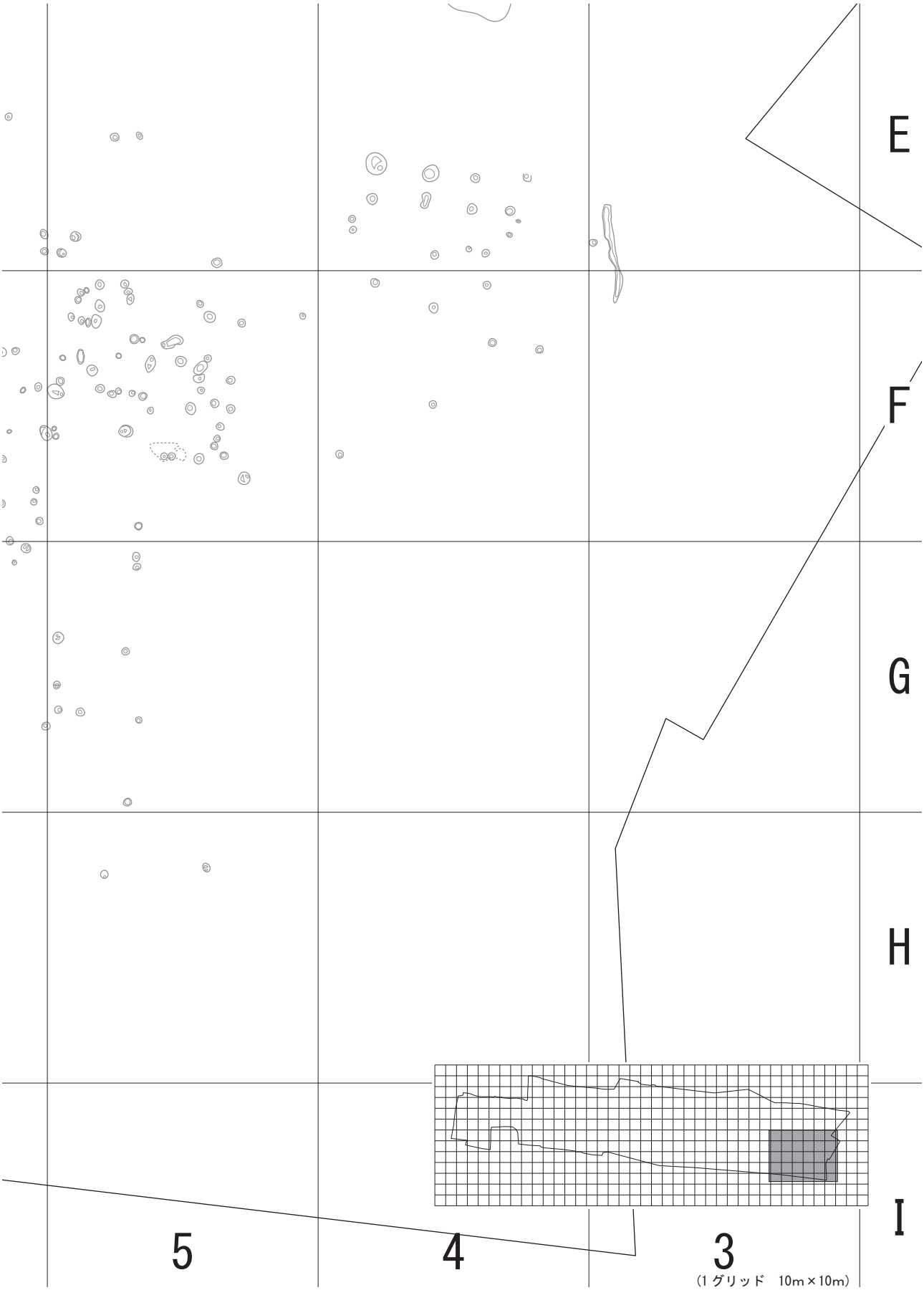
第300図　近世遺構配置図21



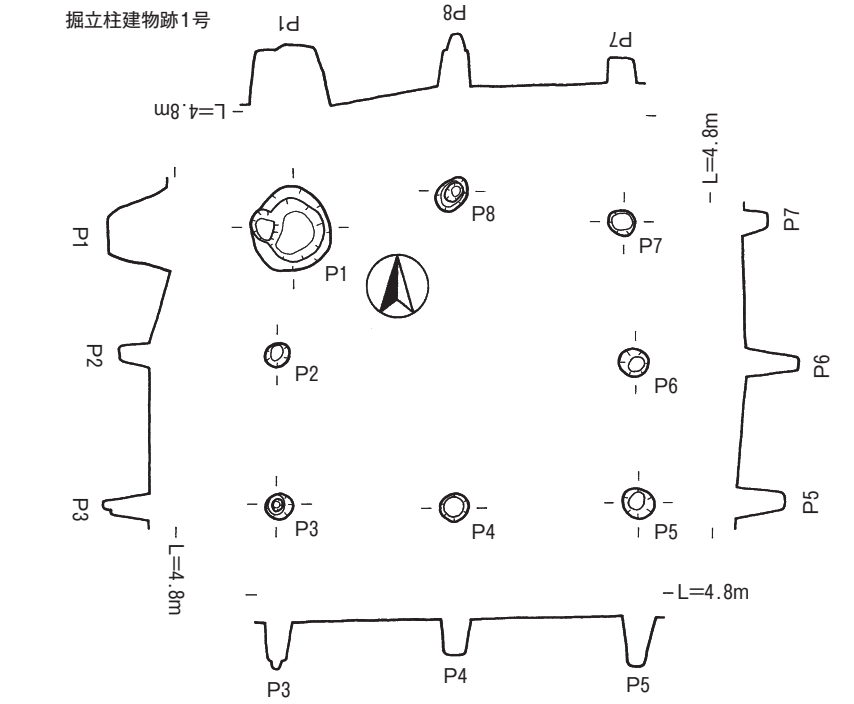
第301図　近世遺構配置図22



第302図　近世遺構配置図23



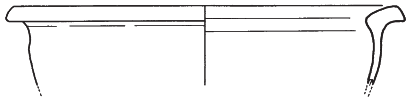
第303図　近世遺構配置図24

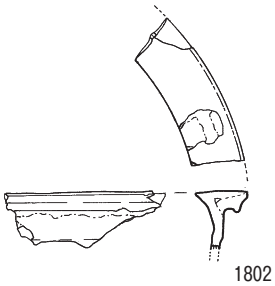


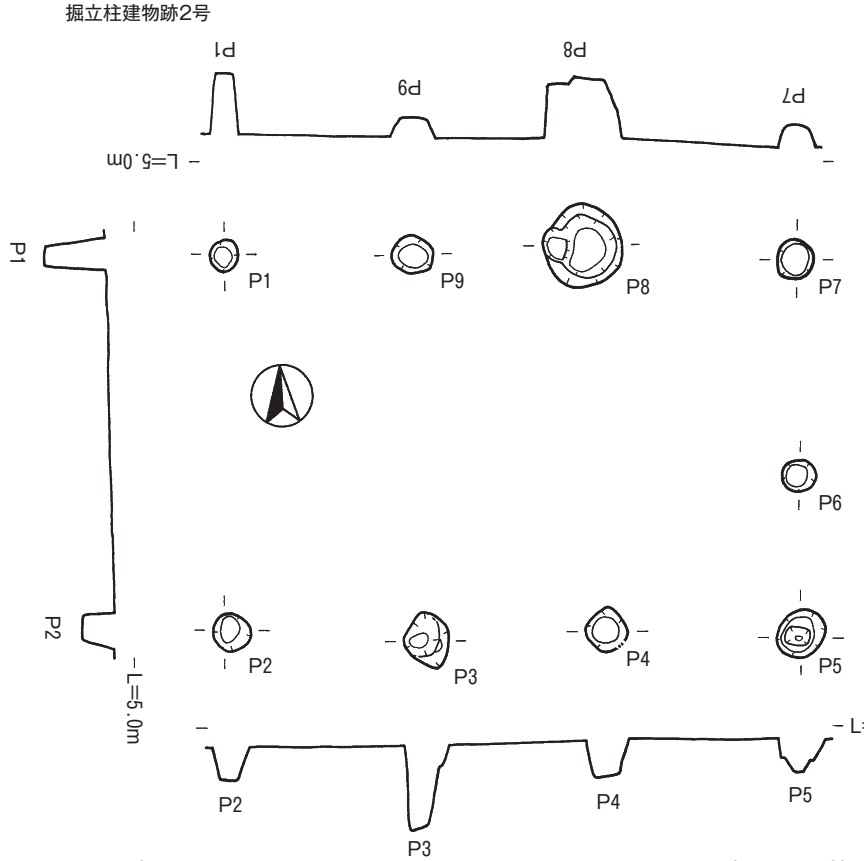
掘立柱建物跡1号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	87	83	66
2	26	24	32
3	28	28	49
4	31	28	38
5	34	32	53
6	32	28	58
7	30	25	27
8	39	31	57

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1−2	1.3	3−4	1.9
2−3	1.6	4−5	1.9
5−6	1.5	7−8	2.0
6−7	1.5	8−1	1.7



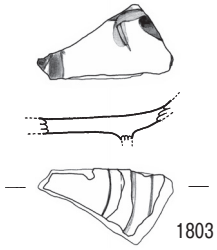




掘立柱建物跡2号

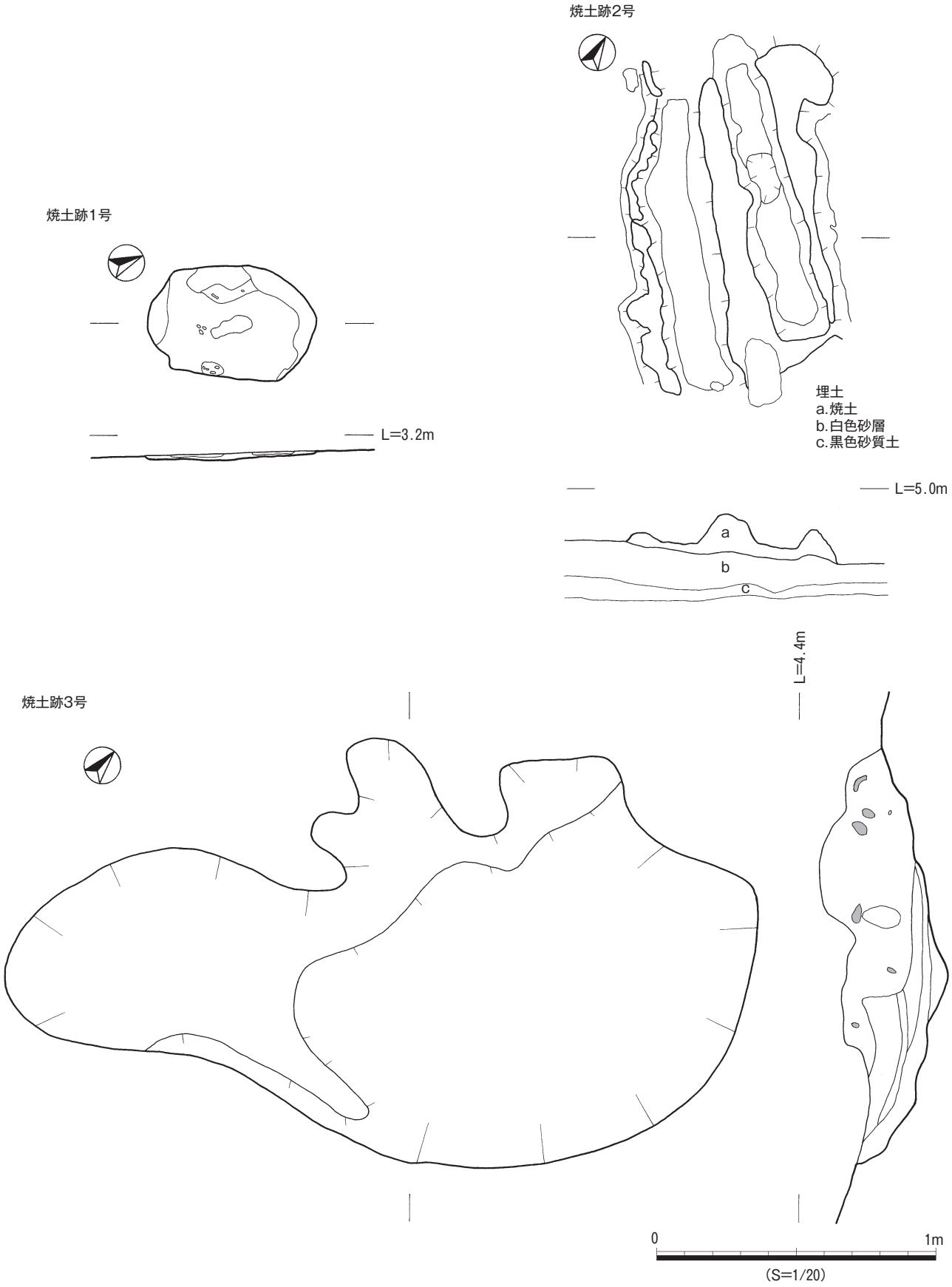
柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	35	31	68
2	40	38	36
3	61	47	87
4	48	45	41
5	55	46	25
6	35	33	46
7	42	39	26
8	87	83	66
9	45	40	20

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1−2	3.9	2−3	2.0
5−6	1.6	3−4	2.0
6−7	2.3	4−5	2.1
		7−8	1.7
		8−9	2.3
		9−1	2.0



0 4m (S=1/80)　0 1801・1803 10cm (S=1/3)　0 1802 10cm (S=1/4)

第304図　掘立柱建物跡１，２号・出土遺物



第305図　焼土跡１～３号

焼土跡３号（第305図）

F-7区で検出された。平面形は長軸2.7m，短軸1.5mの不定形で，検出面からの深さ36㎝である。埋土中に赤色粘質土の焼土塊を含んでいる。

製鉄関連遺構（第306図～第312図）

製鉄に関係すると思われる炉跡や炭化物集中，鉄滓集中などの遺構を一括した。遺構は調査区西側のC・D-35区，調査区中央のB・C-16～18区，F・G-16～18区で検出された。特にF-17区に密集する傾向がある。

製鉄関連遺構１号（第306図）

C-35区で検出された。溝５号内の鉄滓集中である。長軸1.9m，短軸0.8mの範囲に礫とともに広がっている。溝の深い部分に鉄滓が集中しており，廃棄された状態と推察される。

製鉄関連遺構２号（第306図）

D-35区で検出された。掘り込みと鉄滓集中である。掘り込みはごく浅く６㎝程しかない。埋土は焼成を受けているとは言えないが，若干濁った土で，掘り込みより外側にまで広がり，その範囲は長軸2.6m＋α，短軸２m＋αである。また掘り込みの南西側約１mに鉄滓集中があり，１m×1.5mほどの広がりをもつ。

製鉄関連遺構３号（第307図）

B-18区で検出された炉跡である。平面形は径２mの円形に，長さ0.9m，幅0.6mほどの張り出しがつく，柄鏡状を呈する。検出面から底部まで，約0.3mである。埋土中に焼土や炭化物を多く含み，強い焼成を受けたことが伺える。鉄滓も多く出土している。

製鉄関連遺構４号（第308図）

B-18区で検出された炉跡である。平面形は長軸2.45m，短軸1.6mの不定形を呈する。検出面からの深さは0.2mである。平面形からは長方形と方形の炉の切り合いも想定できるが，埋土断面からは確認できない。埋土には焼土や炭化物を多く含んでおり，焼成の痕跡を残す。さらに遺構中央に大型の椀形滓，炉壁片なども出土した。

製鉄関連遺構５号（第309図）

B・C-18区で検出された炉跡である。平面形は径1.4mの円形を呈する。検出面からの深さは23㎝である。また円形の掘り込みの中央付近に深さ７㎝ほどの不定形をした凹みをもつ。埋土には焼土塊，炭化物などの焼成の痕跡が残り，鞴の羽口も出土している。

製鉄関連遺構６号（第309図）

B-16区で検出された。平面形ははっきりしないが，40㎝四方の広がりをもつ，炭化物集中である。断面からもわかるように，本来，掘り込みを有していたと考えられるが，削平のためその規模はわからない。検出面からの深さは４㎝ほどである。近辺に鉄滓も出土している。

製鉄関連遺構７号（第309図）

E・F-18区で検出された炭化物集中である。径0.6m，深さ14㎝ほどの掘り込みがあり，炭化物は掘り込みの外側まで広がっていたものと推察できる。埋土中からは，鉄滓片が多数出土した。また遺構周辺から，多数の鉄滓が出土した。

製鉄関連遺構８号（第309図）

F-17区で検出した炉跡である。平面形は径0.3mほどの略円形を呈し，上面は削平を受け，検出面からの深さはわずかに４㎝ほどの凹みしかない。凹み内からは，椀形滓，炭化物，鞴の羽口が出土した。

製鉄関連遺構９号（第310図）

F-17区で検出した炉跡である。炉跡の平面形は径約0.5mの円形を呈し，検出面からの深さ11㎝である。埋土は黒色灰が主体で鉄滓片が混じる。炉の東側35㎝には茶褐色砂に炭化物，鉄滓を含む埋土の深さ７㎝ほどの凹みがあり，さらに東側へ炭化物が混じる茶褐色砂が２mほど広がる。遺物では鞴の羽口片が出土している。

製鉄関連遺構10号（第310図）

F-17区で検出された炉跡である。平面形は径0.4mほどの円形を呈する。検出面からの深さ17㎝で炭化物を多量に含む暗褐色砂を埋土とする。検出面が９号の0.3mほど上面にあり，若干の時間差を認める。

製鉄関連遺構11号（第311図）

F・G-17区で検出された炉跡である。平面形は長軸1.3m，短軸1.1mの楕円形を呈し，検出面からの深さ16㎝である。黒色炭化物が主体となる埋土で，埋土内から鉄滓や検出面で鍛造剥片が数多く出土した。

製鉄関連遺構12号（第311図）

F・G-17区で検出された炉跡である。平面形は炭化物の広がりなどで不定形を呈しているが，掘り込みは径0.5m程度の円形を呈するのではないかと考えられる。掘り込み上面は炭化物混ざりの埋土が占め，掘り込みから，やや南にずれるように炭化物集中がみられる。掘り込み下部の埋土は焼成により，赤褐色に変色している。

製鉄関連遺構13号（第311図）

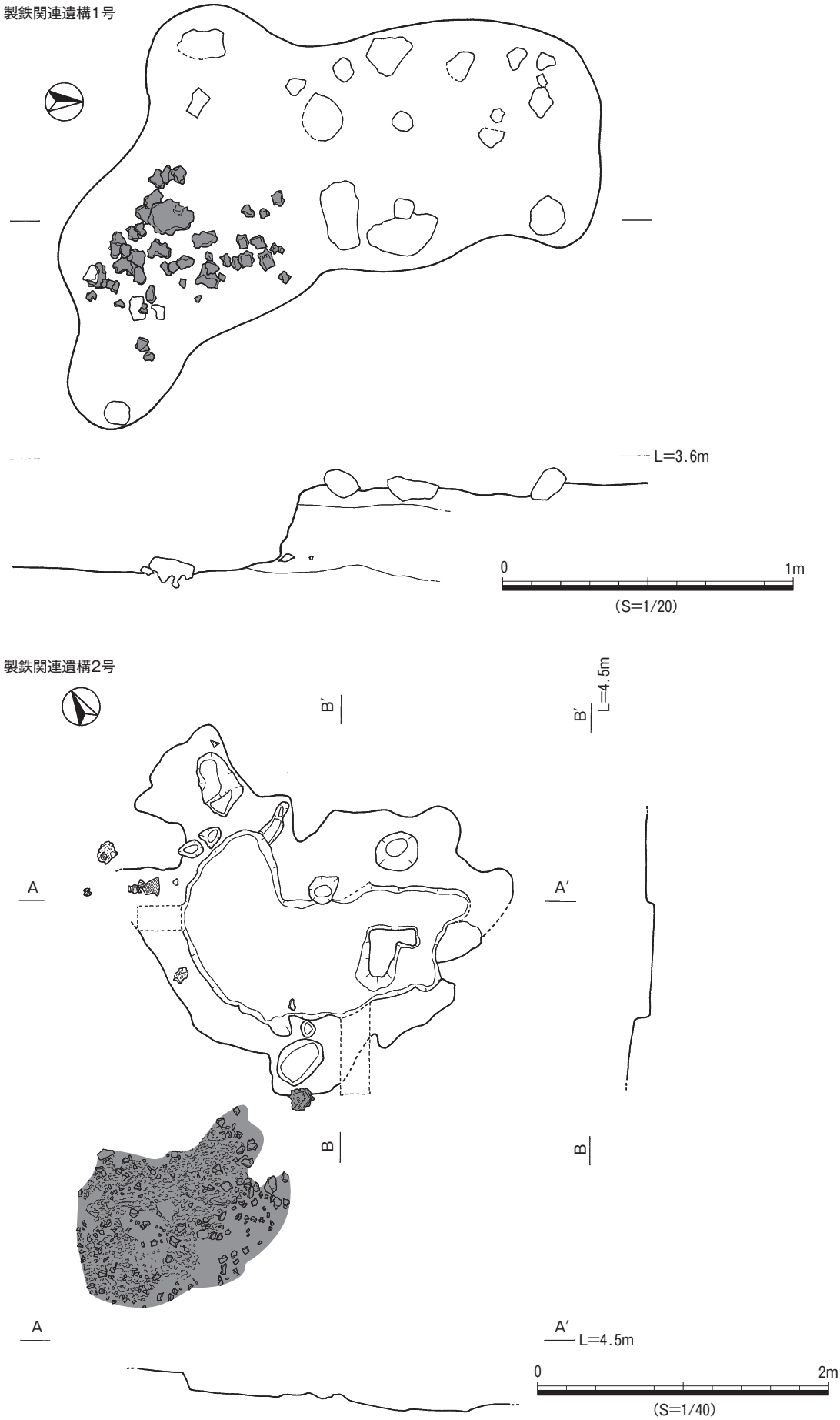
G-18区で検出された炉跡である。平面形は長軸0.6m，短軸0.5mの略方形を呈し，検出面からの深さ15㎝である。埋土はやや濁りの強い砂質土で，上面に炭化物の集中がみられる。鉄滓片も若干混じる。

製鉄関連遺構14号（第311図）

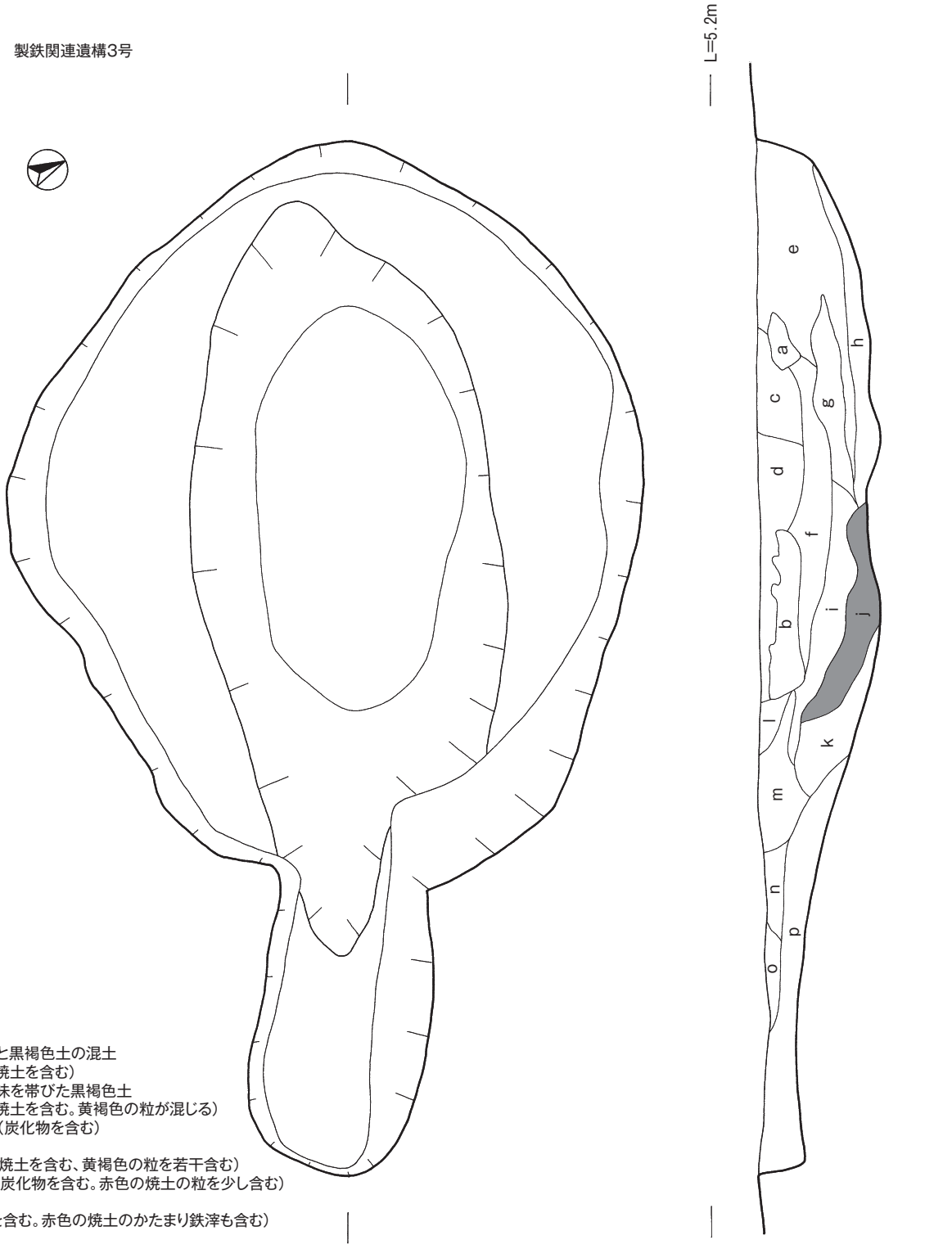
G-18区で検出された焼土跡である。平面形は長軸１m，短軸0.8mの楕円形を呈する。流動滓や鉄塊，炉壁片などが出土する。

製鉄関連遺構15号（第311図）

G-18区で検出された焼土跡である。平面形は長軸１m，短軸0.8mほどで略三角形状に広がる。焼土内からは，炉壁片が多く出土し，流動滓，鉄塊も若干みられた。

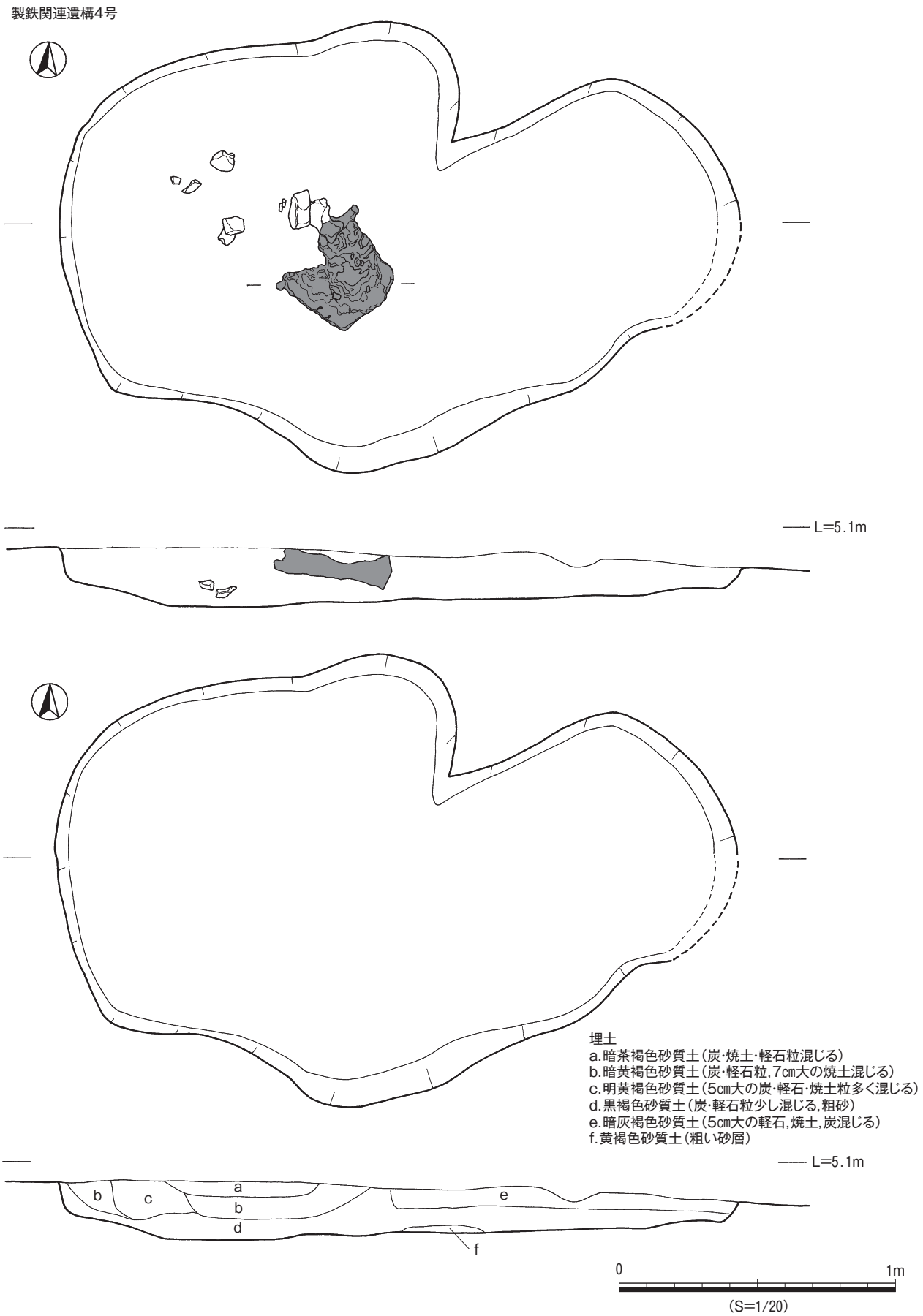


第306図　製鉄関連遺構１，２号

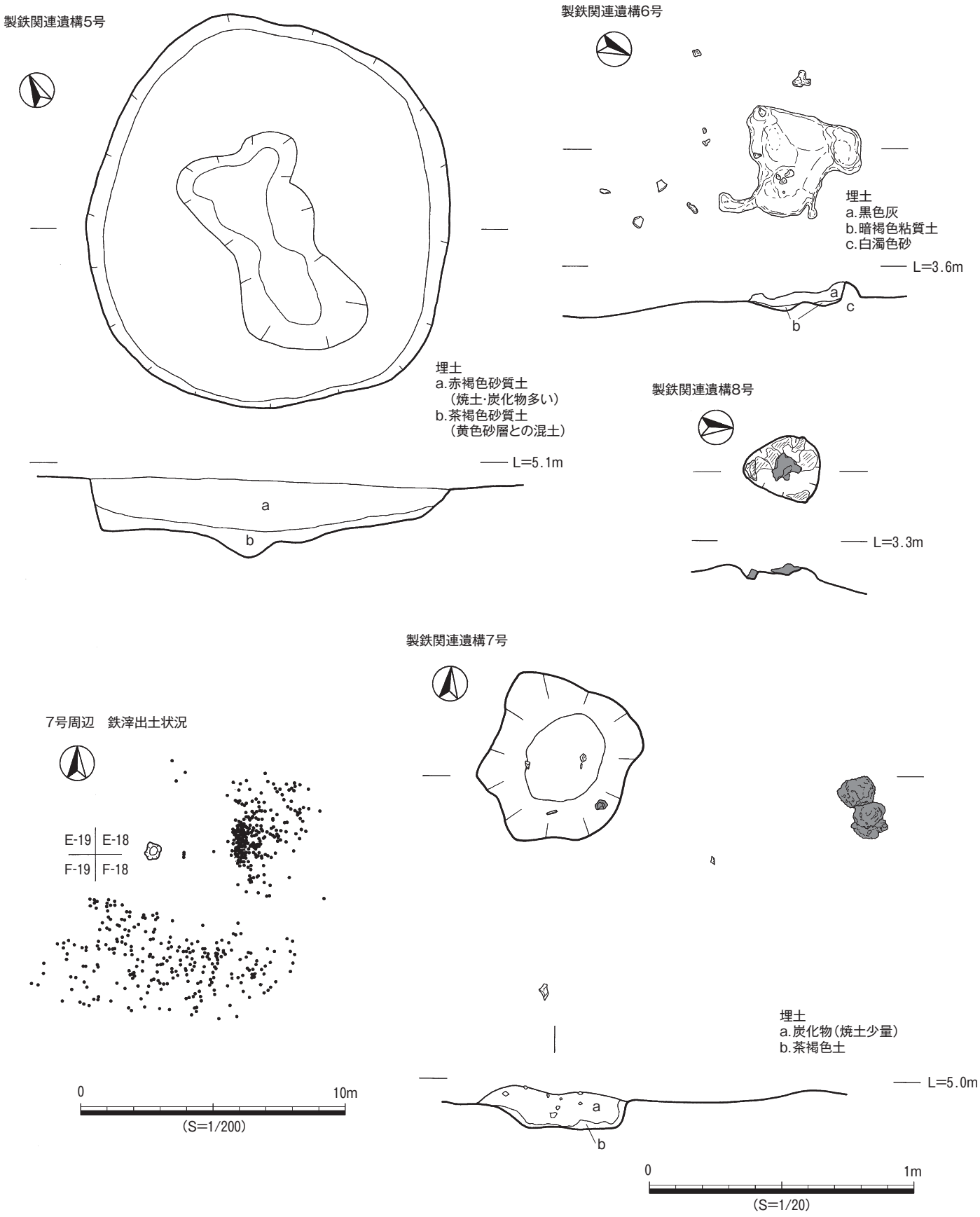


埋土
a.黄褐色土
b.黄褐色土と黒褐色土の混土
（炭化物・焼土を含む）
c.やや黄色味を帯びた黒褐色土
（炭化物・焼土を含む。黄褐色の粒が混じる）
d.黒褐色土（炭化物を含む）
e.黒褐色土
（炭化物、焼土を含む、黄褐色の粒を若干含む）
f.黒褐色土（炭化物を含む。赤色の焼土の粒を少し含む）
g.暗褐色土
（炭化物を含む。赤色の焼土のかたまり鉄滓も含む）
h.黒褐色土
（炭化物、焼土を含む。灰を若干含む。かたくしまりがある）
i.黄褐色の焼土（炭化物・焼土・鉄滓を含む）
j.黒茶色土（鉄滓を多量に含む）
k.灰（礫と鉄滓を含む）
l.黄褐色の焼土（炭化物・赤色の焼土の粒を若干含む）
m.桃色から赤色化した焼土（炭化物を含む）
n.灰（礫を含む）
o.桃色焼土
p.黒褐色砂質土（焼土の粒が若干混じる）

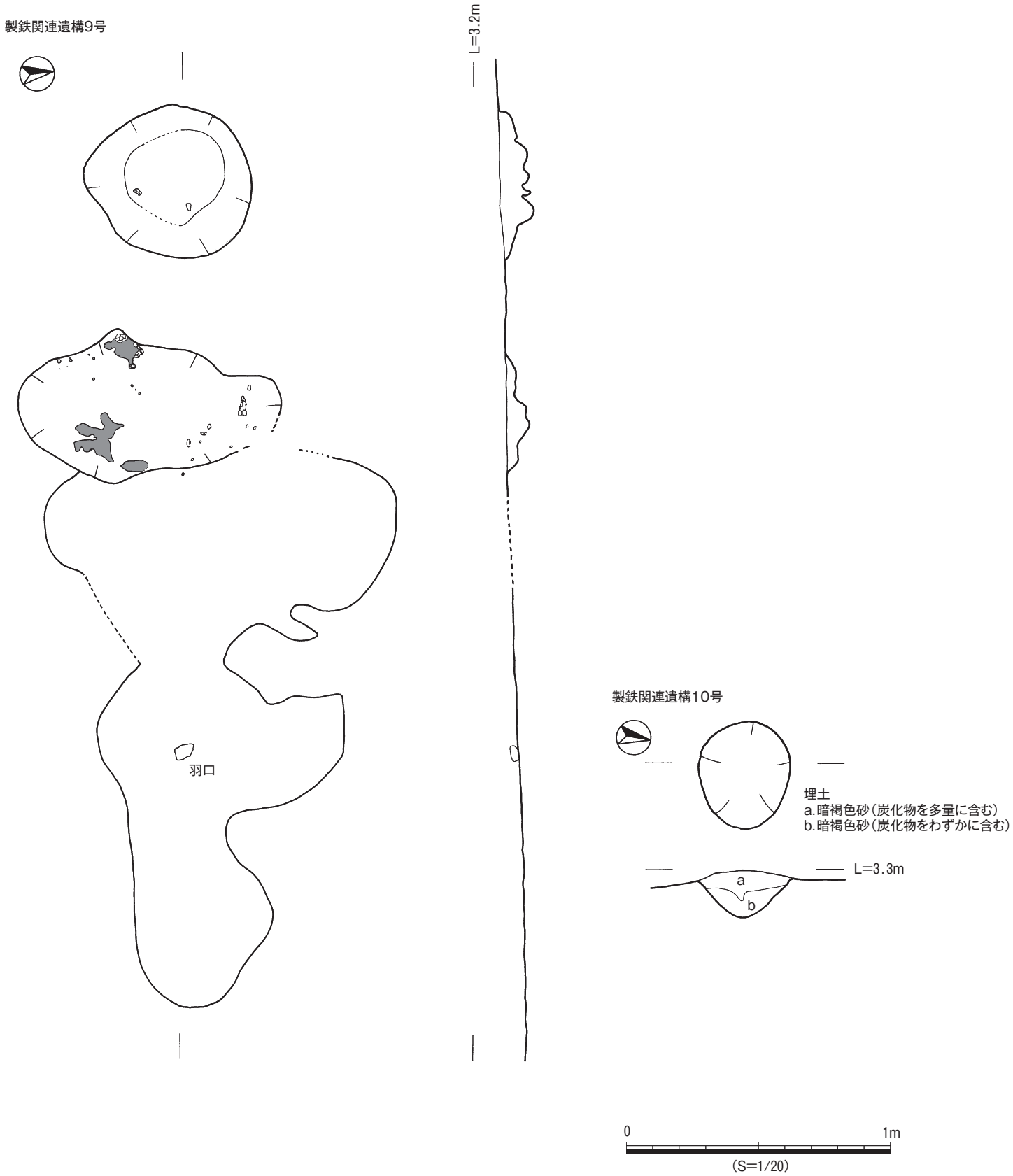
第307図　製鉄関連遺構３号



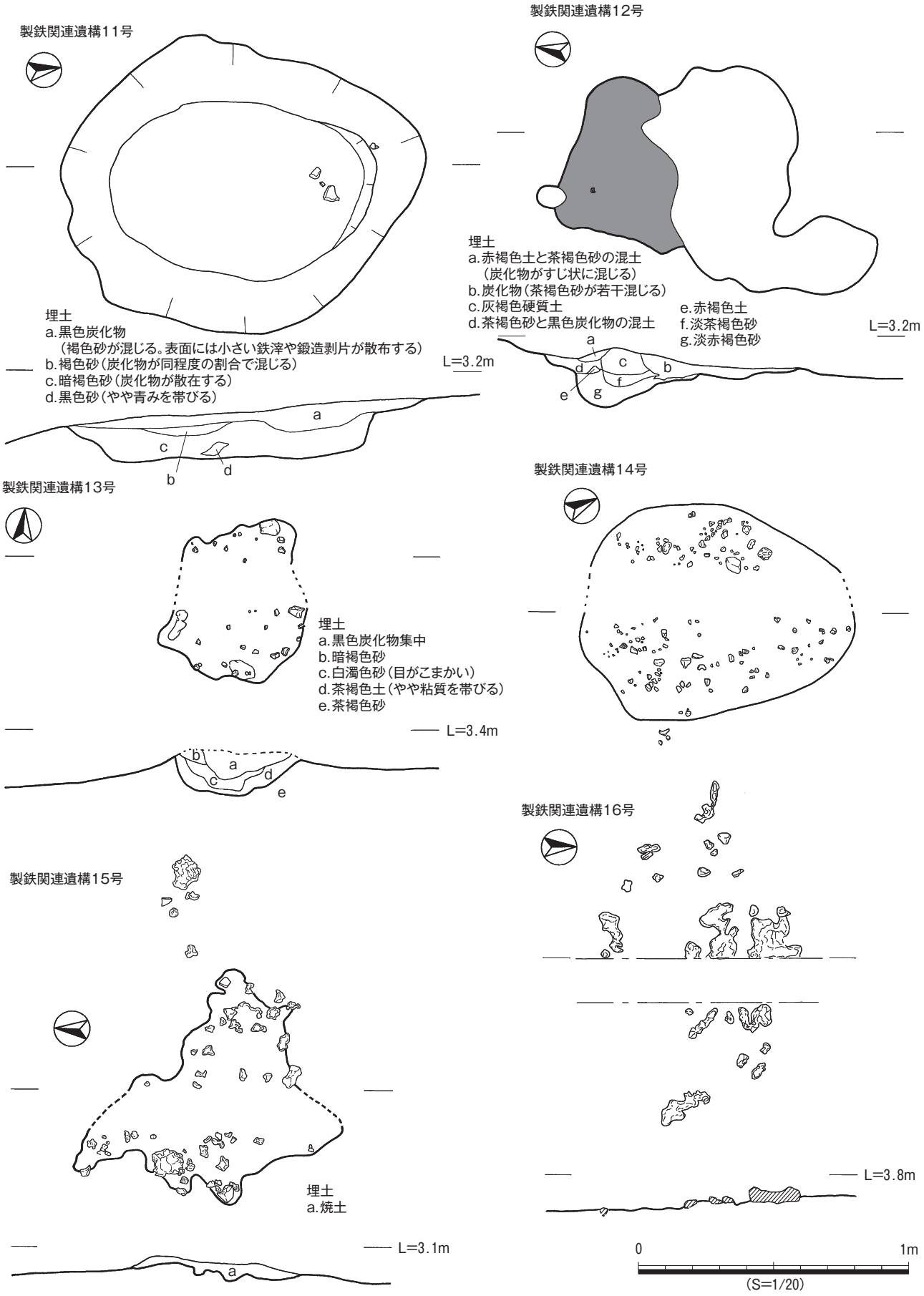
第308図　製鉄関連遺構４号



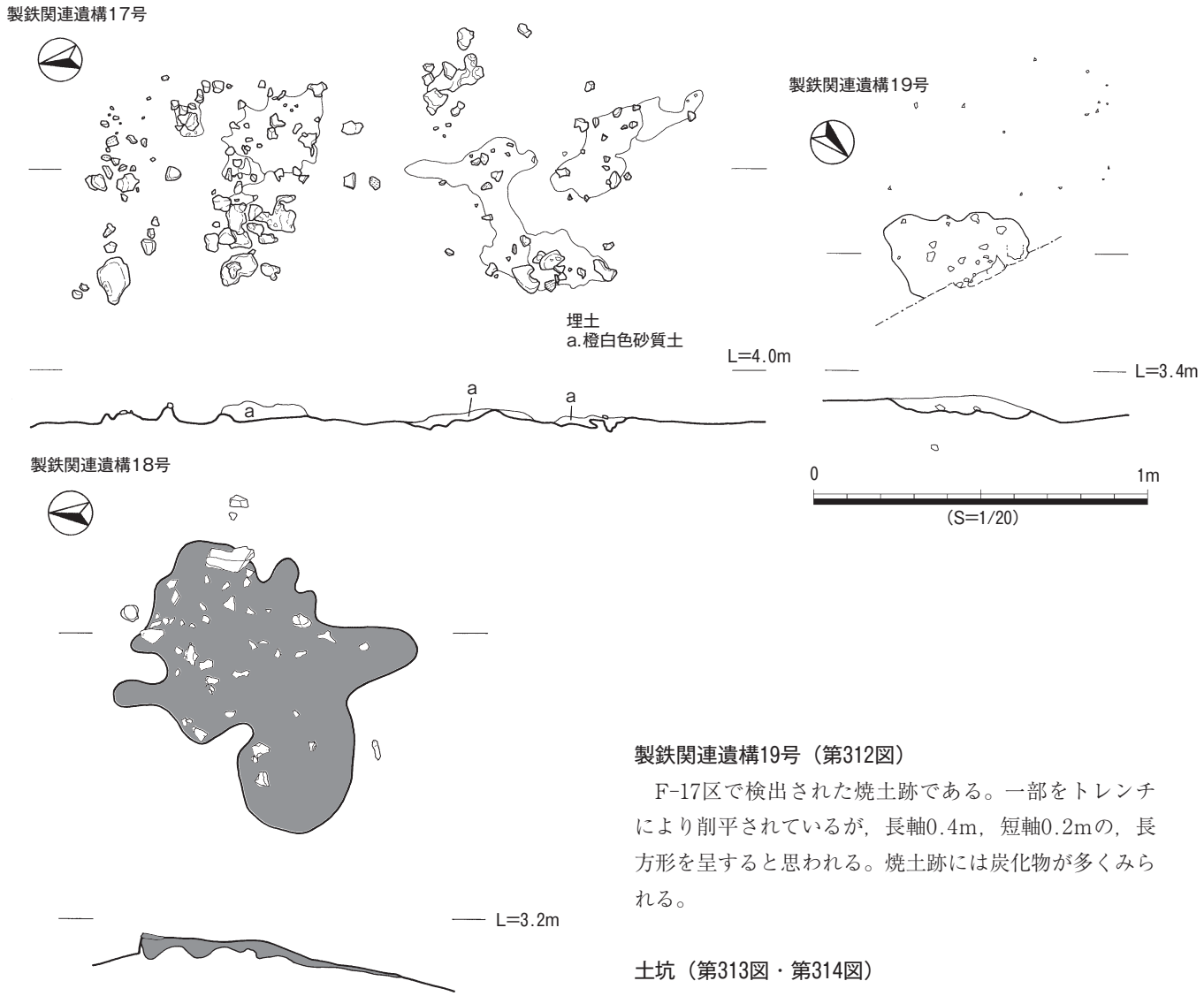
第309図　製鉄関連遺構５～８号・７号周辺鉄滓出土状況



第310図　製鉄関連遺構９，10号



第311図　製鉄関連遺構11～16号



第312図　製鉄関連遺構17～19号

製鉄関連遺構16号（第311図）

G-18区で検出された焼土跡である。砕けた焼土塊が長軸で，1.3m，短軸で0.8mの範囲で散らばっている。

製鉄関連遺構17号（第312図）

G-16・17区で検出された焼土跡である。橙白色の焼土ブロックと炭化物が長軸1.9m，短軸0.9mの範囲で散らばっている。

製鉄関連遺構18号（第312図）

F-17区で検出された。焼土跡である。長軸0.8m，短軸0.7mの不定形に炭化物が多量に混ざる茶褐色砂が広がる。ほかに鉄滓，鍛造剥片なども多量に出土し，排滓場と推察される。

製鉄関連遺構19号（第312図）

F-17区で検出された焼土跡である。一部をトレンチにより削平されているが，長軸0.4m，短軸0.2mの，長方形を呈すると思われる。焼土跡には炭化物が多くみられる。

土坑（第313図・第314図）

土坑は調査区内において多数検出されたが，ここでは遺構内から掲載に耐えうる遺物が出土したもの，特徴的な土坑８基のみについて報告する。その他については検出状況平面図に平面のみ記載する。

土坑１号（第313図）

B-37区で検出された。平面形は径0.6mで円形を呈し，検出面からの深さ0.4mである。埋土に焼土，炭化物を多く含んでいる。銭貨が１点出土したが，小破片のため種別は不明である。

土坑２号（第313図）

B-34区で検出された。平面形は長軸1.2m，短軸１mのほぼ円形を呈し，検出面からの深さ47cmである。近世の遺物が出土した。

出土遺物（第313図）

遺物の出土数は４点である。内訳は肥前系磁器が３点（染付碗１，白磁２），薩摩焼１点（苗代川系）で，そのうち１点を図化することができた。

1804は肥前系白磁の小坏である。体部と高台が一直線につながる桶形の形状を呈する。

土坑３号（第313図）

B-34区で検出された。平面形は長軸1.9m，短軸0.6mの不定形を呈し，検出面からの深さ25cmである。埋土に焼土，炭化物を多く含んでいる。

土坑４号（第313図）

C・D-34区で検出された。平面形は長軸2.1m，短軸1.6mの長方形を呈し，検出面からの深さ44cmである。土坑埋土内には軽石，礫，土器片，釘などがみられた。また床面には，一部炭化物の広がりがみられる。

土坑５号（第313図）

B-33区の調査区境で検出された。平面形は長軸1.7m＋α，短軸1.5m＋αで，楕円形から円形の一部と思われる。検出面からの深さ44cmである。埋土に焼土，炭化物が多く，軽石も若干混ざり，近世の遺物を出土した。

出土遺物（第313図）

遺物の出土数は11点である。内訳は，肥前系の磁器が６点（染付碗１・白磁小坏１・白磁徳利１・その他３），薩摩焼が６点（初期の龍門司系の碗１，苗代川系の土瓶蓋１，植木鉢１，陶器胴部３）で，そのうち１点を図化することができた。

1805は肥前系白磁の小坏で，体部と高台が一直線につながる桶形の形状を呈する。

土坑６号（第314図）

A'-30区で検出された。平面形は径0.9mの円形で，検出面からの深さ0.1mである。床面から壁面にかけて厚さ５cm程度で粘土が貼り付けられている。

土坑７号（第314図）

E-21区で検出された。平面形は長軸1.9m，短軸1.5mの略円形を呈する。検出面からの深さ最大で34cmである。床面から壁面にかけて粘土を貼り付けている。

土坑８号（第314図）

E・F-19・20区で検出された巨大な土坑である。平面形は長軸10m，短軸7.8mの不定形で，検出面からの深さは最大で１m98cmである。埋土中から銭貨４点，陶磁器などが出土している。

出土遺物（第314図）

鉄片１点と銭貨２点を図化した。1806は厚さ約６mmの鉄片である。鍛冶素材として利用されたものと思われる。1807は祥符元宝，1808は永楽通宝である。

土坑墓（第315図～第319図）

土坑墓は11基が確認され28区以西に比較的多くの分布を示し，次に17区から21区にわずかな集中がみられる。ここでは近世以外の時期不明のものも一括して掲載した。

土坑墓１号（第315図）

B-32区で検出された。平面形は，長軸1.6m，短軸0.8mで長方形を呈し，検出面からの深さは0.6mである。主軸方向は西に４°振れる。土坑内から遺存状況はあまりよくないが，頭位を北にしたと思われる人骨が検出された。また洪武通宝１点と釘が出土しており，木棺による進展葬であったことを示唆している。また図化には至らなかったが近世と思われる遺物小片も出土している。

出土遺物（第315図）

1809は洪武通宝である。

土坑墓２号（第315図）

B-32区で検出された。平面形は，長軸1.6m，短軸0.9mで長方形を呈し，検出面からの深さ53cmである。長軸方向は西に６°振れる。また，１号同様に頭位を北にした人骨と，寛永通宝３枚と釘が出土しており，木棺仰臥屈葬であったと思われる。

出土遺物（第315図）

銭貨と釘を図化した。1810は寛永通宝である。1811は釘である。木棺に使用されていたものと考えられる。木質が残存しており，木棺の板材厚が12mmであったことが推測される資料である。

土坑墓３号（第316図）

C-37区で検出された。平面形は，長軸1.7m，短軸0.8mで検出面からの深さは16cmの楕円形を呈する。長軸方向は西に12°振れる。土坑内から頭位を北にした人骨が検出され，釘も出土しており，木棺屈葬であったことを示唆している。所属時期については不明である。

土坑墓４号（第316図）

D・E-31区で検出された。平面形は，長軸1.3m，短軸0.7mで不定形を呈し，検出面からの深さ８cmである。長軸方向は西に３°振れる。掘り込みは，ほぼ失われており遺構内人骨も原位置を保っていない可能性もあるが，頭位は北方向を示している。所属時期は不明である。

土坑墓５号（第316図）

E-30区で検出された。平面形は，径0.92mの円形を呈し，検出面からの深さ26cmである。土坑内からは人骨，鉄滓などを出土した。遺構平面形と下肢骨の位置関係から，膝を立てた状態で埋葬された座棺と考えられる。

土坑墓６号（第317図）

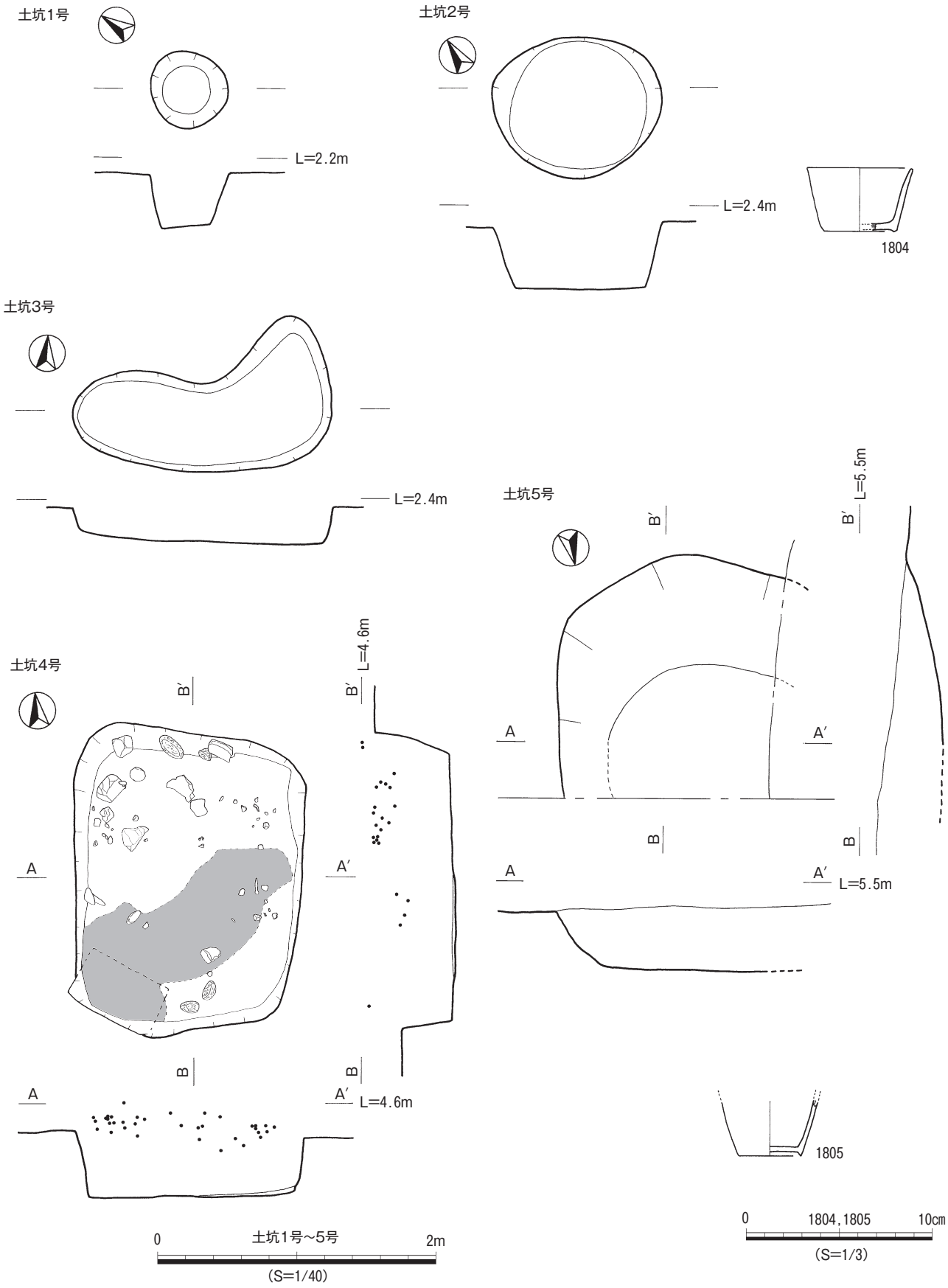
E-30区で検出された。平面形は長軸1.5m，短軸0.9mで楕円形を呈し，検出面からの深さ0.5mである。長軸方向は東に３°振れる。土坑内北寄りに歯が残存し，遺物では洪武通宝と鉄滓が出土した。伸展葬と思われるが，木棺の有無については確認できない。

出土遺物（第317図）

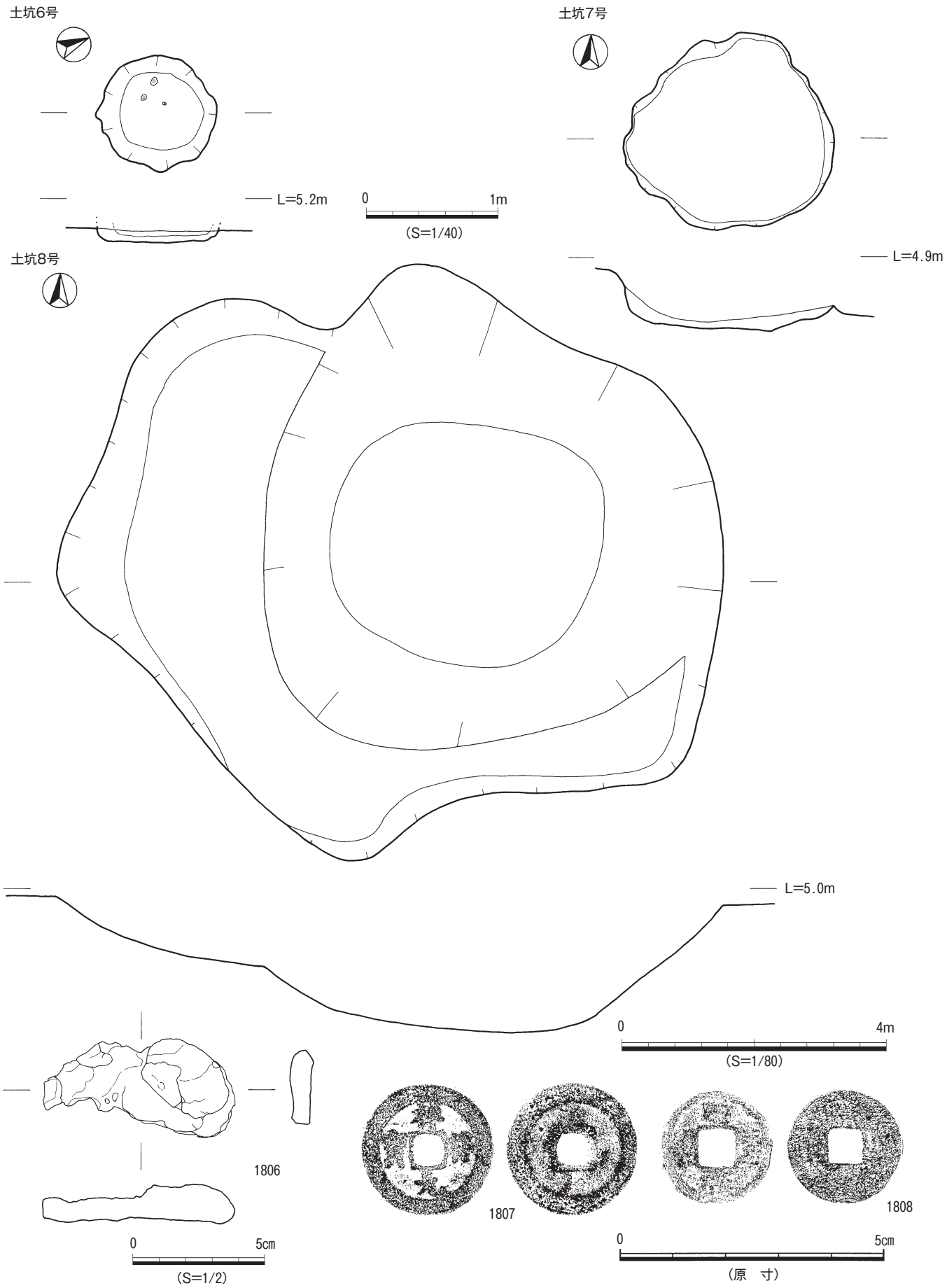
銭貨を図化した。1812～1814は洪武通宝で1813のみ背に治が読める，加治木銭である。

土坑墓７号（第317図）

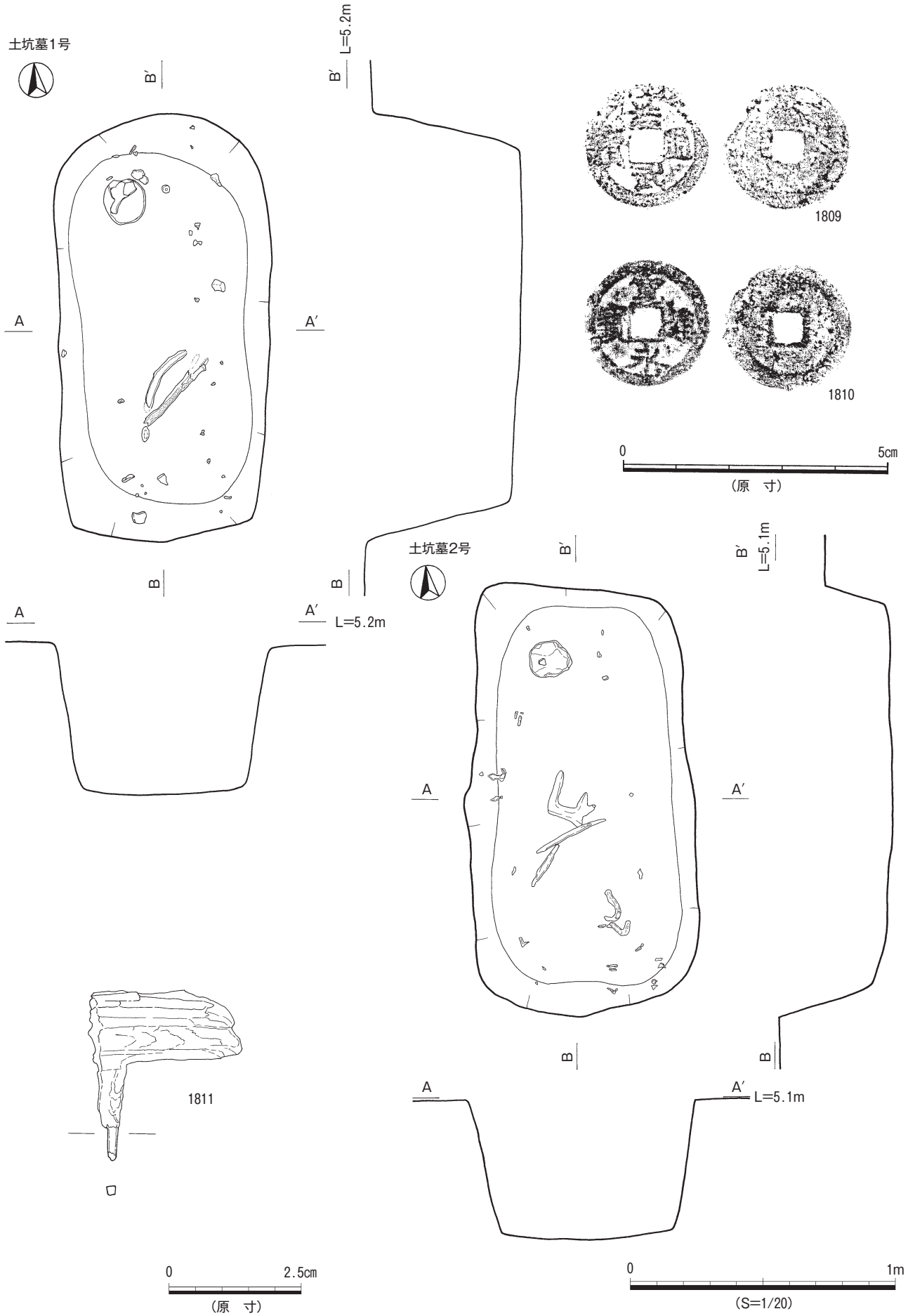
D-28区で検出された。平面形は長軸1.5m，短軸0.8m＋αで不定形を呈し，検出面からの深さ13cm，掘り込みは，かなりの部分を失っている。主軸は真北を向く。



第313図　土坑１～５号・２，５号出土遺物



第314図　土坑６～８号・８号出土遺物

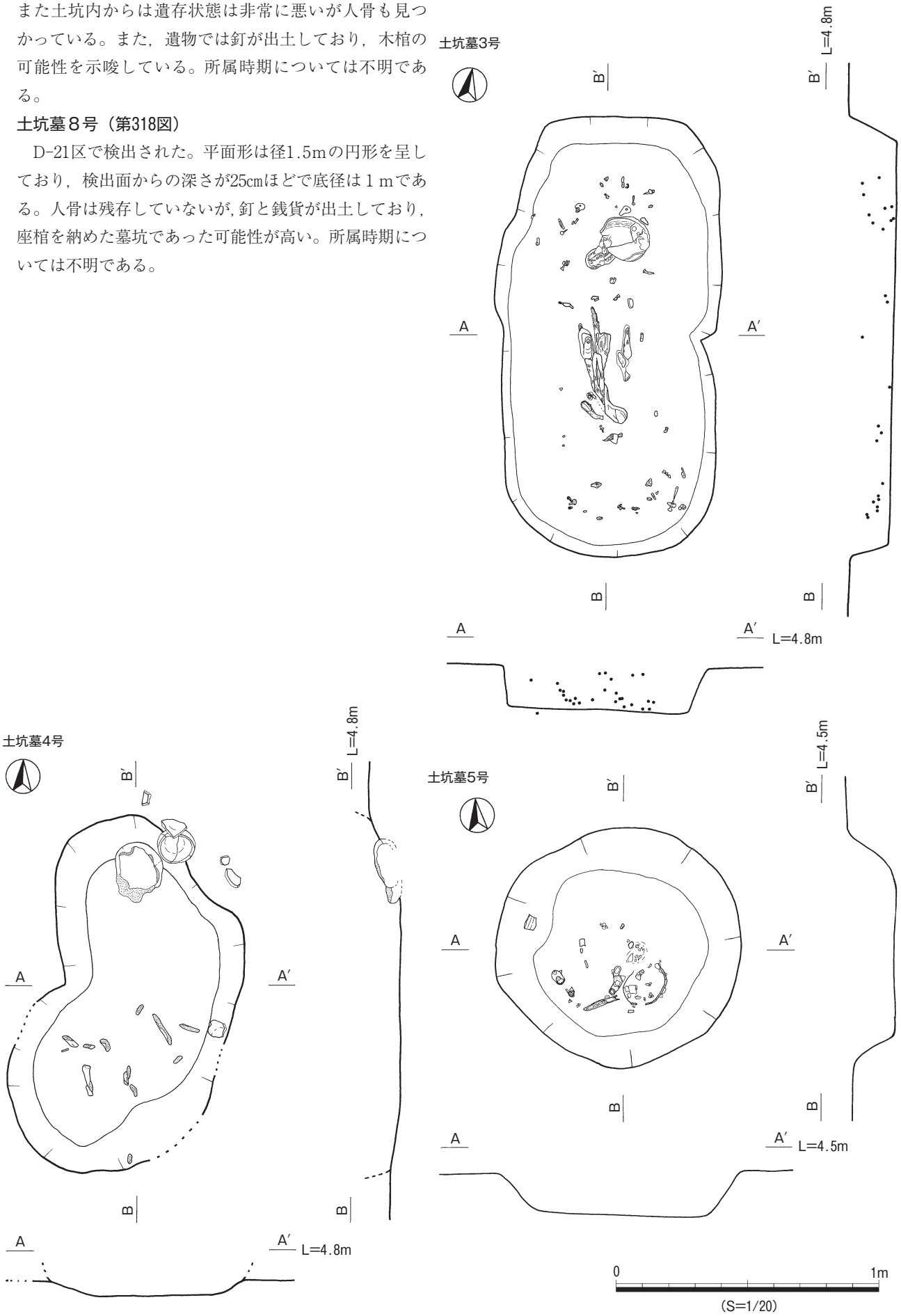


第315図　土坑墓１，２号・出土遺物

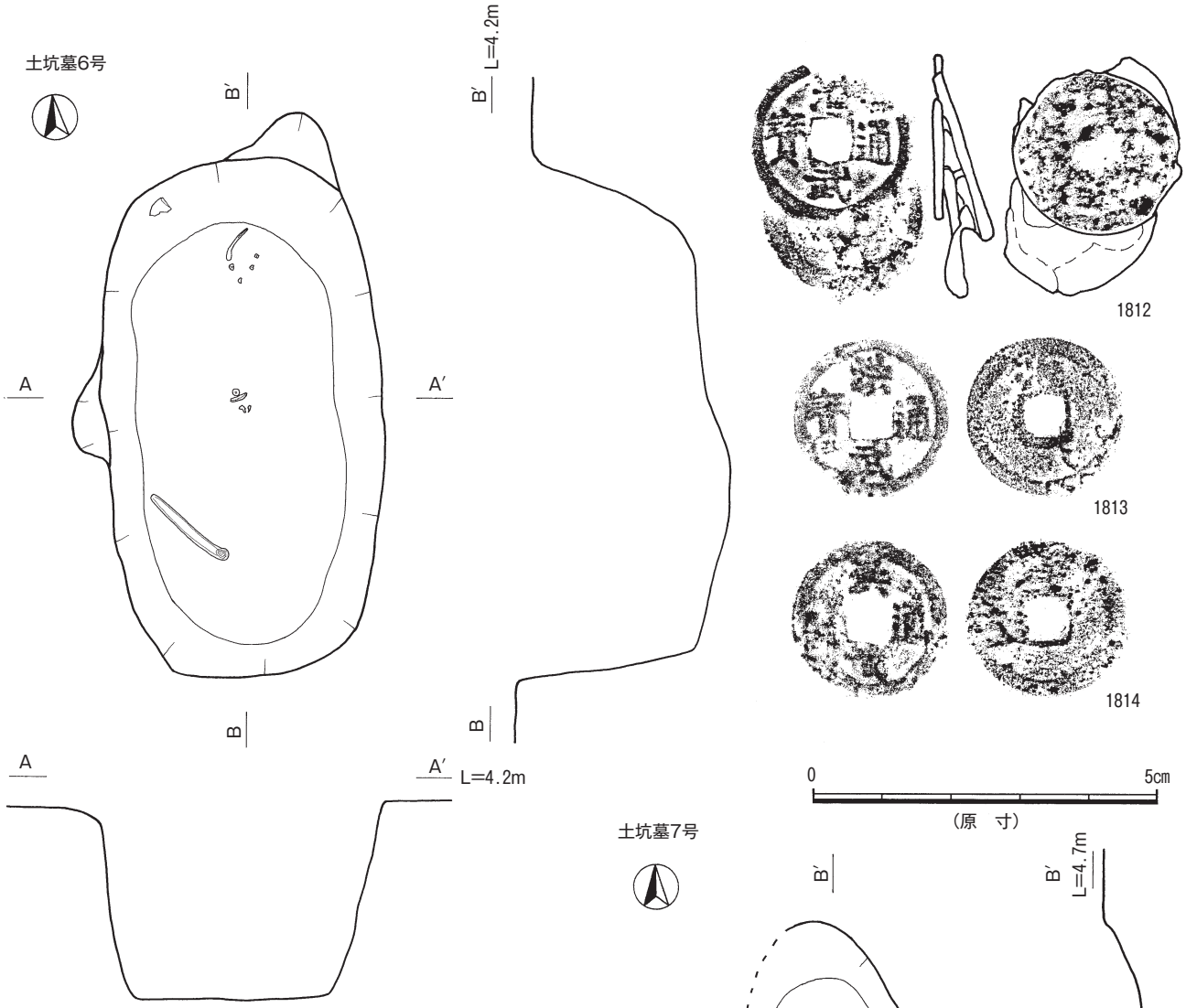
また土坑内からは遺存状態は非常に悪いが人骨も見つかっている。また，遺物では釘が出土しており，木棺の可能性を示唆している。所属時期については不明である。

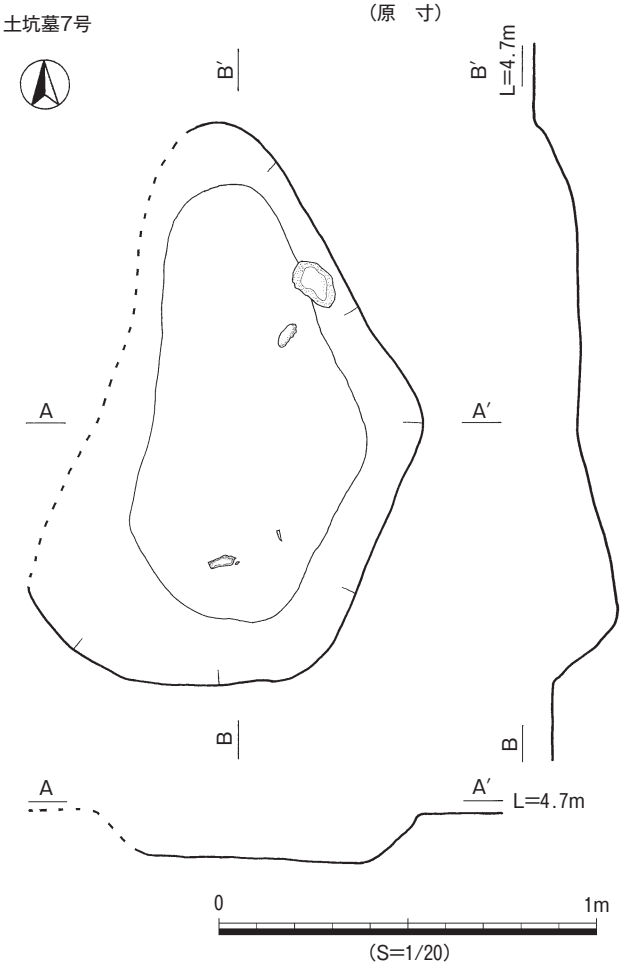
土坑墓８号（第318図）

D-21区で検出された。平面形は径1.5mの円形を呈しており，検出面からの深さが25cmほどで底径は１mである。人骨は残存していないが，釘と銭貨が出土しており，座棺を納めた墓坑であった可能性が高い。所属時期については不明である。



第316図　土坑墓３～５号





第317図　土坑墓６，７号・６号出土遺物

土坑墓９号（第318図）

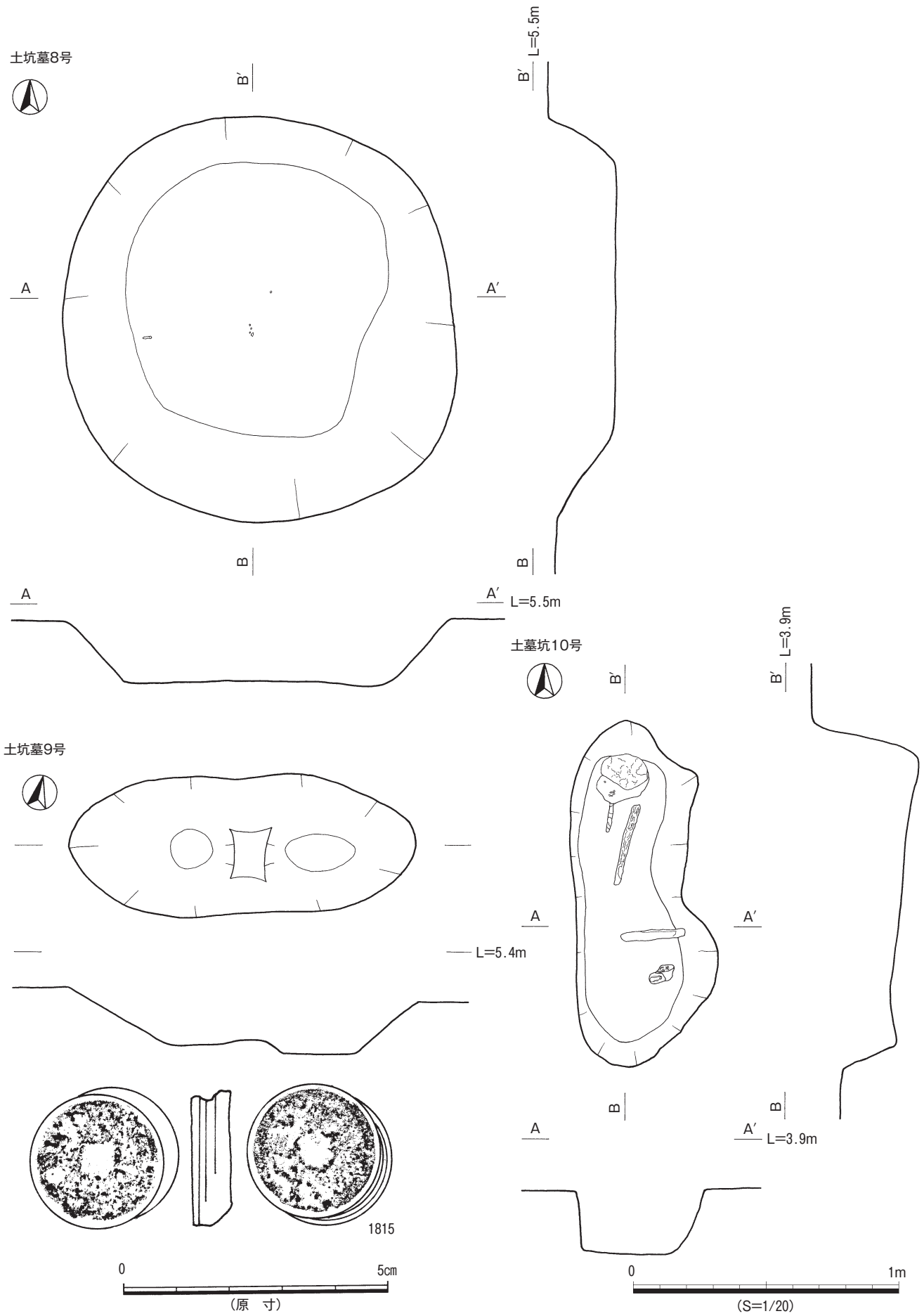
D-20区で検出された。平面形は長軸1.3m，短軸0.5mの楕円形を呈しており，検出面からの深さは0.2mである。長軸方向は東に80°振れる。ほかの土坑墓と比較すると長軸方向が約90°異なる。土坑底面は平坦にならず２カ所の浅いくぼみをもつ。土坑内から人骨の出土は無かったものの，銭貨が出土した。所属時期は不明である。

出土遺物（第318図）

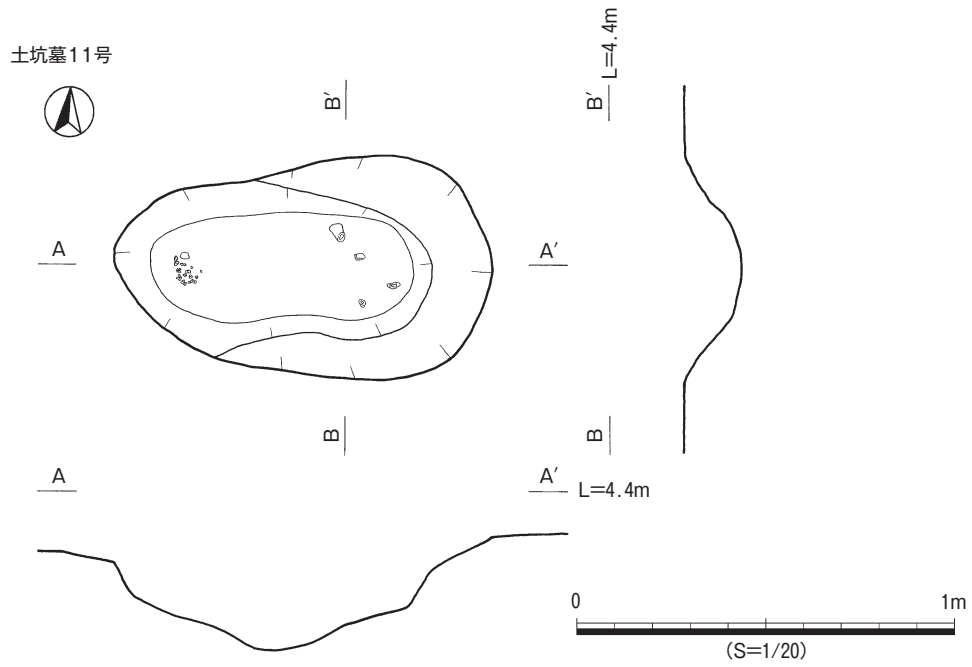
1815は銭貨で，５枚が付着した状態である。錆等で文字判別が出来ず種別不明である。

土坑墓10号（第318図）

F-17区で検出された。平面形は長軸1.3m，短軸0.5mの略楕円形を呈しており，検出面からの深さは26cmである。長軸方向は西に２°振れる。土坑内から人骨が出土し，頭位は北方向であることが確認できる。所属時期は不明である。



第318図　土坑墓８～10号・９号出土遺物



第319図　土坑墓11号

土坑墓11号（第319図）

F-7・8区で検出された。平面形は長軸１m，短軸0.6mの楕円形を呈しており，検出面からの深さは21cmである。長軸方向は東側に85°振れる。人骨の遺存状況がよくないが，西側に歯が集中して出土するため，頭位は西向きと考えられる。所属時期は不明である。

礫集積（第320図）

用途不明な礫の集積を礫集積として一括した。所属時期の不明なものも一括してある。４基検出されており，調査区西側にやや偏る傾向を示しながら点在する。

礫集積１号（第320図）

B-36区で検出された。礫は長軸1.6m，短軸0.8m＋αの範囲に特に密集する部分をもたずに散在する。

礫集積２号（第320図）

C-37区で検出された。礫は長軸1.05m，短軸0.75mの範囲に密集する。やや扁平な礫が多く，礫上面の埋土は黄橙色土で固くしまっている。

礫集積３号（第320図）

A-30区で検出された。礫は径0.5mの範囲で円形に集中する。

礫集積４号（第320図）

D-32区で検出された。礫は長軸0.75m，短軸0.45mの範囲に，ややばらけた感じで集まっている。

石列（第321図）

D-21区で検出された。径20cm前後のやや扁平な礫が１～1.2mの間隔で一直線上に配置されている。礎石建ちの建物の存在も想定されるが，周辺に同様な石列，石列に対して整然と並んだ柱穴などは確認できなかった。

ピット（第321図・第322図）

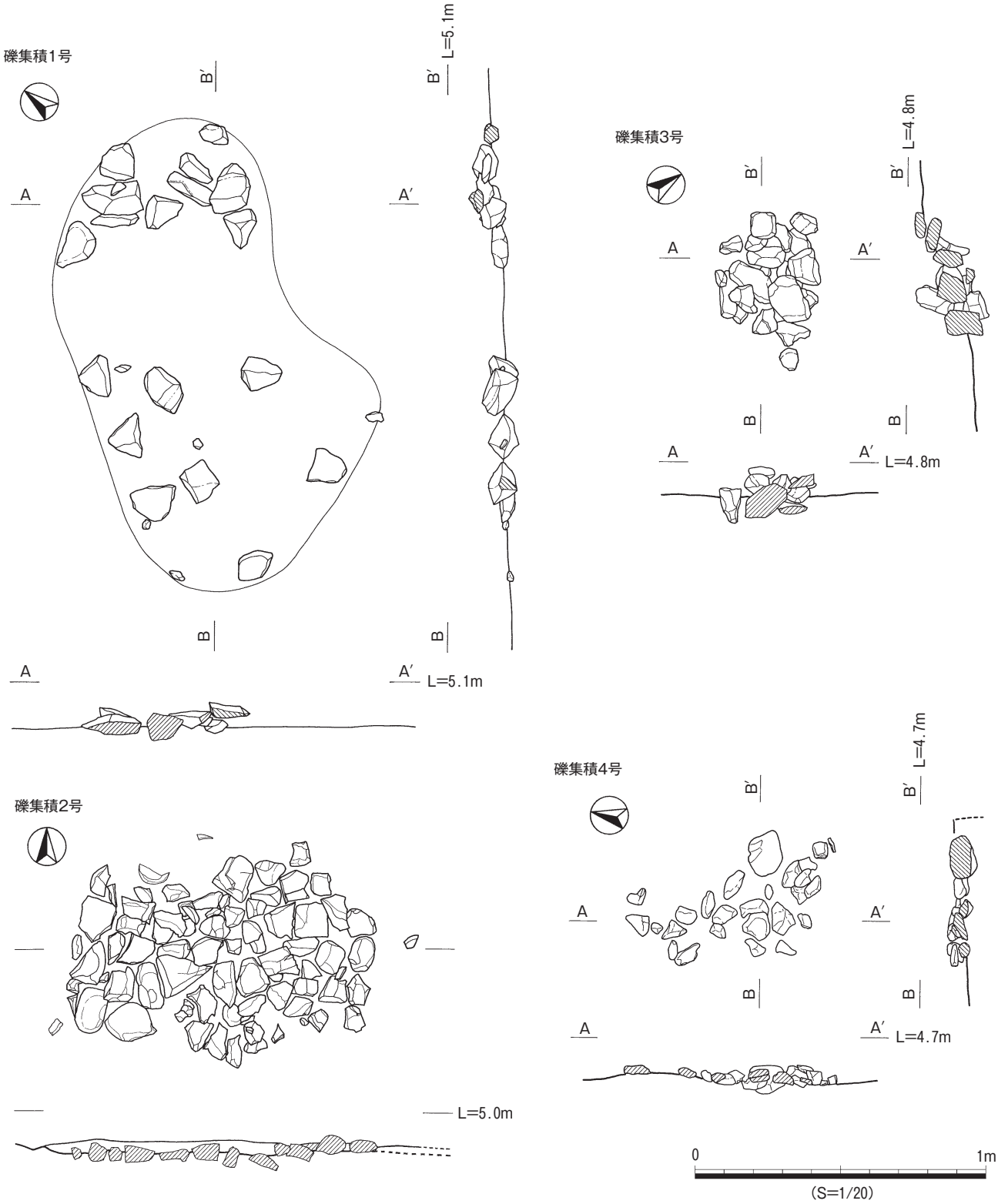
ピットは調査区全体に多数検出された。層位が不安定で，時代判別可能な遺物出土が少なく，時代不明のピットが大半を占めるため個別図掲載はピット内に礫が配置されるもの，遺存状況のよい遺物が出土したものに留める。また，時代不明のものもここに掲載する。

ピット１号（第321図）

B-33区で検出された。検出面から底部までが６cmと非常に浅く，掘り込みのほとんどは失われている。径は現存部で長径１m，短径0.8mである。底面周縁部に３個の軽石が配置される。中心部は固くしまっており，上部から圧力がかかっていたことが想定され，柱穴下部の柱を支える根石と判断した。周辺からは建物に復元できる柱穴の配列は確認できなかった。

ピット２号（第321図）

B-34区で検出された。長軸1.2m，短軸1.1mのほぼ円形の形状を呈しており，検出面から底部までの深さ80cmで底部中央付近に扁平な礫が配置される。径25cm程度の柱痕跡も確認された。周辺からは建物に復元できる柱穴の配列は確認できなかった。



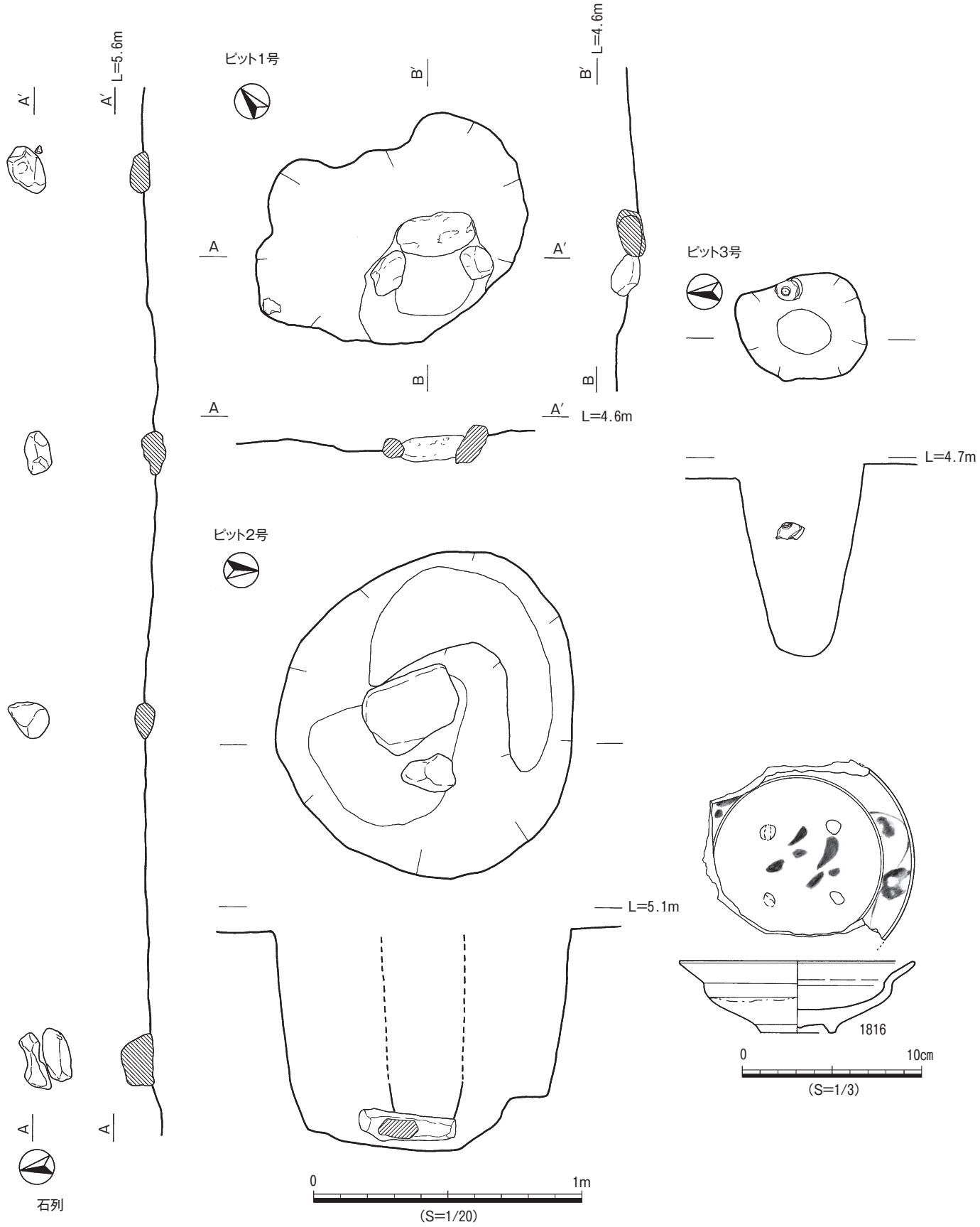
第320図　礫集積１～４号

ピット３号（第321図）

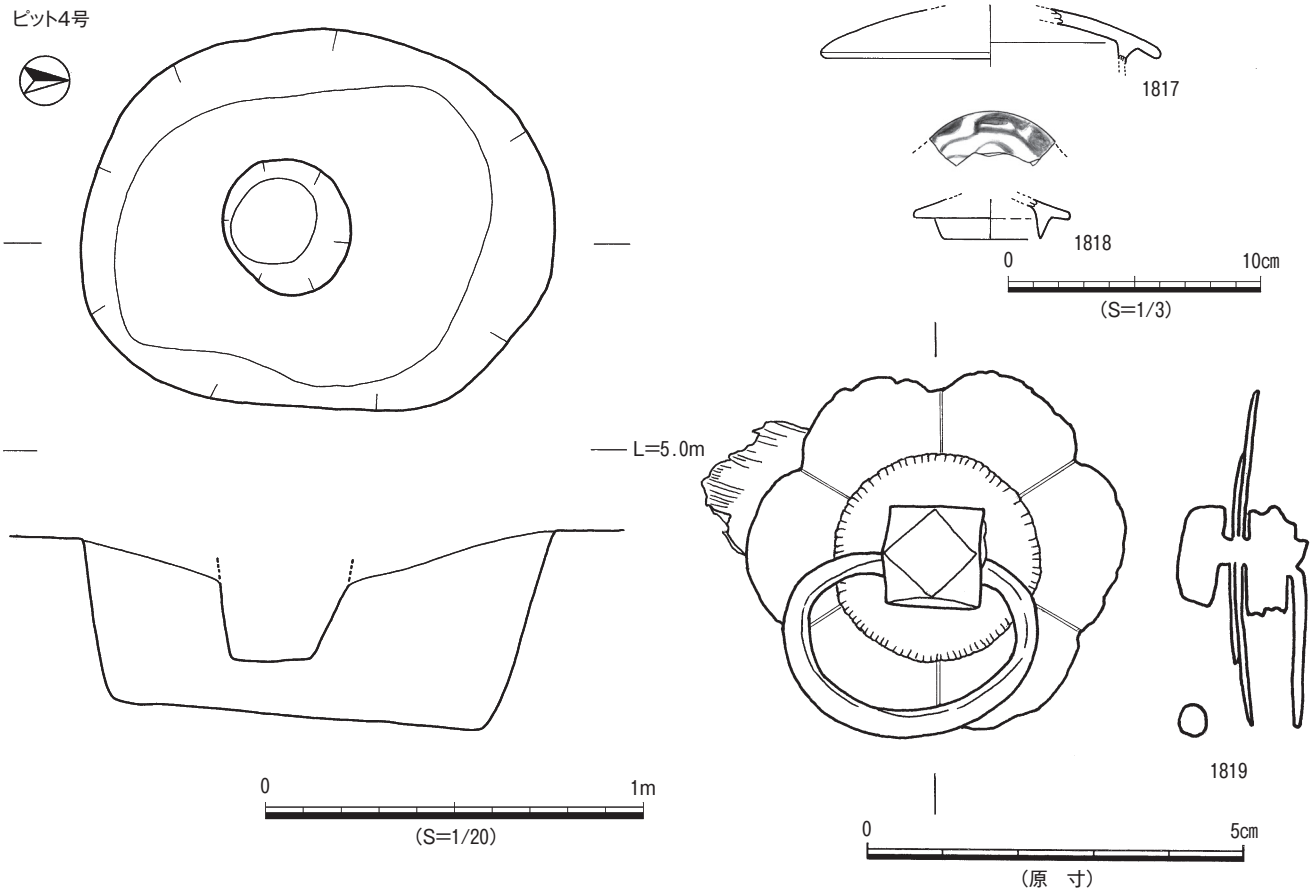
A-36・37区で検出された。平面形は，長軸0.5m，短軸0.4mの略方形を呈しており，検出面から底部までの深さ71cmである。底部から約45cmに伏した状態で肥前陶器が出土した。

出土遺物（第321図）

肥前陶器の折れ縁皿が１点出土した。1816は内面には鉄絵が描かれ，見込みに胎土目が４か所残る。口縁部の３分の２欠損しているが，地鎮として埋納されたものと思われる。



第321図　石列・ピット１～３号・３号出土遺物



第322図　ピット４号・４，６号出土遺物

ピット４号（第322図）

B-34区で検出された。平面形は長軸1.25m，短軸１ｍの略楕円形を呈し，検出面からの深さ0.5mの掘り方である。中央部に径30cm，深さ20cmの柱痕跡が確認でき，柱痕跡下部には粘土質の塊がみられた。

出土遺物（第322図）

遺物の出土数は４点である。全て薩摩焼（苗代川の土瓶蓋１，胴部２，龍門司系の土瓶蓋１）で，そのうち２点を図化することができた。

1817は苗代川系の土瓶蓋である。つまみ部は欠損している。上面に鉄釉がかかる。1818は龍門司系の土瓶蓋である。上面のみ施釉され，白化粧土の上から褐釉をかける。

ピット５号（第280図）

A-37区で検出された。銭貨が出土したが，小片のため種別は不明である。

ピット６号（第298図・第322図）

D-20区で検出された。1819は調度品の取っ手と思われる鉄製品で，花弁状の金具の裏には木質が残存している。

古道（第323図）

古道は，調査区内で５条検出された。規模の大きなものはなく，人の往来によって硬化面が形成されたもののみである。古道１～４は自然流路が埋もれた跡に形成されたものである。

古道１（第323図）

C・D-26区で検出された。南北に7.5mほど延びる。幅約50cmの硬化面である。

古道２（第323図）

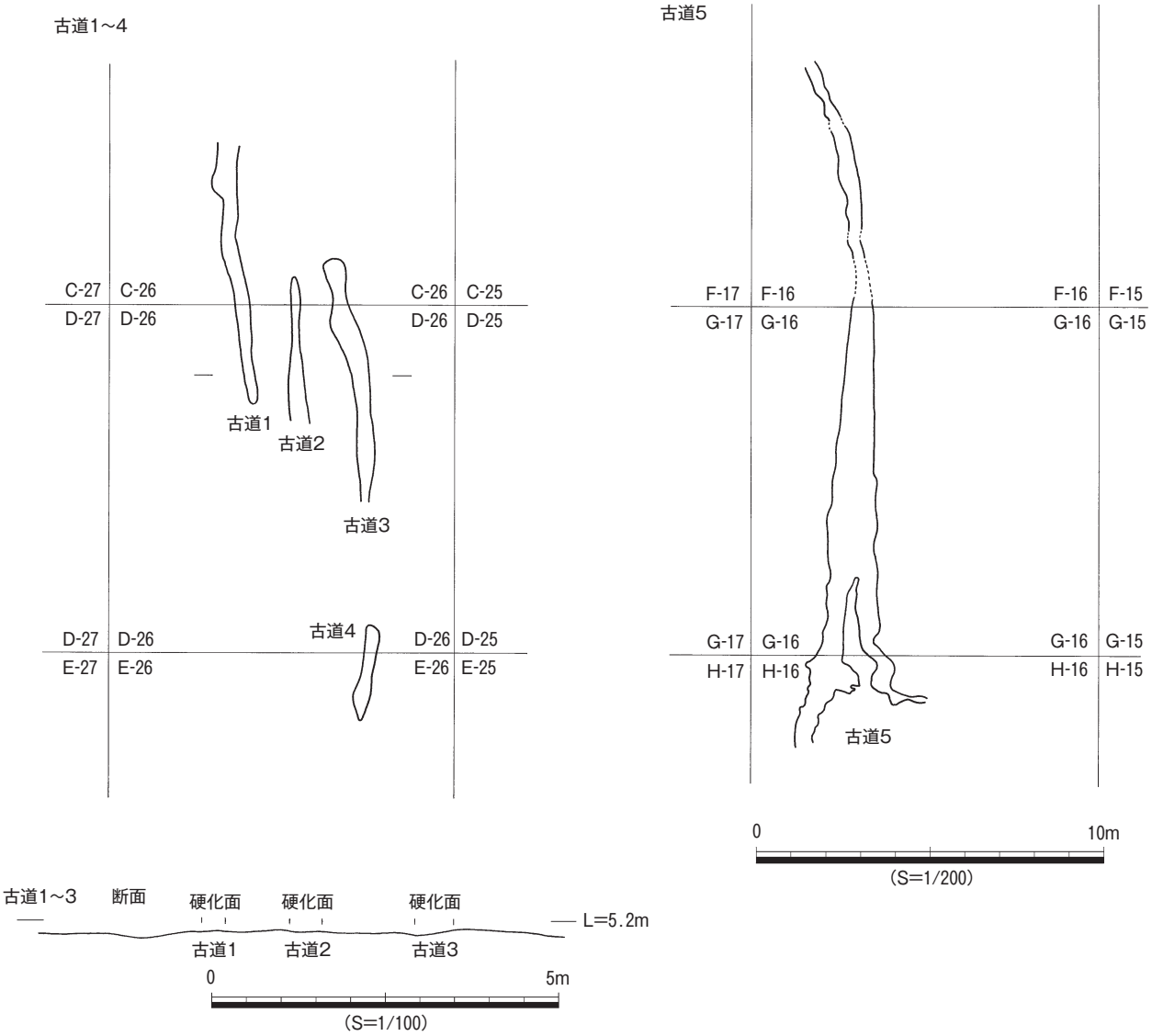
C・D-26区で検出された。南北に５ｍほど延びる。幅約50cmの硬化面である。

古道３（第323図）

C・D-26区で検出された。南北に７ｍほど延びる。幅約50cmの硬化面である。南に位置する古道4と連続する可能性がある。

古道４（第323図）

D・E-26区で検出された。南北に2.8mほど延びる。幅約50cmの硬化面である。



第323図　古道１～５・古道１～３断面

古道５（第323図）

F～H-16区で検出された。南北に約20m延びる。幅は広いところで約1.5mあり，北側末端部では40cmほどに狭まる。南側末端付近で２条に枝分かれするが，その延長については確認できなかった。

溝（第324図～第335図）

溝は調査区内から８条検出された。内5条は34区以西で，残りは18区以東で検出された。調査区中央の20～31区には自然流路が流れており，近世遺物を多く包含していたことから，溝と同様に遺構と遺物について記載を行うこととした。

溝１（第324図）

C・D-36区で検出された。南西方向に約16m延びる。幅約90cm，検出面からの深さ約25cmである。遺構埋土中から多くの遺物が出土した。

出土遺物（第324図・第325図）

遺物は77点出土した。内訳は，薩摩焼（苗代川系の土瓶・徳利・擂鉢・甕・壺，それらの胴部や底部，龍門司系の碗や皿）がほとんどで，その他に肥前産の陶磁器が多く出土した。1820～1831は染付である。1820～1828は碗である。1820は外面に一重網目文が描かれる。1821はコンニャク印判による文様が押される。1822・1823は丸文が描かれたものである。1823は見込みにコンニャク印判五弁が押される。1824は広東碗の形状を意識したものと思われるが，高台が低い。1825は広東碗である。1826は湯飲み碗である。1827と1828は端反碗である。1828は在地産の資料と思われる。1829は皿である。見込みには

コンニャク印判五弁花がスタンプされる。また，高台内底にはハリ支えの先端が熔着している。1830は折れ縁の皿もしくは鉢と思われる。1831は油壺である。1832～1855は陶器である。1832は外面腰部まで銅緑釉がかかる肥前産の碗である。1833は京焼風陶器の煎じ碗である。1834は龍門司系の碗である。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。1835は碗としたが鉢の可能性も考えられる資料である。龍門司系のもので，外面は白化粧土に透明釉がかかる。1836は白薩摩の湯飲み碗である。1837は京焼と思われる碗で，見込みに色絵が描かれる。1838～1840は肥前陶器の皿である。1838は見込みに胎土目が残る。1840は見込みに砂目の痕跡が残る。1841は龍門司系の酒器で「からから」と称されるものである。外面肩部には飛び頑が施される。1842・1843は苗代川系の土瓶である。1842の注口部分は欠損している。1843は一穴である。1844は龍門司系の土瓶の注口である。Ｓ字状を呈する溜め口ではなく，直線的に伸びる鉄砲口である。茶止め穴は一穴である。1845は苗代川系の資料で，水注としたが，壺の可能性も考えられる。1846・1847は鉢である。1847は口縁端部が欠損している。1848～1850は擂鉢である。1848の擂り目は口縁下位に１㎝程度の余白を残して入れられ，その余白部分にはヘラ状工具による横筋状の調整痕が入る。1849・1850は底部である。1851・1852は蓋である。1851は口唇部に貝目が残る。1852は口縁部が平坦につくられるもので，外面口縁下位には２条の浅い沈線が巡る。1853～1855は甕である。1853は口縁端部を外側に折り返して三角形状につくる。口唇部は丸みを帯び，貝目が残る。1854・1855も口縁端部は外側に折り返してつくるものであるが，1854はＴ字状に仕上げ，1855は三角形状に仕上げる。

溝２（第326図）

C-35区で検出された。南北方向に約4.5m延び，さらに南へ延びると思われるが，確認できなかった。幅は約2.1m，検出面からの深さ約40㎝である。

溝３（第326図）

B-35区で検出された。南北方向に約４m延びる。幅約50㎝，検出面からの深さ５㎝弱のごく浅い溝である。断面形は皿状である。

出土遺物（第326図）

遺物は93点出土した。内訳は，薩摩焼（苗代川系の土瓶・片口・鉢・擂鉢・甕・釜やそれらの胴部や底部，龍門司系の碗等）がそのほとんどを占め，その他に肥前陶磁器が少数出土した。また，鉄器１，銭貨１枚を出土した。1856は肥前陶器の碗である。内面は透明釉，外面は腰部まで銅緑釉がかかる。1857は龍門司系の碗である。胎土は緻密で，黒褐色の鉄釉がかかる。山元窯産の可能性も考えられる。1858は水注としたが，壺の可能性も考えられる。口唇部はやや凹んでおり，蓋がつくものと思われる。1859は鎌と思われる鉄製品で，先端部を欠いている。1860は寛永通宝である。

溝４（第326図）

A・B-34・35区で検出された。東西方向に約６m延びる。幅約1.5m検出面からの深さ約15㎝で底面は凹凸がみられる。末端で浅くなり自然に消滅してしまう。

出土遺物（第326図）

苗代川系の擂鉢が１点出土した。1861の口縁端部は外側から内側に折り返してつくるもので，口唇部の一部には貝目が残る。内面は上位に余白を残さずに擂り目が入れられ，その下には横方向のヘラ状工具による調整痕が観察される。

溝５（第326図）

B～D-35区で検出された。南北方向に約17m延びる。幅約４～６m，検出面からの深さ約1.3mで，断面形が緩いU字状を呈し，一部に段を有する。

溝６（第327図）

D～F-18区で検出された。南北方向に約22m延びる。幅約３m，検出面からの深さ約15㎝で，断面形は浅い皿状を呈する。末端では浅くなり自然に消滅してしまう。

出土遺物（第327図）

出土遺物は，薩摩焼５点と，鞴の羽口２点出土した。いずれも小片で，１点を図化することができた。また鉄器が２点出土した。1862は薩摩焼苗代川系の資料で，甕壺に被せる蓋である。口唇部の外側は溝状につくられ，貝目が残る。17世紀前半の堂平窯の製品と考えられる。1863は先端が二叉状に分かれたかぎ爪状の鉄器で，取り付け部分と思われるところで110°折れ曲がる。最先端部は欠損し形状は不明である。1864は棒状に延びる扁平な鉄器である。円形部分には径５㎜程度の穿孔がみられる。

溝７（第327図）

A～G-7～16区で検出された。東西，南北方向の複数の溝が切り合い，長大な溝を形成している可能性もあるが，切り合い関係がつかめなかったため，一連の溝として取り扱った。中世の遺物も確認でき，溝が埋もれる過程で近世でも機能していた可能性がある。A・B-12区で４条に分岐している。総延長170mあり，幅は２～５m，検出面からの深さ約65㎝である。

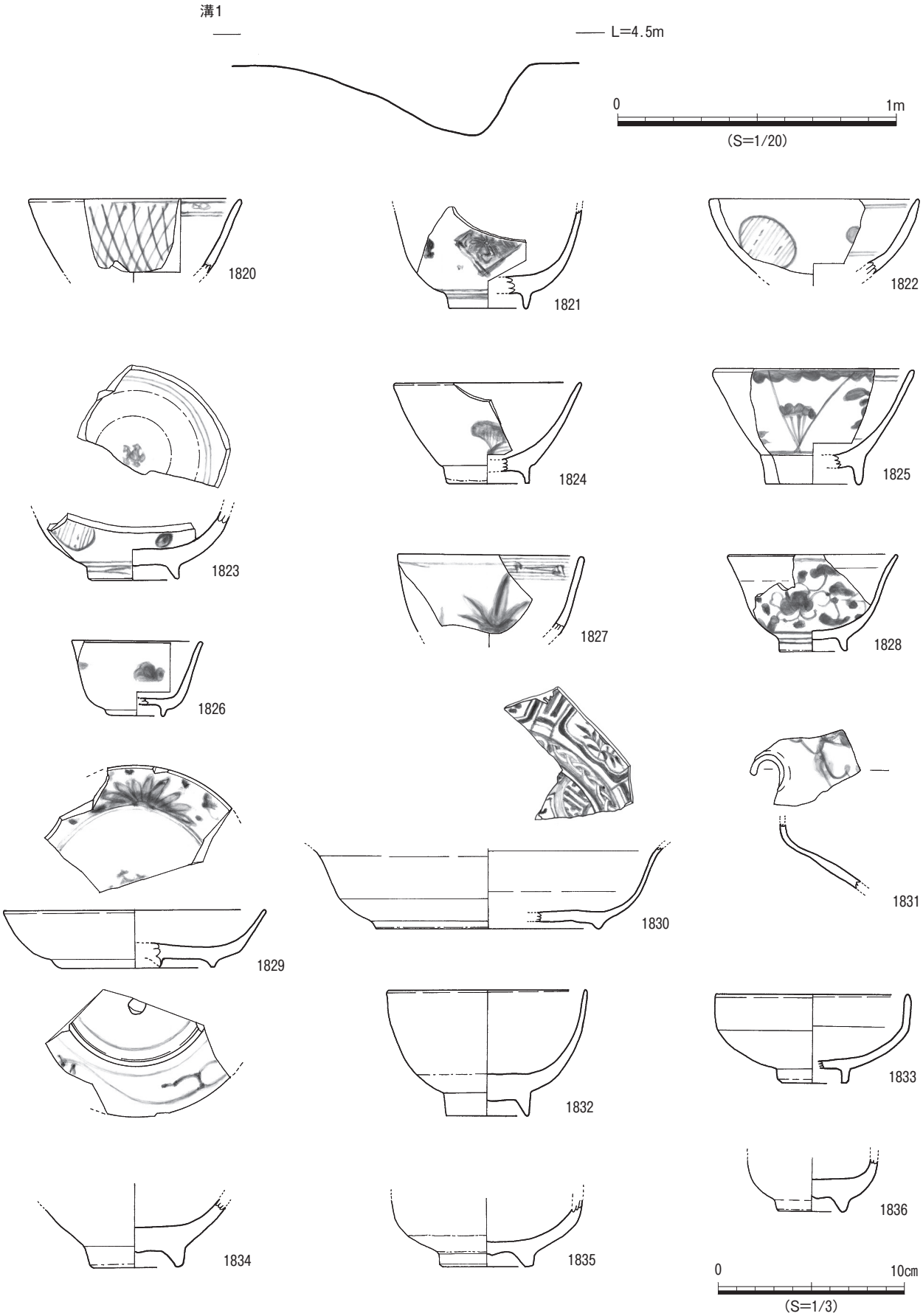
出土遺物（第327図）

出土遺物は２点で，龍門司系と思われる香炉と白土による刷毛目が施される肥前陶器が出土したが，後者は小片で図化できなかった。

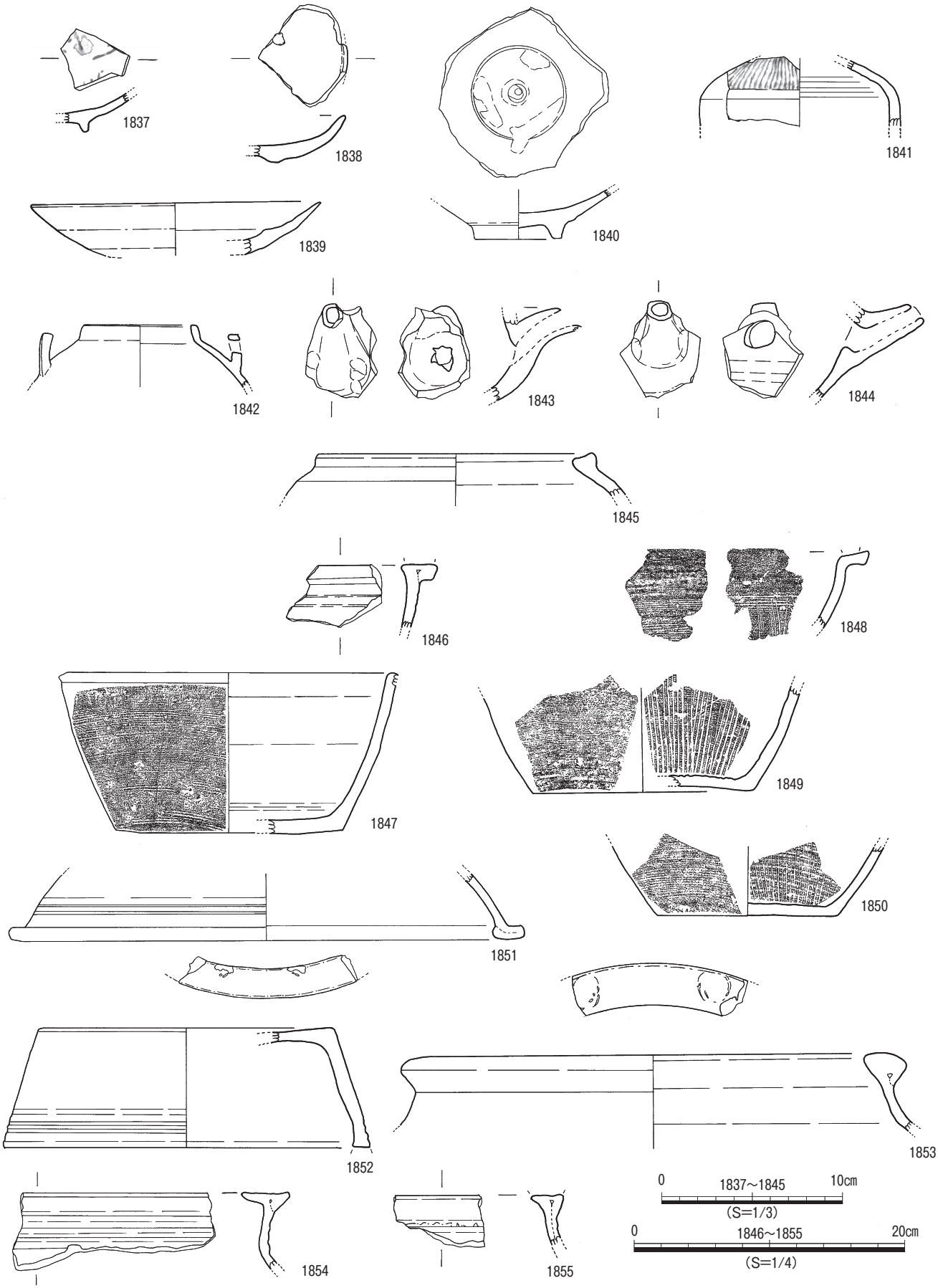
1865は香炉である。やや黄色みがかった灰白色の胎土に，黄釉が外面のみかかる。畳付が幅広の蛇の目高台を呈する。

溝８（第327図）

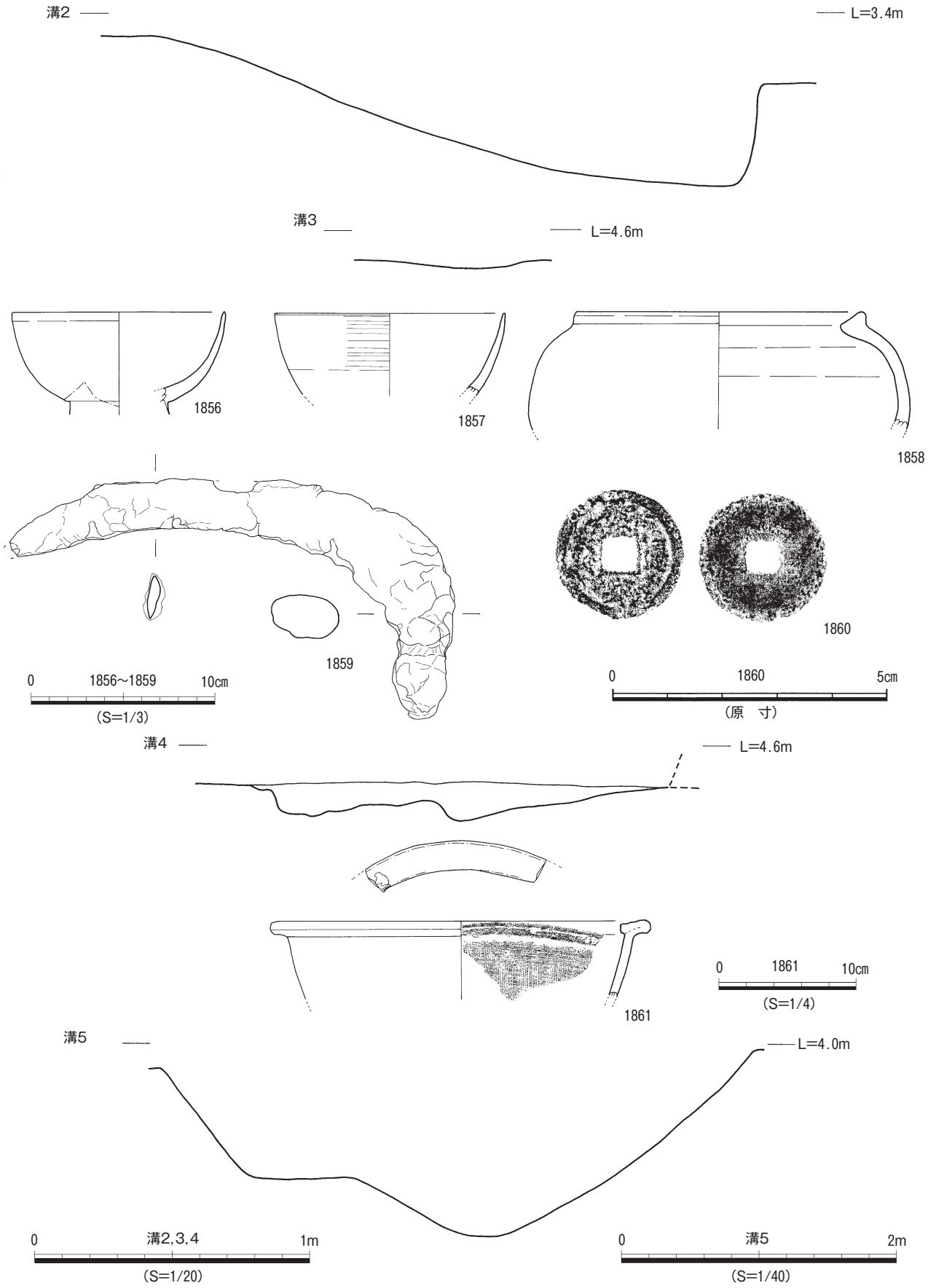
E～G-7･8区で検出された。南西方向に約30m延びる。



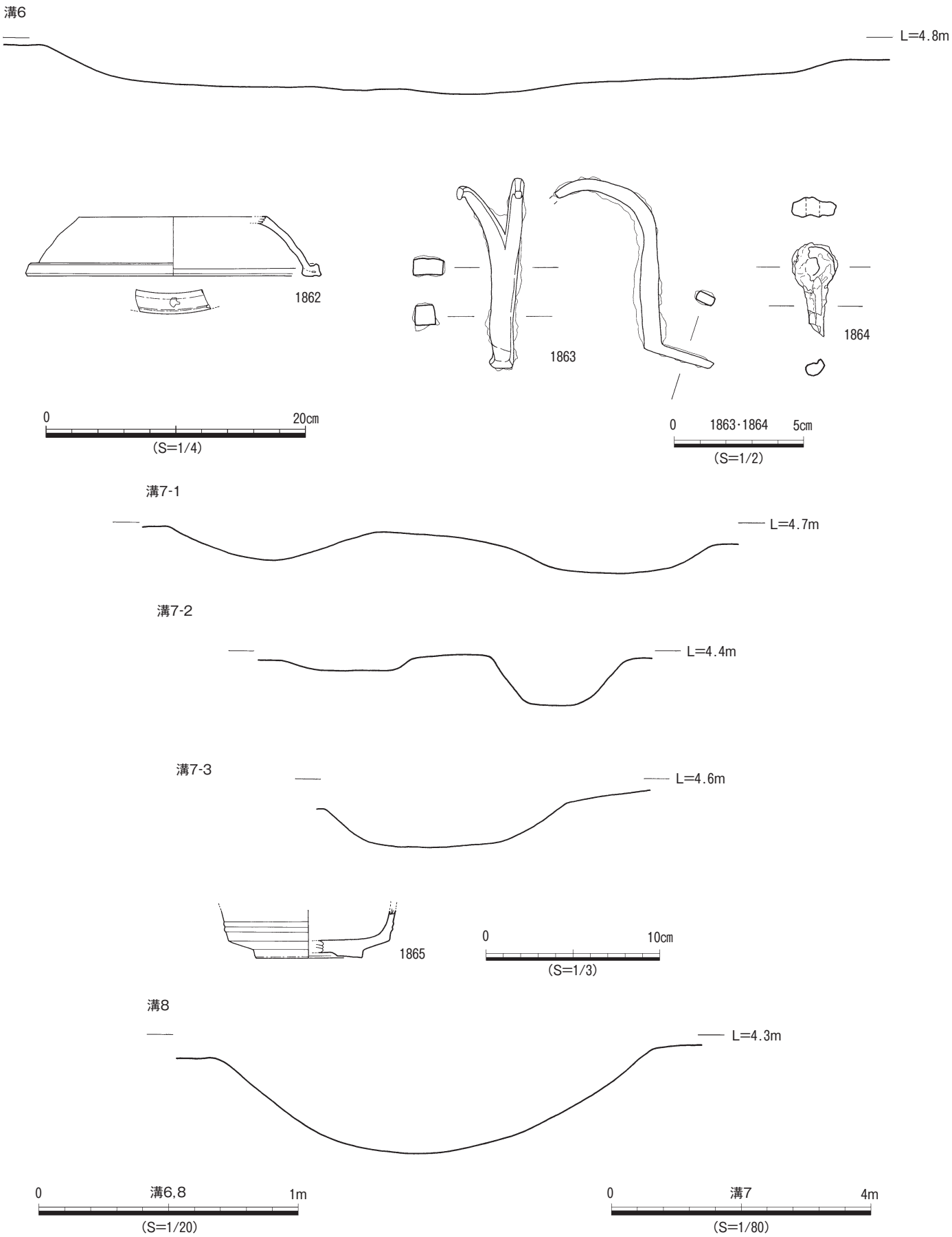
第324図　溝１・出土遺物



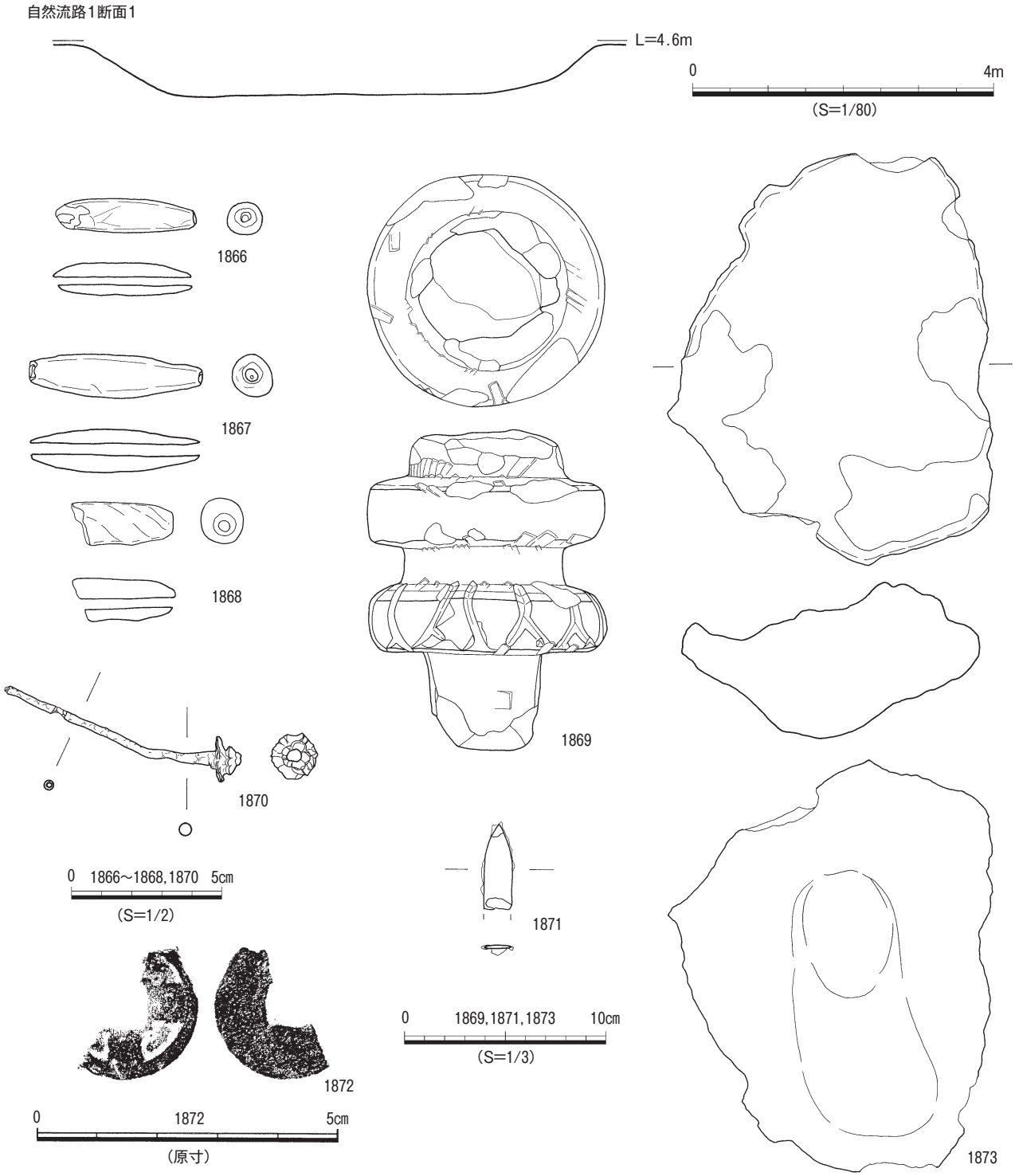
第325図　溝１出土遺物



第326図　溝２～５・溝３，４出土遺物



第327図　溝６～８・溝６，７出土遺物

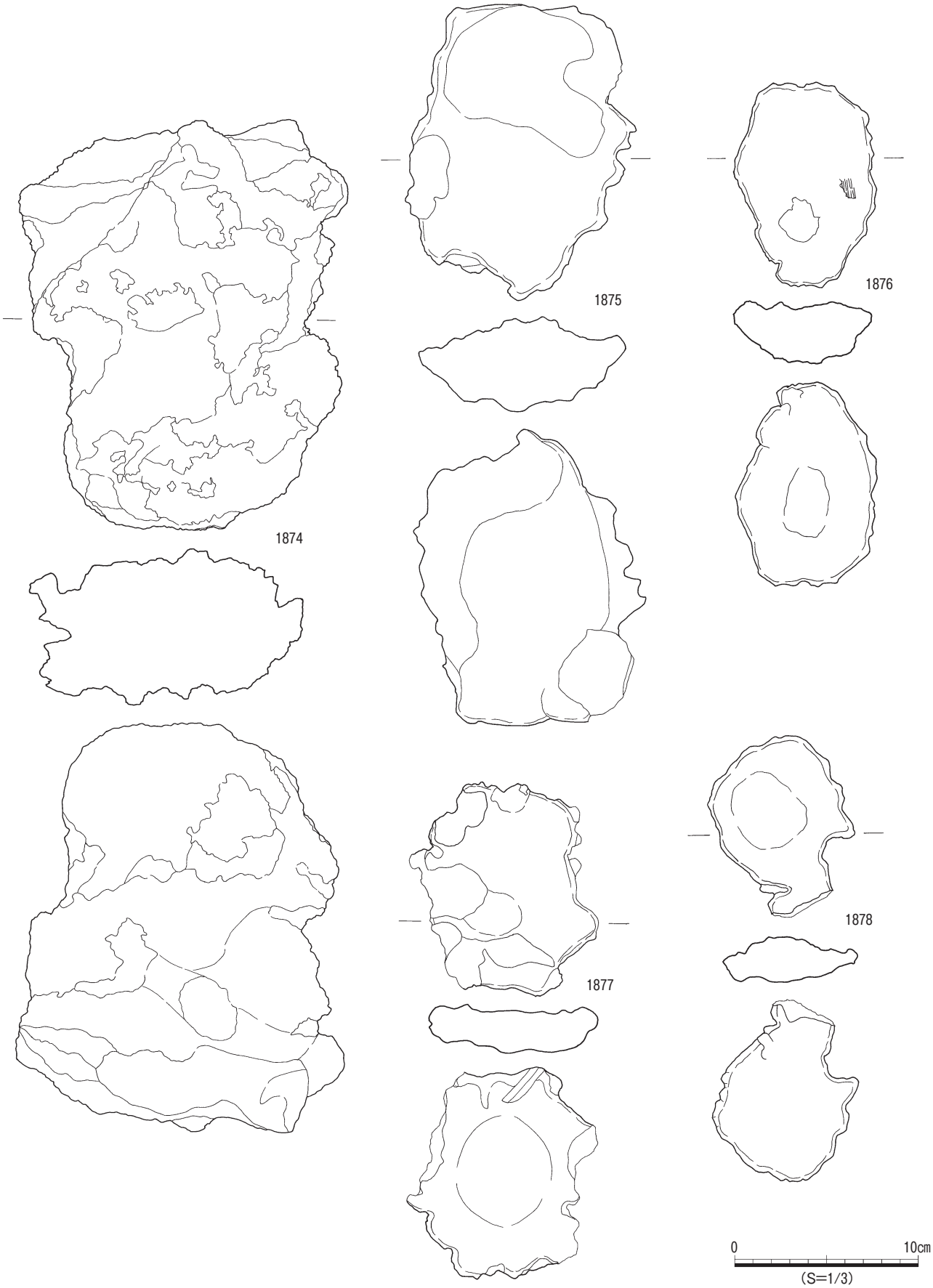


第328図　自然流路１断面１・出土遺物

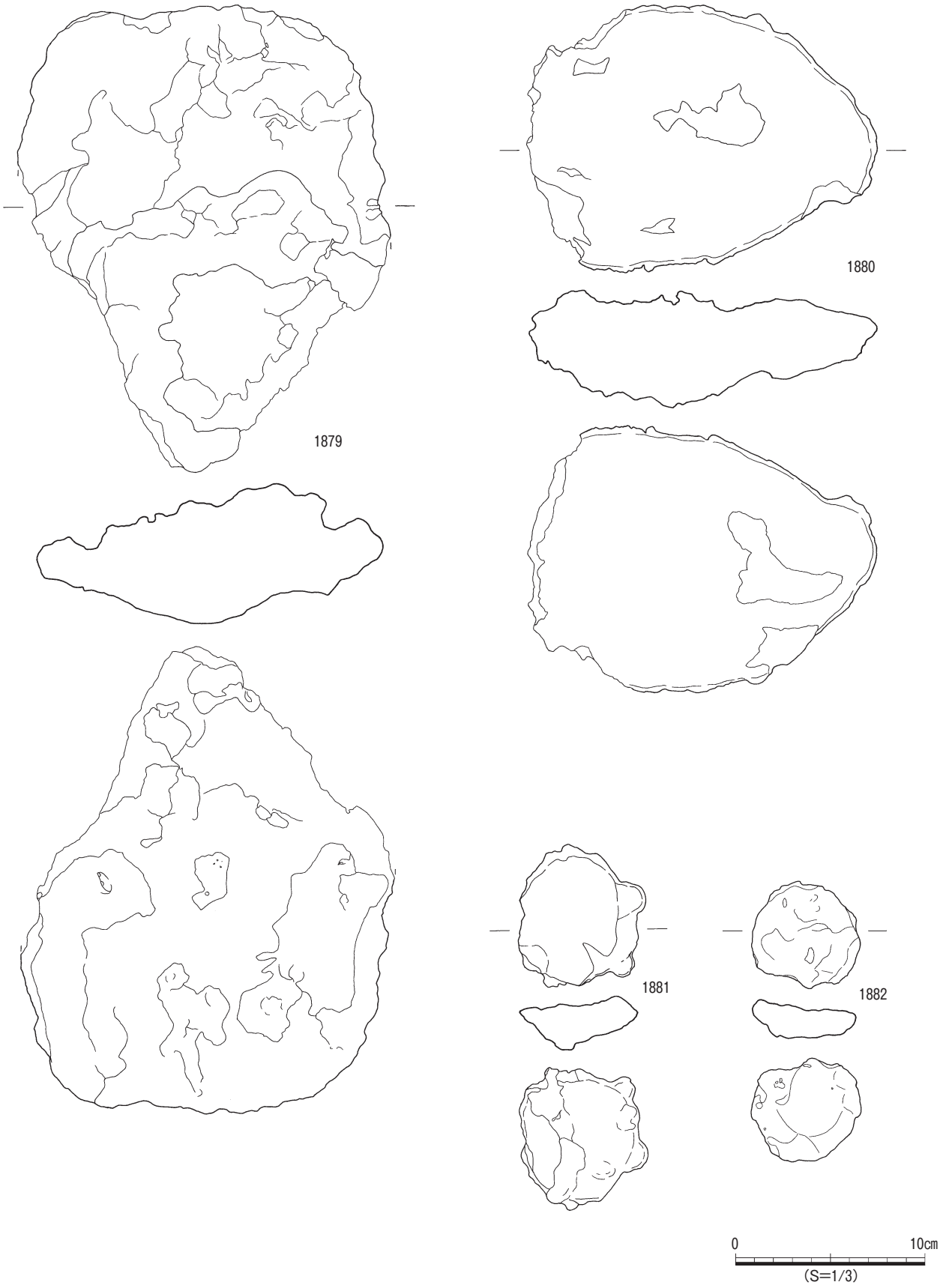
幅約1.6m，検出面からの深さ約40cmで，断面形は緩いU字状を呈する。溝７の末端とほぼ平行する。

自然流路１（第328図）

A'～F-20～31区で検出された。複数の流路が合流し，最終的に21・22区の南方向への流れ，29・30区の南への流れに集約される自然流路である。B～F-29・30区の流路から大量の鉄滓，鞴の羽口片が出土した。



第329図　自然流路１断面１付近出土遺物（１）

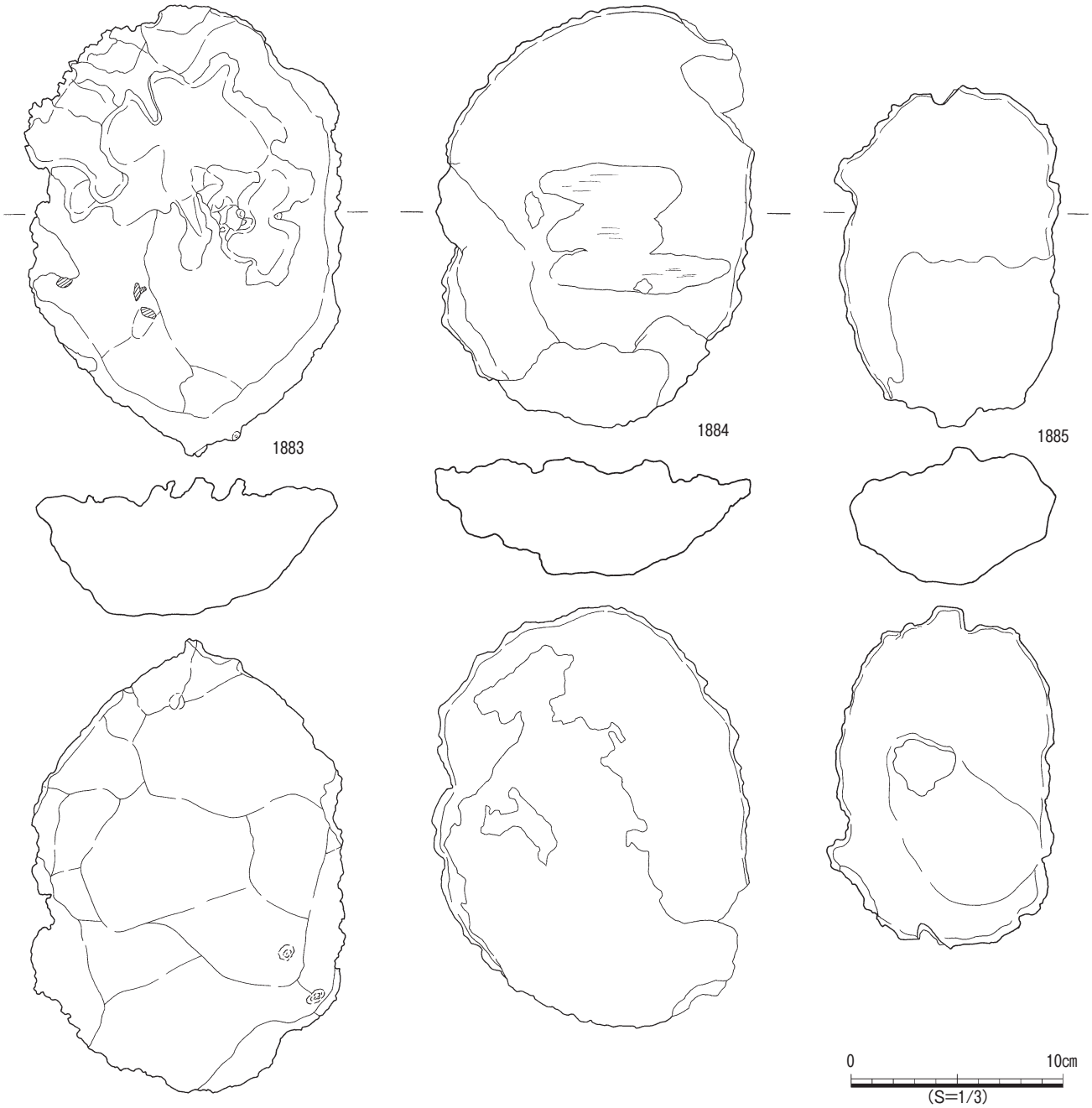


第330図　自然流路１断面１付近出土遺物（２）

出土遺物（第328図～第335図）

1866～1868は土錘である。1866･1867は完形のもので，1868は半分ほど残存するものである。いずれも細身の形状を呈することから，中世以降のものと考えられるものである。

1869は石塔の一部である。太い棒状の石材を二輪の環状部分を残して彫り込むものである。上部３分の２程度は断面円形であるが，下部（基部）のみは断面方形の形状を呈するものである。一段目の環状部分は無文であるが，二段目の環状部分には連弁が施されるものである。形状から「相輪」と呼称される石塔の一部と考えられるもので，宝筐印塔や宝塔，層塔などの上部に乗るものの可能性がある。また，時期はおおむね中世後半から近世初頭におさまるものと考えられる（狭川真一氏【元興寺文化財研究所】の御教示による）。1870・1871は金属製品である。1870は銅製品で，棒状部分の末端部に花弁状の装飾を施すものである。「かんざし」の可能性が考えられる。日本列島の多くでみられるかんざしは装飾部分を棒状部分で突き抜けるものが多いのに対して，本資料は装飾部分を突き抜けてはいない。

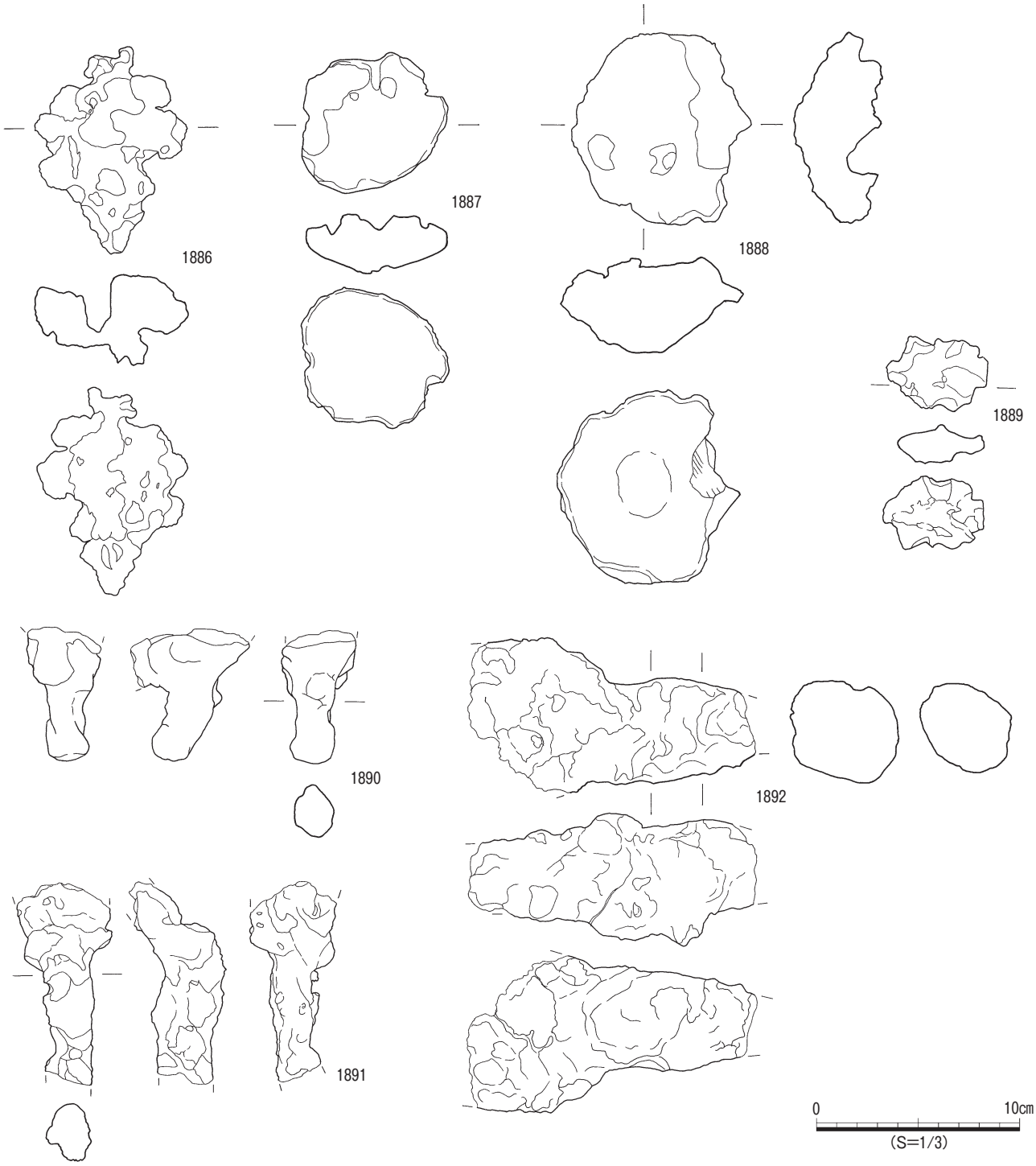


第331図　自然流路１断面１付近出土遺物（３）

これは琉球において多くみられるもの（沖縄では「ジーファー」と呼称）に類似するもので，奄美大島のノロ宅に伝承するかんざしにも類似のものが存在する（金属製品に関しては久保智康氏【京都国立博物館】の教示による部分が大きい）。1871は先端部が鋭く尖り，両側に刃部を持つものである。剣あるいはヤリガンナの可能性が考えられる。

1872は銭貨である。斜めに半分近く欠損しており，銭文も右側と下側の二文字が残存しているが，明瞭ではない。かろうじて「〇宋通〇」か「〇鳳通〇」と読める。前者であれば，「皇宋通寶」で初鋳は北宋の1038年で，後者であれば「龍鳳通寶」で初鋳は宋の1355年である。後者であれば非常に稀少なものであるが，字体が篆書であることから前者の可能性が高いと考えられる。

1873～1895は鉄滓である。1873～1889は「鍛錬鍛冶」



第332図　自然流路１断面１付近出土遺物（４）

と呼称される工程で生じた鉄滓である。1873～1875は，「平面長方形椀型滓」と呼称されるもので，刀剣など鍛打する際に生じた鉄滓の可能性がある。1876～1878・1880～1889は，「椀形鍛冶滓」である。この中で，形状・表面の様子などの特徴から1877・1878・1880・1881は「楕円状椀形滓」，1882は「小型椀形滓」，1886～1889は「ガラス質椀形滓」に分類される。1879は「炉底塊」である。文字どおり鍛冶炉の底部に生じた鍛冶滓で，鍛冶炉の形状が窺われるものである。隅丸方形状を呈するもので，送風痕（鞴の羽口から吹く風によってできた「めくれ」）が観察される。1890～1895は，「精錬鍛冶」と呼称される工程で生じた鉄滓である。なお，「精錬鍛冶」は「鍛錬鍛冶」の前の工程とされている。これらの遺物はいずれも「流出孔滓」である。鍛冶炉の炉内にたまった「炉内滓」を抜き出す排出孔にたまった鉄滓で，これらの遺物から排出孔のようす（大きさ・太さ・傾き）などが窺われる。1896～1901は鞴の羽口である。他にも数十点出土しているが，良好なもののみを選別した。いずれも一端がガラス化するもので，この部分を鍛冶炉に直接向けて送風を行っていたであろうことが推察される。特に1897は高温によって溶解した部分がガラス化して流れる様子が明瞭に観察されるもので，ほぼ45°の角度で「鞴」に固定してあったことが推測できるものである。

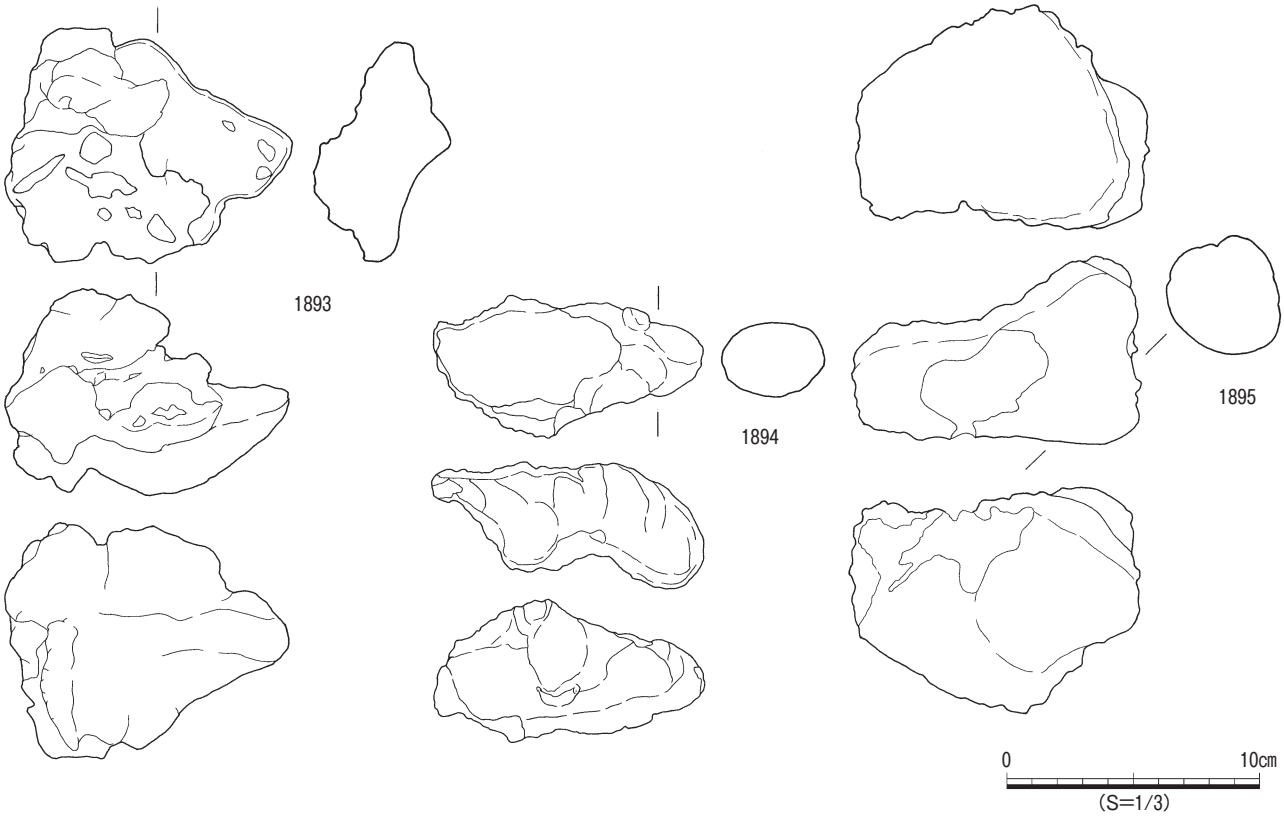
1902・1903は肥前陶器の碗である。1902は内外面に白土による刷毛目が施される。1903は見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。1904は肥前磁器の皿であるが，白濁した釉薬がかかり，半陶半磁状の胎土を呈する資料である。

自然流路２（第335図）

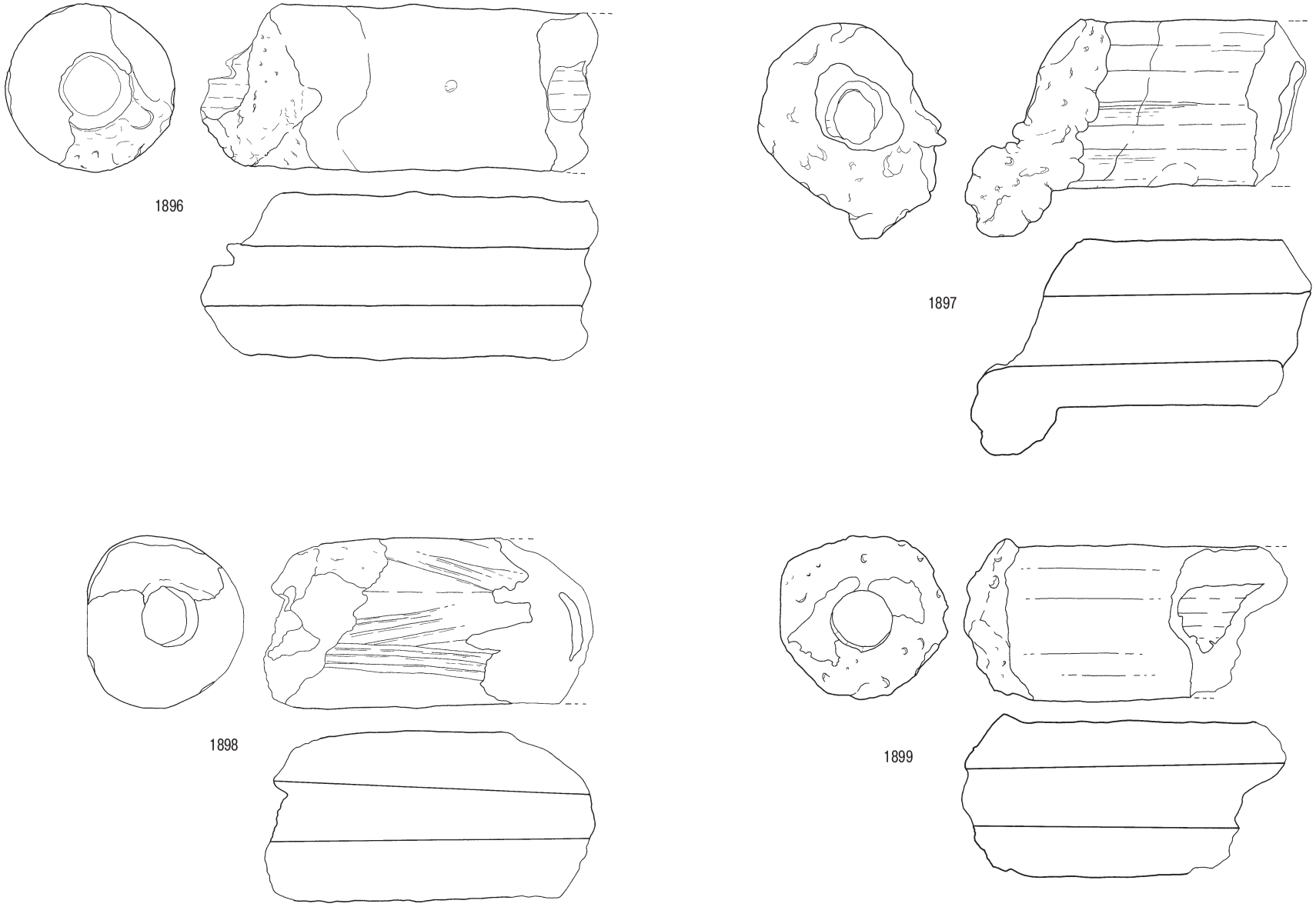
C～E-26区で検出された。南北方向へ約21.5m延びる。幅約7.5mで北側は2.5mと狭くなり，検出面からの深さ約30cmである。遺構埋土上位に硬化面が形成され，道として利用されていたと推測される。

出土遺物（第335図）

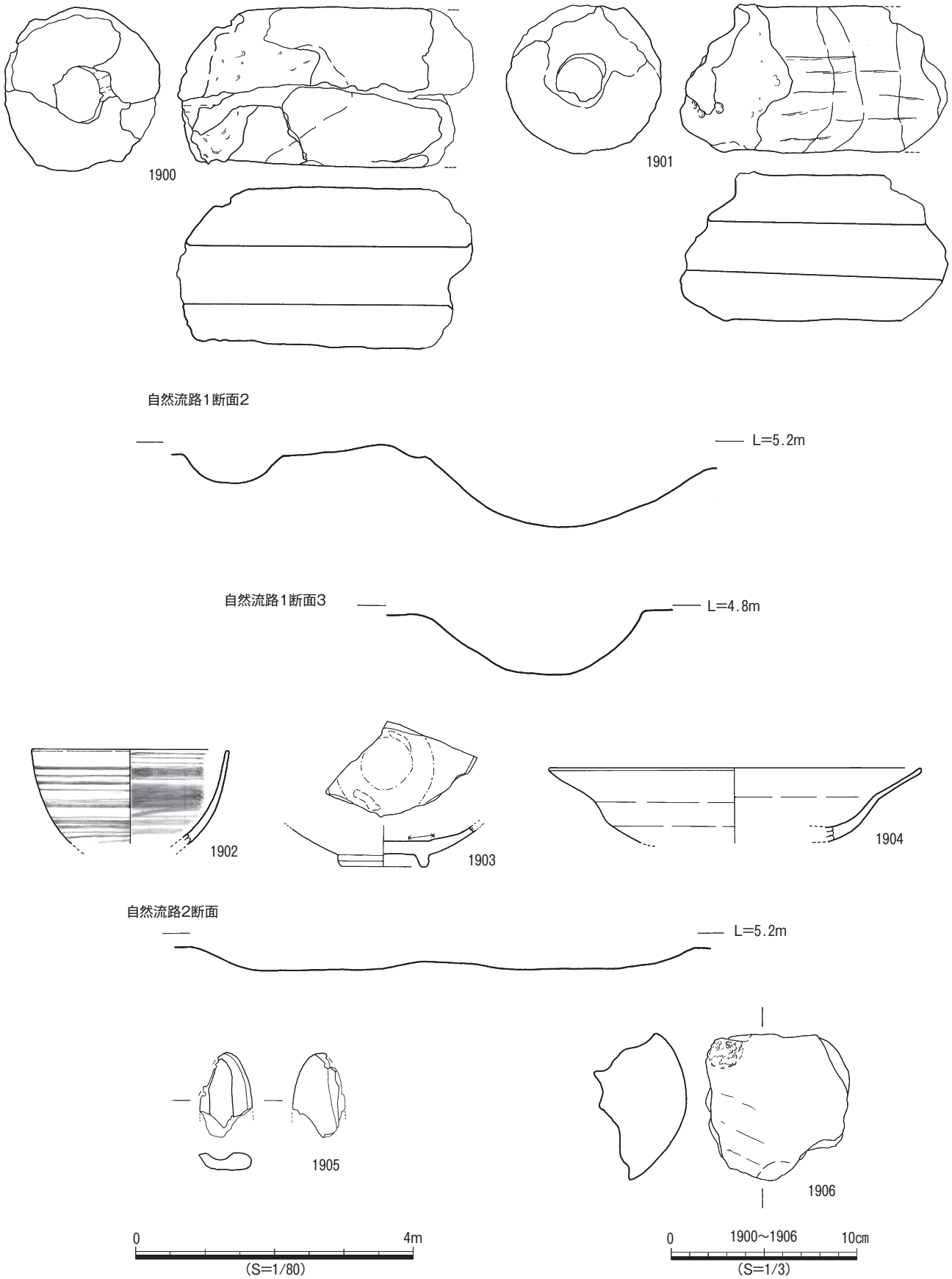
1905は頁岩製の砥石である。表面中央に縦方向の溝状の研ぎ跡がみられる。溝幅約1.2cmである。1906はやや小形の鞴の羽口である。



第333図　自然流路１断面１付近出土遺物（５）



第334図　自然流路１断面１付近出土遺物（６）



第335図　自然流路１断面２，断面３，自然流路２断面・自然流路１断面１，断面３付近，自然流路２出土遺物

（4）遺物

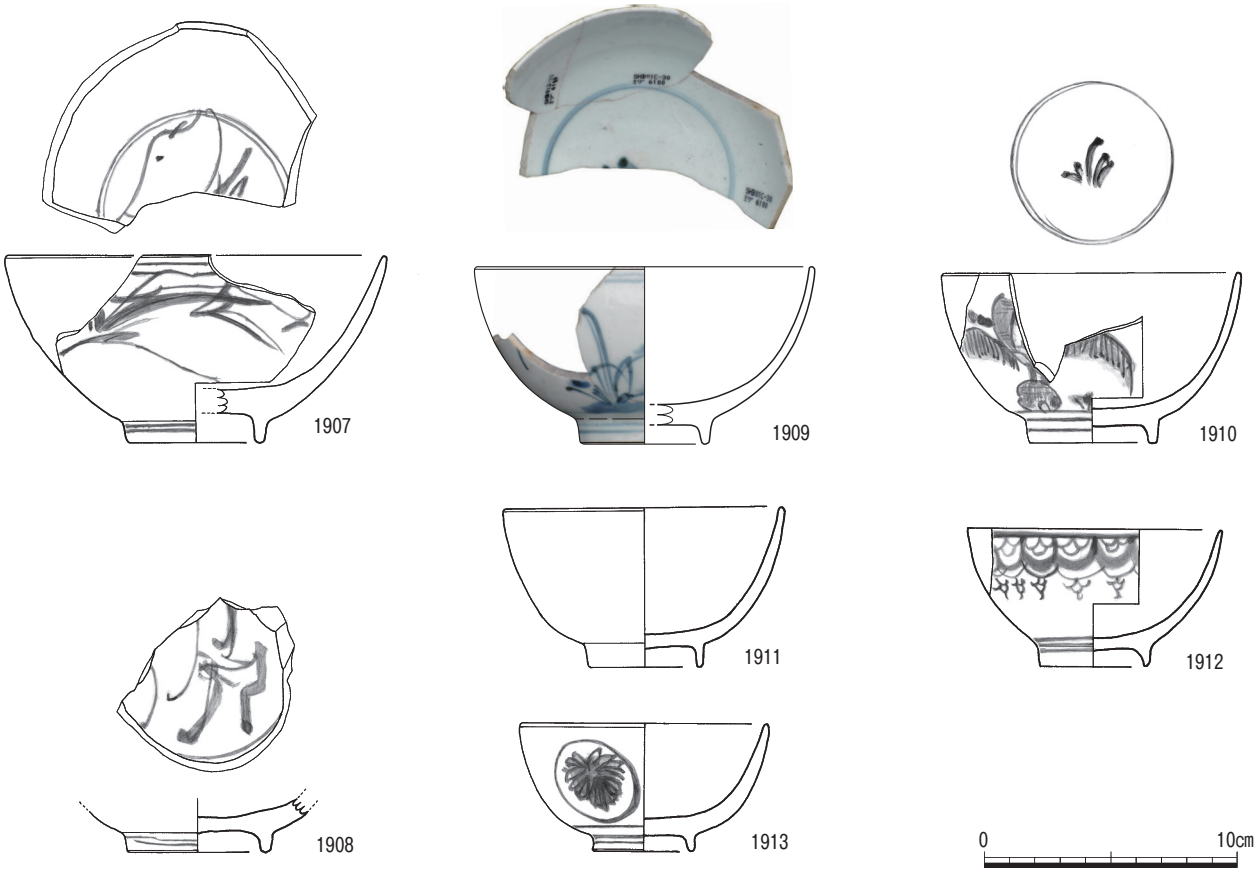
磁器

碗（第336～339図）

1907～1924は肥前系の丸碗である。1911は白磁で，その他は全て染付である。1907・1908は見込みに，波の間から鯉が飛びはね上には雲が描かれる荒磯文が描かれるが，かなり簡略化されている。輸出向けに生産された碗と考えられている資料である。器形はやや大振りで，碗の範疇に入れたが，鉢ともとらえられる資料である。1907は外面に竜の文様が描かれる。1908は底部のみの資料である。1909・1910は見込みに二重圏線と草文が描かれ，1909は外面に草花文，1910はソテツの文様が描かれる。２点とも器壁は薄手で，上手の作りである。器形はやや大振りである。1911は器壁が薄手の白磁である。高台は細く尖る。1912は外面口縁下位に輪宝繋文が描かれる。1913はコンニャク印判により家紋がスタンプされる。1914～1918は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1915・1918は五弁花が矮小化している。1914は外面青磁釉の資料で，高台内底には「渦福」が描かれる。内面口縁下位は四方襷文が描かれる。1915の見込みは蛇の目釉剥ぎが施され，重ね焼きを行った際の高台畳付の痕跡が輪状に残る。外面には，コンニャク印判によりスタンプされた家紋風の文様が入る。1916～1919は，外面に丸文が描かれる資料である。1916～1918は胎土が灰色を呈し，1916の高台内底には，一重方形枠の中に変形文字が記された裏銘がみられる。1917には，さらに簡略された変形文字の裏銘が記される。1918は見込みに蛇の目釉剥ぎが施され，重ね焼きを行った際の高台畳付の痕跡が残る。1919は外面に丸文と格子文が描かれ，見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。1920は胎土が灰褐色を呈する。外面には梅花文が描かれる。1921は外面に草花文が描かれる。裏銘が記されるが，判読できない。1922は焼成不良のためか，呉須の発色が悪く透明釉も熔けていない。肥前系の資料としたが，中国産の可能性も残るものである。1923は胎土が灰色を呈し，一重網目文が描かれる。1924は二重網目文が描かれる。

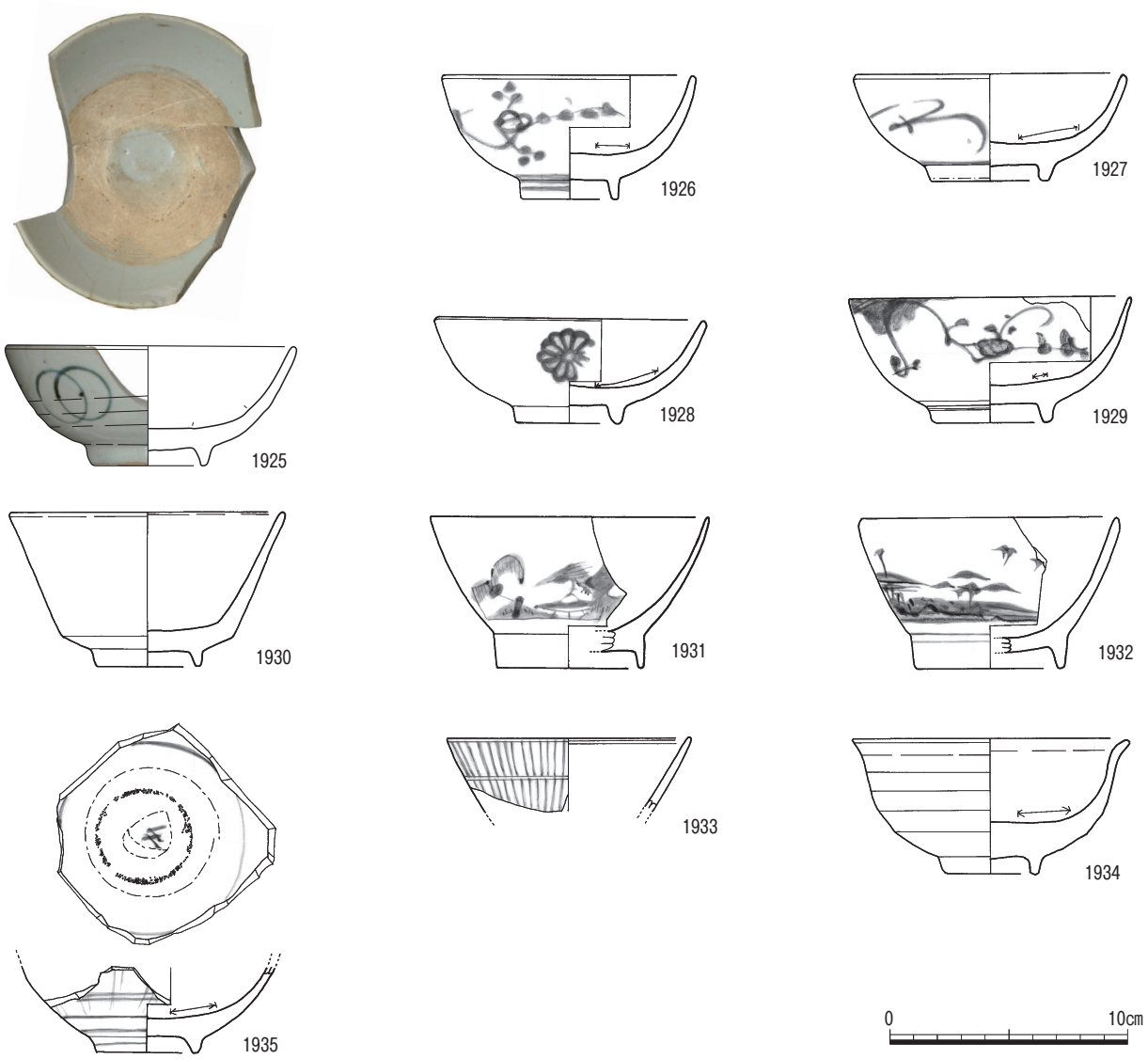
1925～1929は厚手で，深さの浅い丸碗である。すべて肥前系の資料である。見込みには蛇の目釉剥ぎが施され，特に1925～1928のものは幅広に釉剥ぎされる。1925は，外面に線描きの丸文が描かれる。1926は梅花文が描かれる。1927は胎土が灰色を呈し，外面には折れ松葉文が描かれる。1928はコンニャク印判による菊文がスタンプされる。1929は外面に梅花文が描かれる。

1930は，朝顔形の白磁碗である。体部は腰部で内側に



第336図　磁器１　碗

第337図　磁器２　碗



第338図　磁器３　碗

に屈曲し，口縁部にかけて逆ハの字状に開く。

1931・1932は広東形の碗であるが，一般的な広東碗に比べ高台が低く厚手である。どちらも外面には山水文が描かれる。

1933は小広東碗である。外面には線状に簡略化された梵字文が描かれる。器形はやや小振りである。1930～1933は在地産の可能性も考えられる資料である。

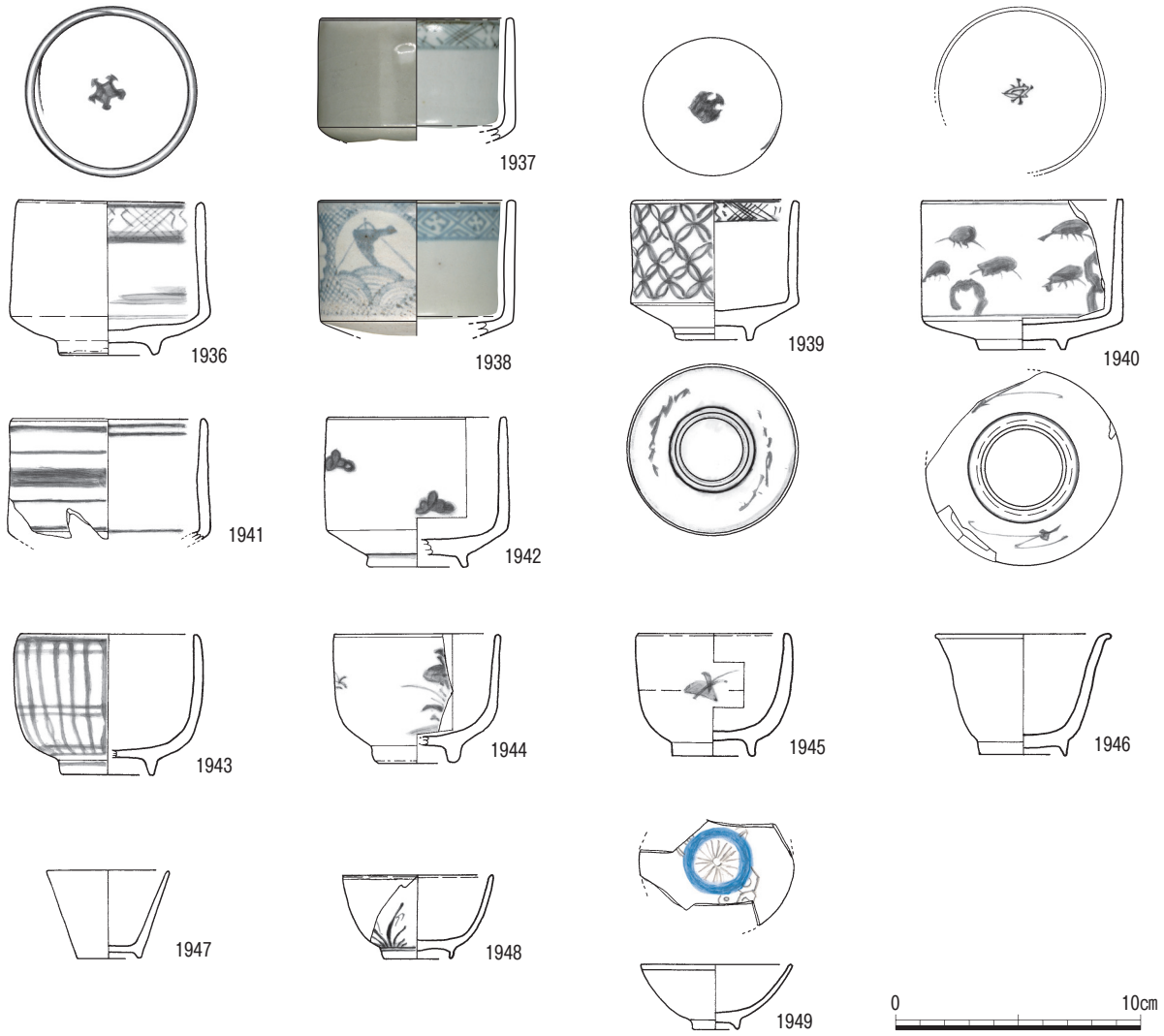
1934・1935は端反形の碗である。２点とも在地産と考えられる資料である。1934は白磁である。器壁が厚手で，外面にはロクロ引きの稜線が明瞭に残る。見込みには幅広の蛇の目釉剥ぎが入る。1935は端反碗の底部である。外面と見込み中央には格子文が描かれ，見込みには蛇の目釉剥ぎと重ね焼きの際の高台痕が残る。

1936～1942は肥前系の筒形を呈する碗である。

1936・1937は外面が青磁釉で，内面口縁下位に四方襷文が描かれる。1937は底部が欠損しているが，２点とも見込みにはコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1938は焼成不良のためか，呉須の発色も悪く，透明釉に光沢がない。外面には菊文と帆かけ舟文，内面口縁下位には四方襷文が描かれる。1939は，外面に二重網目文が描かれるもので，腰部には折れ松葉文が２か所描かれる。見込みには矮小化したコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1940は外面に雪持笹文，腰部に略された折れ松葉文が描かれる資料である。見込みに虫文が描かれる。肥前系としたが，在地産の可能性も考えられる資料である。

1941は外面に横縞文が描かれる。1942は胎土が灰白色を呈するもので，呉須の発色も悪く，灰色みを帯びる。

1943～1945は腰部が丸みを帯びる筒丸形の碗である。1943は外面に格子文が描かれる。透明釉が青みがかって



第339図　磁器４　碗・小坏

おり，在地産の可能性が考えられる資料である。1944・1945は外面に草花と蝶が描かれる。1945はやや小振りである。

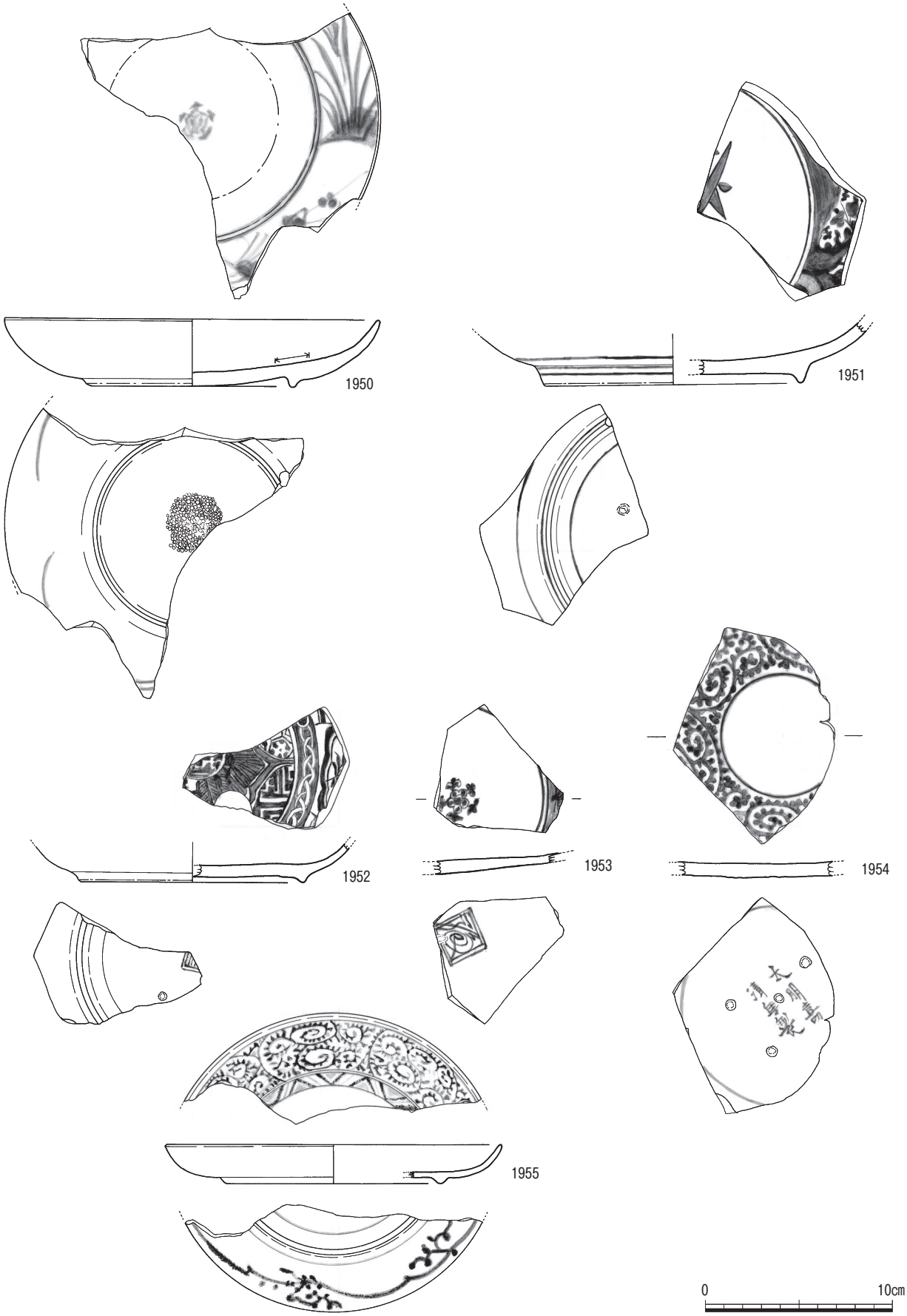
小坏（第339図）

1946～1949は小坏である。1946・1947は白磁である。1946は端反形を呈する。内面と畳付に焼成時に熔着したと思われる砂粒が観察される。小坏として報告するが，器形がやや大振りであるため，他の器種の可能性も考えられる。1947は，高台から口縁部までが直線的につながる桶形を呈する。肥前系としたが，在地産の可能性も考えられる資料である。1948は外面に草花文が描かれる。1949は清朝磁器である。見込みには菊文が描かれ，釉剥ぎ部分には青色の顔料が塗布される。

皿（第340～343図）

1950～1974は染付の皿である。1950～1955は肥前産の大皿である。1950は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。蛇の目釉剥ぎされた部分には，重ね焼きの際の高台痕が観察される。高台内底には，砂状の目跡が熔着する。1951は，高台内底にハリ支えの目跡が残る。1952は高台内底に「角福」と思われる銘とハリ支えの目跡が観察される。1953･1954は底面部のみの資料である。1953は見込み中央に手描き五弁花，高台内底に「角福」が描かれる。1954は内面に蛸唐草文が描かれる。高台内底には「大明嘉靖年製」の文字が記され，ハリ支えの目跡が残る。1955は内面に蛸唐草文，裏文様に唐草文が描かれるが，釉は透明度が低く，呉須は黒みを帯びた発色で，かすれている。

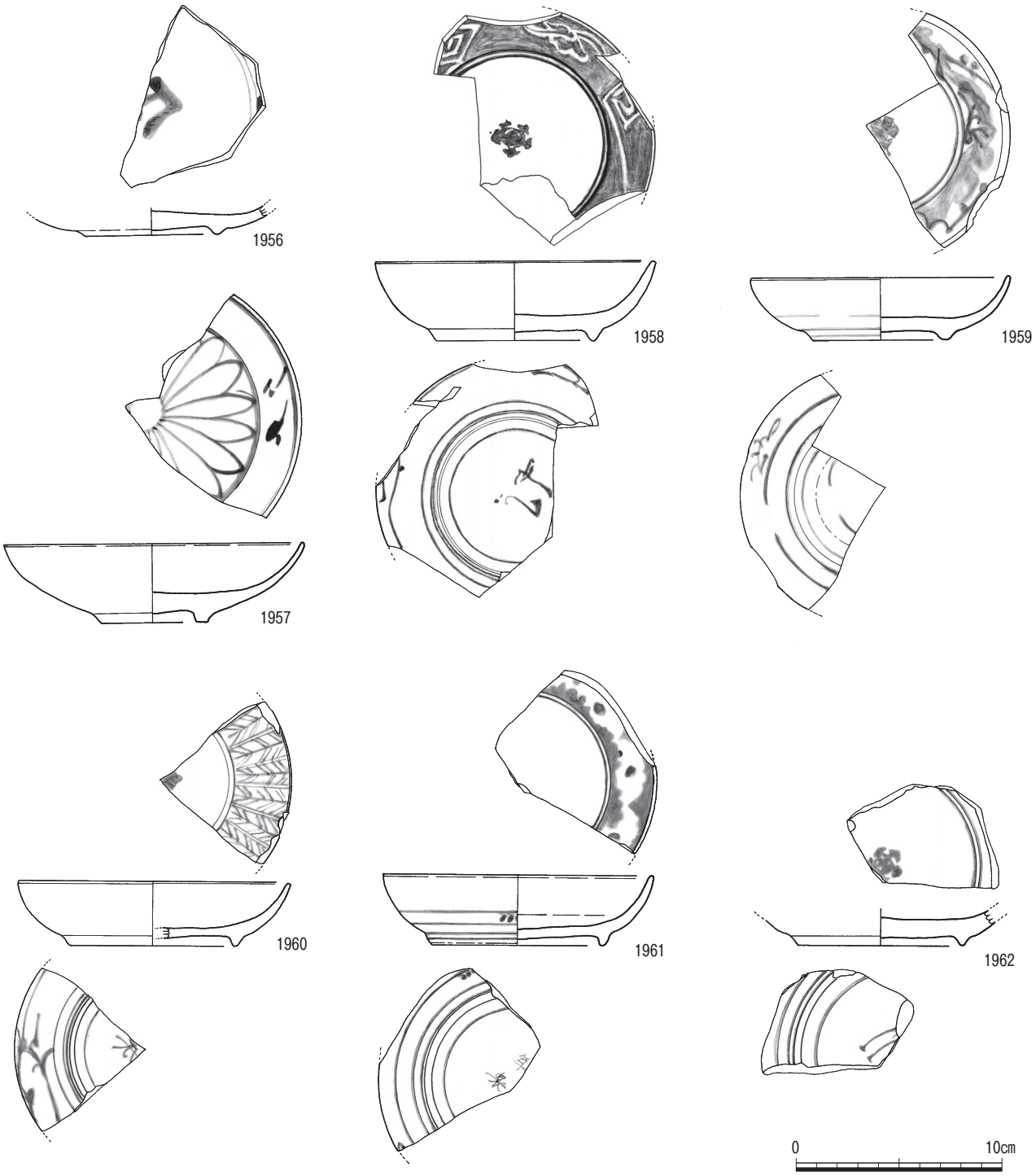
1956～1961は中皿である。1956・1957は初期伊万里の



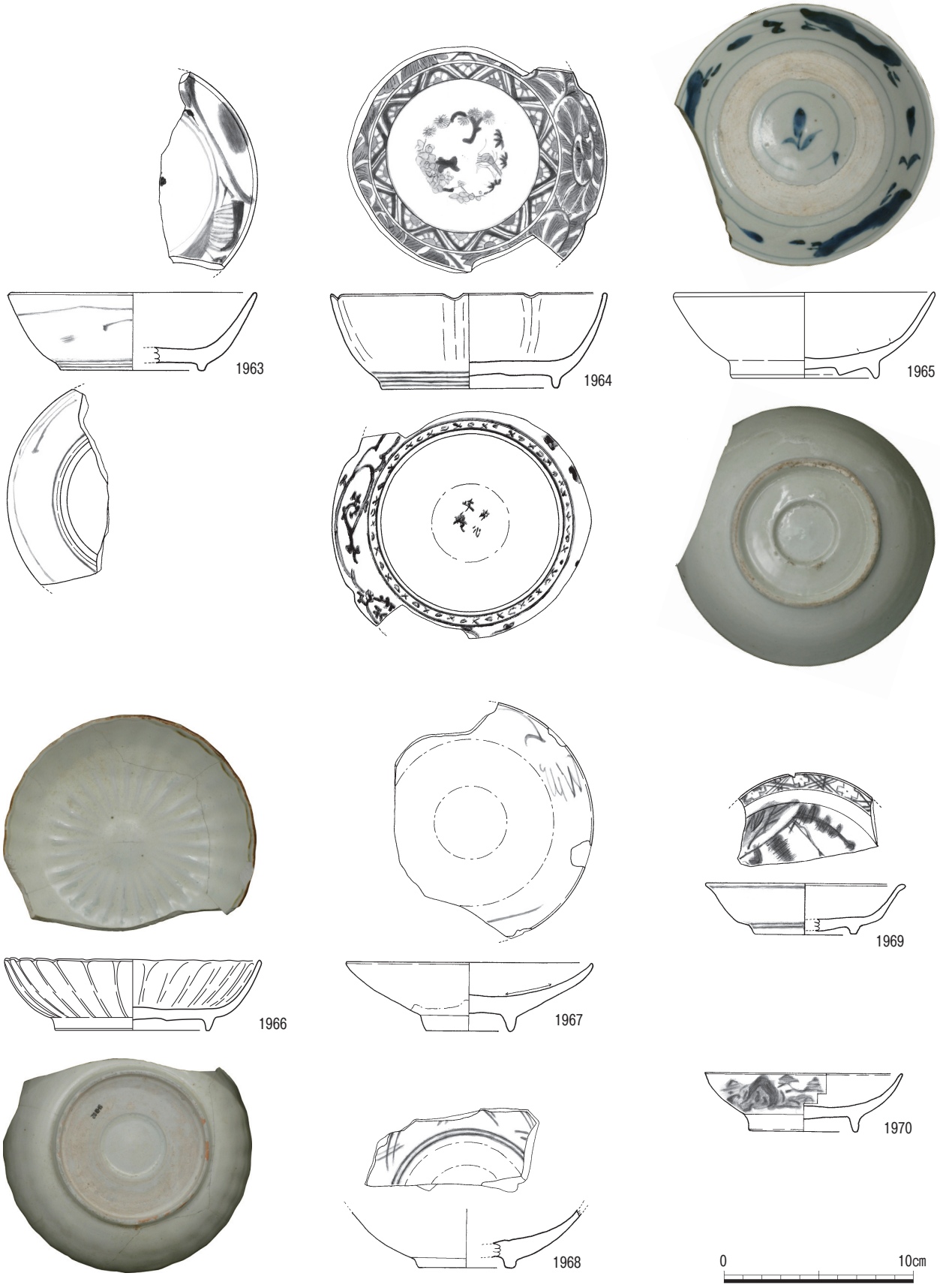
第340図　磁器５　皿

皿である。1956は底部のみの資料で，見込み部分に描かれた「日」の文字の一部が描かれる。海外輸出向けにつくられた日の字鳳凰文の皿と思われる。畳付には白色の砂粒が熔着している。1957は，見込み全体に菊花文が描かれる資料である。口径に対して高台径が小さく，高台は断面四角形状を呈する。1958～1962は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされるものである。

1958の内面は墨弾きの技法により文様が描かれる。高台内底に裏銘が記されているが，判読不能である。1959は胎土が灰色みを帯び，呉須の発色も悪い。1960は内面に矢羽根文，裏文様に簡略化された唐草文が描かれる。呉須の発色が悪く，灰色みを帯びる。高台内底の銘は残存部が少ないため判読できない。1961は高台内底に「年製」の文字がみられる。内面には雪之輪文が描かれる。



第341図　磁器６　皿



第342図　磁器７　皿

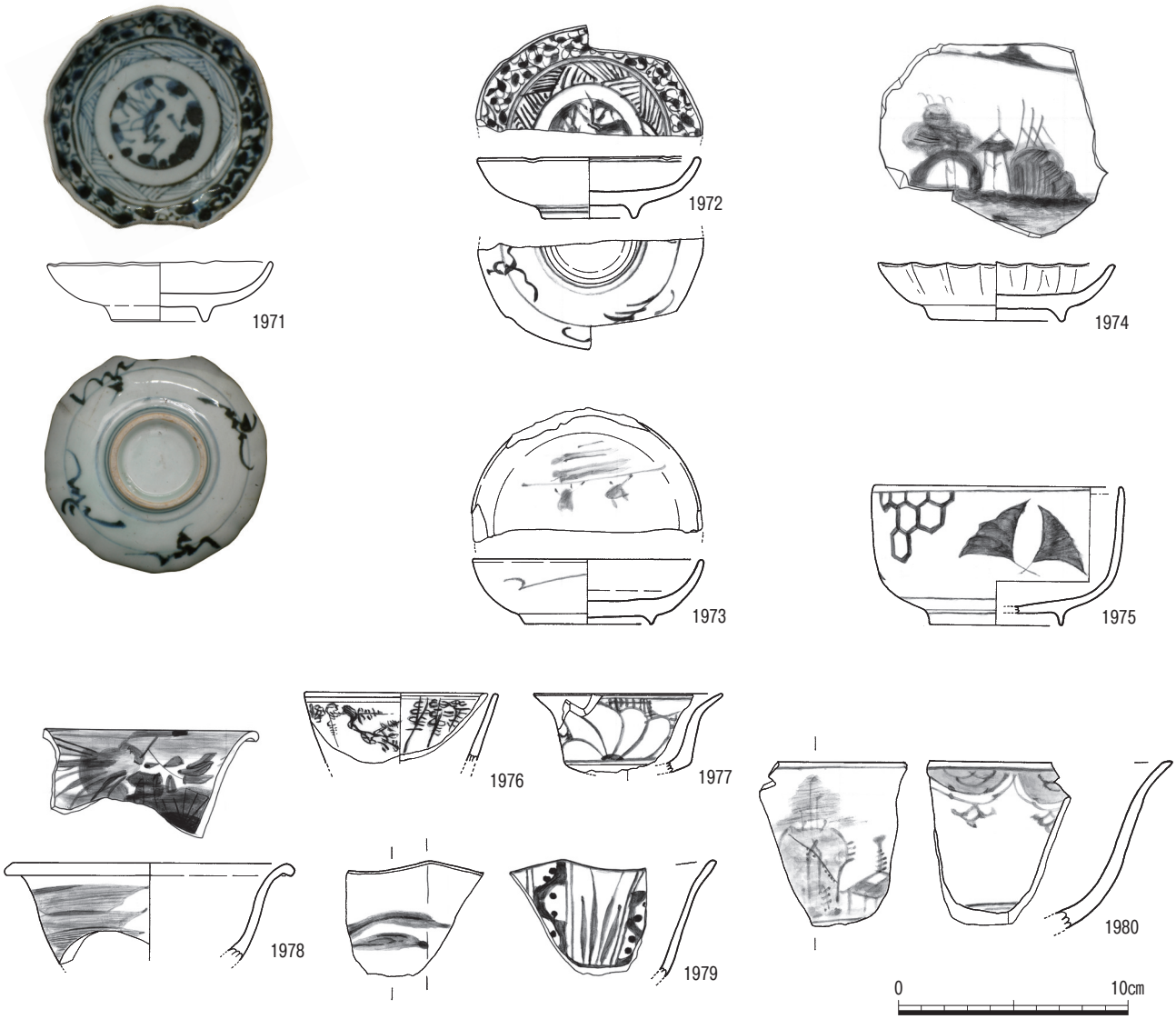
1962は胎土が灰色を呈するもので，呉須も鉄色に発色している。高台内底の銘は残存部が少ないため判読できない。

1963～1966は中形の深皿である。1963は，焼成不良のためか透明釉が白濁し，呉須の発色も悪い。1964は輪花皿である。高台は蛇の目凹型高台を呈し，釉は中央の凹んだ部分まで施釉される。裏銘は，「□化年製」（□は判読不能）と記されている。見込みは松竹梅文，内面は墨弾きと濃により文様が描かれる。裏文様は一筆書きではなく，縁取りをした唐草文が描かれる。1965は高台が蛇の目凹型高台を呈し，見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。1966は型作りの菊花皿である。白磁であるが，口唇部には口錆が施される。高台は蛇の目凹型高台である。1967・1968は見込みに幅広の蛇の目釉剥ぎが施され，重ね焼きの痕跡が残る。在地産の可能性が考えられる。

1969～1974は小皿である。1969は端反の皿で，口縁部に四方襷文，見込みに山水文が描かれる。1970は釉薬の胎土が灰白色を呈し，呉須の発色も悪い。外面には山水文が描かれる。1971・1972は輪花皿で，内面に細かい唐草文と松竹梅文が，裏文様に略された唐草文が描かれる。1972は顔料にコバルトが使用されている。1973・1974は内面に山水文が描かれたもので，1974は輪花皿である。

鉢（第343図）

1975～1980は染付の鉢である。1975は腰部が張る形状のものである。内面口縁下位は釉剥ぎされており，蓋付の鉢と考えられる。1976・1977は小形もので，鉢として分類したが，他の器種の可能性も考えられる。1978は，口縁部が大きく外反する。1979は口縁部が六角もしくは八角形を呈する鉢である。1980は大振りの鉢で，口縁部



第343図　磁器８　皿・鉢

は緩やかに外反する。外面には山水文が描かれる。

蓋（第344図）

1981・1982は飯碗の蓋である。1981は端反碗の蓋で，外面と内面口縁下位には染付で格子文が描かれる。1982は朝顔形碗の蓋で，白磁である。1983～1985は蓋物の蓋である。３点ともつまみ部分が欠損しているが，1985はアーチ状のつまみが付く。

その他（第344図）

1986は磁製の紅皿である。在地産の資料である。外面は型作りにより菊花状につくられ，内面のみ透明釉がかかる。1987はうがい碗と思われる。体部は逆ハの字状で直線的に開く。内面口縁下位に文様が描かれる。1988は油壺である。外面には梅花文が描かれる。1989は白磁の仏飯器である。在地産の資料と思われる。1990は白磁の徳利であるが，産地・年代ともに不明の資料である。近世磁器ではない可能性も残る。底部は碁笥底を呈し，畳付部分は釉剥ぎされる。透明釉が緑がかり青磁のようにもみえる資料である。1991は波佐見焼のコンプラ瓶である。肩部は張らず，なで肩である。一部欠損しているが，外面肩部には呉須で「JAPANSOHZOYA」と書かれるものと思われる。

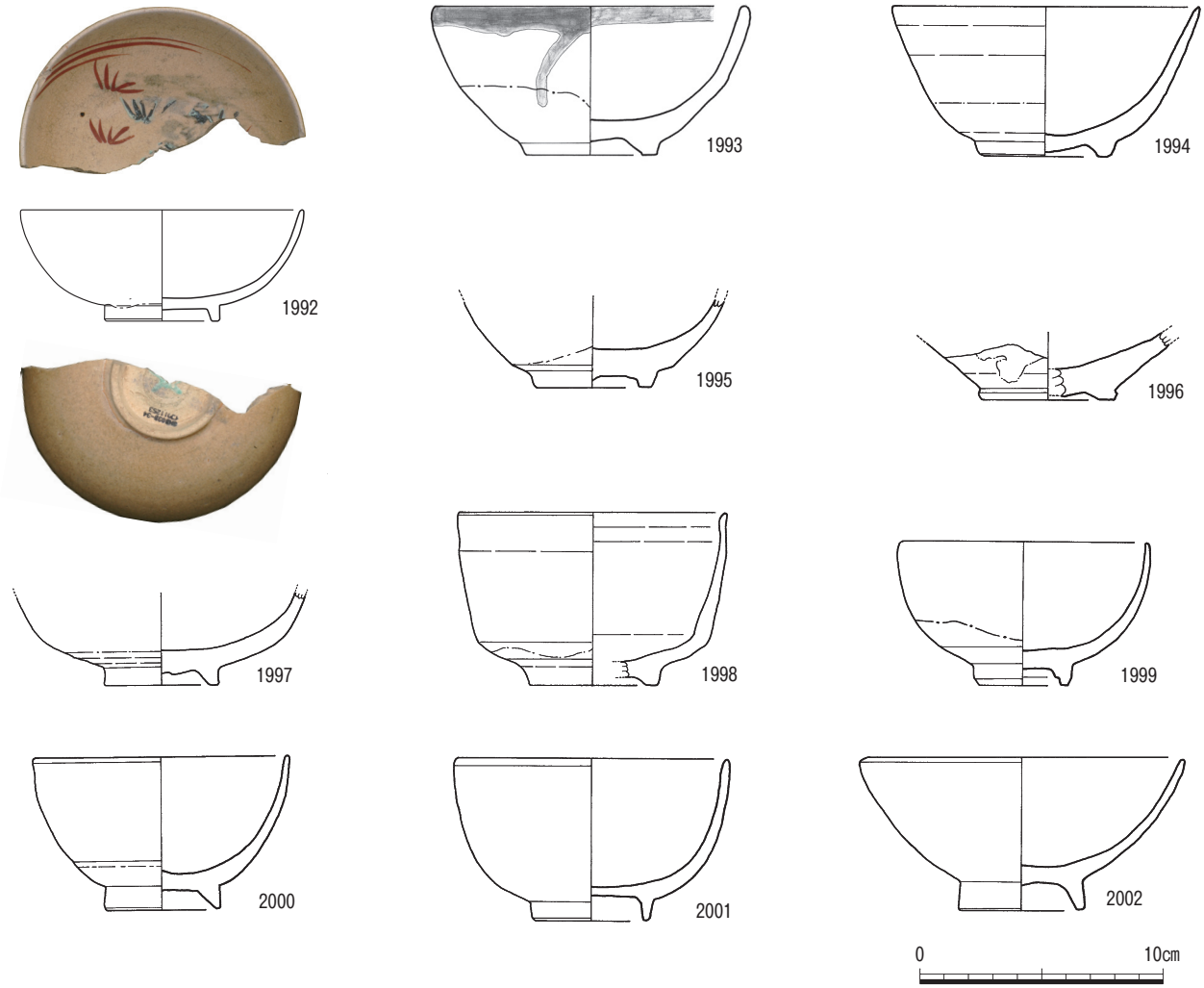
第344図　磁器９　蓋・その他

陶器

碗（第345・346図）

1992～2019は碗である。1992は京焼である。見込みには上絵付が描かれる。1993～2012は肥前陶器である。1993は灰色の灰釉の上から口唇部に鉄釉をかけたもので，皮鯨と呼ばれるタイプの資料である。1994は鈍い褐色の胎土に灰色の灰釉がかかるもので，見込みに胎土目の痕跡が残る。1995は，褐色の胎土に黒褐色の釉がかかる。腰部にはヘラ削りが施されるため，段を有する。1996は天目碗の底部と思われる。胎土は内面灰色，外面赤褐色を呈し，黒釉が厚くかかる。1997は腰が張り，1998は腰部が強く屈曲する形状の碗である。２点とも，内面と外面腰部まで黒釉が厚くかかる。1997の畳付には胎土目の痕跡が残る。1999・2000は内面に透明釉，外面に銅緑釉がかかる。2001は呉器手碗である。黄色みがかった胎土に，畳付以外に釉がかけられる。2002は黄色みがかった胎土に，畳付以外に釉がかけられる。2003～2007は京焼風陶器である。黄白色の緻密な胎土に透明釉がかけられ，外面腰部から高台内底は露胎する。2003～2005は煎じ碗形を呈するものである。2005の外面口縁下位には，鉄絵の笹文が描かれる。2006は筒丸形，2007は半筒形の資料である。どちらも外面には鉄絵の山水文が描かれる。2008は底部である。見込みには崩された「壽」と思われる文字が描かれる。2009・2010は腰が張る器形の陶胎染付である。灰色の胎土に，白化粧土をかけ山水文を描く。2011は筒丸形の碗で，内外面に白土による巻刷毛目が施される。2012は外面に蛍手，内面に打刷毛目が施される。

2013～2019は薩摩焼の碗である。2013～2017は龍門司系の碗である。2013の高台は竹節状に削り出され，畳付を除き飴釉が施釉される。初期龍門司と考えられる資料である。2014は褐釉がかかる口縁部である。2015は畳付を除き，黒褐色の釉がかかる。2016は白化粧土に透明釉をかけた資料である。畳付から高台内底は露胎する。見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。2017は黒褐色の釉がかかるが，畳付から高台内底は露胎する。



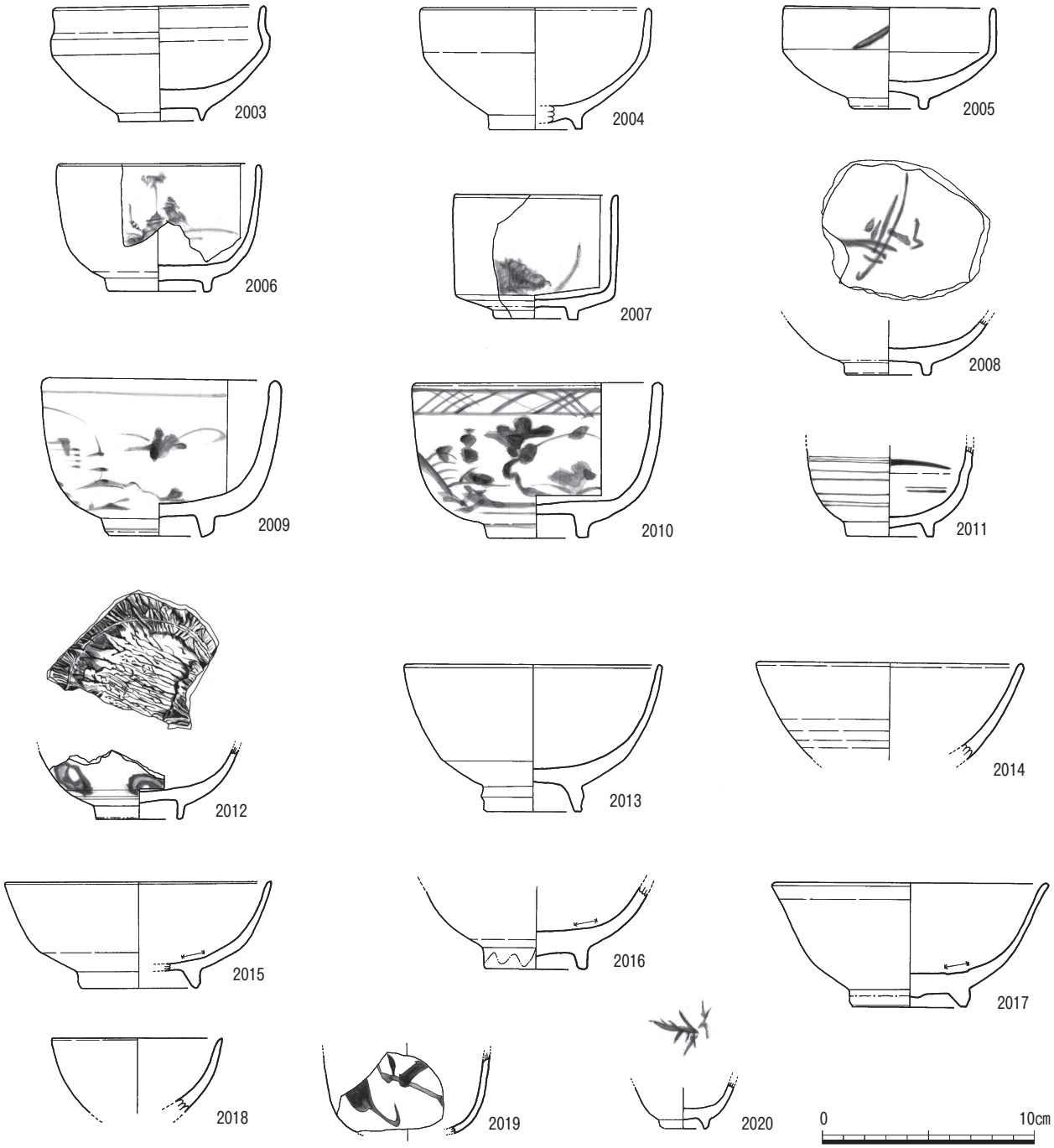
第345図　陶器１　碗

2018・2019は小碗と考えられる資料で，竪野系の白薩摩である。2019は外面に鉄絵（文字か？）が描かれる。

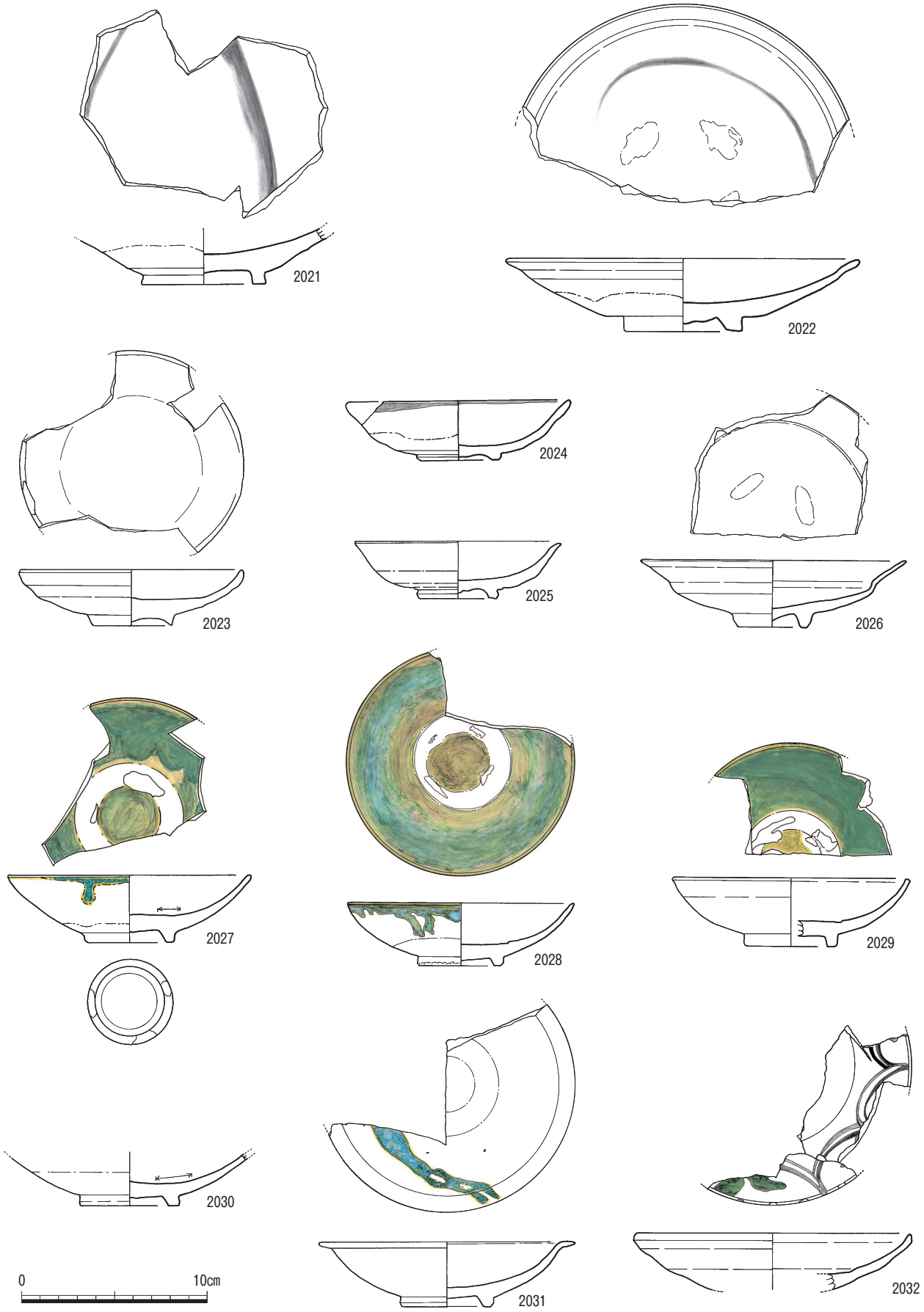
2020は竪野系の白薩摩で，小坏である。見込みに呉須で松葉文が描かれる。

皿（第347図）

2021～2032は肥前陶器の皿である。2021・2022は内面に鉄絵が描かれた大皿である。2022は見込みに砂胎土目の痕跡が残る。2023は灰色の灰釉がかかる。2024は灰色の灰釉の上から口唇部に鉄釉をかけたもので，皮鯨と呼ばれる資料である。2026は見込みに砂目が残る。2027～2031は内野山窯産の資料である。５点とも，見込みは蛇の目釉剥ぎされる。2027～2029は外面に透明釉，内面に銅緑釉がかかる。2030は，内外面とも鉄釉がかかる。2031は口縁端部が強く外側に屈曲する。内外面に透明釉をかけ，内面の一部に銅緑釉を流しかける。2032は陶胎染付の皿である。灰色の胎土に白化粧土をかけ，その上から呉須で文様を描く。



第346図　陶器２　碗・小坏

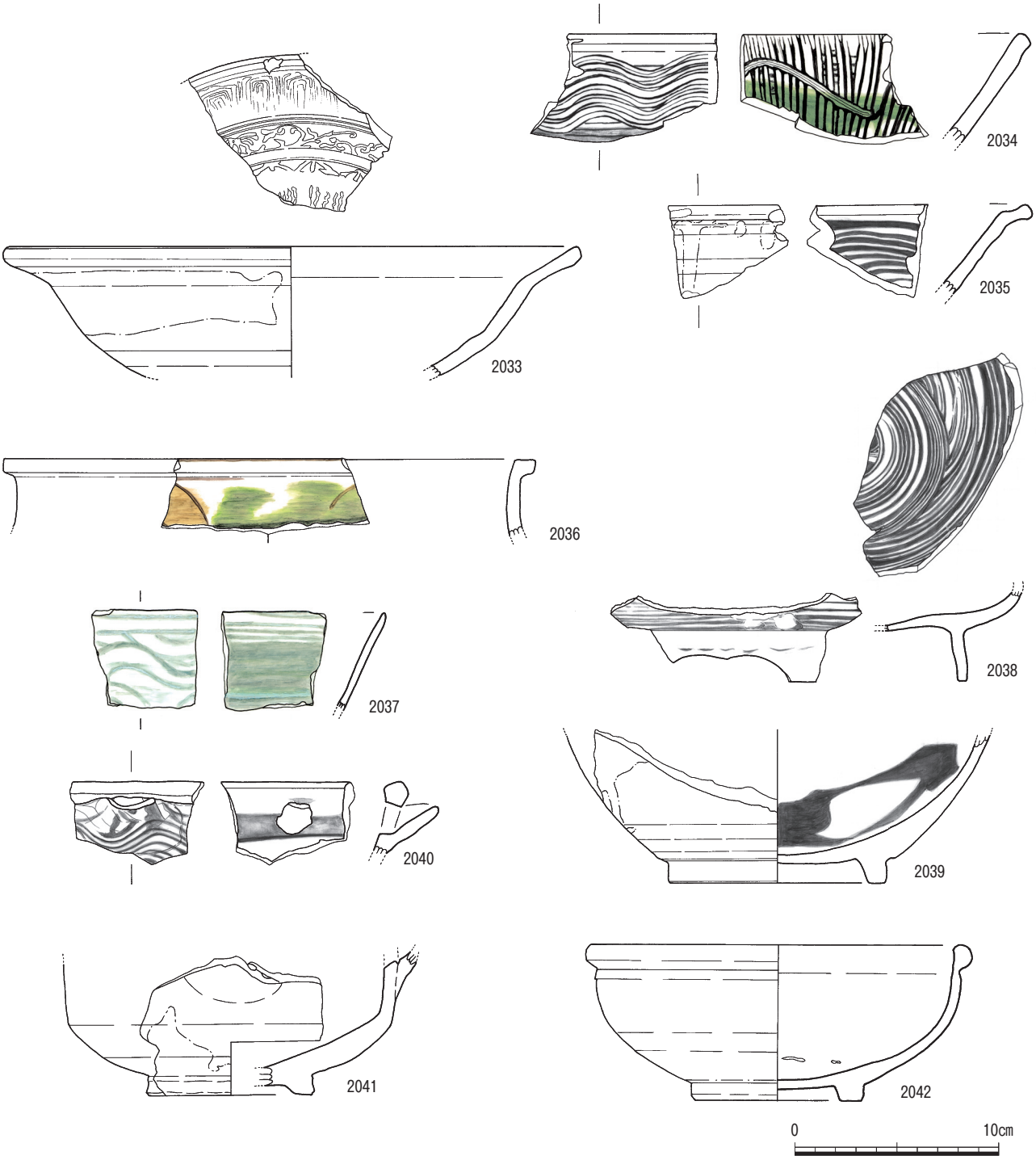

2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
0
10cm

第347図　陶器３　皿

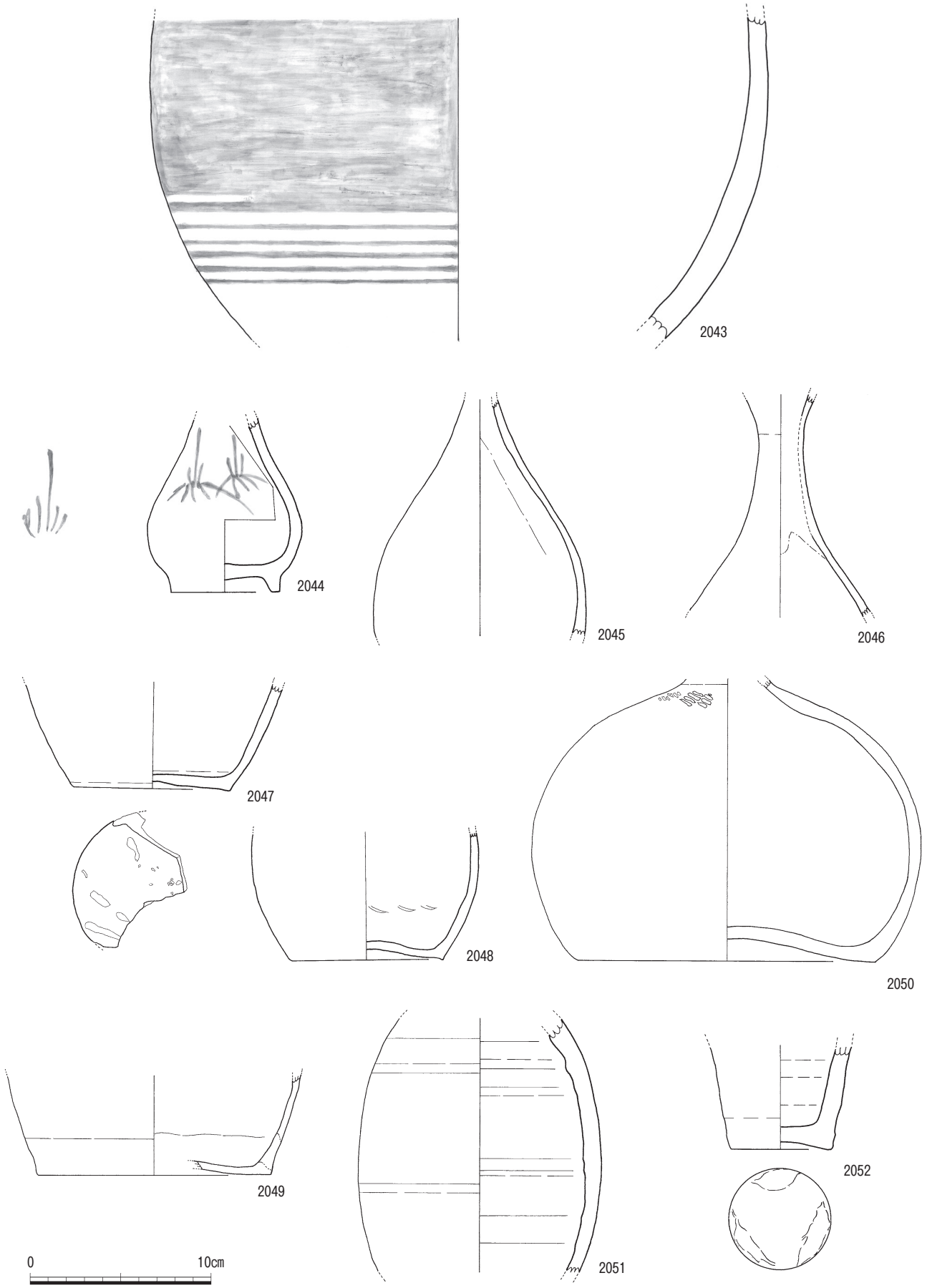
鉢・片口（第348図）

2033～2039は肥前陶器の鉢である。2033の文様は印花であるが，白象嵌は行われていない。2034は外面に白化粧土の刷毛目を施し，内面は白化粧土を掻き落として縦縞文様を入れ，上から緑釉をかける。2035は口縁端部が外側に短く折れる形状の鉢である。内面に白土の刷毛目が施され，褐釉がかかる。2036は内外面に白化粧土がかけられ，外面下位は鉄泥が塗布される。2037は外面に白土による刷毛目が施され，上から緑釉がかかる。鉢としたが他の器種である可能性も考えられる。2038は高台が高く，一部に抉りが入る。内外面には，白土による巻き刷毛目が施される。2039は胎土が赤褐色を呈し，内面と外面腰部まで白化粧土がかけられる。内面濁した釉がかけられる。

2040～2042は肥前陶器の片口である。2040は片口部である。白土による刷毛目が施される。2041は，片口部がわずかに残存している資料である。内面灰色，外面鈍い赤褐色の色調を呈する胎土に，灰色の釉がかかる。2042



第348図　陶器４　鉢



第349図　陶器５　徳利

は，口縁部が玉縁状を呈するもので，内底面には重ね焼きの目跡が残る。片口部は欠損している。

徳利・瓶（第349図）

2043・2045～2052は徳利，2044は瓶である。2043・2044は肥前陶器である。2043の外面は，鉄泥の上から白化粧土をかけ，筋状に掻き取る。2044は陶胎染付の瓶である。2045～2050は薩摩焼苗代川産の資料である。2045・2046は鶴首形の徳利である。2047～2050は底部である。2050は徳利としたが，形状等から溲瓶の可能性も考えられる。肩に貝目が残る。2051・2052は琉球産の荒焼である。2052は鬼の腕と呼ばれる泡盛用の徳利である。外底面に目跡が残る。

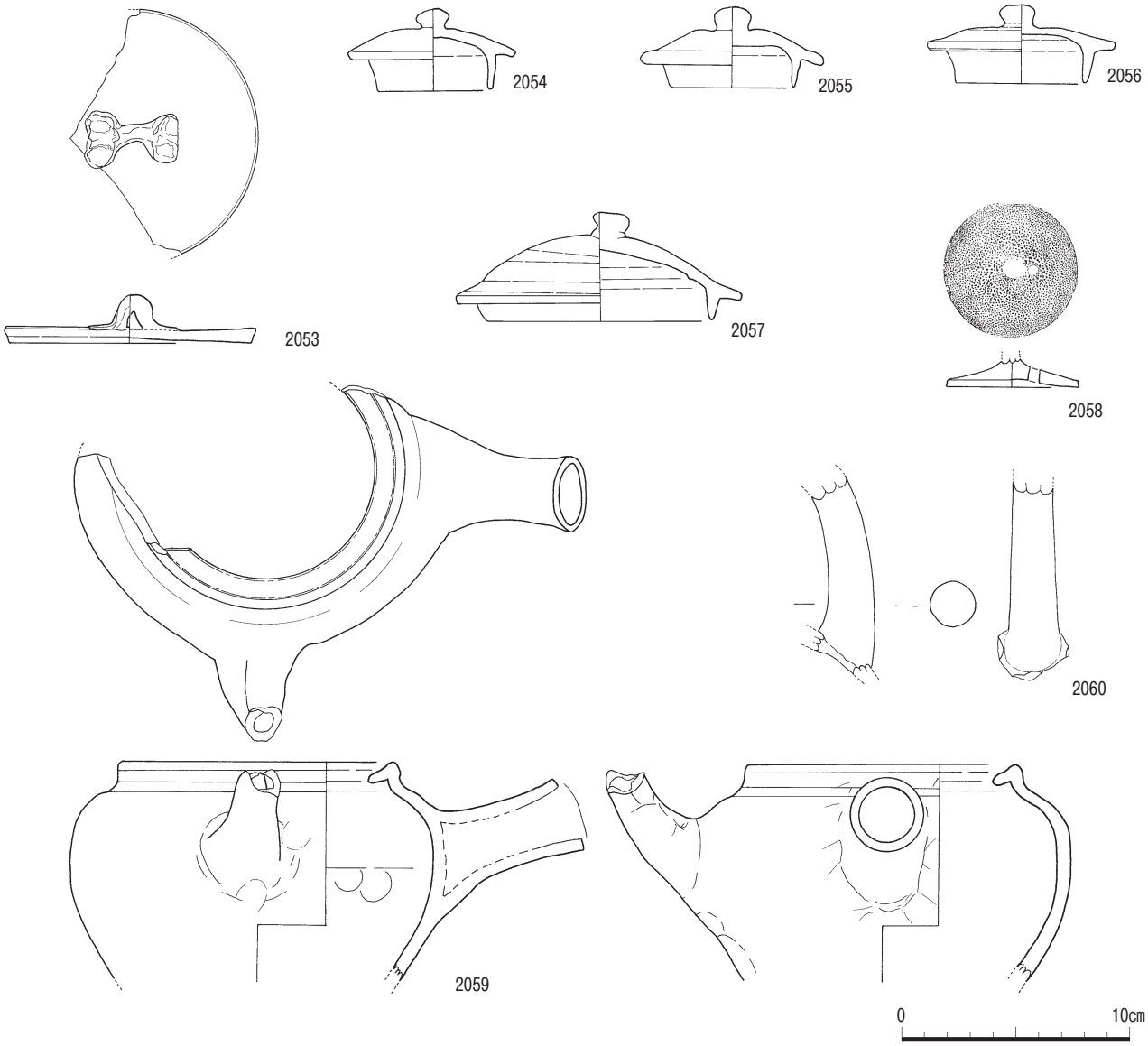
蓋（第350図）

水注，土瓶，釜，急須の蓋を掲載した。2053～2058は薩摩焼である。2053～2057は薩摩焼苗代川産の資料である。2053は水注の蓋である。素焼きのもので，初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2054～2056は土瓶蓋である。上面に鉄釉がかかる。2057は，薩摩で山茶家（やまじょか）と称される釜の蓋である。2058は薩摩焼龍門司窯産の急須の蓋である。上面に鮫肌釉がかかる。

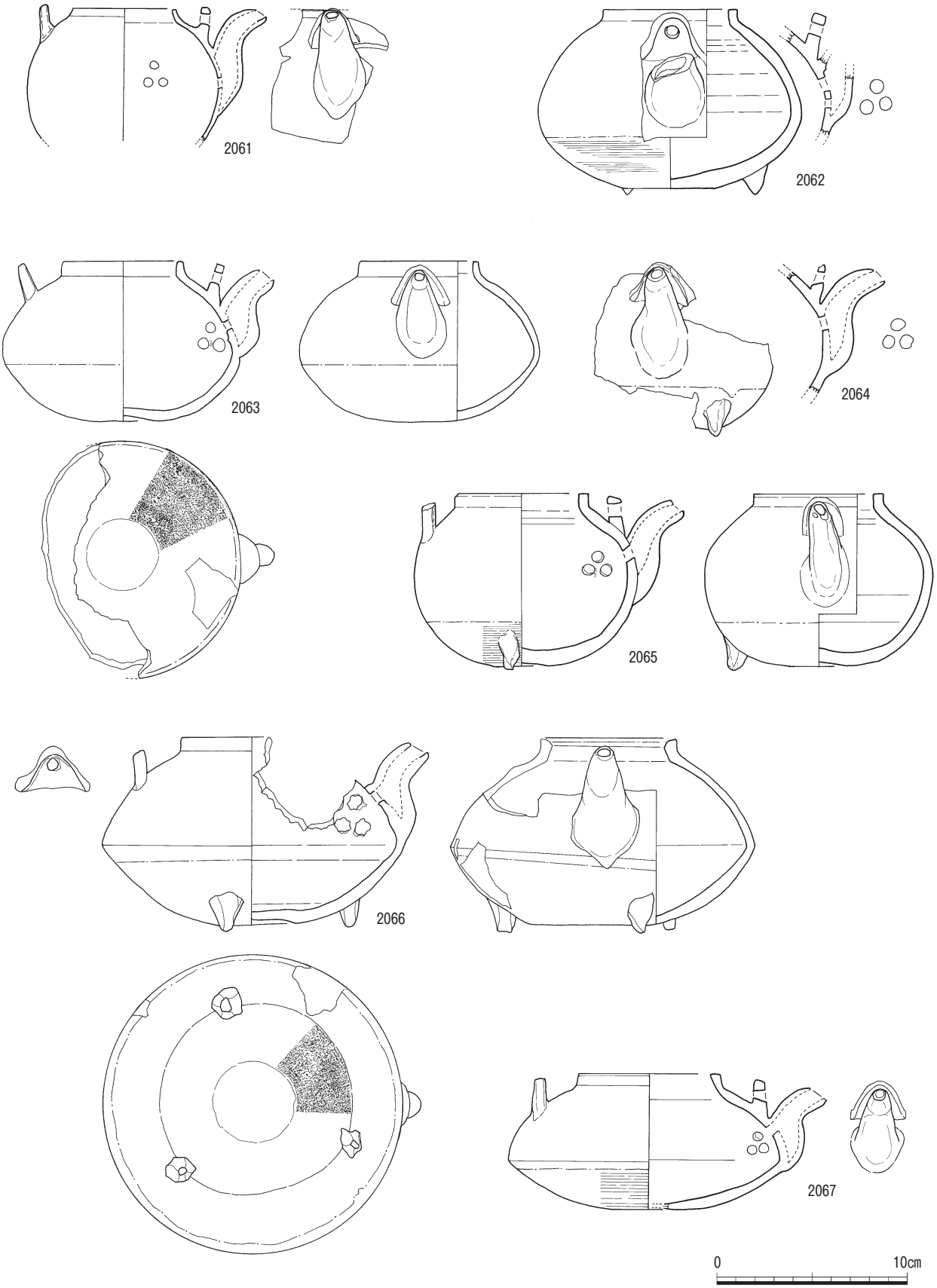
水注・土瓶（第350～352図）

2059は水注である。巻き口の注口を有し，注口に向かって約90度右側に筒状の把手が付く。器面はタタキ成形のあとナデ調整が施されているが，内面には円状のあて具の痕跡が一部に残る。初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2060は水注の把手である。

2061～2069は土瓶である。2061は竪野系の白薩摩である。やや下垂した丸形の形状を呈する。2062～2069は苗代川産の資料で，外面中位まで鉄釉がかかる。口縁脇に



第350図　陶器６　蓋・水注・土瓶

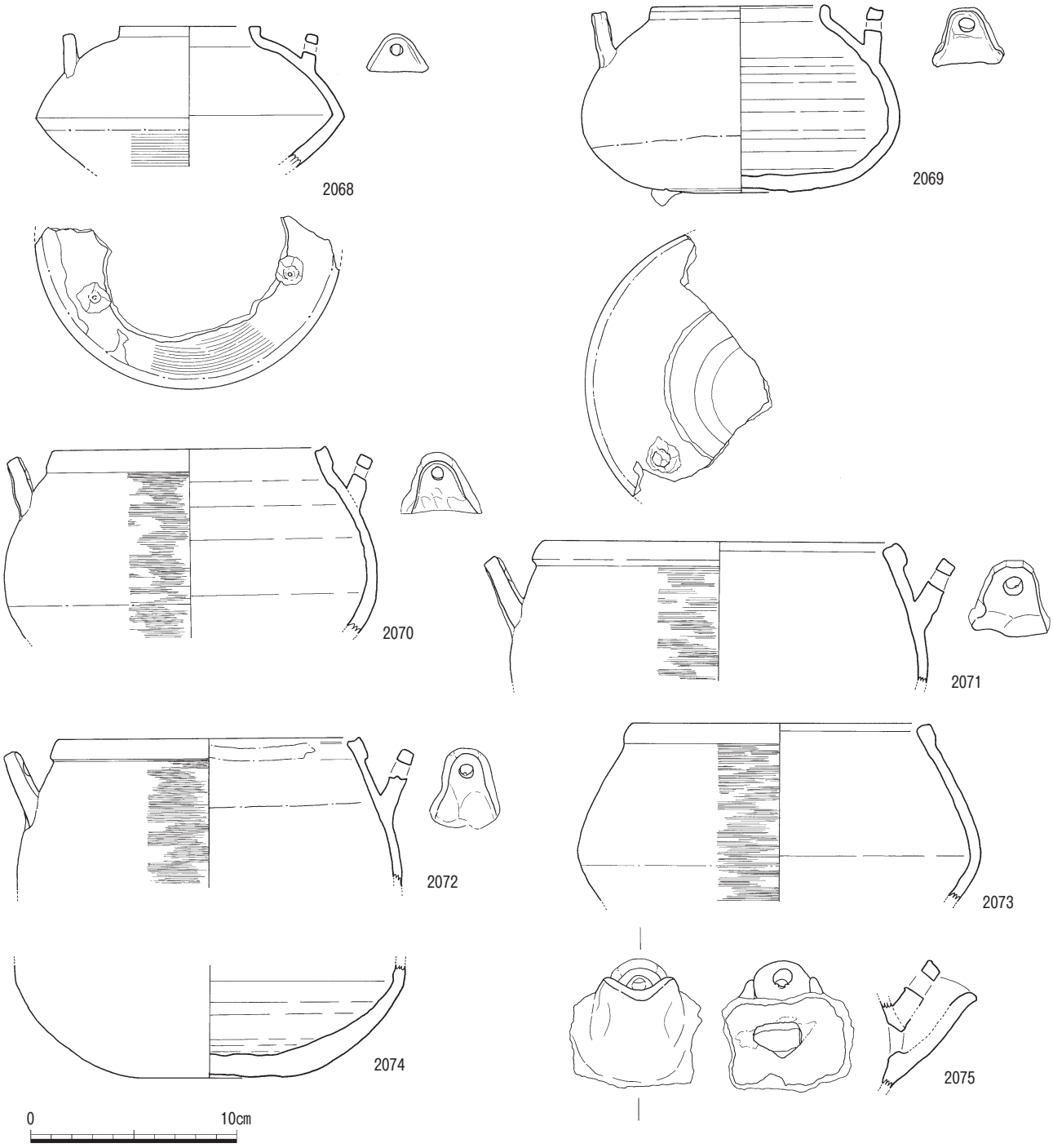


第351図　陶器７　土瓶

は型作りによる三角形状の耳が対で付き，外底面には円錐状もしくは三角錐状の足が３か所付く。外底面には，削り出しによる筋状の工具痕が輪状に残り，中央部は緩やかに凹む。2062～2064はややつぶれた丸形を呈するもので，胴部中央に稜はない。2065は丸形の資料である。2066～2068は平形の資料である。体部は，ソロバン玉状の形状を呈する。2069は，最大径を胴部下位に有する資料である。外底面に重ね焼きの際の痕跡が，沈線状に残る。

釜（第352図）

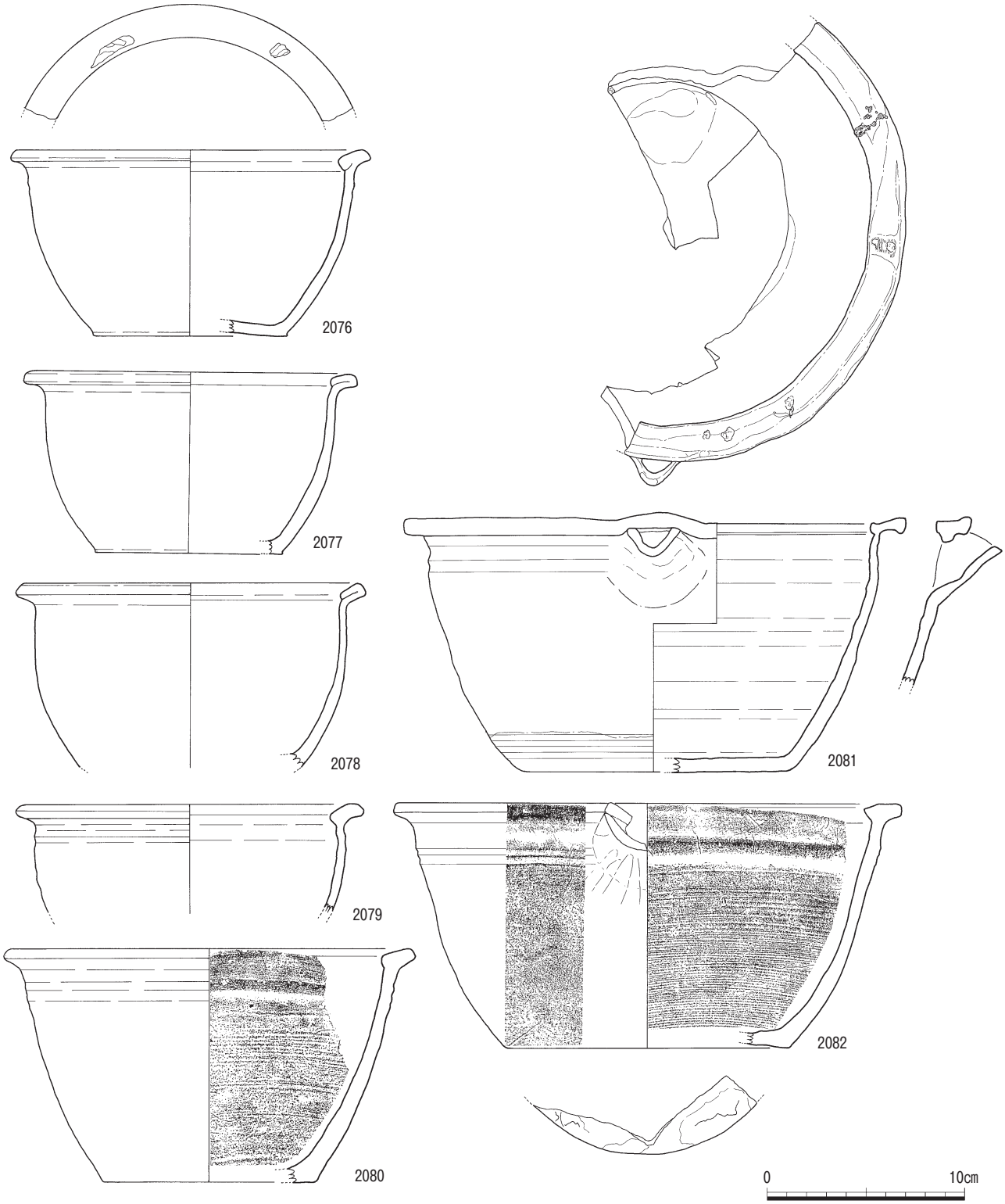
2070～2075は薩摩で「山茶家」と称される釜である。外面腰部まで鉄釉がかかり，口縁下位には型作りによる半楕円状の耳が対でつく。2074は底部である。土瓶のような足はつかない。2075は片口部である。片口の中に一方の耳がつけられる。



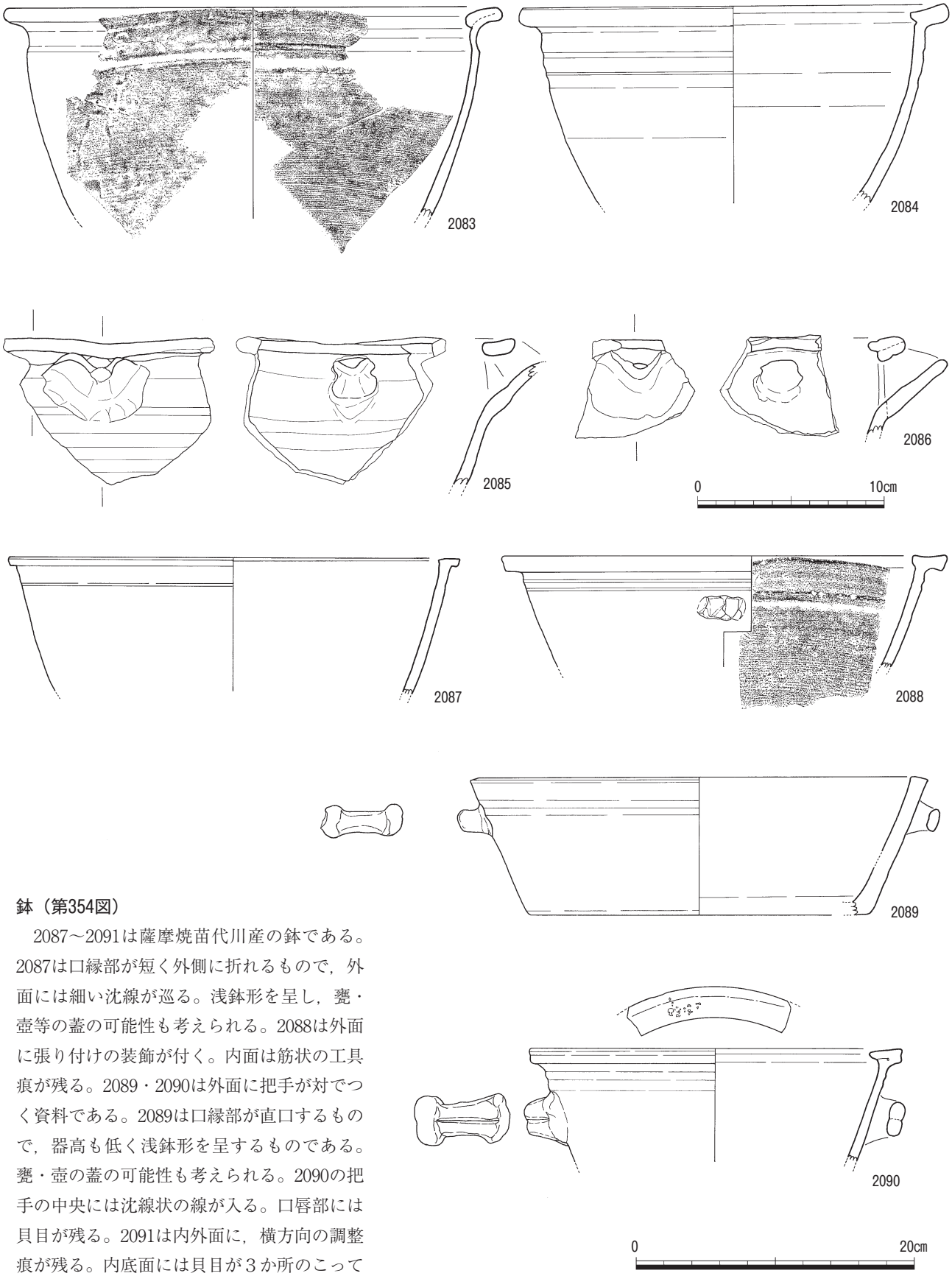
第352図　陶器８　土瓶・釜

片口（第353・354図）

2076～2086は薩摩焼苗代川産の片口である。2076～2080は小形，2081～2084は大形，2085・2086は片口部の資料である。口縁部は外側から内側に折り返してつくられ，胴部下位はヘラ削りされる。2076は，口唇部と外底面に貝目が残る。2080は，内面にヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。2081は口唇部に貝目が残る。2082・2083の内外面はヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。



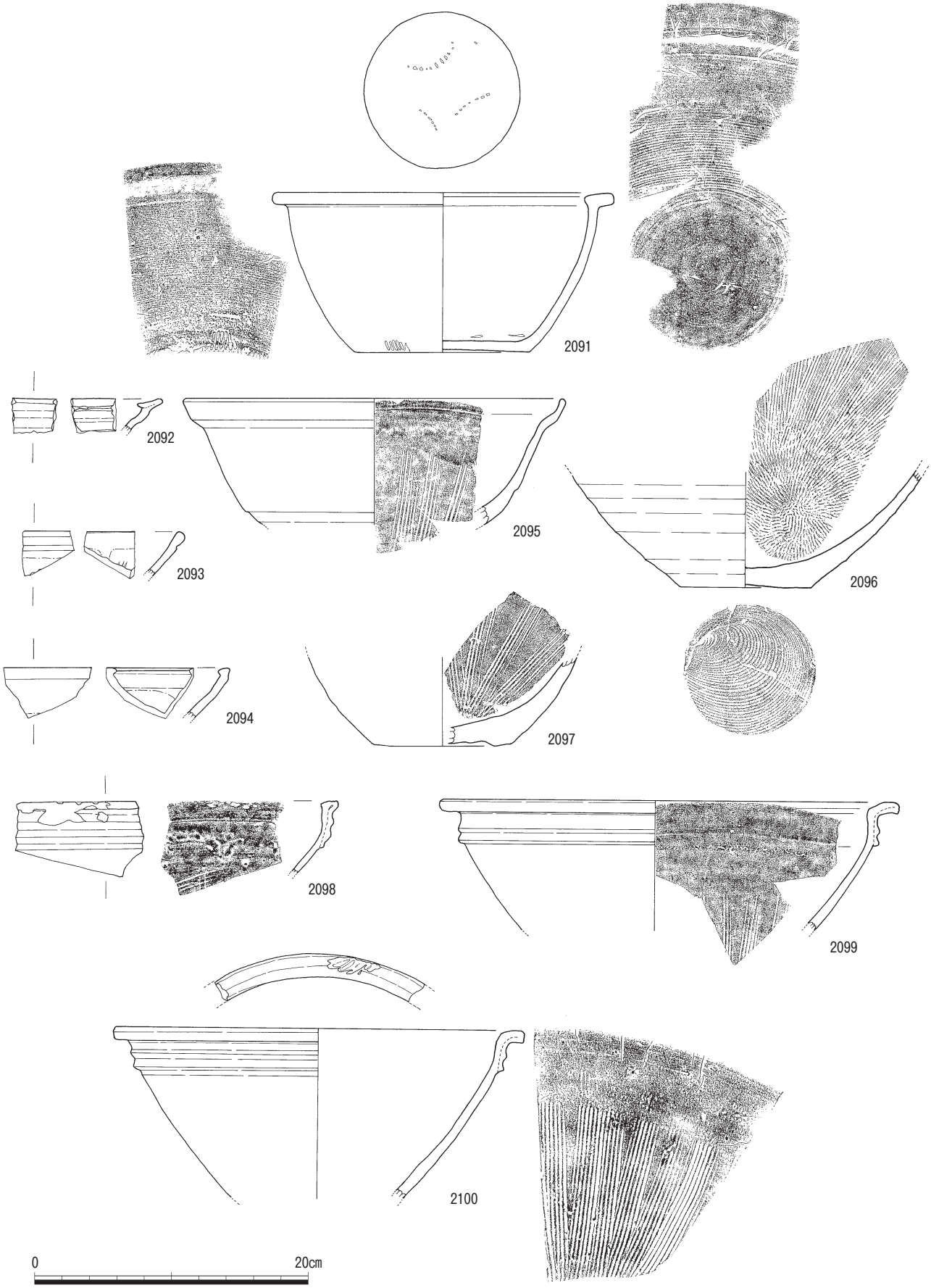
第353図　陶器９　片口



鉢（第354図）

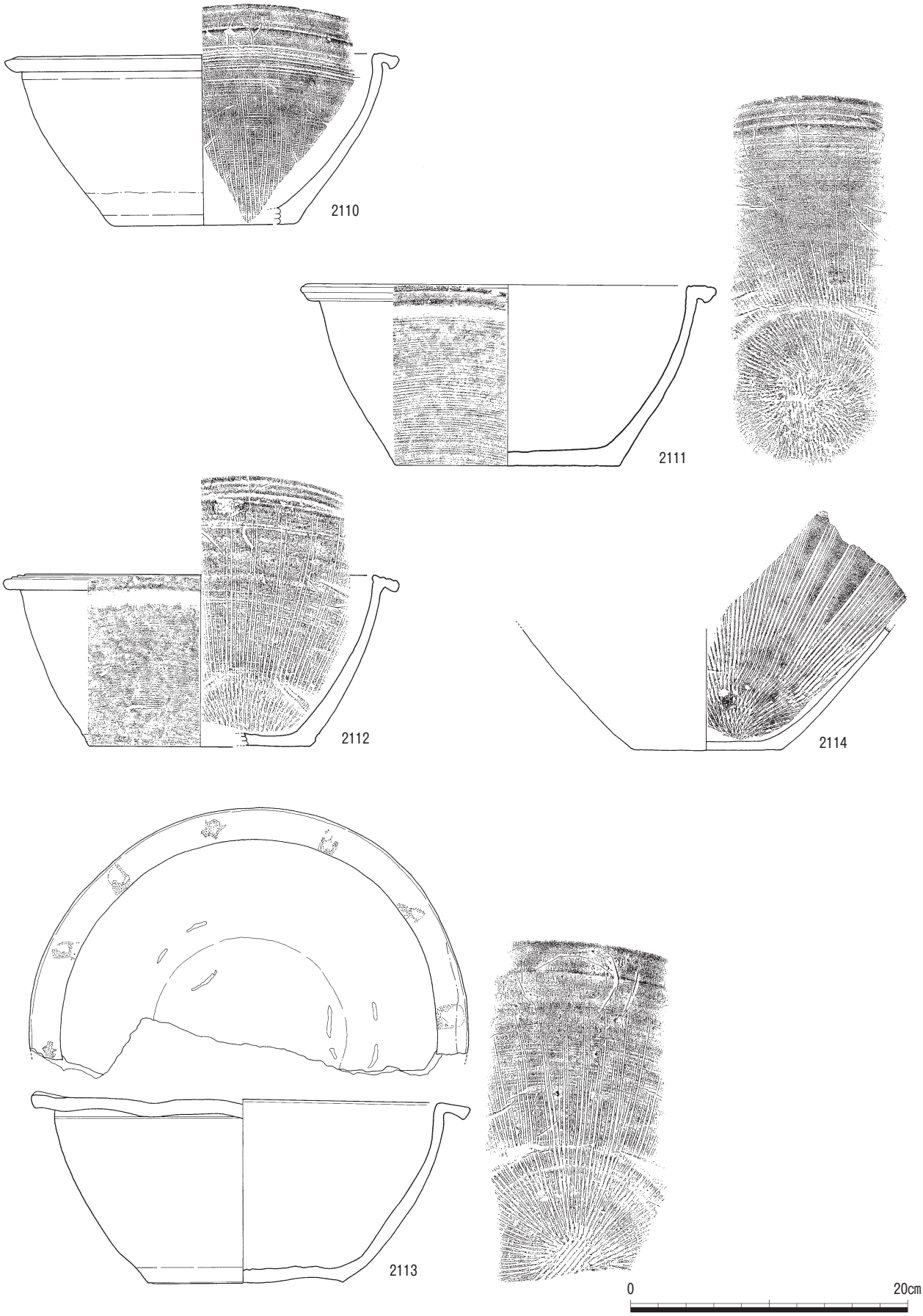
2087～2091は薩摩焼苗代川産の鉢である。2087は口縁部が短く外側に折れるもので，外面には細い沈線が巡る。浅鉢形を呈し，甕・壺等の蓋の可能性も考えられる。2088は外面に張り付けの装飾が付く。内面は筋状の工具痕が残る。2089・2090は外面に把手が対でつく資料である。2089は口縁部が直口するもので，器高も低く浅鉢形を呈するものである。甕・壺の蓋の可能性も考えられる。2090の把手の中央には沈線状の線が入る。口唇部には貝目が残る。2091は内外面に，横方向の調整痕が残る。内底面には貝目が３か所のこっており，焼成時に別の製品を内側に入れて焼いたと考えられる。

第354図　陶器10　片口・鉢



第355図　陶器11　鉢・擂鉢

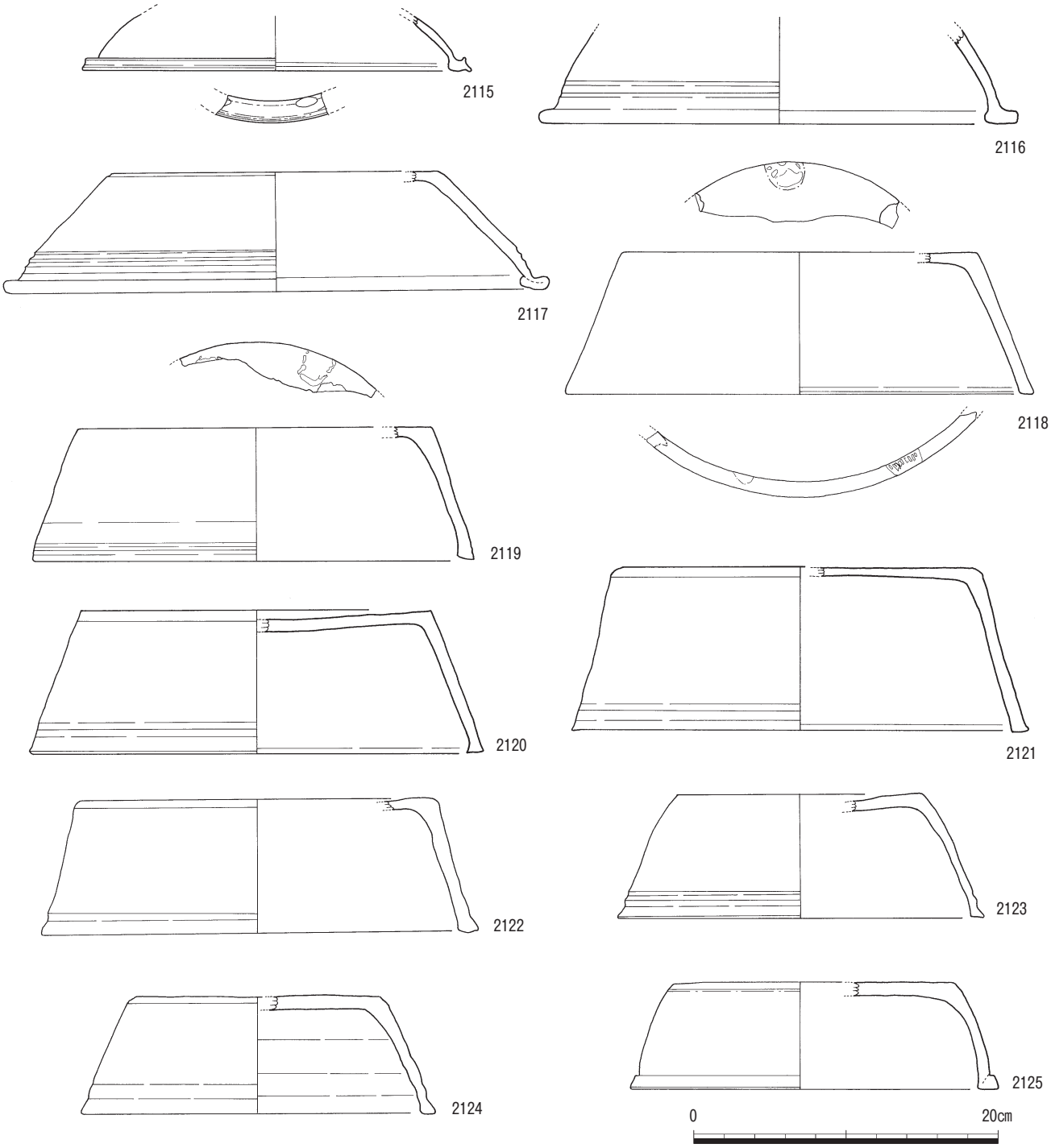
第356図　陶器12　擂鉢



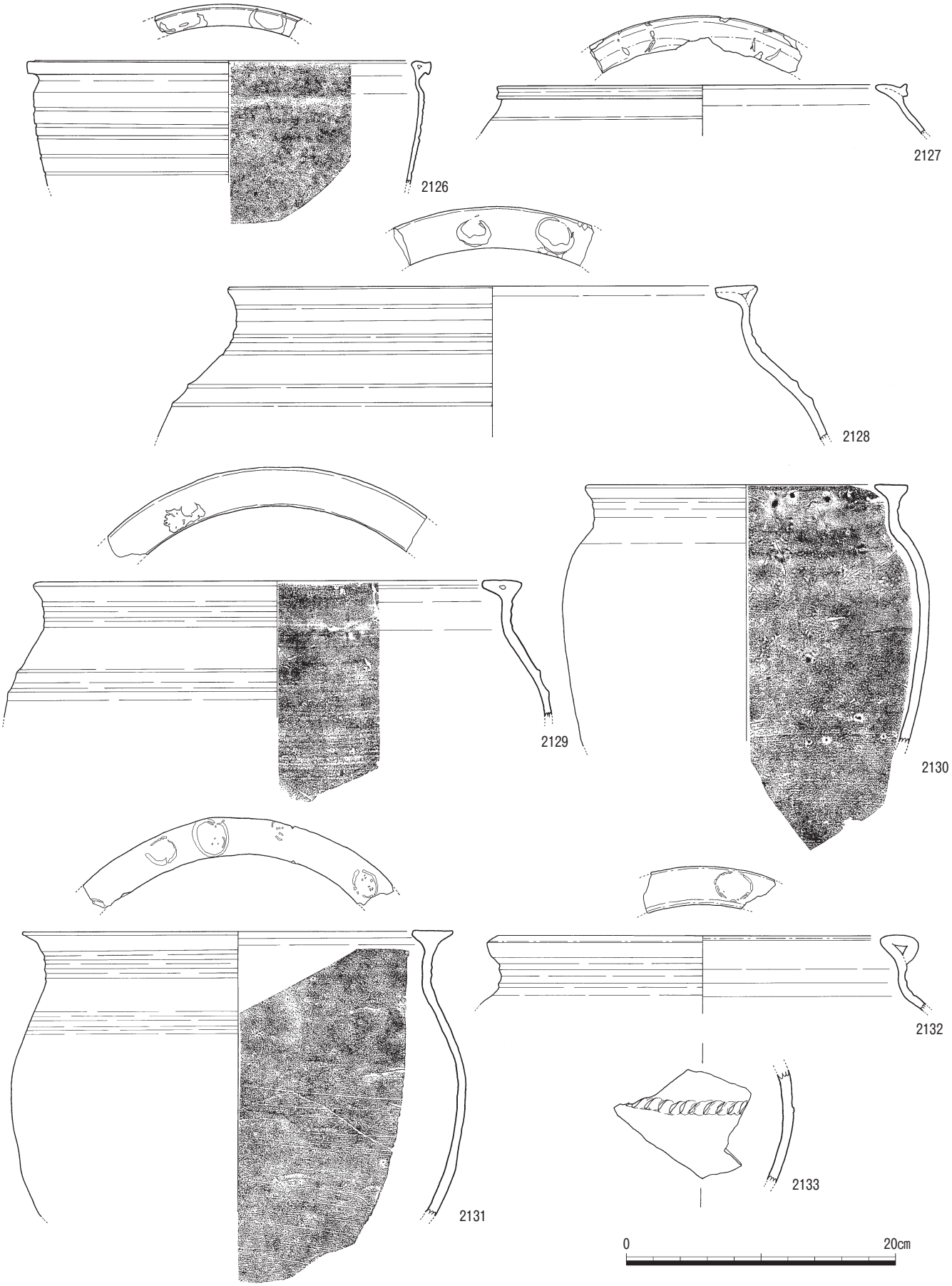
第357図　陶器13　擂鉢

擂鉢（第355～357図）

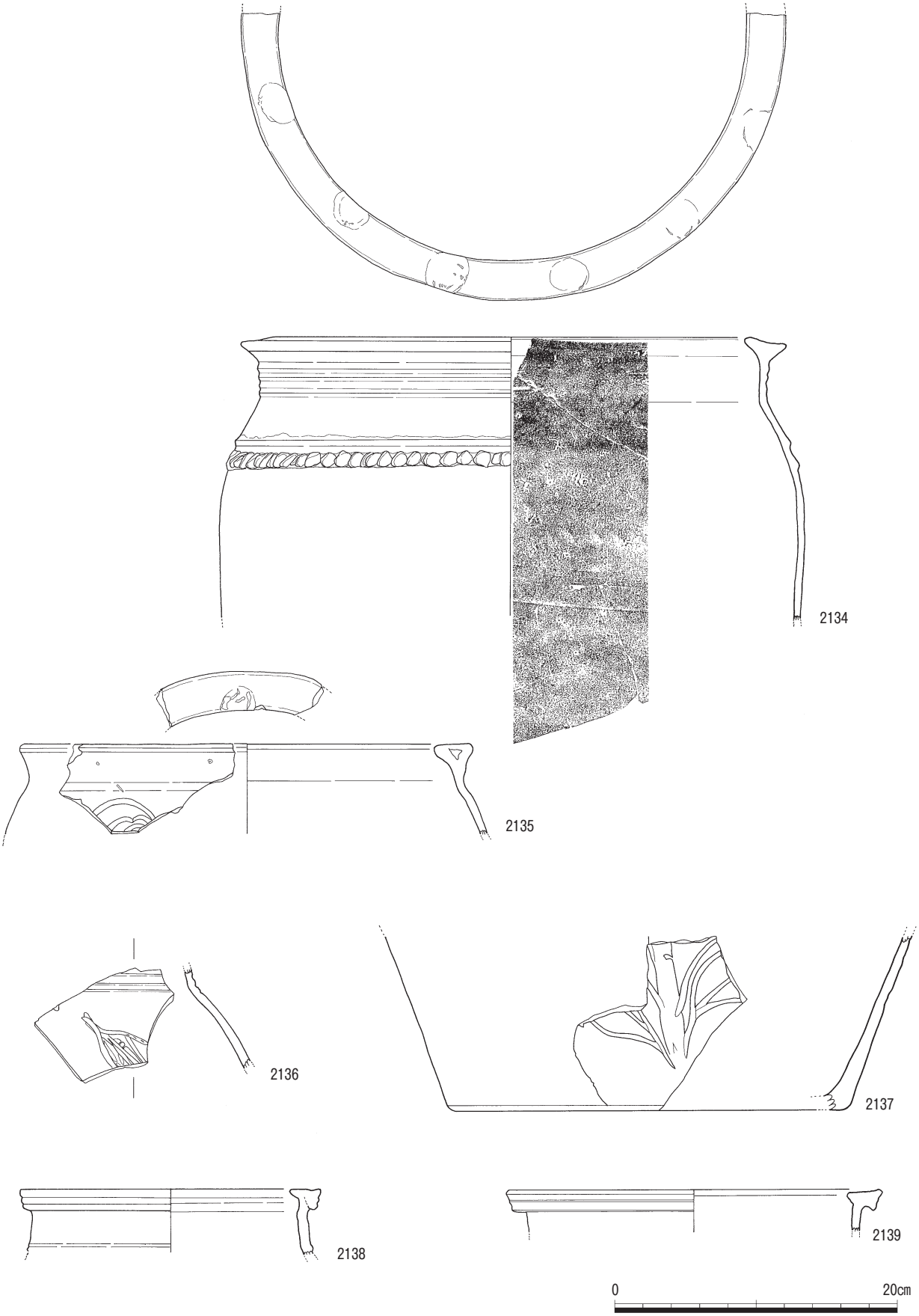
2092～2097は肥前陶器の擂鉢である。2092～2094は口縁部，2095は口縁～胴部で，口縁先端には褐釉がかけられ，以下は露胎する。2096・2097は底部である。擂り目は細くシャープであるが，2096はやや密に，2097は余白を空けて入る。2097は高台を有する。2098～2114は薩摩焼苗代川産の資料である。2098は口縁部を外側に折り返して肥厚させ，外面口縁下位に２条の突帯を巡らせるものである。2099～2104も同様の口縁つくりであるが，突帯は低く，口縁端部外側に長くのびる。2105～2108は，口縁部を外側から内側に折り返して丸くつくる。2107のような片口を有するものと思われる。擂り目は，2108を除き，内面口縁下位に余白を残し，細くシャープに入る。2109は口唇部が平坦につくられ，口縁部がＴ字状となる。擂り目は内面上位まで余白なく入り，擂り目の下と外面には，横方向の工具痕が残る。2110～2113は口縁部がＬ字状を呈する。胎土は赤褐色や鈍い橙色を呈し，粗く白色砂粒を多く含む。擂り目は細くシャープであるが，内



第358図　陶器14　蓋（甕・壺用）



第359図　陶器15　甕



第360図　陶器16　甕

面口縁下位まで入り，擂り目の下には横方向の工具痕が残る。2111・2112は外面にも横方向の工具痕が明瞭に残る。2114は底部である。擂り目が細くシャープに入る。

蓋（第358図）

2115～2125は，薩摩焼苗代川産の蓋である。甕や壺にかぶせる浅鉢形の形状をしたものである。2115は口唇部の外側が溝状に凹むもので，貝目も残る。2116・2117は，口縁部を外側から内側に折り返してつくる。
外面口縁下位には，浅い沈線が２条巡る。2118～2124は，口縁部が直口し，端部はやや肥厚する形状のものである。口唇部は釉剥ぎされ平坦につくられる。外面口縁下位には，２条の弱い沈線が巡るものもある。2118は外底面と口唇部に，2119は外底面に貝目が残る。2125は，口縁端部が短く外側に折れる。口唇部は釉剥ぎされ，外面腰部から底面にかけては露胎する。

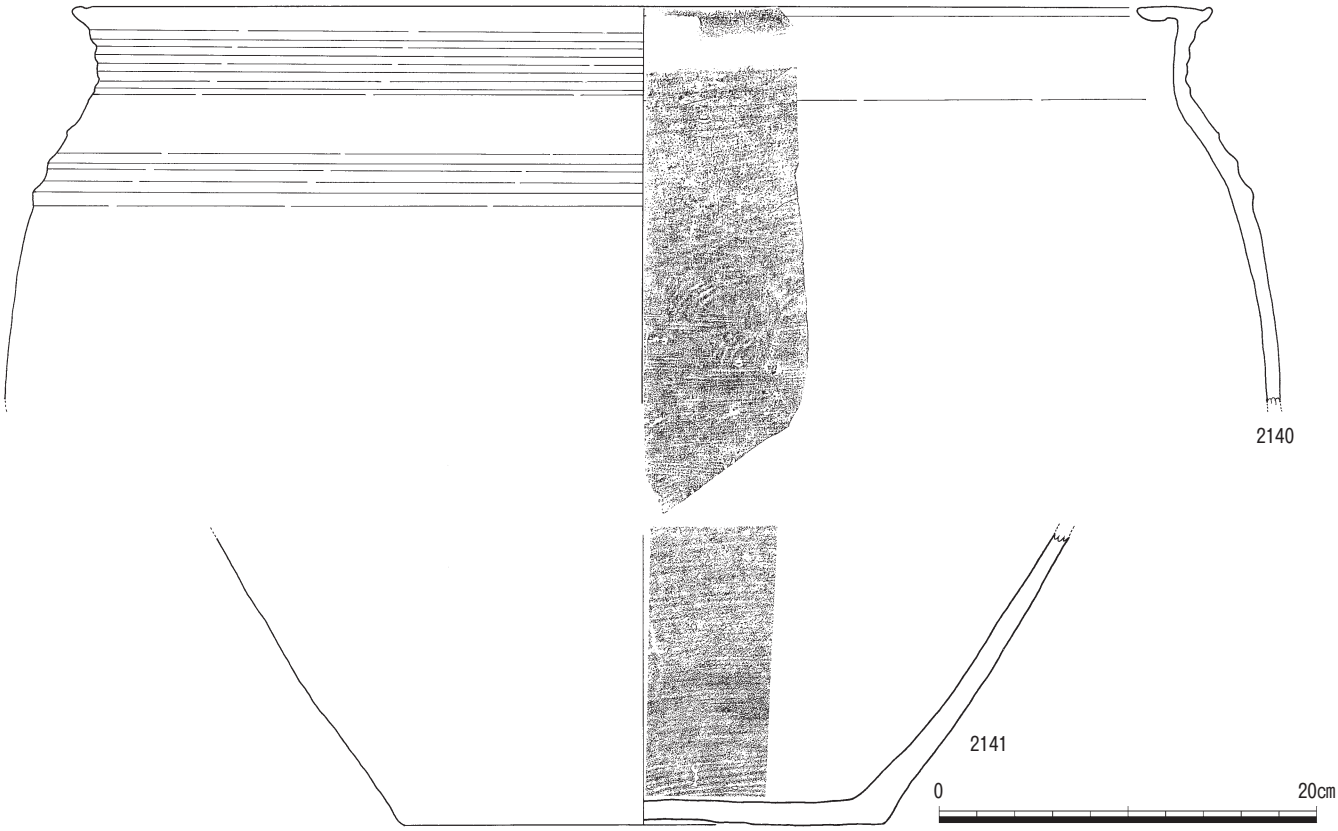
甕（第359～361図）

2126～2141は薩摩焼苗代川産の甕である。2126・2127は，胎土が緻密で器壁も非常に薄い。口唇部の外側は溝状に凹む。2126はバケツ状の形状のものである。外面には数条の沈線を有し，口唇部には貝目が残る。タタキ成形と考えられるが，ナデ調整により内面には当て具の痕跡は残っていない。胎土は灰黄色を呈し，非常に緻密で層状をなす。初期薩摩焼である串木野窯産の可能性が考えられる。2127は肩が張る形状のものである。口唇部には貝目が残る。初期薩摩焼の堂平窯産の可能性が考えられる。2128～2134は，口縁端部を外側に折り曲げて，断面三角形につくる資料である。肩部には１～２条の突帯や，縄状突帯が巡る。2135～2137は外面に掻き落とし文が描かれた資料である。2135は口縁部で，断面三角形につくられる。2136は肩部，2137は胴～底部である。2138・2139は口縁部がＴ字状を呈し，外端部が垂れ下がる資料である。胎土は赤褐色で粗く，白色砂粒を多く含む。2140・2141は大形の甕である。

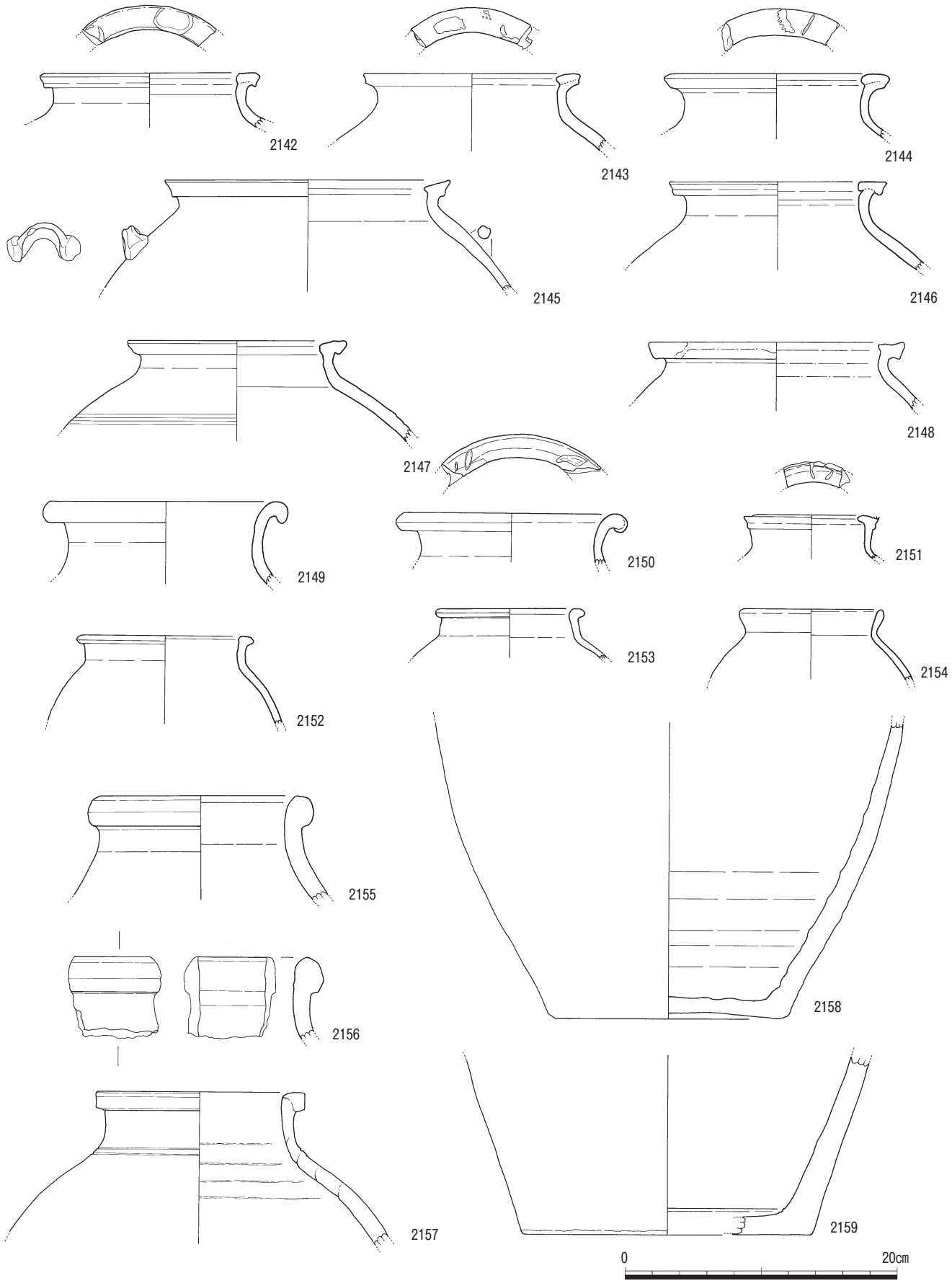
2140の口縁部はくちばし状に内側へ伸びる。施釉により不明瞭であるが，外面には横方向の工具による調整痕が筋状に残り，内面にはタタキ成形時の同心円状のあて具と，その上からの横ナデ調整が残る。2141は底部で，内面には横方向のナデ調整の痕跡が残る。

壺（第362図）

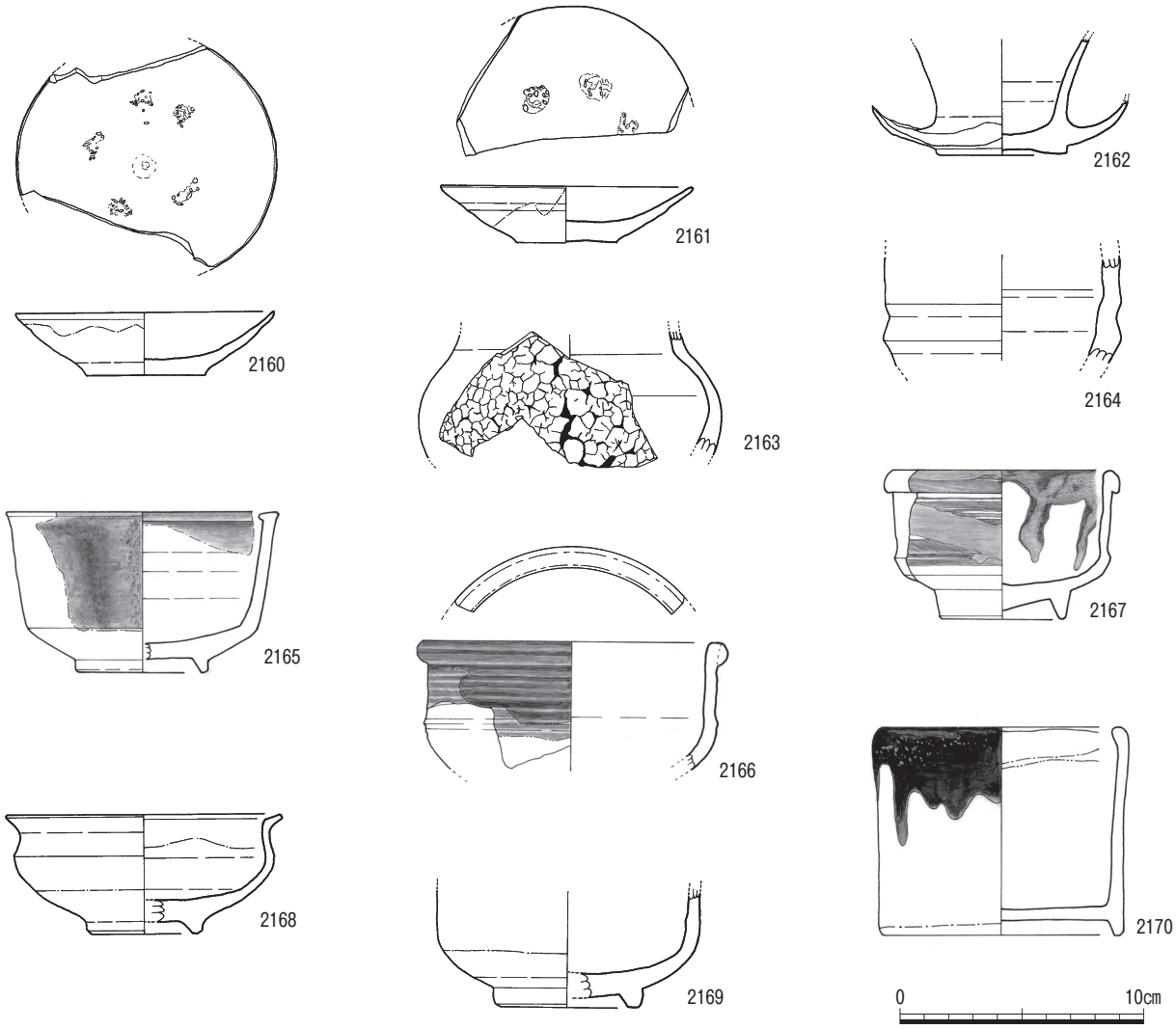
2142～2159は壺である。2142～2154は薩摩焼苗代川系の資料で，2155～2159は琉球産の荒焼である。2142～2150は大形の壺である。2142～2148は，口縁部は外側から内側に折り返してつくられる。2142～2144・2147は口唇部がやや丸みを帯び，貝目が残る。2145・2146・2148の口唇部は平坦につくられる。2145の肩部に



第361図　陶器17　甕


2142
2143
2144
2145
2146
2147
2148
2149
2150
2151
2152
2153
2154
2155
2156
2157
2158
2159
0
20cm

第362図　陶器18　壺



第363図　陶器19　灯明具・仏具

は横耳がつくが，個数は不明である。2149・2150は口縁部が外側に開き，端部を丸くつくるものである。口唇部にはイタヤガイの目跡が残る。2151～2154は中形の壺である。2151は器壁が薄く，口唇部の外側は溝状に凹み，貝目が残る。初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2152・2153は，口縁端部が小さく丸くつくられる。2154は口縁部から頸部にかけての形状が，くの字状に屈曲する。2155～2159は焼き締めで，胎土は赤褐色を呈する。琉球壺屋窯の製品と考えられる。

灯明具（第363図）

2160～2162は薩摩焼龍門司系の灯明具である。2160・2161は灯明皿で，見込みにはゴマ目が残る。2162は灯明皿受け台である。外底面には糸切りの痕跡が残る。

仏具（第363図）

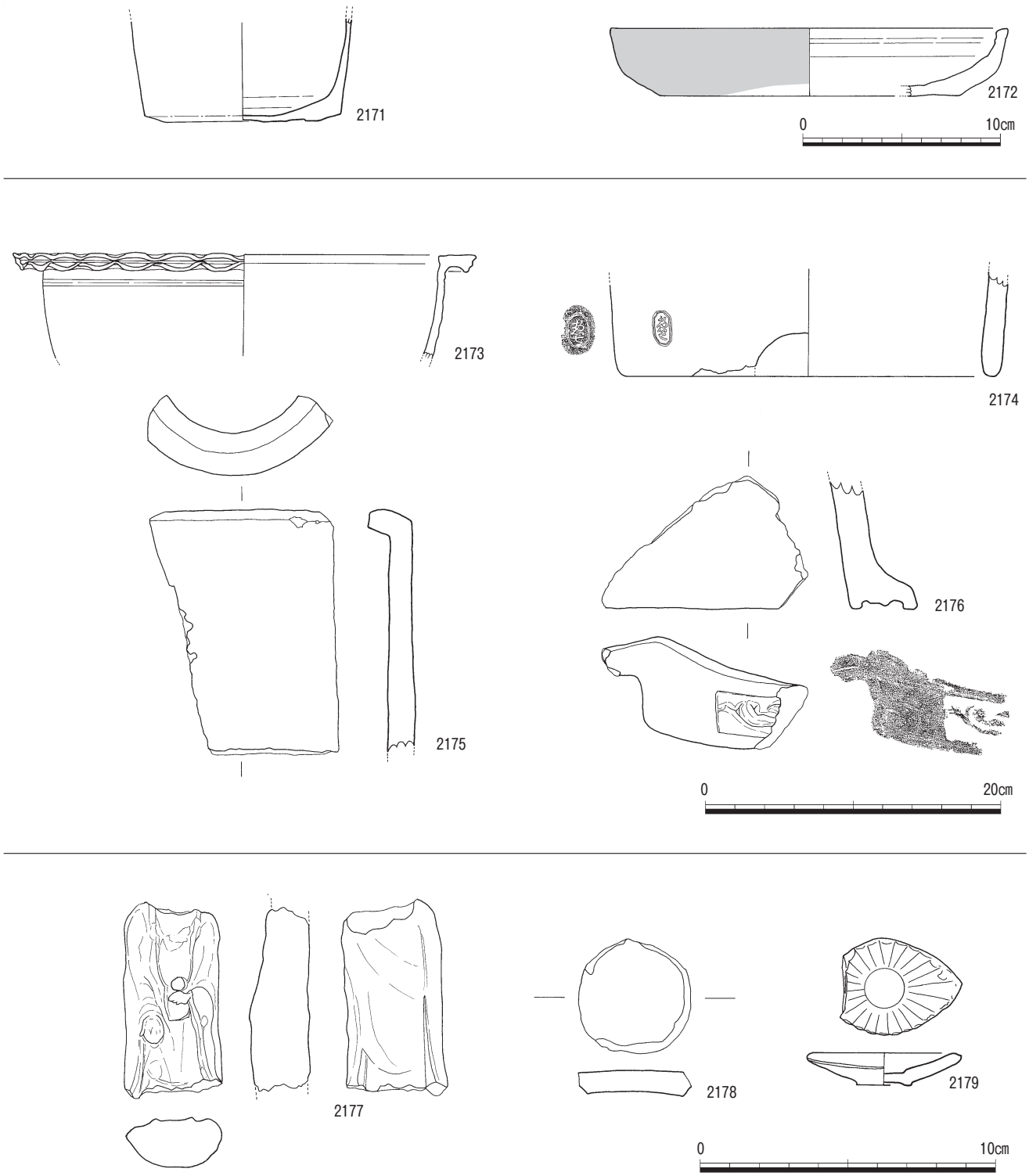
2163～2170は仏具である。2163・2164は薩摩焼で，元立院窯産の仏花器である。2163は黒蛇蝎釉がかかり，2164は黒釉がかかる。2165～2170は香炉である。2165～2167は肥前陶器である。2165は，灰色の焼き締まった胎土に，一部褐釉がかかる。2166・2167は，白化粧土による刷毛目の上から褐釉がかけられる。2168～2170は薩摩焼で龍門司窯産の資料である。2168は黄褐色に発色した鉄釉がかかる。2169は底部で，外面に黒褐色の鉄釉がかかる。2170は筒形の形状を呈し，外面は白化粧土に緑釉が流しかけられる。

その他（第364図）

2171は浅黄色の緻密な胎土に透明釉がかかる資料で，肥前陶器と思われる。高台は幅広で非常に低く削り出され，高台脇は広く面取りされる。用途不明の資料である。

2172は土師質土器の焙烙である。外面に煤が付着する。

2173は薩摩焼苗代川産の植木鉢と思われるが，甕の可能性も考えられる資料である。口縁端部には指でつまんで波状にした装飾が施される。2174は瓦質土器の火鉢の底部である。器面には，金雲母状の光る鉱物が観察される。「お七」の印銘がみられる。2175・2176は燻し瓦である。2175は丸瓦，2176は軒平瓦である。2177は土製品の人形である。頸から上が欠損している。2178は陶器の底部を転用したメンコである。2179は，型作りされた菊花形のミニチュア皿で，素焼きである。



第364図　陶器20　その他

金属製品（鉄製品・銅製品）（第365～367図）

2180～2209は金属製品を一括した。いずれも中世から近世にかけてのものと考えられる。この中には，鉄製品と銅製品が含まれる。なお，諸般の事情によりＸ線撮影できたものとそうでないものがあり，詳細な形状については検討が必要なものも含まれている。

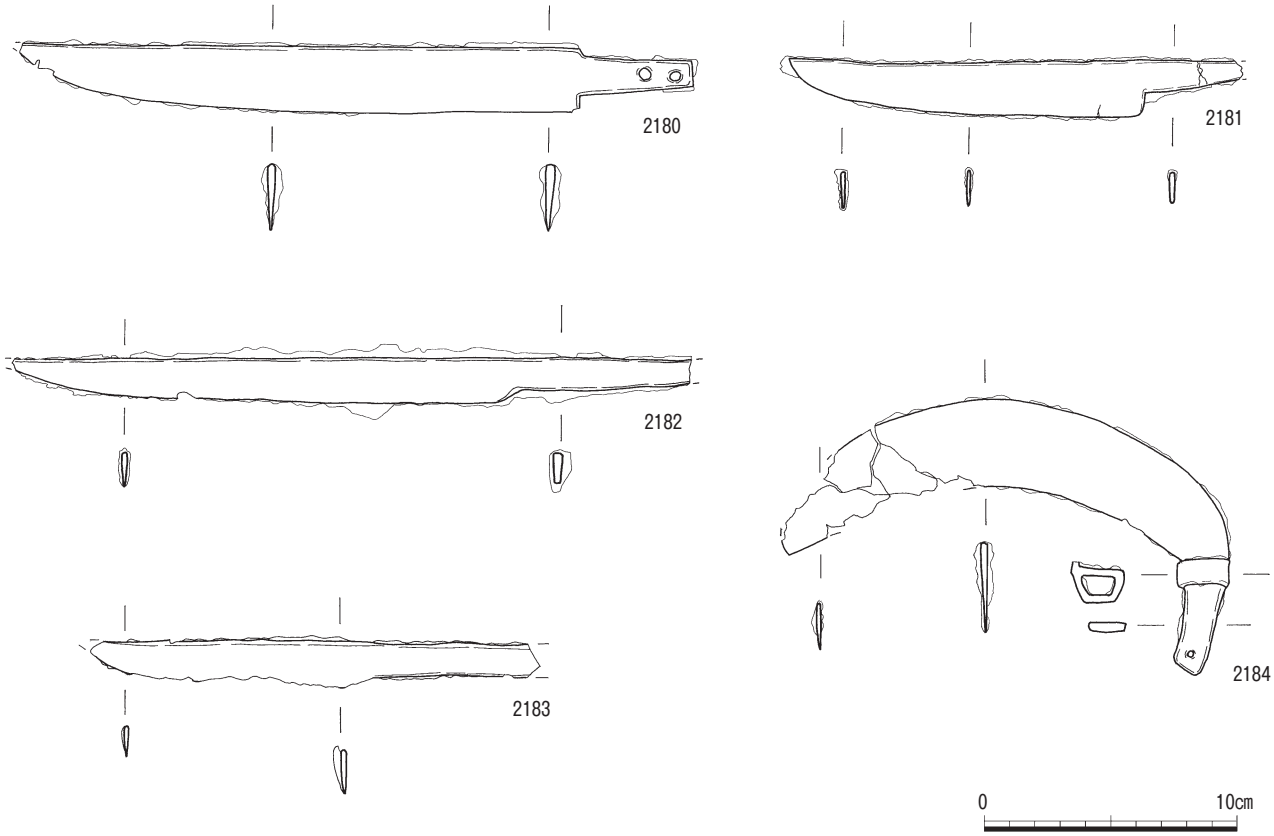
2180～2200は鉄製品である。

2180～2183は短刀である。2180・2181はほぼ完全なもので，特に2180については茎（なかご・柄部分のこと）に目釘穴が明瞭に残るものである。2181については本来は目釘穴があるはずであるが現状では確認できない。2182は2180・2181と比較して細身の刃部を持つものである。使用し研磨を繰り返すうちに現状の大きさとなった可能性も考えられる。2183は刃部の残存状況は良好ではないが，茎についてはほぼ完全なものである。

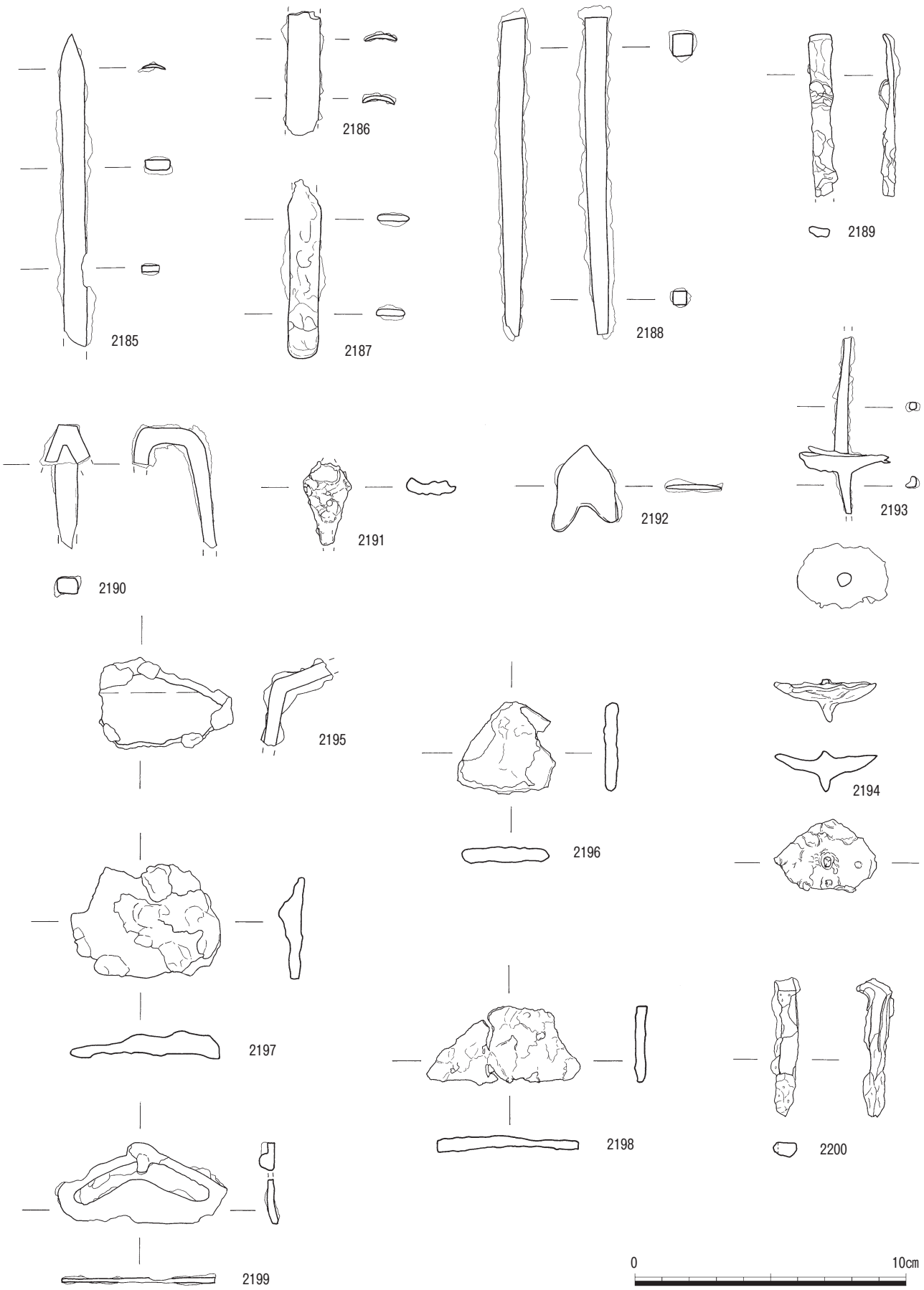
2184は鎌である。先端部に若干の刃こぼれと破損がみられるが，ほぼ完全な状態のものである。基部には輪状になった部分があり木質もわずかではあるが残存する。

2185・2186は先端部の断面が三日月状を呈する短冊状の製品で，ヤリガンナの可能性のあるものである。2185は先端の一部が鋭く尖る。2187は短冊状の製品である。上部にはやや幅が狭くなる部分があるのでヘラ状を呈していたものと考えられる。2188は方柱状の製品で先細りのものである。大型釘やタガネの可能性が考えられるものである。2189は短冊状の製品である。上端部に反りを持つ。釘の可能性もあるが，検討を要する。2190は，角柱状の棒を「Ｕ字」状に曲げ，途中で二股に加工した製品で，「熊手」状の形状を呈するものと考えられる。2191・2192は鉄鏃である。2191は菱形を呈するもので，古墳時代に多い「圭頭鏃」に類似するものである。2192はハート形を呈するもので，「無茎鏃」と呼称されるものである。この２点はいずれも古墳時代の遺物の混入の可能性も考えられるものである。2193・2194は鉄製紡錘車である。いずれも円盤状部分の破損が著しい。

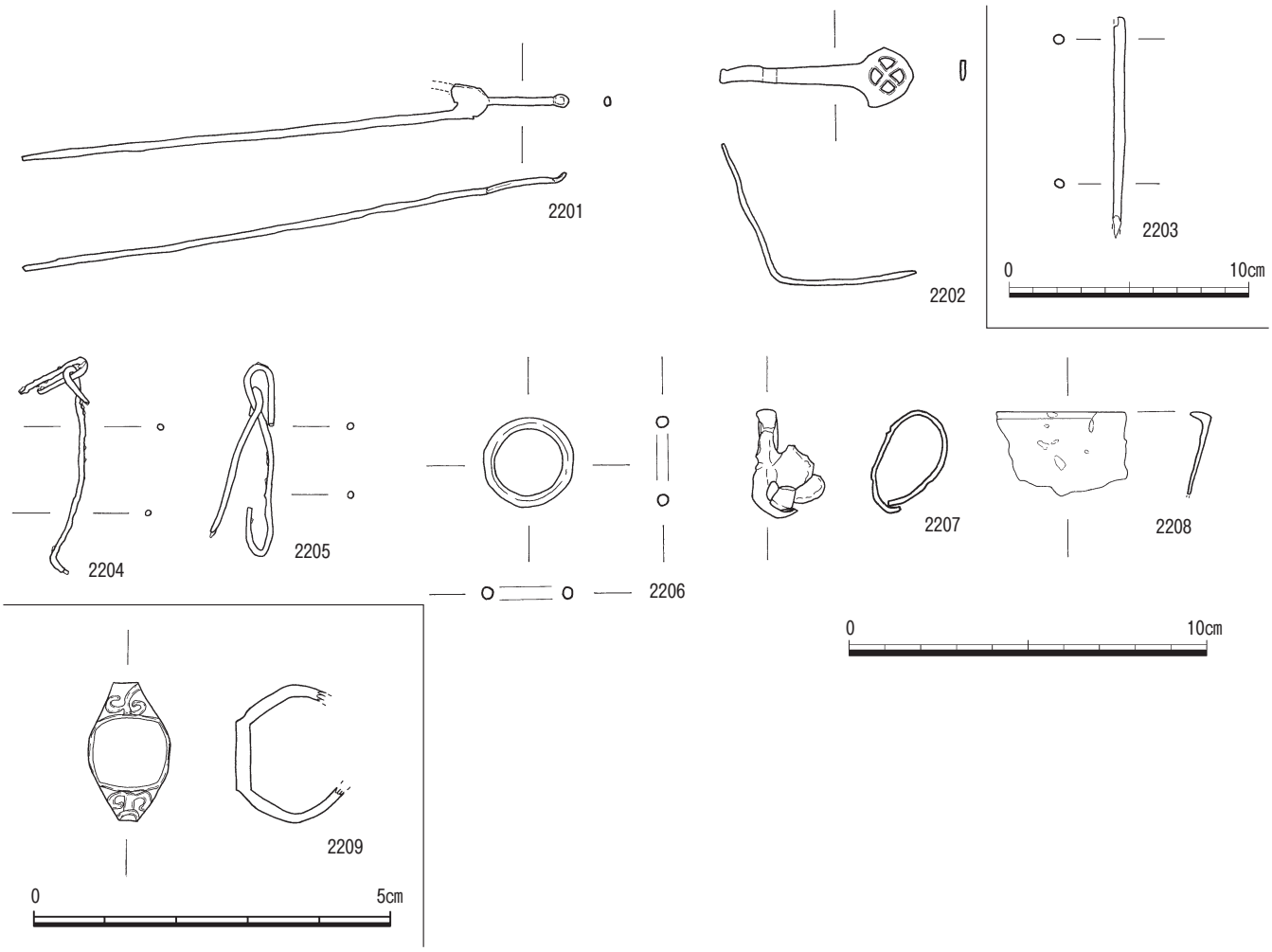
2195～2198は鋳造製品で，鉄鍋の破片の可能性が高いものである。特に2196は鍋の頸部とみられるもので，鍋の形状を窺い知ることのできる数少ない資料である。2199は，ハンガー形を呈する製品で，火打金である。上部に棒状部分を絡めたと見られる部分がある。全体的に銹化が進んでおり，破損が著しい。2200は断面が方形を呈し，上部で直角に曲げた棒状製品で，いわゆる「角釘」である。本遺跡では，土坑墓から出土することが多いが，



第365図　金属製品１


2185
2186
2187
2188
2189
2190
2191
2192
2193
2194
2195
2196
2197
2198
2199
2200
0
10cm

第366図　金属製品２



第367図　金属製品３

この遺物についても土坑墓の棺に使用された可能性がある。

2201～2209は銅製品である。

2201・2202は「かんざし」と考えられるものである。2201は，耳かき部分をもつもので，途中で二股になるものである。2202はＬ字形に折れているが，元は，まっすぐであったとみられる。端部は円形を呈し，クローバー形の４カ所の「透かし」を持つ。2203は棒状の製品で両端部の一端は丸くおさめ，もう一方については鋭く尖るものである。「縫い針」の可能性も考えられるが，糸通しの穴がみられないので検討が必要である。2204・2205は針金状のものを両端でフック形に環状にするものを連結するものである。何らかの金具の可能性があるが，「釣花いけ」という製品に類似する。なお，2204・2205は中世竪穴建物跡の壁面に接する状態で出土したという調査時の記録があったが，どの遺構であるかが判然としなかったため，一般遺物として扱った。2206は環状の製品である。指輪にも類似するものであるが，「金坐（かんざ）」と呼称される製品に類似する。金坐であれば，手箱の紐掛や兜の後頭部につけられていたものと考えられる。2207は王冠に類似した環状を呈する製品である。「太刀金具」と呼称されるものに類似する。「太刀金具」であれば，鞘の先端部付近に巻かれていたと考えられる。この場合，通常であれば「太刀」は上級武士のものであるのだが，本資料は簡素なつくりであるので，場合によっては農民クラスのものであった可能性も指摘される。2208は椀形とみられる製品の口縁部の破片で，「銅椀」と呼称されるものである。通常であれば，７～８世紀頃に比定されるものである。2209は指輪である。上面には方形の区画を持つ。また，側面には唐草文様がみられる。日本では，古代から近世にかけては「指輪」をつけるという文化自体がないので，大陸との影響によるものと考えられるもので，重要な資料である（銅製品に関しては久保智康氏【京都国立博物館】の御教示による部分が大きい）。

近世遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	備考
第304図	1801	掘立柱1号	A-30		陶器	片口	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.0	－	－	薩摩苗代川	17c前半	
	1802	掘立柱1号	A-30		陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	17c中頃	口唇部に貝目あり
	1803	ピット8	A-30		染付	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前系	18c代	
第313図	1804	土坑2号	B-34		白磁	坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	5.6	4.0	3.4	肥前系	19c	
	1805	土坑5号	B-33		白磁	坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	3.4	－	肥前系	19c	
第314図	1806	土坑8号	E-19	Ⅱ	鉄製品		－	－	－	最大長7.2	最大幅3.5	最大厚0.6			重さ46g
第315図	1811	土坑墓2号	B-32		鉄製品	釘	－	－	－	最大長3.2	最大幅2.9	最大厚0.8			重さ2g
第321図	1816	ピット2	A-36		陶器	皿	褐灰色	灰釉	外面中位から高台内無釉	13.0	4.0	4.0	肥前	1580～1610	内面　鉄絵
第322図	1817	ピット4	B-34		陶器	蓋	にぶい赤褐色	鉄釉	上面のみ施釉	－	庇径13.0	－	薩摩苗代川	18c後半	
	1818	ピット4	B-34		陶器	蓋	にぶい赤褐色	白化粧土に褐釉	上面のみ施釉	3.8	庇径6.1	－	薩摩龍門司か？	18c後半	
	1819	ピット6号	D-20		鉄製品		－	－	－	最大長4.8	最大幅5.0	最大厚1.7			
第324図	1820	溝1	C-36		磁器	碗	白色	透明釉	残存部全面施釉	11.4	－	－	肥前系	18c後半	
	1821	溝1	D-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.2	－	肥前系	18c後半	
	1822	溝1	C-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.2	－	－	肥前系	18c後半	
	1823	溝1	C-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	－	4.8	－	肥前	18c後半	
	1824	溝1	C・D-36		磁器	碗	浅黄橙色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.0	4.8	5.4	肥前系	18c末期～19c初頭	
	1825	溝1	C・D-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.8	4.8	6.3	肥前系	18c末期～19c初頭	
	1826	溝1	C-36		磁器	碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.0	3.0	4.0	肥前系	18c後半	
	1827	溝1	C-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.0	－	－	肥前系	18c末期～19c初頭	
	1828	溝1	D-36, E-37		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.0	3.7	5.2	在地	18c末期～19c初頭	
	1829	溝1	C-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	14.0	8.4	3.1	肥前	18c中頃	高台内面にハリ支えの目跡あり
	1830	溝1	B-35・36, C-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	12.0	－	肥前	18c代	
	1831	溝1	C-36		磁器	油壺か？	灰白色	透明釉	内面路胎	－	－	－	肥前	18c	
	1832	溝1	C-36		陶器	碗	灰色	銅緑釉	外面腰部～高台内面露胎	10.6	4.4	6.7	肥前内野山系	17c後半	
	1833	溝1	D-37		陶器	碗	暗灰黄色	透明釉	高台脇～高台内面路胎	10.4	3.6	4.8	肥前	18c後半	
	1834	溝1	D-36		陶器	碗	にぶい黄褐色	鉄釉	畳付～高台内面釉剥ぎ　蛇ノ目釉剥ぎ	－	4.4	－	薩摩龍門司	18c後半	
	1835	溝1	C・D-36		陶器	碗	灰黄褐色	白化粧土に透明釉	畳付～高台内面露胎	－	4.6	－	薩摩龍門司	18c後半	
	1836	溝1	C-36		陶器（白薩摩）	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	3.5	－	薩摩竪野系	18c代か？	
第325図	1837	溝1	D-36		陶器	碗	黄褐色	透明釉	高台内面釉剥ぎ	－	－	－	関西京焼	17c後半	見込み色絵
	1838	溝1	D-36		陶器	皿	灰褐色	灰釉	外面腰部以下露胎	－	－	－	肥前	16c末期～17c初頭	皮鯨　見込みに胎土目あり
	1839	溝1	C-36		陶器	皿	にぶい褐色	透明釉	外面腰部以下露胎	16.0	－	－	肥前か？	17c後半？	
	1840	溝1	C・D-36		陶器	碗	赤褐色	褐釉	外面腰部以下露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	－	4.7	－	薩摩龍門司系	18c後半	
	1841	溝1	C・D-36		陶器	瓶類	にぶい黄色	鉄釉	内面路胎	－	－	－	薩摩龍門司	18c後半～	飛び鉋　からから
	1842	溝1	C-36, D-36		陶器	土瓶	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	6.2	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	1843	溝1	D-36		陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	1844	溝1	C-36		陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c後半	
	1845	溝1	D-37		陶器	壺または水柱	褐色	鉄釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	薩摩苗代川	18c代か？	
	1846	溝1	C-36		陶器	片口または鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	1847	溝1	C-36		陶器	鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	25.2	16.6	11.8	薩摩苗代川	18c代	
	1848	溝1	C-36		陶器	鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	1849	溝1	B-37, D-35, C・D-36		陶器	擂鉢	暗赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	－	16.2	－	薩摩苗代川	19c代	
	1850	溝1	D-36		陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	外底面露胎	－	13.2	－	薩摩苗代川	19c代	
	1851	溝1	C・D-36		陶器	蓋	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	38.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	口唇部に目跡あり
	1852	溝1	C・D-36		陶器	蓋	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	27.2	21.4	8.8	薩摩苗代川	17c後半	
	1853	溝1	E-36		陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	34.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	口唇部に貝目あり
	1854	溝1	D-36		陶器	甕	暗赤色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	1855	溝1	C-36		陶器	甕	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
第326図	1856	溝2	B・C-35, D-36	Ⅰ, Ⅱ	陶器	碗	灰白色	（内）透明釉（外）銅緑釉	残存部全面施釉	11.6	－	－	肥前	18c前半	
	1857	溝2	B-35		陶器	碗	にぶい褐色	鉄釉	残存部全面施釉	12.4	－	－	薩摩龍門司	18c後半	
	1858	溝2	C-35		陶器	壺	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.4	－	－	薩摩苗代川	18c代か？	
	1859	溝2	B-35		鉄製品	鎌	－	－	－	最大長24.1	最大幅13.0	最大厚3.1			重さ187g
	1861	溝3	B-34・35		陶器	擂鉢	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	27.6	－	－	薩摩苗代川	18c後半	口唇部に貝目あり
第327図	1862	溝4	E-18		陶器	蓋	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	22.8	14.4	4.6	薩摩苗代川	17c前半	口唇部に貝目あり
	1863	溝4			鉄製品		－	－	－	最大長7.45	最大幅2.6	最大厚0.8			重さ58g
	1864	溝4	E-18		鉄製品		－	－	－	最大長3.65	最大幅1.75	最大厚0.75			重さ6g
	1865	溝5	B-10		陶器	香炉	灰白色	透明釉	内面・畳付～高台内面露胎	－	6.0	－	肥前	不明	

近世遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	産地	時期	備考
第328図	1866	自然流路1	D-29		土製品	土錘	にぶい黄橙色	-	-	4.7	最大径1.1	-	-			
	1867	自然流路1	D-30		土製品	土錘	にぶい黄橙色	-	-	5.7	最大径1.4	-	-			
	1868	自然流路1	D-30		土製品	土錘	にぶい黄橙色	-	-	3.4	最大径1.5	-	-			
	1869	自然流路1	C-29・30		石製品	五輪塔	-	-	-	15.8	最大径11.7	-	-			
	1870	自然流路1	D-30		鉄製品	簪	-	-	-	8.3	1.5	0.3	0.7	琉球か？		
	1871	自然流路1			鉄製品	ヤリガンナ	-	-	-	4.4	1.5	0.6	-			
	1873	自然流路1			鉄滓	平面長方形椀型鉄滓	-	-	-	20.4	16.0	7.8	2330			
第329図	1874	自然流路1			鉄滓	流動滓	-	-	-	22.2	17.9	8.5	3040			
	1875	自然流路1			鉄滓	流動滓	-	-	-	16.2	12.6	5.2	958			
	1876	自然流路1			鉄滓		-	-	-	11.1	7.4	3.0	310			
	1877	自然流路1			鉄滓		-	-	-	11.6	10.3	2.6	328			
	1878	自然流路1			鉄滓		-	-	-	9.9	8.0	2.5	221			
第330図	1879	自然流路1			鉄滓		-	-	-	24.5	19	6.5	2440			
	1880	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	-	-	-	18.4	14.1	5.8	1610			
	1881	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	-	-	-	7.3	6.1	2.3	168			
	1882	自然流路1			鉄滓		-	-	-	5.4	5.8	1.8	80			
第331図	1883	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	-	-	-	21.1	14.7	6.4	2190			
	1884	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	-	-	-	19.7	14.7	5.5	2090			
	1885	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	-	-	-	16.0	10.6	6.4	875			
第332図	1886	自然流路1			鉄滓	椀型鍛冶滓	-	-	-	10.0	7.4	4.4	139			
	1887	自然流路1			鉄滓	椀型鍛冶滓	-	-	-	6.8	7.1	2.9	110			
	1888	自然流路1			鉄滓	椀型鍛冶滓	-	-	-	9.3	8.6	4.6	243			
	1889	自然流路1			鉄滓		-	-	-	3.7	4.1	1.9	27			
	1890	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	-	-	-	6.5	3.7	2.6	90			
	1891	自然流路1			鉄滓		-	-	-	9.9	4.5	3.4	120			
	1892	自然流路1			鉄滓		-	-	-	14.0	7.5	6.2	605			
第333図	1893	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	-	-	-	11.0	9.3	8.3	461			
	1894	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	-	-	-	10.7	5.7	5.0	261			
	1895	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	-	-	-	11.5	8.8	7.4	674			
第334図	1896	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい黄橙色	-	-	20.5	最大径8.6	-	-			
	1897	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい黄橙色	-	-	17.5	最大径11.0	-	-			
	1898	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい橙色	-	-	16.9	最大径8.6	-	-			
	1899	自然流路1			土製品	鞴の羽口	明黄褐色	-	-	16.5	最大径8.3	-	-			
第335図	1900	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい黄橙色	-	-	15.9	最大径8.7	-	-			
	1901	自然流路1			土製品	鞴の羽口	灰黄色	-	-	14.3	最大径8.0	-	-			
	1902	自然流路1			陶器	碗	にぶい黄色	白化粧土の刷毛目に透明	残存部全面施釉	口径10.6	-	-	-	肥前	18c前半	
	1903	自然流路1			陶器	皿	灰色	銅緑釉	外面腰部下位露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	-	底経4.6	-	-	肥前	17c	
	1904	自然流路1			陶器	皿	灰色	透明釉	残存部全面施釉	口径20.0	-	-	-	肥前	18c代か？	
	1905	自然流路2	E-26		石製品		-	-	-	最大長4.5	最大幅2.8	最大厚0.9	-			
	1906	自然流路2			土製品	鞴の羽口	明褐色	-	-	7.5	-	-	-			

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	備考
第336図	1907			磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	15.0	5.2	7.4	肥前	17c前半	荒磯文 竜文
	1908	A・B-30		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.8	－	肥前	17c前半	荒磯文
	1909	C-30		磁器	丸碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.4	5.1	7.0	肥前	17c前半	草花文
	1910	B-30	Ⅲ	磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.8	5.0	6.7	肥前	17c前半	ソテツの文様
	1911	A・B-30		白磁	丸碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.0	4.4	6.3	肥前	17c後半か？	
	1912	B-34,C-35	Ⅰ,Ⅱ	磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.0	4.2	5.4	肥前	18c前半	輪宝繋文
	1913	D-36		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.8	4.1	5.1	肥前	18c中頃	コンニャク印判
第337図	1914	D-35		磁器	丸碗	白色	(内)透明釉 (外)青磁釉	畳付釉剥ぎ	11.0	4.4	6.7	肥前	18c中頃	コンニャク印判五弁花, 内面口縁部 四方襷文, 高台内面 渦福
	1915	A-36		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.6	4.4	5.5	肥前	18c後半	矮小化したコンニャク印判五弁花
	1916			磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.8	4.9	6.1	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
	1917	A・B-36・37	Ⅱ	磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.8	－	肥前	18c中頃	
	1918	D-36		磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.0	4.2	5.1	肥前	18c後半	矮小化したコンニャク印判五弁花
	1919	C-34		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.2	4.2	5.4	肥前	18c末～19c初頭	丸文 格子文
	1920	B-35		磁器	丸碗	灰褐色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.2	4.0	5.4	肥前	18c後半	
	1921	C・D-36		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.3	4.0	5.9	肥前	18c中頃	草花文
	1922			磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.5	4.6	6.0	肥前	18c後半	
	1923	B-36・37		磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.4	4.2	5.6	肥前	18c後半	一重網目文
	1924	D-35	Ⅲ	磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.2	－	肥前	18c後半	二重網目文
第338図	1925			磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.1	4.8	5.0	肥前系	18c後半	丸文
	1926	B-35		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	10.6	4.0	5.2	肥前系	18c後半	梅花文
	1927	C-35	Ⅰ	磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.2	5.0	4.5	肥前系	18c後半	折れ松葉文
	1928	B-37		磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.4	4.4	4.4	肥前系	18c後半	コンニャク印判の菊文
	1929	C-36		磁器	丸碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.8	5.0	5.3	肥前系	18c後半	梅花文
	1930	C-35	Ⅰ	白磁	朝顔形碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.6	4.2	6.5	肥前系	18c後半	
	1931	C-35,D-35	Ⅰ	磁器	広東碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.6	6.0	6.3	肥前系	18c末～19c前半	山水文
	1932	C-35		磁器	広東碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.6	6.0	6.4	肥前系	18c末～19c前半	山水文
	1933	B-35	Ⅲa	磁器	小広東碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.2	－	－	肥前系	18c末～幕末	梵字文
	1934	B-36,C-34	Ⅲ	白磁	端反碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.8	4.0	5.7	在地	18c末～幕末	
	1935	B-35・37		磁器	端反碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	－	4.3	－	在地	18c末～幕末	格子文
第339図	1936	C-35	Ⅰ	磁器	筒形碗	白色	(内)透明釉 (外)青磁釉	畳付釉剥ぎ	7.6	4.0	6.3	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花, 内面口縁部 四方襷
	1937			磁器	筒形碗	灰白色	(内)透明釉 (外)青磁釉	残存部全面施釉	7.9	－	－	肥前	18c後半	四方襷文
	1938			磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	7.9	－	－	肥前	18c後半	菊文と帆かけ舟文 四方襷文
	1939	D-37		磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	6.7	3.0	5.7	肥前	18c後半	矮小化したコンニャク印判五弁花 二重編目文 折れ松葉文 四方襷文
	1940	B-35		磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	8.7	3.4	6.1	肥前	18c末～19c初頭	雪持笹文 虫文 松葉文
	1941	D-35	Ⅲ	磁器	筒形碗	白色	透明釉	残存部全面施釉	7.8	－	－	肥前	18c後半	横縞文
	1942	D-35	Ⅲ	磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.3	4.0	6.1	肥前系	18c後半～19c初頭	
	1943	D-35	Ⅲ	磁器	筒丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.2	4.0	5.8	在地？	18c後半～19c初頭	格子文
	1944	D-34	Ⅲ	磁器	筒丸碗	灰色	透明釉	口縁～底部	6.8	3.2	5.3	肥前	18c後半	草花 蝶
	1945	D-35		磁器	筒丸碗	灰色	透明釉	残存部全面施釉	6.2	3.4	5.0	肥前	19c代	草花 蝶
	1946	A'-30		白磁	小坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.0	3.5	5.0	肥前	18c後半	畳付に砂目あり
	1947	B-33・34	Ⅱ	白磁	小坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	5.0	2.6	3.5	肥前	18c末～19c	
	1948	E-24	Ⅱ	磁器	小坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	6.0	2.8	3.4	肥前	19c代	草花文
	1949	C-35		清朝磁器	小坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	6.2	1.9	2.7	中国景徳鎮	19c	菊文
第340図	1950	B-35, B-34・35	Ⅰ	磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	22.0	12.2	3.6	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花, 裏面砂付着
	1951	A・B-30		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	14.0	－	肥前	18c後半	高台内底にハリ支えの目跡あり
	1952	B-35・36		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	11.7	－	肥前	18c後半	高台内底にハリ支えの目跡あり 角福
	1953	A'-30		磁器	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c後半	手書き五弁花 角福
	1954	D-35	Ⅲ	磁器	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c後半	蛸唐草文 高台内底にハリ支えの目跡あり
	1955	B-35		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17.8	11.4	2.1	肥前	18c後半	蛸唐草文 唐草文
第341図	1956	F-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	6.4	－	肥前	17c中葉	初期伊万里 日の字鳳凰文
	1957			磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	14.5	5.2	3.9	肥前	17c中葉	初期伊万里 菊花文
	1958	C-35	Ⅰ	磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.5	7.6	3.8	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
	1959			磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.5	6.4	3.0	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
	1960	C-35		磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.2	8.2	3.1	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花 唐草文
	1961	B-34	Ⅱ	磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.2	8.2	3.4	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花 雪之輪文
	1962	B-35	Ⅰ	磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	8.0	－	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
第342図	1963	D-36		磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.0	7.6	4.1	肥前	18c後半	
	1964	B-35		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	14.6	9.6	5.0	肥前	18c後半～19c前半	輪花皿 蛇ノ目凹型高台 松竹梅文 唐草文
	1965	B-3		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.8	7.8	4.6	肥前	19c代	蛇ノ目凹型高台
	1966	C-35	Ⅰ	磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.6	8.1	3.8	肥前	18c後半～19c前半	菊花皿 蛇ノ目凹型高台 口錆
	1967	B-35	Ⅰ	磁器	皿	黄白色	透明釉	外面腰部下位～高台内面露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.0	4.6	3.6	在地系	18c末～19c前半	
	1968	D-36		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	－	5.0	－	在地系	18c末～19c前半	
	1969	B-10	Ⅳ	磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.5	5.3	2.7	肥前	18cか？	砂粒付着 四方襷文 山水文
	1970	A-36	Ⅰ	磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.3	5.0	3.1	肥前	18c末～19c前半か？	山水文
第343図	1971			磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.8	4.2	2.6	肥前	19c代	輪花皿 唐草文 松竹梅文
	1972	C-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.8	4.2	2.6	肥前	19c代	輪花皿 唐草文 松竹梅文
	1973	C-35	Ⅰ	磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.0	5.5	2.8	肥前	19c前葉～中葉	山水文
	1974	E-35		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.3	6.0	2.5	肥前	19c前葉～中葉	輪花皿 山水文
	1975	D-35	Ⅲ	磁器	鉢	灰白色	透明釉	口唇部内釉剥ぎ	10.8	5.8	6.0	肥前	18c代	
	1976	C・D-36		磁器	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.4	－	－	肥前	18c代か？	
	1977			磁器	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.2	－	－	肥前	18c代	
	1978	B-35・36		磁器	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	12.6	－	－	肥前	18c代	
	1979	G-28	Ⅰ	磁器	鉢	白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c代	
	1980	C-35	Ⅰ	磁器	鉢	灰色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c代	山水文

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	備考
第344図	1981	C-35	Ⅰ	磁器	蓋	白色	透明釉	残存部全面施釉	9.7	−	−	肥前系	19c代	格子文
	1982	D-36		白磁	蓋	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.2	つまみ径3.9	2.7	肥前系	18c末～19c初頭	
	1983	B-35		磁器	蓋	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	8.6	庇径10.2	−	肥前系	18c後半	
	1984			磁器	蓋	白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	9.0	庇径9.2	−	肥前系	17c後半か？	
	1985	A・B-35・36, D-36		磁器	蓋	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	10.6	庇径11.0	3.1	肥前系	17c後半	
	1986	A-36		磁器	紅皿	白色	透明釉	外面露胎	4.6	1.2	1.6	在地系	19c代	
	1987	A-30		磁器	うがい碗か？	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.0	−	−	肥前	17c末～18c初頭	
	1988	D-35	Ⅲ	磁器	油壺	灰白色	透明釉	内面頸部以下無釉	2.4	−	−	肥前	18c代	梅花文
	1989	C-33		磁器	仏飯具	白色	透明釉	外底面露胎	8.0	4.2	5.6	在地	19c代	
	1990	B-33・34	Ⅱ	磁器	徳利	灰白色	透明釉	内面無釉　畳付釉剥ぎ	−	5.2	−	−	−	
	1991	B-36, C-35	Ⅰ	磁器	コンプラ瓶	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　内面口縁上位施釉	2.4	7.2	22.0	肥前（波佐見）	19c幕末	砂粒付着
第345図	1992	B-34		磁器	碗	淡黄色	透明釉	高台脇～高台内面露胎	11.8	4.8	4.6	京焼き	18c前半	絵付け
	1993	E-19		陶器	碗	にぶい褐色	灰釉　鉄釉	外面腰部～高台内面露胎	12.7	5.4	6.1	肥前	16c末～17c初頭	皮鯨
	1994	C-35		陶器	碗	にぶい褐色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	12.6	5.2	6.2	肥前	16c末～17c初頭	
	1995	AB-36・37	Ⅱ	陶器	碗	褐色	黒褐色釉	外面腰部～高台内面露胎	−	4.8	−	肥前	16c末～17c初頭	
	1996			陶器	天目碗	灰色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	−	5.6	−	肥前	16c末～17c初頭	
	1997	E-8		陶器	碗	灰黄色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	−	4.7	−	肥前	16c末～17c初頭	畳付に胎土目の痕跡有り
	1998	E-8・9		陶器	碗	灰褐色	黒釉	外面上部施釉　高台内下部露胎	11.2	5.2	7.1	肥前	16c末～17c初頭	
	1999	C-35	Ⅰ	陶器	碗	浅黄色	（内）透明釉（外）銅緑釉	外面腰部～高台内面露胎	10.2	4.0	5.9	肥前	17c後半	
	2000	C-35		陶器	碗	灰白色	（内）透明釉（外）銅緑釉	外面腰部～高台内面露胎	10.6	4.8	6.3	肥前（内野山系）	17c後半	
	2001			陶器	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.4	4.8	6.7	肥前	17c後半	呉器手椀
	2002			陶器	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.4	5.2	6.3	肥前	−	
第346図	2003	C-35		陶器	煎じ碗	黄白色	透明釉か？	畳付釉剥ぎ	10.0	4.0	5.9	肥前	18c前半	京焼風陶器
	2004	A'-30		陶器	煎じ碗	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.8	4.4	5.7	肥前	18c前半	京焼風陶器
	2005			陶器	煎じ碗	黄白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.0	3.6	4.8	肥前	18c前半	京焼風陶器
	2006			陶器	筒丸碗	黄白色	透明釉	高台～高台内面露胎	9.4	5.0	6.0	肥前	18c前半	見込み鉄絵　京焼風陶器
	2007			陶器	筒形碗	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	7.8	3.9	5.8	肥前	18c前半	見込み鉄絵　京焼風陶器
	2008	B-34	Ⅲ	陶器	碗	灰白色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	−	3.8	−	肥前	18c前半	見込み鉄絵　京焼風陶器
	2009	D-35	Ⅲ	陶器（陶胎染付）	碗	灰色	白化粧土に透明釉	総釉	11.2	5.0	7.3	肥前	18c前半	
	2010			陶器（陶胎染付）	碗	灰色	白化粧土に透明釉	総釉	11.4	4.8	7.3	肥前	18c前半	
	2011	A'-31		陶器	碗	黄灰色	白化粧土の巻刷毛目に透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.0	−	肥前	18c前半	
	2012			陶器	碗	灰褐色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.2	−	肥前	18c前半	内面　打刷毛目　外面　白土による蛍手
	2013	E-30		陶器	碗	灰白色	飴釉	畳付釉剥ぎ	12.0	4.7	6.9	薩摩龍門司系	17c後半	山元窯
	2014			陶器	碗	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	12.5	−	−	薩摩龍門司系	17c後半	初期龍門司
	2015	AB-35・36		陶器	碗	にぶい黄褐色	黒釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.4	5.2	5.0	薩摩龍門司系	18c後半	
	2016	C-35		陶器	碗	橙色	白化粧土に透明釉	高台～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	−	4.8	−	薩摩龍門司系	18c後半	
	2017	C-35		陶器	碗	にぶい黄橙色	鉄釉	高台～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.1	5.4	5.9	薩摩龍門司系	18c後半	
	2018	D-36		白薩摩	碗	黄白色	透明釉	残存部全面施釉	8.0	−	−	薩摩竪野系	18c代か？	
	2019	D-36	Ⅲa	白薩摩	碗	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−	薩摩竪野系	18c代か？	鉄絵
	2020			白薩摩	小杯	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	2.2	−	薩摩竪野系	18c代か？	松葉文
第347図	2021	B-35, ?-35・36	Ⅰ	陶器	皿	灰白色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	−	6.6	−	肥前	16c末～17c初頭	鉄絵
	2022	B-36・37	Ⅱ	陶器	皿	黄灰色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	19.0	6.4	3.9	肥前	16c末～17c初頭	見込みに胎土目あり　鉄絵
	2023	E-19・20		陶器	皿	灰白色	灰釉	畳付～高台内面露胎	12.0	4.3	3.0	肥前	1584～1610年	口唇部鉄錆
	2024	E-18,F-19	Ⅱ	陶器	皿	にぶい黄褐色	灰釉　鉄釉	外面腰部～高台内面露胎	12.0	4.2	3.2	肥前	16c末～17c初頭	皮鯨　口錆
	2025	E-19		陶器	皿	灰色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	11.1	4.1	3.1	肥前	1580～1610年	
	2026			陶器	皿	灰色	灰釉	総釉	14.2	3.8	3.6	肥前	16c末～17c初頭	見込みに砂目
	2027	B-30		陶器	皿	灰白色	（内）銅緑釉（外）透明釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.0	4.6	4.6	肥前（内野山系）	17c後半	
	2028			陶器	皿	灰白色	（内）銅緑釉（外）透明釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.2	4.4	3.4	肥前（内野山系）	17c後半～18c初頭	
	2029	C-30		陶器	皿	浅黄橙色	（内）銅緑釉（外）透明釉	外面腰部以下露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.6	4.8	3.7	肥前（内野山系）	17c後半	
	2030	D-30	Ⅱ	陶器	皿	灰白色	鉄釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	−	5.2	−	肥前（内野山系）	17c	
	2031			陶器	皿	灰黄色	透明釉に銅緑釉流し	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.8	4.6	3.5	肥前（内野山系）	17c後半～18c初頭	
	2032	B-12,C-12, D-22,E-18	Ⅱ	陶器（陶胎染付）	皿	にぶい褐色	白化粧土に透明釉	残存部全面施釉	14.8	−	−	肥前	不明	鉄絵
第348図	2033	D-36		陶器	鉢	灰赤色	灰釉,鉄泥	外面中位以下露胎	28.0	−	−	肥前	17c代	
	2034	−		陶器	鉢	にぶい赤褐色	白化粧土の刷毛目に透明釉,緑彩	残存部全面施釉	−	−	−	肥前	17c後半	
	2035	D-34	Ⅰb	陶器	鉢	赤灰色	白化粧土の刷毛目に褐釉	残存部全面施釉	−	−	−	肥前	17c後半	
	2036	B-35・36 溝内		陶器	鉢	灰褐色	白化粧土,銅緑釉,褐釉	残存部全面施釉	26.0	−	−	肥前	17c後半	
	2037	F-3	Ⅰb	陶器	鉢	暗灰黄色	白化粧の刷毛目,銅緑釉	残存部全面施釉	−	−	−	肥前	17c後半	
	2038	C-36		陶器	鉢	灰白色	白化粧土の巻き刷毛目に透明釉	高台内面露胎	−	−	−	肥前	18c前半	
	2039	E-30		陶器	鉢	明赤褐色	（内）白化粧土・緑彩	高台脇～高台内面露胎	−	10.6	−	肥前	18c代か？	
	2040	C-35	Ⅰ	陶器	片口	赤褐色	白化粧土の刷毛目に透明釉か？	口唇部釉剥ぎ	—	−	−	肥前	17c後半	
	2041	C-35	Ⅰ	陶器	片口	灰白色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	−	8.2	−	肥前	16c末～17c初頭	
	2042	E-37		陶器	片口	にぶい黄橙色	透明釉	高台脇～高台内面露胎	18.0	8.2	7.6	肥前	19c代	内底面に目跡あり
第349図	2043	D-34	Ⅲ	陶器	徳利か？	にぶい赤褐色	鉄泥に白化粧土	外面腰部以下・内面露胎	−	−	−	肥前	18c後半	
	2044	C-30		陶器（陶胎染付）	瓶	灰白色	白化粧土に透明釉	畳付釉剥ぎ	−	6.0	−	肥前	18c後半	
	2045			陶器	徳利	赤褐色	灰釉	内面上部一部施釉	−	−	−	薩摩苗代川	17c後半	
	2046	A'-30		陶器	徳利	黄灰色	鉄釉	内面上部一部施釉	−	−	−	薩摩苗代川	17c後半	
	2047			陶器	徳利	黒褐色	鉄釉	残存部全面施釉	−	8.6	−	薩摩苗代川	17c後半	外底面貝目あり
	2048	A-23	Ⅲ	陶器	徳利	紫灰色	鉄釉	残存部全面施釉	−	8.4	−	薩摩苗代川	17c後半	
	2049	C-35		陶器	徳利	灰色	−	−	−	12.8	−	薩摩苗代川	17c後半	
	2050	A-23	Ⅲ	陶器	徳利	橙色	灰釉	残存部全面施釉	−	16.5	−	薩摩苗代川	18c代	肩部に貝目あり
	2051	C-35	Ⅰ	陶器	徳利	赤色	−	−	−	−	−	琉球	18c後半	
	2052	E-30		陶器	徳利	赤灰色	−	−	−	5.6	−	琉球	18c後半	外底面に目跡あり

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	備考
第350図	2053			陶器	蓋	黒褐色	－	－	10.6	庇径11.0	2.1	薩摩苗代川	17c後半	堂平窯
	2054	B-35	Ⅲb	陶器	蓋	にぶい橙色	鉄釉	上面施釉	5.0	庇径7.0	3.6	薩摩苗代川	18c後半	
	2055	B-34	Ⅲ	陶器	蓋	明赤褐色	鉄釉	上面施釉	5.4	庇径7.7	3.5	薩摩苗代川	18c後半	
	2056	D-36		陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	上面施釉	5.6	庇径8.2	3.4	薩摩苗代川	18c後半	
	2057			陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	上面施釉	9.8	庇径12.2	4.7	薩摩苗代川	18c後半	
	2058	C・D-36	Ⅶ	陶器	蓋	灰色	鮫肌釉	上面施釉	－	庇径5.8	－	薩摩龍門司	幕末以降	
	2059	O・A-30		陶器	水注	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	6.0	－	－	薩摩苗代川	17c前半	
	2060	D-35・36		陶器	把手	灰色	鉄釉	残存部全面施釉	12.0	－	－	薩摩苗代川	17c代	
第351図	2061	D-36		白薩摩	土瓶	灰白色	透明釉	口唇部釉剥ぎ	5.4	－	－	薩摩竪野系	18c後半	
	2062	D-34・35	Ⅲ	陶器	土瓶	にぶい橙色	鉄釉	外面腰部以下露胎	7.0	4.4	9.7	薩摩苗代川	18c後半	
	2063	B-33・34		陶器	土瓶	橙色	鉄釉	外面腰部～外底面露胎	6.4	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	2064	C-35		陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	－	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	2065	B-34・35	Ⅱ,Ⅲ	陶器	土瓶	褐灰色	鉄釉	外面腰部以下露胎	7.0	2.8	9.2	薩摩苗代川	18c後半	
	2066	B-33・34	Ⅱ	陶器	土瓶	橙色	鉄釉	外面腰部～外底面露胎	7.4	－	10.0	薩摩苗代川	18c後半	
	2067			陶器	土瓶	にぶい褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	7.4	3.5	7.1	薩摩苗代川	18c後半	
第352図	2068			陶器	土瓶	明赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	6.8	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	2069			陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	8.6	5.0	9.6	薩摩苗代川	18c後半	
	2070			陶器	釜	暗赤褐色	鉄釉	内面腰部以下露胎	13.2	－	－	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2071	D-35	Ⅲ	陶器	釜	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17.2	－	－	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2072	D-35	Ⅲ	陶器	釜	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	14.6	－	－	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2073	A-36	Ⅱ	陶器	釜	にぶい赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	14.4	－	－	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2074	C-35,D-35	Ⅲ	陶器	釜	灰色	鉄釉	外面腰部以下露胎	－	－	－	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2075	A・B-35・36		陶器	釜	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
第353図	2076			陶器	片口	褐灰色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	18.2	9.6	9.4	薩摩苗代川	17c後半	口唇部・外底面に貝目あり
	2077			陶器	片口	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	16.8	9.4	9.2	薩摩苗代川	17c後半	
	2078			陶器	片口	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17.7	－	－	薩摩苗代川	17c後半	
	2079	B-35		陶器	片口	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.7	－	－	薩摩苗代川	17c後半	口唇に同心円状の敲き目
	2080	D-35	Ⅰ	陶器	片口	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	20.2	10.7	12.0	薩摩苗代川	18c代	
	2081			陶器	片口	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	25.4	13.0	12.8	薩摩苗代川	18c代	口唇部に貝目あり
	2082	C-29		陶器	片口	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	25.6	14.4	12.3	薩摩苗代川	18c代	
第354図	2083	A'-31		陶器	片口	にぶい黄褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	26.8	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2084			陶器	片口	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	22.5	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2085			陶器	片口	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2086	C-35	Ⅰ	陶器	片口	褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2087	E-35・36		陶器	鉢	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.4	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2088			陶器	鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2089	B-35	Ⅲb	陶器	鉢	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.8	25.0	9.9	薩摩苗代川	18c代	
	2090	B-36・37		陶器	鉢	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	26.6	－	－	薩摩苗代川	18c代	口唇部に貝目あり
第355図	2091	E-35	Ⅰ	陶器	鉢	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.6	12.8	11.5	薩摩苗代川	18c代	外・内底面に貝目あり
	2092			陶器	擂鉢	にぶい橙色	鉄釉	口唇部上端施釉	－	－	－	肥前	1630～1650年	
	2093	D-36	Ⅲ	陶器	擂鉢	暗灰黄色	鉄釉	口唇部上端施釉	－	－	－	肥前	17c中頃	
	2094	E-9		陶器	擂鉢	灰黄色	鉄釉	口縁部上端施釉	－	－	－	肥前	17c中頃	
	2095	E-20・22, F-19・20	Ⅱ,Ⅲ	陶器	擂鉢	灰黄褐色	褐釉	口縁上端～外面腰部施釉	28.0	－	－	肥前	17c中頃	
	2096	C-30		陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	－	－	－	9.6	－	肥前	17c中頃	
	2097			陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口縁上端～外面腰部施釉	－	10.0	－	肥前	17c中頃	
	2098			陶器	擂鉢	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	17c後半	堂平窯
	2099	D-36	Ⅰ,Ⅲ	陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	33.4	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
	2100	A'-30, A・B-30		陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	29.8	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
第356図	2101	A-30		陶器	擂鉢	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	33.0	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
	2102	D-36		陶器	擂鉢	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	30.6	－	－	薩摩苗代川	18c前半	口唇部貝目あり
	2103	D-34・35・36	Ⅲ,Ⅳ	陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.8	－	－	薩摩苗代川	18c後半	
	2104			陶器	擂鉢	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
	2105			陶器	擂鉢	にぶい橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	24.2	8.6	11.2	薩摩苗代川	18c代	
	2106	C-36, D-35・36	Ⅲ	陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2107	A'-31		陶器	擂鉢	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.8	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
	2108	B-33・34	Ⅱ	陶器	擂鉢	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　外面腰部～外底面露胎	24.0	10.2	10.7	薩摩苗代川	18c後半～19c前半	
	2109			陶器	擂鉢	暗灰黄色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	23.0	12.2	11.6	薩摩苗代川	18c前半	
第357図	2110	B-34	Ⅲ	陶器	擂鉢	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　外面腰部以下露胎	28.8	13.2	12.2	薩摩苗代川	18c代	
	2111	B-34・35, C-36	Ⅲ	陶器	擂鉢	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　外底面釉拭き取り	30.2	16.2	13.0	薩摩苗代川	19c代	
	2112	B-33・34	Ⅱ	陶器	擂鉢	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　外面底部露胎	28.6	16.0	12.3	薩摩苗代川	18c後半～19c前半	
	2113	F-13	Ⅰb	陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外底腰部以下露胎	31.3	14.3	13.1	薩摩苗代川	18c後半	
	2114	A'-31		陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	11.0	－	薩摩苗代川	18c前半	
第358図	2115	E-17	Ⅱ	陶器	蓋	赤黒色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	25.4	－	－	薩摩苗代川	17c前半	口唇部に貝目あり
	2116			陶器	蓋	にぶい赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	31.4	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2117	E-35		陶器	蓋	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	35.8	21.4	7.8	薩摩苗代川	18c前半	
	2118	D-30,	Ⅰb	陶器	蓋	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	31.2	23.4	9.3	薩摩苗代川	18c前半	口唇部・外底面に貝目あり
	2119			陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　上面露胎	29.0	23.4	8.7	薩摩苗代川	18c前半	外底面に貝目あり
	2120	A・A'-30・31	Ⅰ	陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	29.9	23.0	9.4	薩摩苗代川	18c前半	
	2121	B-36	Ⅲ	陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	30.0	23.4	10.5	薩摩苗代川	18c前半	
	2122	E-35	Ⅲb	陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	28.8	23.2	8.8	薩摩苗代川	18c前半	
	2123	C-21	Ⅳ	陶器	蓋	暗赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　上面釉拭き取り	24.2	16.0	8.1	薩摩苗代川	18c代	
	2124			陶器	蓋	赤橙色	鉄釉	上面釉拭き取り	23.2	16.0	7.7	薩摩苗代川	18c前半	
	2125	B-35		陶器	蓋	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ　外底面露胎	24.0	18.4	7.0	薩摩苗代川	19c代	

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	備考
第359図	2126	B-12		陶器	甕	灰黄色	鉄釉か？	口唇部釉剥ぎか？	30.0	－	－	薩摩苗代川 串木野か？	17c初頭	口唇部に貝目あり 串木野産か？
	2127			陶器	甕	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	30.6	－	－	薩摩苗代川	17c中頃	口唇部に貝目あり
	2128	A'-30	Ⅲ	陶器	甕	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	39.2	－	－	薩摩苗代川	18c前半	口唇部に貝目あり
	2129	A'-30・31		陶器	甕	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	36.2	－	－	薩摩苗代川	17c後半	
	2130	B-29		陶器	甕	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.2	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2131	AB-30		陶器	甕	にぶい黄橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.0	－	－	薩摩苗代川	17c後半	口縁部貝目あり
	2132			陶器	甕	暗灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2133			陶器	甕	赤色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
第360図	2134	A-23, E-35	Ⅲ, Ⅰ	陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	38.8	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
	2135			陶器	甕	明褐色	灰釉	口唇以外全面施釉	31.0	－	－	薩摩苗代川		
	2136	B-37	Ⅳウ	陶器	甕	明赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川		
	2137			陶器	甕	明赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	－	27.3	－	薩摩苗代川		
	2138			陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	21.0	－	－	薩摩苗代川	19c前半	
	2139	C-35	Ⅰ	陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	26.6	－	－	薩摩苗代川	19c代	
第361図	2140	B-35	Ⅲb？	陶器	甕	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	60.4	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2141			陶器	甕	黄灰色	鉄釉	外底面釉拭き取り	－	25.6	－	薩摩苗代川	18c後半	
第362図	2142	A'-31		陶器	壺	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.4	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2143			陶器	壺	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.0	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2144	C-36	Ⅲ	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.0	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2145	B-35,C-35, E-31	Ⅰ, Ⅰb	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	21.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2146	A・B-35・36		陶器	壺	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.0	－	－	薩摩苗代川		
	2147			陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.0	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2148	F-13	Ⅰb	陶器	壺	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18.6	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2149	D-34	Ⅲ	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	16.9	－	－	薩摩苗代川		口唇部にイタヤガイの目跡あり
	2150			陶器	壺	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	17.6	－	－	薩摩苗代川		口唇部にイタヤガイの目跡あり
	2151			陶器	壺	褐灰色	鉄釉	残存部全面施釉	8.4	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり 堂平窯
	2152	B-35・36		陶器	壺	灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	12.0	－	－	薩摩苗代川		
	2153	B-35		陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉 口唇部釉剥ぎ	11.0	－	－	薩摩苗代川	17c後半	
	2154	D-35	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	10.4	－	－	薩摩苗代川		
	2155	D-36	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	－	－	14.6	－	－	琉球		
	2156			陶器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	琉球		
	2157	D-34・35		陶器	壺	赤褐色	－	－	15.4	－	－	琉球		
	2158	D-34,D-37	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	－	－	－	16.6	－	琉球		
	2159	D-35	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	－	－	－	21.2	－	琉球		
第363図	2160	D-34	Ⅲ	陶器	灯明皿	赤褐色	鉄釉	外面口縁下位～外底面露胎	10.6	4.9	2.5	薩摩龍門司系	18c後半	見込みにゴマ目あり
	2161	B-34,D-35	Ⅱ,Ⅲ	陶器	灯明皿	灰黄褐色	褐釉	外面口縁下位～外底面露胎	10.4	4.1	2.3	薩摩龍門司系	18c前半	見込みにゴマ目あり
	2162	C-35	Ⅰ	陶器	灯明皿受け台	暗赤色	鉄釉	皿部外面露胎	－	5.4	－	薩摩龍門司系	18c代	
	2163	D-16		陶器	仏花器	灰赤色	蛇蝎釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩元立院	18c後半	
	2164	G		陶器	仏花器	灰褐色	黒釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩元立院	18c後半	
	2165			陶器	香炉	灰色	褐釉	外面腰部以下露胎	11.2	5.0	6.6	肥前	18c代	
	2166	C-30		陶器	香炉	にぶい橙色	白化粧土の刷毛目に褐釉	口唇部～外面中位施釉	12.0	－	－	肥前	18c後半	
	2167	F-30	Ⅰb	陶器	香炉	灰白色	白化粧土の刷毛目に褐釉	口唇部～外面のみ施釉	9.6	5.2	6.1	肥前	18c前半	
	2168	E-38		陶器	香炉	浅橙色	鉄釉	外面・内面口縁下位以下露胎	11.4	4.4	4.9	薩摩龍門司	18c後半	
	2169			陶器	香炉	にぶい橙色	鉄釉	外面腰部まで施釉	－	5.8	－	薩摩龍門司	18c代	
	2170	A・B？-35		陶器	香炉	灰白色	白化粧土に緑釉から透明釉	内面口縁下位以下露胎 外面高台～高台内面露胎	10.0	10.0	8.5	薩摩龍門司	19c代	
第364図	2171	C-36		陶器	鉢か？	浅黄色	透明釉	外底面釉剥ぎ	－	9.9	－	肥前	17c後半～18c前半	
	2172	B-35		土師質土器	焙烙	にぶい黄橙色	－	－	20.0	15.0	3.4			外面に煤付着
	2173	D-35	Ⅲ	陶器	植木鉢	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	31.2	―	―	薩摩苗代川	18c後半	
	2174	B-35		瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	25.4	－			
	2175	E-30		瓦	丸瓦	灰白色	－	－	最大長 16.5	最大幅 12.7	最大厚 3.0			
	2176	D-34	Ⅲ	瓦	軒平瓦	赤橙色	－	－	最大長 8.9	最大幅 13.9	最大厚 4.6			
	2177	F-18	Ⅱ	土製品	人形	浅黄色	－	－	－	－	－			
	2178	D-35	Ⅲ	陶器	メンコ	にぶい橙色	－	－	3.8	－	0.7			
	2179				皿か？	灰白色	－	－	4.8	1.8	1.1	不明	不明	ままごと道具か？

金属製品観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	遺構名	出土区	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	備考
第148図	721	鉄製品		竪穴建物6	C・D-20・21	3.2	2.7	1.10	8.0	
第178図	753	鉄製品	煙管	土坑12	D-20	6.7	0.9		4.0	
第201図	861	鉄製品	鉄鍋片か？	ピット41	D-15	3.8	3.65	0.5	11.0	鋳造製品
	862	鉄製品	鉄鍋片か？	ピット42	D-15	5.4	4.3	1.1	2.3	鋳造製品
	863	銅製品	六弁花形金座金具	ピット43	D-9	2.6	2.4	0.5	3.0	塗金あり
第203図	888	鉄製品	鉄鍋片か？	溝7	A-27	5.1	2.6	0.5	21.0	鋳造製品

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	備考
第365図	2180	鉄製品	短刀	C-37	Ⅱ	26.6	2.8	0.8	138.0	
	2181	鉄製品	短刀	D-27	Ⅱ	18.1	2.35	0.4	41.0	
	2182	鉄製品	短刀	F-25	Ⅱ	26.7	2.75	0.9	89.0	
	2183	鉄製品	短刀	F-11	Ⅱ	17.6	2.0	0.5	27.0	
	2184	鉄製品	鎌			24.0	3.8	0.6	73.0	
第366図	2185	鉄製品	ヤリガンナか？	C-25・26		11.6	1.7	0.7	14.0	
	2186	鉄製品	ヤリガンナか？	B-37	Ⅳ	4.6	1.5	0.25	5.0	
	2187	鉄製品	ヘラ状製品	B-37	Ⅲb	6.6	1.65	0.45	11.0	
	2188	鉄製品	大型釘	D-21	Ⅱ	12.25	1.2	1.0	42.0	
	2189	鉄製品	短冊状製品	D-25		6.0	1.1	0.8	0.4	
	2190	鉄製品	熊手状製品	E-28	Ⅱ	4.6	1.7	0.9	16.0	
	2191	鉄製品	鉄鏃	A-23		3.1	1.8	0.6	3.0	圭頭鏃
	2192	鉄製品	鉄鏃			2.4	2.3	0.5	5.0	無茎鏃
	2193	鉄製品	紡錘車			6.5	3.3	0.5	14.0	
	2194	鉄製品	紡錘車			2.7	3.8	1.5	9.0	

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	備考
第366図	鉄15	鉄製品	鉄鍋片か？	A・B-30		4.9	3.3	0.4	37.0	鋳造製品
	鉄22	鉄製品	鉄鍋片か？	D-29		3.7	3.4	0.6	9.0	鋳造製品
	鉄32	鉄製品	鉄鍋片か？	D-23		5.5	4.0	0.9	17.0	鋳造製品
	鉄26	鉄製品	鉄鍋片か？	G-17	Ⅳ	5.6	2.8	0.4	14.0	鋳造製品
	鉄36	鉄製品	火打金			6.3	3.0	0.6	10.0	
	鉄19	鉄製品	角釘	E-31	Ⅲ	5.1	0.9	0.5	8.0	
第367図	鉄30	銅製品	簪	F-28	Ⅰ	15.3	1.0	0.2	5.0	
	鉄29	銅製品	簪	F-28	Ⅰ	8.0	1.7	0.2	3.0	
	25	銅製品	棒状製品	E-28	Ⅱ	9.3	0.5	0.4	7.0	
	鉄28	銅製品	針金状製品			5.75	1.75	1.75	2.0	釣花いけか？
	鉄28	銅製品	針金状製品			5.35	1.75	1.75	2.0	釣花いけか？
	24	銅製品	兜の金坐	D-34	Ⅲ	2.6	2.5	3.5	5.0	
	鉄25	銅製品	太刀金具	E-26	Ⅱ	3.0	2.1	0.15	6.0	
	鉄27	銅製品	銅碗	C-28	Ⅲ	2.8	2.4	0.3	8.0	7C後半～8C前半か
	50	銅製品	指輪	D-25	Ⅱ	2.0	1.1	0.2	2.56	

※挿図番号第148図・第178図・第201図・第203図は中世遺構

第４章　自然科学分析

第１節

芝原遺跡出土製鉄・鍛冶・青銅関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

１．いきさつ

芝原遺跡は鹿児島県南さつま市金峰町に所在する。縄文時代中期から近世にわたる複合遺跡である。調査地区内からは中世末～近世初頭と推定される鉄滓等の製鉄・鍛冶関連遺物が多量に出土している。遺跡内での生産の実態を検討する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

２．調査方法

2－1．供試材

Table 1に示す。製鉄・鍛冶・青銅関連遺物計21点の調査を行った。

2－2．調査項目

（１）肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。これらの記載をもとに分析試料採取位置を決定している。

（２）顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として，光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後，エメリー研磨紙の#150，#240，#320，#600，#1000，及びダイヤモンド粒子の3μと1μで順を追って研磨している。また金属鉄の腐食には３％ナイタル（硝酸アルコール液），酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

（３）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は，真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し，発生する特性X線を分光後に画像化し，定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は，調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される金属（合金）や鉱滓中の結晶ほど明るく，軽い元素で構成される晶出物ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後，定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため，反射電子像に加えて，適宜特性X線像の撮影も行った。

（４）化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S），：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V），銅（Cu），二酸化ジルコニウム（Zr_2O）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果

SIB－1：炉壁

（１）肉眼観察：熱影響を受けて内面が黒色ガラス質化した，大型で厚手の炉壁片である。内面表層には着磁性の強い黒灰色の滓部や茶褐色の鉄錆が溶着する個所も観察される。側面２面は直線状で，築炉時の粘土塊の接合面の可能性が考えられる。胎土は粘土質で，小礫や砂粒，赤色スコリアなどが含まれている。また微細な有機質の混和物が目につく。

（２）顕微鏡組織：Photo.1①～③に示す。①の明灰色部は銹化鉄である。また下側の暗色部は炉壁内面の溶融物（黒色ガラス質滓）で，②③はその拡大である。ガラス質滓中には炉材粘土中に混和された砂粒が散在している。さらに滓中のごく微細な明白色部は金属鉄である。３％ナイタルで腐食したところ，ほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite：α鉄）単相の組織であった。

内面に金属鉄（またはその銹化物）が溶着することから，当炉壁は製鉄炉の炉壁片と推測される。

SIB－2：砂鉄

（１）肉眼観察：遺跡内に集積した砂鉄である。砂鉄粒子は磨耗してやや丸みを帯びたものが多い。また砂鉄以外には斜長石，角閃石，輝石類などの無色・有色鉱物が混在する。地域周辺に分布する火山噴出物起源の砂鉄を採取している。

（２）顕微鏡組織：Photo.1④～⑥に示す。灰褐色粒は砂鉄〔磁鉄鉱または含チタン鉄鉱（注１）〕である。粒内の暗色多角形結晶は燐灰石〔Apatite：$Ca_5(PO_4)_3F$〕と推定される。鹿児島県下の砂鉄には，粒内に微細な燐灰石が多数含まれる事例が多い（注２）が，当遺跡でも同様の特徴が確認された。暗色粒は斜長石，角閃石，輝石類などの鉱物である。反射顕微鏡下で観察してい

るため，光を透過する鉱物ほど暗い色調になる。

SIB－2：砂鉄は，平成14年度に調査したSBH－1：砂鉄とほぼ同じ地点の砂鉄と判断されるため，その時に分析したSBH－1：砂鉄の化学組成について報告する。

（3）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）54.10%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.05%，酸化第1鉄（FeO）31.62%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）42.20%の割合であった。主に砂鉄以外の無色・有色鉱物に含まれる造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）12.23%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.83%である。砂鉄（含チタン鉄鉱）に含まれる二酸化チタン（TiO_2）11.72%と高値で，バナジウム（V）は0.24%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.59%，銅（Cu）＜0.01%である。さらに五酸化燐（P_2O_5）は0.50%と高値傾向を示した。

遺跡内の採取砂鉄は，地域周辺に分布する火山噴出物起源の高チタン（TiO_2）砂鉄と推定される。磨耗して丸みを帯びた粒の割合が高いことからも，近接する河川または海浜部に堆積した砂鉄を採取して製鉄原料としていた可能性が高いと考えられる。

SIB－3：炉外流出滓

（1）肉眼観察：やや小型で厚手の炉外流出滓の破片である。上面は滑らかで複数条の流動痕が残る。他の面はすべて破面で，内部に気孔は散在するが，緻密で重量感のある滓である。

（2）顕微鏡組織：Photo.2①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO\cdot TiO_2$），淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。

（3）化学組成分析：Table2に示す。全鉄分（Total Fe）46.62%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.06%，酸化第1鉄（FeO）51.23%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）9.64%の割合であった。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は18.69%と低めで，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は4.48%であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）17.92%と高値で，バナジウム（V）は0.26%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.81%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.69%と高値であった。

当鉄滓はチタン（TiO_2），燐（P_2O_5）の高値傾向が顕著であり，地域の火山噴出物起源の砂鉄を原料とした製錬滓と特定できる。

SIB－4：鉄塊系遺物

（1）肉眼観察：表面全体が黄褐色の土砂で覆われた鉄塊系遺物の破片と推定される。特殊金属探知機のL（●）で反応があり，内部にはまとまった金属鉄部が存在する。表面には銹化に伴う放射割れも生じている。一方表面には広い範囲で暗灰色の滓部も観察される。内部には細かい気孔が散在するが緻密である。

（2）顕微鏡組織：Photo.2④～⑥に示す。④の明色部は金属鉄で，⑤はその拡大である。3％ナイタルで腐食したところ，フェライト単相～亜共析組織（C＜0.77%）が確認された。またフェライト結晶には燐（P）が固溶していて結晶粒が粗大化している部分がみられる。黒色層状のパーライト（Pearlite）組織の面積率からは，炭素含有量が0.1%前後の極軟鉄と推定される。

④の右下は滓部で⑥はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO\cdot TiO_2$）が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である（注3）。

付着滓の鉱物組成から，当鉄塊系遺物は地域の火山噴出物起源の砂鉄を製鉄原料としたものと判断される。また金属鉄部は比較的炭素含有量の低い軟鉄（低炭素鋼）であるが，内部に燐（P）の影響が確認された。

SIB－5：羽口

（1）肉眼観察：熱影響を受けて外面がガラス質化した羽口先端部の破片である。暗灰色の滓が帯状に固着しており，下面側の小破片と推定される。滓部は細かい凹凸があり，着磁性の強い個所と弱い個所をもつ。羽口胎土部分は緻密な粘土質で，微細な有機質の混和物が観察される。

（2）顕微鏡組織：Photo.3①～③に示す。①は付着滓部分の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO），淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

②③の明白色部はガラス質滓中の金属鉄で，3％ナイタルで腐食した組織を示している。炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織であった。

付着滓の鉱物組成から，当羽口は鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去（精錬鍛冶作業）に用いられた羽口破片と推定される。

SIB－6：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：平面不整台形でやや偏平な2240gと特大の椀形鍛冶滓である。長軸片側に弧状の窪み部分があり，羽口からの送風痕跡の可能性が考えられる。表面は広い範囲が茶褐色の鉄錆や土砂で覆われるが，特殊金属探知機での反応はない。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸が多数残る。滓の地の色調は暗灰色で，細かい気孔がみられるが，重量感のある滓である。

（2）顕微鏡組織：Photo.3④～⑥に示す。滓中には白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）43.36%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.06%，酸化第1鉄（FeO）38.66%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）18.94%の割合であった。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）32.28%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は3.50%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）3.34%，バナジウム（V）0.12%であった。酸化マンガン（MnO）は0.28%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.65%と高値であった。

当鉄滓は遺跡出土砂鉄（SBH-1）や製錬滓（SIB－3）と比較すると，製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V，MnO）の低減傾向を示すことから精錬鍛冶滓に分類される。また砂鉄や製錬滓と同様燐（P_2O_5）の高値傾向がみられることから，やはり在地の砂鉄を製錬してできた鍛冶原料鉄（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去作業での反応副生物と考えられる。

SIB－7：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：約1/4が欠損しているが本来の平面は楕円状で，厚みのある1419gと大型の椀形鍛冶滓である。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。銹化鉄部には比較的着磁性の強い個所が複数あるが，特殊金属探知機での反応はない。滓の地の色調は暗灰色で上下面とも木炭痕が多数散在する。下面には微細な木炭も複数付着する。破面には大小の気孔が散在するが，重量感のある滓である。

（２）顕微鏡組織：Photo.4①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）47.76%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.07%，酸化第１鉄（FeO）42.32%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）21.15%の割合であった。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）27.26%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は4.37%である。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は4.64%，バナジウム（V）0.13%であった。酸化マンガン（MnO）は0.38%，銅（Cu）＜0.01%である。また五酸化燐（P_2O_5）は0.60%と高値であった。

当鉄滓は椀形鍛冶滓（SIB－7）と近似する鉱物・化学組成であり，精錬鍛冶滓に分類される。

SIB－8：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：平面不整円形をした，260gの中型で完形の椀形鍛冶滓である。やや偏平で下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。表面は全体に茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。土砂中にはごく微細な木炭破片や鍛造剥片が含まれる。着磁性の強い部分があるが，特殊金属探知機での反応はない。また表面には気孔がほとんどなく緻密で重量感のある滓である。

（２）顕微鏡組織：Photo.4④～⑥に示す。④の左上は鉄滓表面に付着した土砂で，内部にごく微細な鍛造剥片が複数含まれている。⑤はその拡大である。一方④右下は滓部で⑥はその拡大である。白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鉄チタン酸化物の結晶はなく，鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）46.06%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.23%，酸化第1鉄（FeO）37.87%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）23.44%の割合であった。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）30.72%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.07%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.31%，バナジウム（V）も0.02%と低値であった。酸化マンガン（MnO）0.07%，銅（Cu）＜0.01%も低い。五酸化燐（P_2O_5）は0.30%とやや高めであった。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V，MnO）の影響がほとんどなく，鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIB－9：椀形鍛冶滓（ガラス質滓）

（１）肉眼観察：93gと小型で完形の椀形鍛冶滓である。ガラス質で軽く，炉材粘土（羽口・炉壁）または鍛接剤（粘土汁・藁灰）などの溶融物主体の滓と考えられる。上下面ともごく細かい木炭痕が多数残る。

（２）顕微鏡組織：Photo.5①～③に示す。素地部分は黒色ガラス質滓で，内部には熱影響を受けた無色鉱物が点在する。これは炉材粘土中に含まれていた砂粒の可能性が考えられる。また微細な明白色粒は金属鉄で，②③はその拡大である。３%ナイタルで腐食したところ炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）は9.84%と非常に低値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.18%，酸化第１鉄（FeO）6.47%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）6.62%の割合である。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）84.08%と非常に高値であるが，塩基性成分（CaO＋MgO）は4.46%と低めであった。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.66%，バナジウム（V）も0.02%と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.11%，銅（Cu）＜0.01%と低い。五酸化燐（P_2O_5）は0.26%であった。

当鉄滓は粘土溶融物（SiO_2，Al_2O_3主成分）主体の鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIB－10：流出孔滓（鍛冶・含鉄）

（1）肉眼観察：平面楕円状でやや小形偏平な605gの椀形鍛冶滓の端部から，棒状の流出孔滓が伸びたものと推測される。また椀形滓部分では鉄部の銹化に伴う放射割れが顕著であり，特殊金属探知機での反応はないものの，まとまった鉄部が存在する可能性が考えられる。また流出孔部分は断面楕円状で，破面では中小の気孔が放射状に分布するが，緻密で重量感のある滓である。

（2）顕微鏡組織：Photo.5④～⑥に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（3）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）52.50%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.05%，酸化第１鉄（FeO）21.77%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）50.80%の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）15.46%と低めで，塩基性成分（CaO＋MgO）も2.73%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）1.97%，バナジウム（V）0.08%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.14%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.53%と高値傾向を示した。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V，MnO）の影響が残ることから，精錬鍛冶後半段階の反応副生物と推測される。

SIB－11：流出孔滓（鍛冶）

（1）肉眼観察：120gと小形で偏平な椀形鍛冶滓の端部から，やや偏平な棒状の流出孔滓が伸びたものと推測される。流出孔滓（SIB－10）と比較すると全体に小型で，まとまった鉄部はみられない。椀形滓部分の下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。流出孔部分も細かい凹凸があり，流動性は弱いものと推測される。

（2）顕微鏡組織：Photo.6①～③に示す。白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の微細な淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネルと推定される。③中央の微細舞白色粒は金属鉄で，３%ナイタルで腐食したところ，ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。

（3）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）57.47%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.17%，酸化第１鉄（FeO）55.76%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）19.96%の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）18.72%と低めで，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.84%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は1.38%，バナジウム（V）0.03%であった。酸化マンガン（MnO）は0.12%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.53%と高値傾向を示した。

当鉄滓は流出孔滓（SIB－10）と同様，脈石成分（TiO_2，V，MnO）の影響が残ることから，精錬鍛冶後半段階の反応副生物と推測される。

SIB－12：粒状滓（イ）・鍛造剥片（ロ）

イ－1，8.0㎜径

（1）肉眼観察：黒灰色で歪な球状の粒状滓様遺物である。表面には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着する。全体に着磁性が強く，表面に気孔はみられない。

（2）顕微鏡組織：Photo.6④⑤に示す。内部は空洞化し，滓中にはウスタイトが凝集して晶出する。

イ－2，8.3㎜径

（1）肉眼観察：大きさの異なる二つの粒状滓様遺物が溶着している。色調は暗灰色で，どちらも歪な球状を呈する。表面にはごく微細な気孔が散在しており，着磁性は弱い。

（2）顕微鏡組織：Photo.6⑥⑦に示す。どちらもともに粘土溶融物（ガラス質滓）であった。また内面の微細明白色粒は金属鉄である。SIB-9椀形鍛冶滓的な鍛冶に関連した派生物。

イ－3，3.5㎜径

（1）肉眼観察：やや大型で比較的きれいな球状の粒状滓である。色調は暗灰色で，表面にはごく微細な棘状の突起がみられるが，全体に平滑である。着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7①②に示す。滓中にはウスタイトが凝集して晶出する。

イ－4，2.8㎜径

（1）肉眼観察：比較的きれいな球状の粒状滓である。色調は暗灰色で，表面には１個所微細な鍛造剥片が付着する。表面は平滑で気孔はなく，着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7③④に示す。写真上側にごく微細な鍛造剥片が固着している。また内部空洞化の外周滓中にはごく微細なウスタイトが晶出する。

イ－5，1.9㎜径

（1）肉眼観察：比較的きれいな球状の粒状滓で，色調は暗灰色である。表面は平滑で気孔はなく，着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7⑤⑥に示す。内部気孔は少なく滓中には白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。また微細明白色部は金属鉄である。

イ－6，1.6㎜径

（1）肉眼観察：やや小型で歪な球状の粒状滓である。色調は暗灰色で，表面には１個所ごく微細な不定形の割れ面が観察される。着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7⑦⑧に示す。内部空洞化の

外周は灰褐色多角形結晶マグネタイトが晶出する。

今回調査をした６点のうち５点（イ－1，3～6）は鉄酸化物の結晶主体であり，鉄素材を熱間で加工した時に生じた微細遺物と推定される。また残る１点はガラス質で，鍛接剤に用いた粘土汁などの溶融物の可能性が考えられる。前者が高温鍛接，後者は低温加工時の派生物の可能性をもつ。

ロ－1，9.3×6.5×0.6㎜

（１）肉眼観察：大型で微かに湾曲した形状の剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，淡褐色の土砂が薄く付着する。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8①②に示す。写真上側の灰褐色多角形結晶はマグネタイトと推定される。普通鍛造剥片で確認される鉄酸化物の３層構造は見られないが，鉄酸化物からなる薄膜状の微細遺物である。

ロ－2，9.3×6.4×0.7㎜

（１）肉眼観察：大型で厚手の剥片様遺物である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微細な凹凸が著しい。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8③④に示す。最表層の灰白色針状結晶はヘマタイト，灰褐色多角形結晶はマグネタイト，灰色結晶はウスタイトである。

ロ－3，7.9×4.9×0.45㎜

（１）肉眼観察：大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8⑤⑥に示す。表側は水平状に割れを起すもののロ－1と同様，灰褐色多角形結晶マグネタイトが凝集する。鉄酸化物からなる薄膜状の微細遺物である。

ロ－4，6.5×4.7×0.65㎜

（１）肉眼観察：大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8⑦⑧に示す。表層（写真上側）の明白色部はヘマタイト，灰褐色部はマグネタイトと推定される。

ロ－5，4.7×3.0×0.5㎜

（１）肉眼観察：大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.9①②に示す。肥大化した表層（写真上側）の明白色部はヘマタイト，その内側の灰褐色部はマグネタイト，下側の灰色部はウスタイトである。

ロ－6，1.7×1.3×0.3㎜

（１）肉眼観察：ごく小型でやや薄手の剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，表層に鉄錆が付着する。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.9③④に示す。素地の黒色部はガラス質滓で，白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。鍛造剥片ではなく鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。鉄滓の表層剥片に分類される。

調査した６点のうち５点（ロ－1～5）は鉄酸化物であり，鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じる微細遺物と推定される。また残る１点は鍛錬鍛冶滓の表層部剥片の可能性が高い。

SIB－13：鉄塊系遺物

（１）肉眼観察：表面が黄褐色の土砂で覆われた74gの塊状の鉄塊系遺物である。明瞭な滓部はなく，鉄主体の遺物と推測される。また特殊金属探知機のL（●）で反応があり，内部にはまとまった金属鉄部が存在するものと考えられる。

（２）顕微鏡組織：Photo.9⑤～⑦に示す。⑤左下の暗灰色部は黒色ガラス質滓である。また明白色部は金属鉄で，３％ナイタルで腐食したところ，過共析組織～共晶状黒鉛組織が確認された。⑥が局部的に晶出した共晶状黒鉛組織で細い黒色部分は黒鉛（C）である。⑦は過共析組織の拡大で，白色針状のセメンタイト（Cementite：Fe_3C）が晶出する。

当遺物にはガラス質滓が付着することから，製鉄炉壁と接触する部分で生じた鉄塊の可能性が考えられる。また比較的炭素含有量が高く，局部的に鋳鉄組織も確認された。

SIB－14：鉄塊系遺物

（１）肉眼観察：355gとやや大型で塊状の鉄塊系遺物である。全体が黄褐色の土砂で厚く覆われており，本来の表面状態の確認は困難である。

（２）顕微鏡組織：Photo.10①～③に示す。内部にはまとまりの良い金属鉄部が存在する。３％ナイタルで腐食したところ，フェライト単相～亜共析組織（C＜0.77%）が観察された。炭素含有量は部位によるばらつきが大きいが，最大で0.5%程度の鋼と推定される。また部分的に燐（P）偏析が生じている。①は燐偏析の顕著な部分である。偏析状態についてはEPMA調査の項で詳述する。

（３）EPMA調査：Photo.10④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。淡褐色針状または多角形結晶は，特性X線像ではともにチタン（Ti）に強い反応がある。定量分析値は79.2%TiO_2－9.2%FeO－4.4%Al_2O_3－3.2%MgO－3.5%V_2O_3（分析点１），77.1%TiO_2－9.3%FeO－4.5%Al_2O_3－4.4%MgO－1.6%V_2O_3（分析点２），78.3%TiO_2－10.1%FeO－4.4%Al_2O_3－4.3%MgO－1.5%V_2O_3（分析点３）であった。チタン酸化物（TiO_2）主体で，ルチル（Rutile：TiO_2）に近い組成の結晶である。砂鉄を高温製錬した時の晶癖とい

える。また暗色結晶定量分析値は48.0SiO_2－30.4%Al_2O_3－10.5%CaOであった（分析点４）。アノーサイト（Anorthite：CaO・Al_2O_3・$2SiO_2$）と推測される。素地のガラス質滓部分の定量分析値は47.2%SiO_2－10.0%Al_2O_3－5.7%CaO－5.1%MgO－1.4%K_2O－14.1%FeO－5.2%TiO_2－4.2%MnO（分析点5）であった。非晶質珪酸塩で鉄（FeO）やチタン（TiO_2），マンガン（MnO）を含む。

Photo.10⑤は①の燐偏析部分の反射電子像である。微小黄褐色部は特性X線像をみると硫黄（S）に強い反応がある。定量分析値は61.7%Fe－36.0%Sであった。硫化鉄（FeS）に同定される。その周囲は特性X線像をみると燐（P）に強い反応があり，さらに環状に弱い反応が広がっている。定量分析値は燐に強い反応がある個所が86.4%Fe－22.0%P（分析点15）であった。燐化鉄共晶（α＋Fe_3P）に同定される。また反応の弱い個所でも97.4%Fe－3.1%P（分析点16），99.0－0.9%P（分析点17）と燐の影響が顕著であった。

付着滓の鉱物組成から，当遺物は砂鉄を高温製錬した生成鉄塊（製錬鉄塊系遺物）と特定できる。金属鉄部の炭素含有量は部位によるばらつきが大きいが，最大で0.5%程度の鋼であった。また燐（P）の影響が著しいところから，在地の砂鉄を製鉄原料とした可能性が高いと考えられる。

SIB－15：鉄塊系遺物

（１）肉眼観察：370gとやや大型で塊状の鉄塊系遺物である。銹化の進行に伴う放射割れが著しく，表面の剥落も生じている。特殊金属探知機のL（●）で反応があるため，内部にまとまった金属鉄部が存在する。また表面の土砂中には，微細な木炭破片が複数含まれる。表面には部分的に暗灰色の滓部を残す。

（２）顕微鏡組織：Photo.11①～③に示す。①全体に銹化が進んでいるが，一部金属鉄が残存する。②はその拡大である。金属鉄部は３%ナイタルで腐食したところ，黒色層状パーライト地に白色針状セメンタイト析出の過共析組織が確認された。炭素含有量は1.5%前後の鋼と推測される。一方①左上は滓部で③はその拡大である。発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが晶出する。

付着滓の鉱物組成から，当遺物は砂鉄を高温製錬した生成鉄塊（製錬鉄塊系遺物）と推定される。金属鉄部は比較的炭素含有量の高い鋼であった。

SIB－16：椀形鍛冶滓（緑青付着，含鉄）

（１）肉眼観察：309gで平面不整楕円状の椀形鍛冶滓である。広い範囲が茶褐色の鉄錆に覆われている。銹化に伴う放射割れも著しいが特殊金属探知機のL（●）で反応があり，内部に金属鉄部が存在する。部分的に暗灰色の滓部も確認される。また上面側に1個所緑青が付着している。

（２）顕微鏡組織：Photo.11④～⑥，Photo.12①②に示す。Photo.11④～⑥は表層に緑青が付着する部分（16－1）であるが，断面には銅の影響は不明瞭である。暗灰色部は滓部で，白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。一方明灰色は滓部で過共析組織痕跡が残存する。またPhoto.12①②は金属鉄粒が残存する部分（16－2）で，３%ナイタルで腐食したところ，フェライト単相～亜共析組織が確認された。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）51.05%に対して，金属鉄（Metallic Fe）1.20%，酸化第１鉄（FeO）20.84%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）48.11%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）19.62%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.62%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.26%，バナジウム（V）が0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）0.06%，銅（Cu）は<0.01%と低値である。五酸化燐（P_2O_5）は0.28%と若干高めであった。

当初緑青の付着から銅関連遺物の可能性が考えられたが，断面観察と化学分析を実施した結果，銅（Cu）の影響が確認されなかったこと。また椀形鍛冶滓（SIB－8）と近似した組成であることから，鉄素材の熱間加工に伴って生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIB－17：椀形鍛冶滓（鍛造品）

（１）肉眼観察：銹化に伴い複数の破片に分かれているが，比較的大きな３片が接合可能であった。その状態から，やや小形の椀形鍛冶滓の下面中央に鍛造製品が付着している。滓部は暗灰色で，表層は若干風化気味である。鍛造品は残存長が63㎜，断面は最大14×７㎜程度の長方形状で，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.12③～⑤，Photo.13①に示す。Photo.12③上側の暗色部は滓部で，Photo.13①はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

一方Photo.12③下側は横断面が長方形状に成形された鍛造品で，④⑤は金属鉄部の拡大である。３%ナイタルで腐食したところ，⑤に示したようなほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が主体であったが，④のように黒色層状のパーライトが析出する亜共析組織部分も存在する。ただし炭素含有量の高い個所でも0.1%以下の軟鉄であった。

（３）EPMA調査：Photo.13②に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では

鉄（Fe）に反応がある。定量分析値は95.6%FeO－3.9%TiO_2（分析点８）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像をみるとチタン（Ti）に反応がある。定量分析値は66.9%FeO－24.7%TiO_2－6.1%Al_2O_3（分析点９）であった。アルミナ（Al_2O_3）を含むがウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO_2）に近い組成の結晶といえる。また素地部分の定量分析値は39.5%SiO_2－8.9%Al_2O_3－7.3%CaO－1.2%MgO－2.3%K_2O－1.6%Na_2O－1.3%P_2O_5－33.8%FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分（FeO）の割合が高く，燐（P）も若干含まれる。

もう１視野，Photo.13③には鍛造鉄の非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶の定量分析値は95.6%FeO－2.4%TiO_2（分析点11）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像ではチタン（Ti）に反応がある。定量分析値は65.2%FeO－22.3%TiO_2－8.7%Al_2O_3－3.4%V_2O_3（分析点12）であった。アルミナ（Al_2O_3），バナジウム（V_2O_3）を含むがウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO_2）に近い組成の結晶といえる。13の淡灰色結晶の定量分析値は62.5%FeO－3.0%MgO－1.1%CaO－30.9%SiO_2（分析点13）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）で微量ライム（CaO），マグネシア（MgO）を固溶する。また素地部分の定量分析値は37.4%SiO_2－8.4%Al_2O_3－8.8%CaO－1.0%MgO－3.7%K_2O－3.4%Na_2O－5.0%P_2O_5－30.2%FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分（FeO）の割合が高く，燐（P）の高値傾向も顕著である。

滓部の鉱物組成から，当鉄滓は精錬鍛冶末期の反応副生物の可能性がある。ただし滓下部に鍛造鉄器が付着していることから，鍛錬鍛冶滓の可能性も看過できない。ある程度製錬工程起源の不純物（鉄チタン酸化物の結晶を含む滓）の混じった新鉄と古鉄（廃鉄器）の両方を加熱・鍛錬していた可能性が考えられる。また鉄製品部分は炭素含有量のごく低い軟鉄（高融点）であった。介在物のEPMA調査の結果高チタン（TiO_2），高燐（P_2O_5）傾向が確認されたため，この製品の始発原料も在地の火山岩噴出物起源の砂鉄と推測される。

SIB－18：鉄製品（鍛造品）

（１）肉眼観察：椀形鍛冶滓（SIB－17）中の鍛造製品とよく似た棒状（長さ58×幅16×厚み５㎜）の鍛造品である。表面は銹化に伴う剥離が著しいが，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.14①～③に示す。横断面が長方形状の鍛造製品の端部である。明白色部は金属鉄で，3%ナイタルで腐食したところ炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。また内部の暗色部は非金属介在物で，内部には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

当鉄器は炭素含有量の低い軟鉄を鍛打成形した鍛造品の破片である。また介在物中にウルボスピネルが含まれており，始発原料は砂鉄と判断される。椀形鍛冶滓（SIB－17）中の鉄製品と非常によく似た遺物であった。

SIB－19：鉄製品（鍛造品）

（１）肉眼観察：鉄製品（SIB－18）より細い棒状（断面８×４㎜）の鍛造品である。鉄釘などの先端寄りの破片の可能性が考えられる。表面は銹化に伴う剥離が著しいが，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.14④～⑥に示す。棒状鉄製品の縦断面の調査を実施した。金属鉄部を３%ナイタルで腐食したところ先端部中央（④右側および⑥上側の黒色部）で高炭素域が確認された。最大で0.7%程度の炭素含有量の鋼である。一方基部（④左側の白色部）は低炭素域で，粒度の微細なフェライト単相の組織であるが，下面側に若干炭素含有量の高い部分をもつ（⑤下側はその拡大）。炭素含有量の異なる鉄素材を鍛接した製品の可能性が考えられる。また鍛造品（SIB－17，18）とは異なり，非金属介在物中はウスタイトのみで明瞭なウルボスピネル結晶はなく，始発原料が砂鉄であったかは不明である。

SIB－20：鉄製品（鋳造品）

（１）肉眼観察：板状の鋳造製品の小破片である。鉄鍋などの鉄鋳物の体部破片と推定される。表面は銹化に伴う割れが著しいが，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.15①～③に示す。断面は約4.5㎜の厚みをもつ。全面亜共晶組成白鋳鉄組織（C＜4.26%）を呈する。また内部には微細な気孔（鋳巣）を残す。

SIB－21：青銅製品（両端：鋳鉄）

（１）肉眼観察：中央部は表面が緑青に覆われた流動状の銅（または青銅）である。両端部は茶褐色の鉄錆に覆われた薄板状の鋳鉄片であり，鋳掛による補修などを施した部分破片の可能性をもつ。

（２）顕微鏡組織：Photo.15④～⑥に示す。青銅と鋳鉄板が接する部分を示した。全体はほぼ左右対称で，中央の青銅部分が両端の板状の鋳鉄を挟んだ状態になっている。また青銅部分は酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食して現出した組織を示しているが，各相の組成に関してはEPMA調査の項で詳述する。一方鋳鉄部分は完全に銹化しているが，ほぼ全面蜂の巣状のレデ

ブライト（Ledeburite）の共晶組成白鋳鉄組織（C：4.26%）が残存する。出土遺物としてはかなり炭素含有量の高い鋳鉄製品といえる。

（３）EPMA調査：Photo.16①②に青銅部分の反射電子像（COMP）を示す。反射顕微鏡下の粒状黒色部は反射電子像では明白色を呈する。また特性X線像では鉛（Pb）に強い反応があり，定量分析値は86.0%Pb－8.0%O（分析点１），79.7%Pb－9.5%O（分析点８）であった。鉛酸化物と推定される。

反射顕微鏡下での淡橙色樹枝状相は反射顕微鏡下では最も暗い色調を呈する。定量分析値は81.3%Cu－2.6%Sn－3.9%Pb－4.2%Zn－4.2%As（分析点２），83.6%Cu－2.1%Sn－3.4%Pb－4.4%Zn－4.1%As（分析点９）であった。銅（Cu）の割合の高い相である。またその周囲の顕微鏡下では白色の部分も特性X線像では暗色を呈する。定量分析値は80.9%Cu－2.9%Sn－4.4%Pb－4.1%Zn－4.9%As（分析点３），79.5%Cu－2.7%Sn－5.7%Pb－4.2%Zn－5.4%As（分析点10）であった。銅の割合が僅かに低いが淡橙色部と類似した組成である。

反射顕微鏡下の青灰色相は，反射電子像では上記淡橙色～白色部分より若干淡い色調となっており，特性X線像では錫（Sn）にやや強い反応がみられる。定量分析値は73.1%Cu－8.3%Sn－3.8%Pb－2.2%Zn－10.3%As（分析点４），75.6%Cu－7.4%Sn－3.4%Pb－2.3%Zn－9.9%As（分析点５），71.4%Cu－9.8%Sn－4.1%Pb－1.9%Zn－10.4%As（分析点13）であった。錫（Sn）の割合の高い相といえる。

さらに反射顕微鏡下で灰色の針状・粒状相は，反射電子像では淡橙色～白色部分より若干淡い色調で，特性X線像では砒素（As）に強い反応がみられる。定量分析値は68.0%Cu－30.9%As（分析点６），64.5%Cu－33.7%As（分析点７），65.1%Cu－32.5%As（分析点11），66.9%Cu－29.8%As（分析点12）であった。銅（Cu），砒素（As）が主成分の相である。

以上の調査結果から，中央部は砒素をかなりの割合で含む鉛青銅に同定される。さらに亜鉛（Zn）も検出されているが，今回は化学分析を実施していないため，銅の鉱石起源のものか否かについては判断が困難である。また両端の鋳鉄部分は金属組織から，比較的炭素量の高い共晶組成白鋳鉄であることが明らかとなった。

４．まとめ

中世末～近世初頭と推定される芝原遺跡の製鉄・鍛冶および銅関連遺物の調査を実施した結果，遺跡周辺で砂鉄製錬から，鍛造鉄器製作までのマスプロ方式の一貫体制がとられた事が明らかとなった。大量の鍛冶廃滓，精錬鍛冶，鍛錬鍛冶用羽口の規格化（内径30㎜），粗鉄の大量徐滓にみられる流出孔滓の存在などで一大コンビナートは裏付けられる。また調査地区内から緑青の付着した転用取鍋の出土があり，近接する渡畑遺跡で緑青の付着した炉壁片が出土している。地域で銅（または青銅）鋳物生産が行われたことは確実であるが，今回調査を実施した遺物中には，遺跡内での銅（または青銅）製品生産に直接伴うものは検出されなかった。個々のまとめをTable 3に示す。詳細は以下のとおりである。

〈１〉出土砂鉄〔SIB－2（SBH－1）〕には，粒内に微細な燐灰石〔Apatite：$Ca_5(PO_4)_3F$〕を多数含む含チタン鉄鉱が複数確認された。当遺跡では火山噴出物の起源の砂鉄が製鉄原料であったと推定される。この特徴は鹿児島県下の他の製鉄遺跡でも共通しており，地域の地質を反映したものである。

〈２〉砂鉄と同様製錬滓（SIB－3）には，高チタン（TiO_2），高燐（P）傾向が窺える。やはり地域に分布する火山噴出物の起源の砂鉄が製鉄原料であった。また製錬滓としては鉄分（Total Fe）が高めである。これも鹿児島県下の出土製錬滓に広く共通する特徴であり〔Fig.1〕（注４），高燐砂鉄を製鉄原料としていることと関連すると考えられる。

金属鉄中の燐は，鍛錬作業時の鍛接不良や製品の脆化といった悪影響の原因となるため，鉄製錬時に①砂鉄／木炭比を大きくして，製錬滓中のFeO含有率を上げることや，②製錬温度を比較的低く保つことで，生成鉄中への燐の移行を抑制した可能性が考えられる。

〈３〉鉄塊系遺物・含鉄鉄滓（SIB－4，13～16）中には，一部鋳鉄組織を呈するなど，比較的炭素含有量の高いものも存在するが，完全な銑は見られなかった〔Fig.2〕。また燐偏析が観察されるものもあり（SIB－4，14），地域の砂鉄製錬生成鉄塊（新鉄）が鍛冶原料となっていたと発言できる。

〈４〉椀形鍛冶滓（SIB－6，7）と流出孔滓（SIB－10，11）はチタン濃度が高く精錬鍛冶滓，椀形鍛冶滓（SIB－8，9，16）は鍛錬鍛冶滓に分類される。また粒状滓，鍛造剥片（SIB－12）など熱間での鍛打加工に伴う微細遺物も検出された。鍛冶原料（製錬系鉄塊）の不純物除去から鍛造鉄器製作まで，遺跡内で一連の作業が行われたことを示す遺物群であった。

また鍛造鉄器を含む椀形鍛冶滓（SIB－17）の存在から，遺跡周辺で生産された新鉄のみでなく，古鉄（廃鉄器）も合わせて鍛冶原料とした可能性が指摘できる。

〈５〉鍛造鉄器（SIB－17，18，19）のうち２点は，非金属介在物中にウルボスピネル結晶が含まれており，始発原料は砂鉄である。なかでもEPMA調査を実施したSIB－17は非金属介在物の素地部分に高燐（P）傾向がみられて，在地の砂鉄を始発原料とした鉄材の可能

性は十分に有りうる。

〈6〉青銅製品（両端：鋳鉄）（SIB－21）は鋳掛による補修などを施した部分の破片であろう。類似遺物はさつま川内市の古原遺跡でも出土しており，分析調査を実施している（注5）。中央の緑青部分は砒素（As），亜鉛（Zn）を高い割合で含む鉛青銅であった。近接地域の渡畑遺跡では鋳造用溶解炉の炉壁片が出土しており，溶着金属のEPMA調査を実施した結果，錫（Sn）の割合の高い鉛青銅と判明している（注6）。今回確認された砒素（As），亜鉛（Zn）などはごく微量であり，地域には様々な成分の鋳造原料（または青銅製品）が搬入されたと考えられる。

〈7〉Table 4に芝原遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の分類を示す。前近代製鉄の一貫体制を実証する遺物群である。各遺構との対応を参考にして頂きたい。精錬鍛冶では鍛冶炉の下部に排滓孔を設けた新機軸，羽口内径は30㎜に統一して精錬鍛冶，鍛錬鍛冶に充当したマスプロ方式の一大製鉄コンビナートを形成している。

（注）

（1）木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社　1995

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。（中略）チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には，チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし，全体が完全に均質なものと，チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものとがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり，これにも均質なものと，縞状のものとがある。（中略）このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱，または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱Titaniferous iron oreという。

（2）鈴木瑞穂「鹿児島県下の採取砂鉄の分析調査結果」『ミュージアム知覧紀要・官報11号』ミュージアム知覧　2007

（3）J.B.Mac chesney and A. Murau：American Mineralogist，46（1961），572

〔イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）の晶出はFeO－TiO2二元平衡状態図から高温化操業が推定される。〕

（4）Fig.1に示した鹿児島県下の出土製鉄関連遺物の分析データは，以下の文献より引用した。

①中山光夫・上田耕「小坂ノ上遺跡出土の古代の蔵骨器と埋納鉄滓について」『ミュージアム知覧紀要第1号』1995

②大澤正己・鈴木瑞穂「宝満製鉄遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『宝満製鉄遺跡』鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会　2004

③大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制遺物と鋳銅遺物の金属学的調査」『上加世田遺跡1』加世田市教育委員会　1985

④大澤正己・鈴木瑞穂「一ツ木遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『一ツ木地区（A・B）遺跡』鹿児島県宮之城町教育委員会　2001

⑤大澤正己・鈴木瑞穂「古原遺跡出土鉄滓・青銅製品の金属学的調査」『古原遺跡』さつま川内市教育委員会　2005年度分析調査実施

⑥大澤正己・鈴木瑞穂「厚地松山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『厚地松山製鉄遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会　2000

⑦大澤正己・鈴木瑞穂「中原鉄生産関連（前畑西）遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『中原鉄生産関連遺跡（前畑西）遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会2007

⑧「宝満製鉄遺跡出土鉄滓の分析調査（予備調査）～周辺地域（東谷･吉原･花房）を比較して～」『宝満寺跡　宝満製鉄遺跡　牟田遺跡　弓場ヶ尾遺跡』鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会　2003

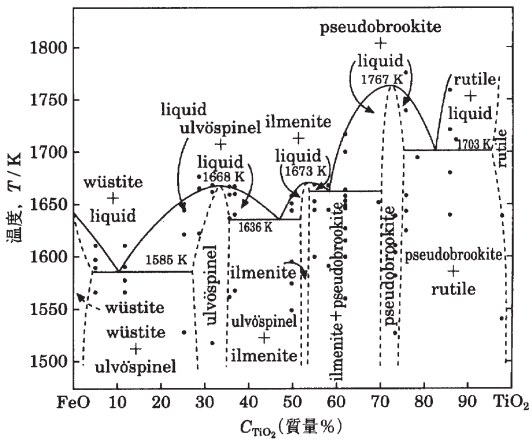
⑨鈴木瑞穂「南九州地域の中世～近世の製鉄技術について」『鉄の歴史－その技術と文化－フォーラム第12回公開研究発表会論文集』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　2009

⑩大澤正己・鈴木瑞穂「上水流遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上水流遺跡4』中小河川改修事業（万之瀬川）に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅵ）鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）鹿児島県立埋蔵文化財センター2010

⑪大澤正己・鈴木瑞穂「出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査」『渡畑遺跡2』中小河川改修事業（万之瀬川）に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅸ）鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）鹿児島県立埋蔵文化財センター2011

（5）前掲注（4）⑤

（6）前掲注（4）⑪



FeO-TiO_2 二元平衡状態図

Table 1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構No.	遺構名	写真No.	遺物名称	推定年代	計測値					調査項目						備考
							大きさ（mm）	重量（g）	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	ｶﾛﾘｰ	
SIB-1	芝原	441	製鉄関連遺構４号	8	炉壁	中世末	116 × 102 × 85	1036	なし		○							
SIB-2		－	砂鉄集積	9	砂鉄	～近世初頃	－	281	なし		○				(○)			＊H14年化学分析実施
SIB-3		442	製鉄関連遺構１号	4	炉外流出滓		56 × 40 × 55	280	なし		○				○			
SIB-4				5	鉄塊系遺物		91 × 63 × 62	551	L（●）		○							
SIB-5		－	－	7	羽口		92 × 54 × 48	152	なし		○							
SIB-6				23	椀形鍛冶滓		245 × 190 × 65	2440	なし		○				○			
SIB-7		6100	自然流路１	3	椀形鍛冶滓		160 × 120 × 66	1419	なし		○				○			
SIB-8				1	椀形鍛冶滓		94 × 88 × 32	260	なし		○				○			
SIB-9		12050	製鉄関連遺構12号	12	椀形鍛冶滓		74 × 61 × 26	93	なし		○				○			
SIB-10		6100	自然流路１	21	流出孔滓		140 × 75 × 61	605	銹化(△)		○				○			
SIB-11				25	流出孔滓		99 × 45 × 34	120	なし		○				○			
SIB-12		12049	製鉄関連遺構11号	13	粒状滓・鍛造剥片		－	－	なし		○							
SIB-13		12050	製鉄関連遺構12号	10	鉄塊系遺物		49 × 31 × 24	74	L（●）		○							
SIB-14		6100	自然流路１	14	鉄塊系遺物		63 × 61 × 52	355	L（●）		○							
SIB-15				17	鉄塊系遺物		77 × 70 × 38	370	L（●）		○			○				＊銹化割れ進行
SIB-16				15	椀形鍛冶滓（緑青付、含鉄）		100 × 74 × 43	309	L（●）		○				○			
SIB-17				19	椀形鍛冶滓（鍛造品付）		69 × 44 × 26	172	L（●）		○			○				
SIB-18				20	鉄製品（鍛造品）		58 × 16 × 5	20.9	L（●）		○							
SIB-19				20	鉄製品（鍛造品）		58 × 8 × 4	6.4	L（●）		○							
SIB-20				16	鉄製品（鋳造品）		46 × 43 × 5	36.4	L（●）		○							
SIB-21		－	－	18	青銅製品（両端鋳鉄）		37 × 38 × 10	20.8	L（●）		○			○				

Table 2　供試材の化学組成

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	全鉄分(Total Fe)	金属鉄(Metallic Fe)	酸化第１鉄(FeO)	酸化第２鉄(Fe2O3)	＊ 二酸化珪素(SiO2)	＊ 酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ(Al2O3)	＊ 酸化ｶﾙｼｳﾑ(CaO)	＊ 酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ(MgO)	＊ 酸化ｶﾘｳﾑ(K2O)	＊ 酸化ﾅﾄﾘｳﾑ(Na2O)	酸化ﾏﾝｶﾞﾝ(MnO)	二酸化ﾁﾀﾝ(TiO2)	酸化ｸﾛﾑ(Cr2O3)	硫黄(S)	五酸化燐(P2O5)	炭素(C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ(V)	銅(Cu)	二酸化ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ(ZrO2)	Σ＊ 造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO2 Total Fe
SBH-1	芝原	G-14、15	砂鉄	中世末～近世初頃	54.10	0.05	31.62	42.20	6.31	2.76	1.03	1.80	0.09	0.24	0.59	11.72	0.04	0.02	0.50	0.04	0.24	<0.01	ー	12.23	0.226	0.217
SIB-3		製鉄関連遺構１号	流動滓		46.62	0.06	51.23	9.64	9.77	3.66	2.24	2.24	0.54	0.24	0.81	17.92	0.05	0.07	0.69	0.05	0.26	<0.01	0.09	18.69	0.401	0.384
SIB-6		－	椀形鍛冶滓		43.36	0.06	38.66	18.94	21.02	6.41	2.23	1.27	0.98	0.37	0.28	3.34	0.03	0.05	0.65	0.28	0.12	<0.01	0.02	32.28	0.744	0.077
SIB-7		自然流路１	椀形鍛冶滓		47.76	0.07	42.32	21.15	15.98	5.44	2.84	1.53	1.21	0.26	0.38	4.64	0.03	0.06	0.60	0.09	0.13	<0.01	0.04	27.26	0.571	0.097
SIB-8			椀形鍛冶滓		46.06	0.23	37.87	23.44	23.18	3.91	1.44	0.63	1.20	0.36	0.07	0.31	0.02	0.05	0.30	0.39	0.02	<0.01	0.02	30.72	0.667	0.007
SIB-9		製鉄関連遺構12号	椀形鍛冶滓		9.84	0.18	6.47	6.62	59.40	15.62	3.13	1.33	2.46	2.14	0.11	0.66	0.03	0.01	0.26	0.06	0.02	<0.01	0.03	84.08	8.545	0.067
SIB-10		自然流路１	流出孔滓		52.50	0.05	21.77	50.80	9.35	2.60	1.89	0.84	0.57	0.21	0.14	1.97	0.03	0.08	0.53	0.38	0.08	<0.01	0.02	15.46	0.294	0.038
SIB-11			流出孔滓		57.47	0.17	55.76	19.96	11.78	3.32	1.93	0.91	0.58	0.20	0.12	1.38	0.03	0.04	0.53	0.12	0.03	<0.01	0.01	18.72	0.326	0.024
SIB-16			椀形鍛冶滓（緑青付、含鉄）		51.05	1.20	20.84	48.11	12.54	3.04	1.99	0.63	1.05	0.37	0.06	0.26	0.03	0.09	0.28	0.31	0.01	<0.01	<0.01	19.62	0.384	0.005

Table 3　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe2O3	塩基性成分	TiO2	V	MnO	造滓成分	Cu	
SIB-1	芝原	製鉄関連遺構４号	炉壁	中世末～近世初頭	ｶﾞﾗｽ質滓、微小金属鉄粒（ﾌｪﾗｲﾄ単相）銹化鉄部	－	－	－	－	－	－	－	－	製鉄炉の炉壁破片と推測される
SIB-2		砂鉄集積	砂鉄		含ﾁﾀﾝ鉄鉱（粒内微細構灰石）、斜長石・角閃石・輝石類	54.10	42.20	2.83	11.72	0.24	0.59	12.23	<0.01	周辺地域に分布する火山噴出物起源の高ﾁﾀﾝ・燐砂鉄を採取した可能性が高い
SIB-3		製鉄関連遺構１号	炉外流出滓		滓部：U+F	46.62	9.64	4.48	17.92	0.26	0.81	18.69	<0.01	製錬滓（原料：高ﾁﾀﾝ・燐砂鉄）
SIB-4			鉄塊系遺物		滓部：U+I、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織(燐偏析)	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：高ﾁﾀﾝ・燐砂鉄、高温製錬）
SIB-5		－	羽口		滓部：W+U+F、微小金属鉄粒：ﾌｪﾗｲﾄ単相	－	－	－	－	－	－	－	－	精錬鍛冶作業に用いられた羽口先端部破片
SIB-6			椀形鍛冶滓		滓部：W+U+F	43.36	18.94	3.50	3.34	0.12	0.28	32.28	<0.01	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIB-7		自然流路１	椀形鍛冶滓		滓部：U+W+F	47.76	21.15	4.37	4.64	0.13	0.38	27.26	<0.01	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIB-8		（自然流路）	椀形鍛冶滓		滓部：W+F、鍛造剥片付着	46.06	23.44	2.07	0.31	0.02	0.07	30.72	<0.01	鍛錬鍛冶滓
SIB-9		製鉄関連遺構12号	椀形鍛冶滓		ｶﾞﾗｽ質滓、被熱砂粒散在、微小金属鉄粒（ﾌｪﾗｲﾄ単相）	9.84	6.62	4.46	0.66	0.02	0.11	84.08	<0.01	鍛錬鍛冶滓（炉材粘土溶融物主体のｶﾞﾗｽ質滓）
SIB-10		自然流路１	流出孔滓		滓部：U+W+F	52.50	50.80	2.73	1.97	0.08	0.14	15.46	<0.01	精錬鍛冶工程末期の滓の可能性が高い
SIB-11		（自然流路）	流出孔滓		滓部：W（粒内微細U）+F	57.47	19.96	2.84	1.38	0.03	0.12	18.72	<0.01	精錬鍛冶工程末期の滓の可能性が高い
SIB-12		製鉄関連遺構11号	粒状滓・鍛造剥片		イ－1、3、4、5:W、2:ｶﾞﾗｽ質滓、6:M、ヨ－2、5:He+M+W、1、3:M、4:He+M、6:W（鍛冶滓片）	－	－	－	－	－	－	－	－	熱間での鍛打作業に伴う微細遺物
SIB-13		製鉄関連遺構12号	鉄塊系遺物		滓部：ｶﾞﾗｽ質滓、金属鉄部：過共析組織～共晶状黒鉛組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物の可能性が高い、炭素含有量が比較的高く局部的に鋳鉄組織を呈する
SIB-14		自然流路１	鉄塊系遺物		滓部：R、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：砂鉄）、炭素含有量は最大0.5%程度の鋼、燐偏析が著しい
SIB-15		（自然流路）	鉄塊系遺物		滓部：U、金属鉄部：過共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：砂鉄）、炭素含有量は1.5%前後の高炭素鋼
SIB-16			椀形鍛冶滓（緑青付、含鉄）		滓部：W+F、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織、銹化鉄部：過共析組織痕跡	51.05	48.11	2.62	0.26	0.01	0.06	19.62	<0.01	鍛錬鍛冶滓（緑青は廃棄後の二次的な付着の可能性が高い）
SIB-17			椀形鍛冶滓（鍛造品付）		滓部：U+W+F、鉄製品：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織、介在物：U+W+F	－	－	－	－	－	－	－	－	砂鉄起源の不純物の残る新鉄と古鉄（廃鉄器）とをあわせて鉄素材とする作業で生じた滓の可能性がある
SIB-18			鉄製品（鍛造品）		介在物：U+W+F、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相	－	－	－	－	－	－	－	－	軟鉄を熱間で鍛打成形した製品破片（始発原料：砂鉄）
SIB-19			鉄製品（鍛造品）		介在物：W、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ～亜共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	炭素含有量の異なる鉄素材を合わせ鍛えした鍛造品の可能性が高い
SIB-20			鉄製品（鋳造品）		金属鉄部：亜共晶組成白鋳鉄組織	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳造鉄器片
SIB-21		－	青銅製品（両端鋳鉄）		中央部：鉛青銅（砒素・亜鉛を含む）、両端：共晶組成白鋳鉄組織痕跡	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳掛など鋳造鉄器の補修部分の破片の可能性が高い

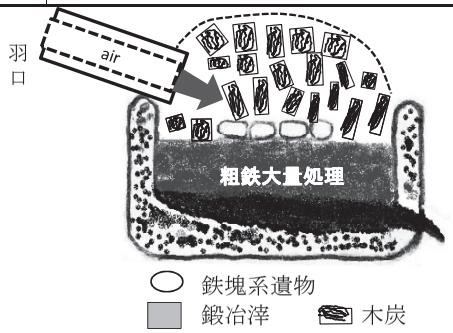
U:Ulvöspinel（2FeO･TiO2）、I: Ilmenite（FeO･TiO2）、R:Rutile（TiO2）W:Wustite（FeO）、F:Fayalite（2FeO･SiO2）、M:Magnetite（Fe3O4）、He:Hematite（Fe2O3）

2011.9.15～16

Table 4　芝原遺跡出土製鉄・鍛冶・銅関連遺物の分析（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

＜前近代製鉄一貫体制操業を実証する遺物を出土＞:マスプロ方式製鉄一大コンビナート遺跡(精錬鍛冶：下部排滓新機軸採用、羽口内径30㎜統一)

生産工程	製　鉄 高チタン砂鉄製錬 砂鉄SBH-1 11.72%TiO_2、0.50%P_2O_5	精錬鍛冶 粗鉄大量処理 ＜操業中断なく排滓＞ 粗鉄処理 故鉄（スクラップ）処理、表層slag化した中核に釘状鉄器遺存：出土位置不明一括資料(年代不詳)	高温沸し鍛接	鍛錬鍛冶 低温素延	低温火造	製　品
遺　構	B－18 製鉄関連遺構1号(中世) 製鉄関連遺構4号(近世)	A'～J－18 自然流路1 大溝（鍛冶工房からの排出物を大量廃棄）総重量記録必要、生産状況を表わす EF－18 製鉄関連遺構13号(近世) 鍛錬鍛冶工房推定地		製鉄関連遺構3･6号(中世)，9･11･12号(近世) 粒状滓、鍛造剥片検出（9/15）		
遺　物	砂鉄集積　EF－18 炉壁(内面、半還元砂鉄付着) 製錬滓(滑らか肌、緻密質) 鉄塊系遺物、再結合滓	←― 大・中・小椀形鍛冶滓 ―→ 鉄塊系遺物・含鉄椀鍛冶滓 SIB-6、7：精錬鍛冶滓 SIB-10,11：精錬系流出孔滓	SIB-8：高温沸し鍛接椀形鍛冶滓 SIB-14,15：高Ti濃度滓付着鉄塊	←― ガラス質椀形鍛冶滓 ―→ (5点実測図) 製鉄関連遺構19号(近世)：ガラス質椀形鍛冶滓と微細遺物は共伴 SIB-9：低温鍛冶滓		
課　題	どんな鉄を造ったか(炭素量) ＜粗鉄の組成＞	椀形滓形状から鍛冶炉の形態を推定 → 第228図1773～第332図1789 平面が長方形、楕円形、円形で大・中・小存在 断面：椀形　浅～深、扁平　炉底付着物 → 粘土、砂粒、木炭痕				鉄製品の特定
情　報 (特記事項)	高温操業 slag鉱物相：イルミナイト 17.92%TiO_2　ウルボスピネル	・羽口：内径30㎜ 肉厚20～30㎜、ずん胴タイプに統一、マスプロ方式製羽口充当、精錬・鍛錬鍛冶両方使用か ・平面長方形椀形滓の存在、類例少ない（岡山県灘崎町彦崎片屋からの表採品）　(12048から同一タイプ羽口出土) ・流出孔滓の存在(島根県板屋遺跡に類例)　粗鉄の大量除滓　高温排滓のslag				



精錬鍛冶炉断面模式図

報告書紹介
①水巻町教育委員会1996『宮尾遺跡』江戸初期鍛冶炉　浅～深タイプ一挙検出
②岡山市教育委員会2009『研究紀要』第1号　年代不明　長方形椀形滓採取
③島根県教育委員会1998『板屋Ⅲ遺跡』精錬鍛冶炉の前壁排滓孔から鉄滓を流し出す

※ 芝原遺跡の調査指導参照(H14.11.14～15、H15.8.5)

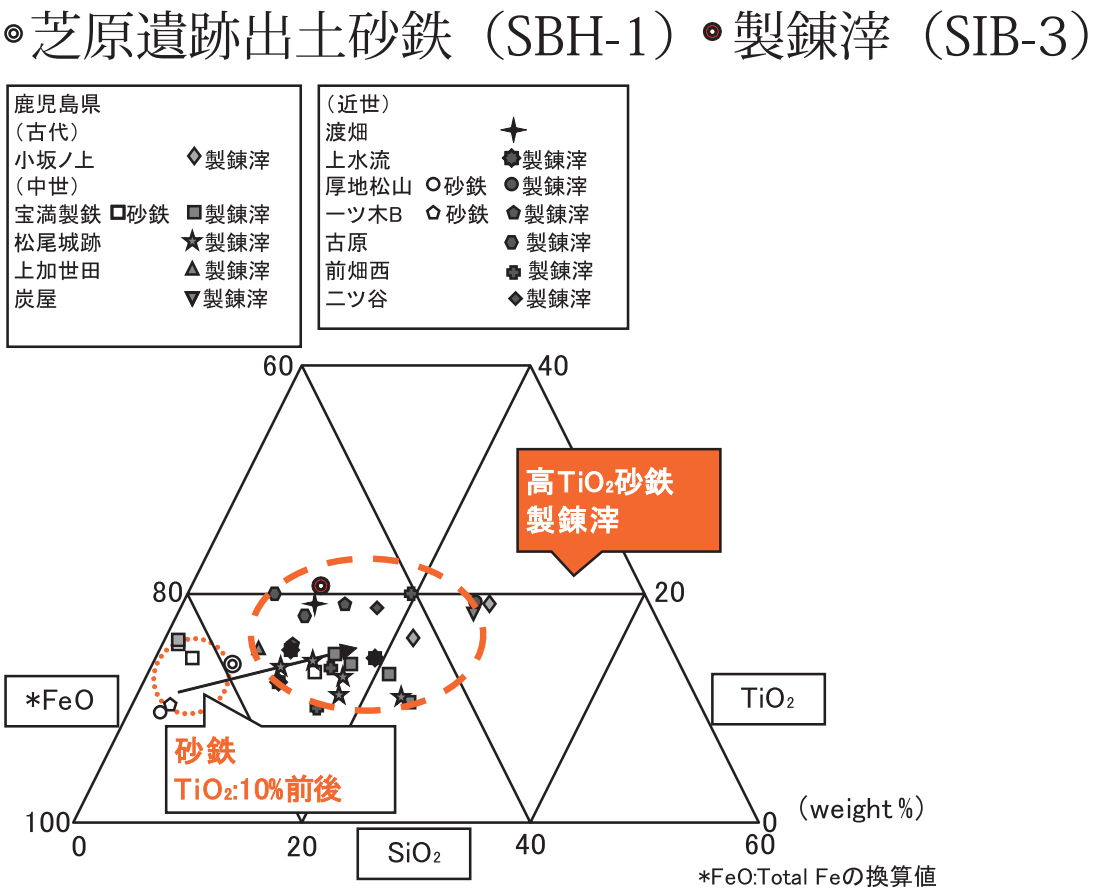


Fig. 1　鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄。製錬滓の化学組織

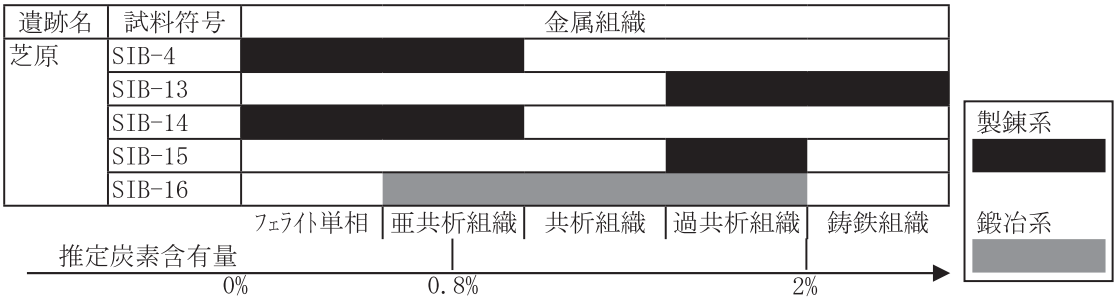
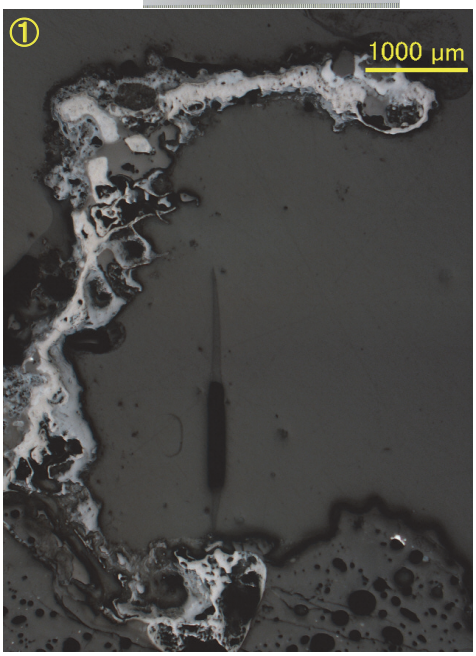
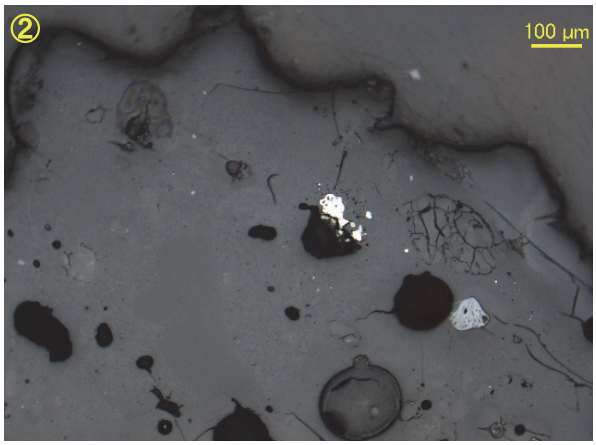
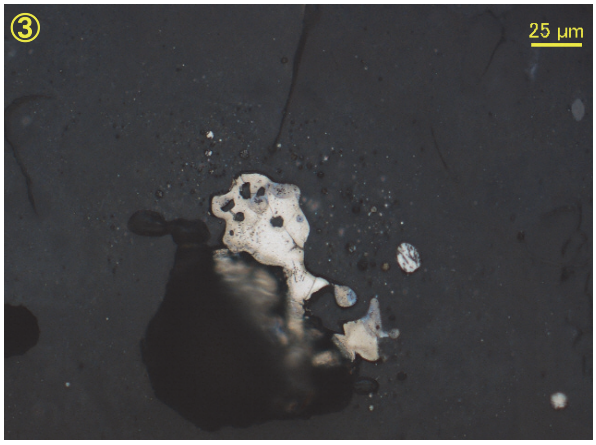


Fig. 2　芝原遺跡出土鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の断面金属組織調査結果

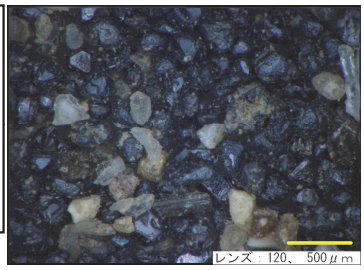
SIB-1　炉壁
①～③暗灰色部:内面表層ｶﾞﾗｽ質滓、砂粒散在、明灰色部:錆化鉄、微小明白色粒:金属鉄、ﾅｲﾀﾙ etch ﾌｪﾗｲﾄ単相

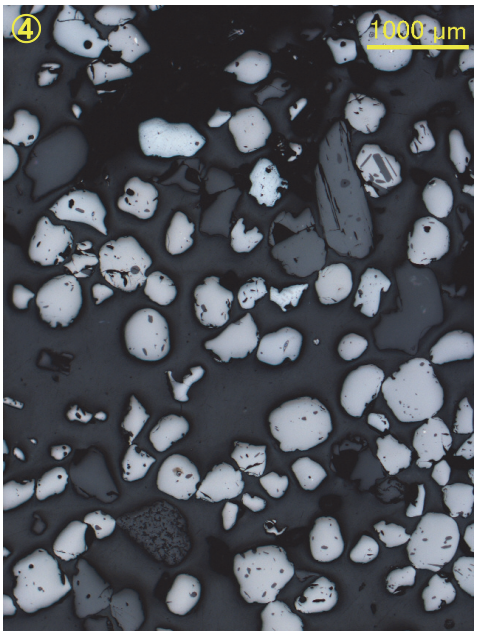


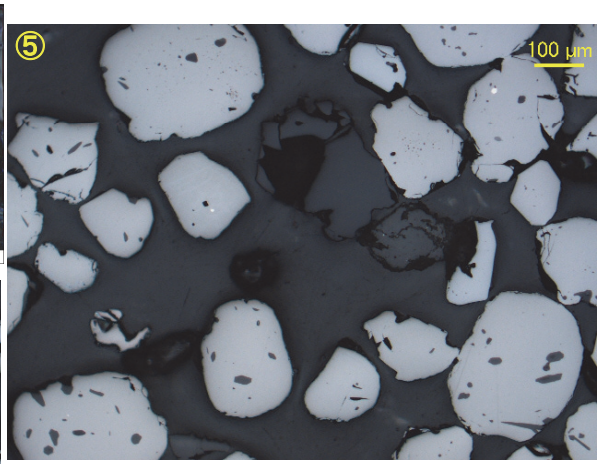




SIB-2　砂鉄
④～⑥灰褐色粒:砂鉄(含ﾁﾀﾝ鉄鉱)、砂鉄粒内多角形状暗色鉱物:燐灰石、淡黄色鉱物:黄鉄鉱、
暗色粒:斜長石、角閃石、輝石類などの造岩鉱物







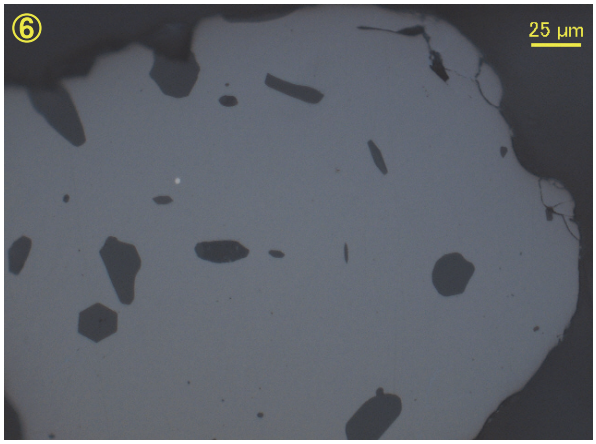
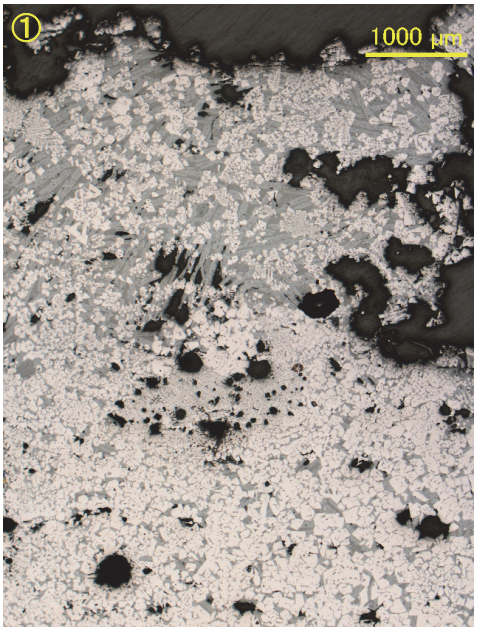
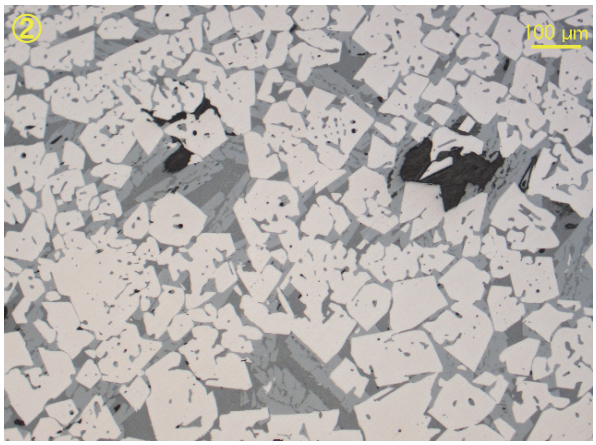
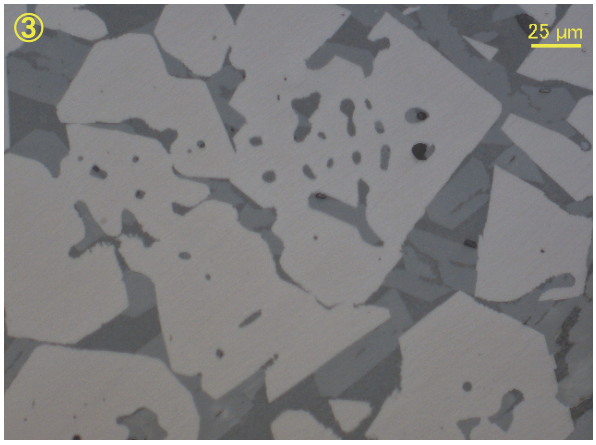


Photo. 1　炉壁・砂鉄の顕微鏡組織

SIB-3
炉外流出滓
①～③滓部:ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ







SIB-4
鉄塊系遺物
④明白色部:金属鉄、ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織（燐偏析）、滓部:ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ・ｲﾙﾐﾅｲﾄ
⑤金属鉄部、⑥滓部拡大

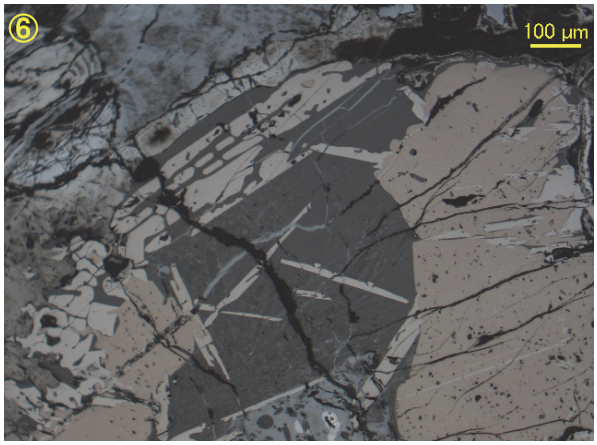
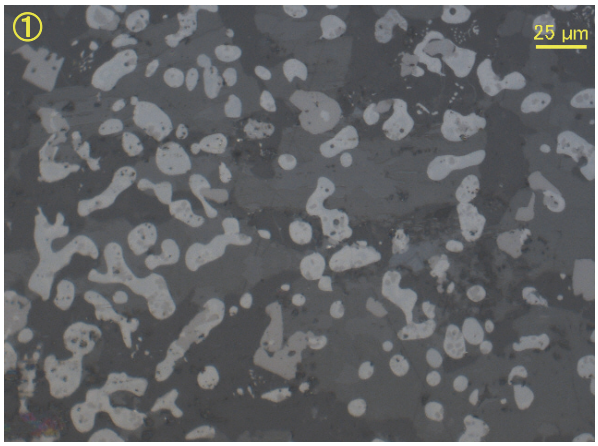
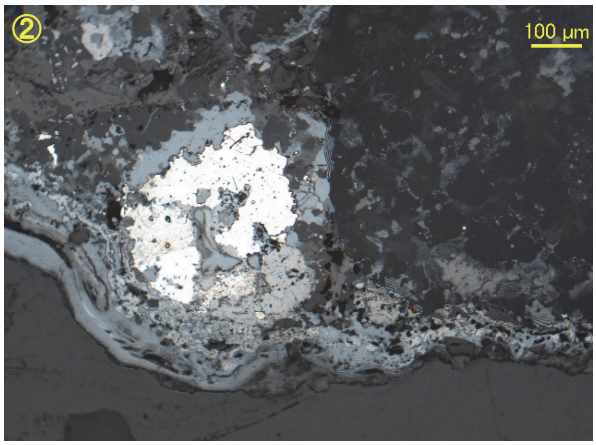
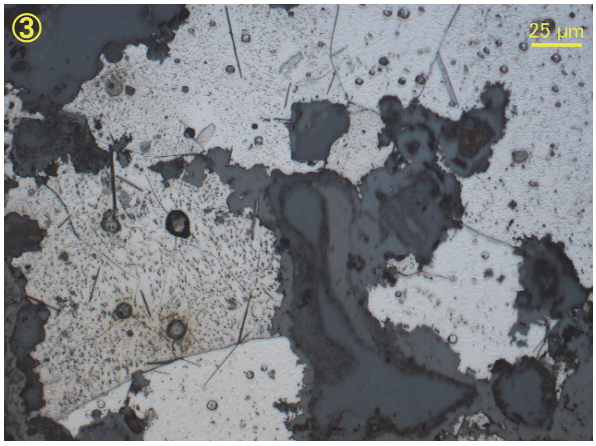


Photo. 2　炉外流出滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

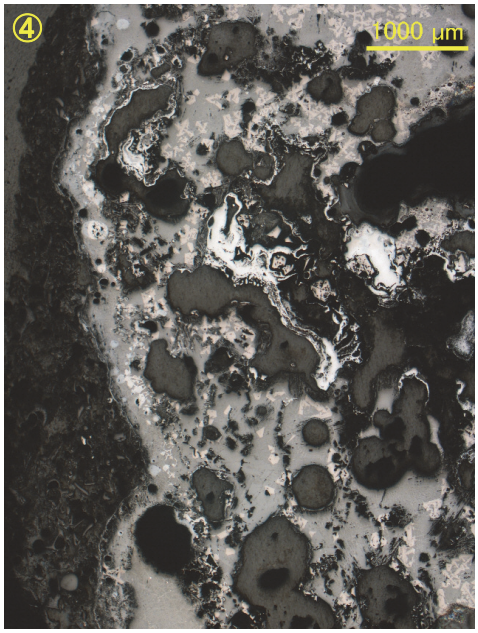
SIB-5　羽口
①付着滓部:ウスタイト・ウルボスピネル・ファヤライト
②③明白色粒:金属鉄、ナイタルetch フェライト単相







SIB-6
椀形鍛冶滓
④～⑥明灰色部:銹化鉄、滓部:ウルボスピネル・微細ウスタイト・ファヤライト



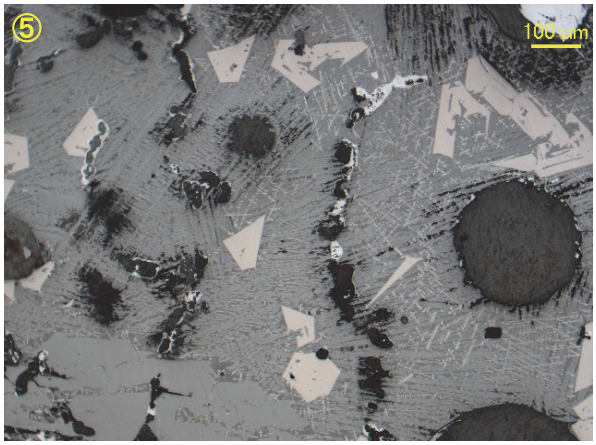
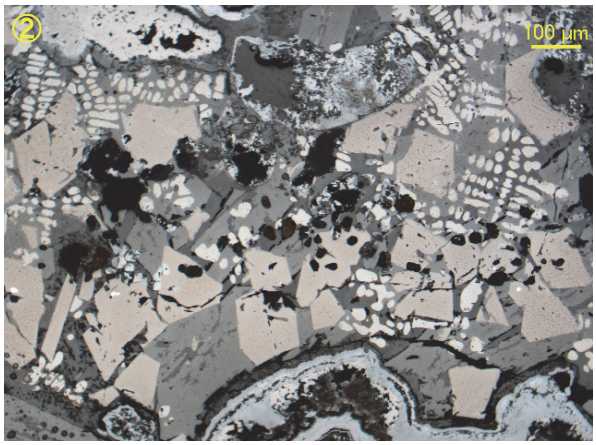
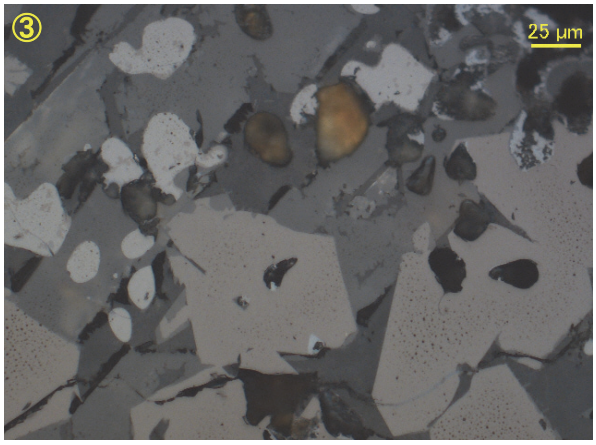


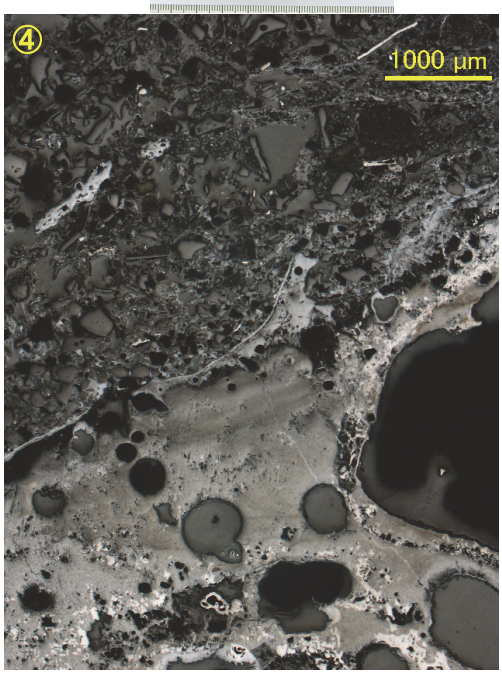
Photo. 3　羽口・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

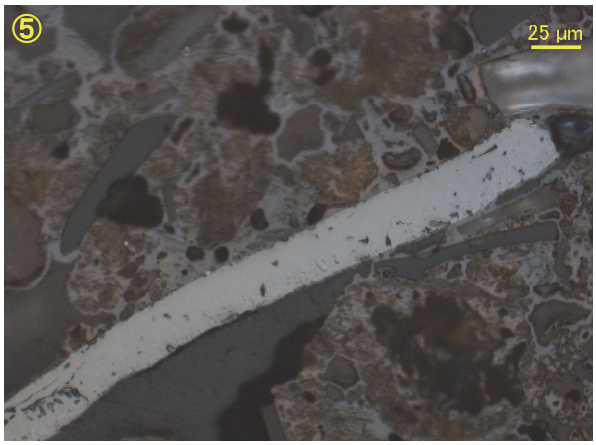
SIB-7
椀形鍛冶滓
①～③滓部:ウルボスピネル・ウスタイト・ファヤライト、不定形青灰色部:銹化鉄





SIB-8
椀形鍛冶滓
④上側:表層付着土砂、鍛造剥片混在、下側:滓部、ウスタイト・ファヤライト、銹化鉄部散在、⑤鍛造剥片拡大、⑥滓部拡大





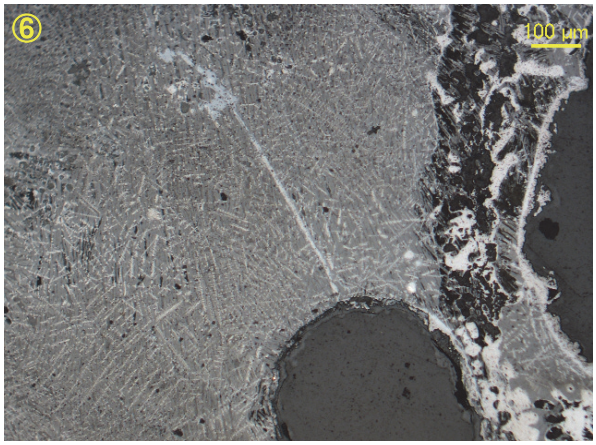
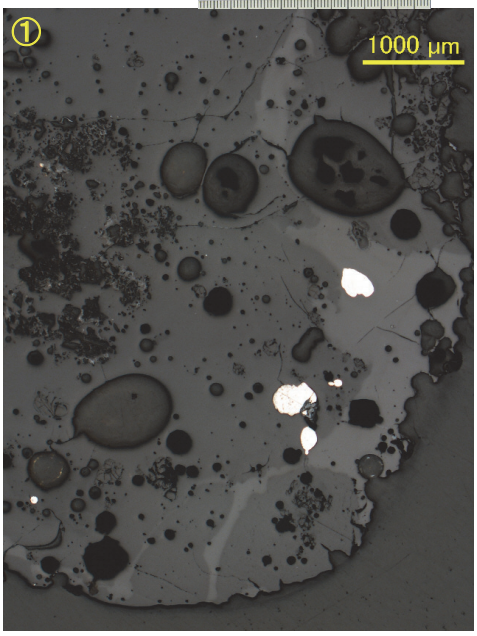
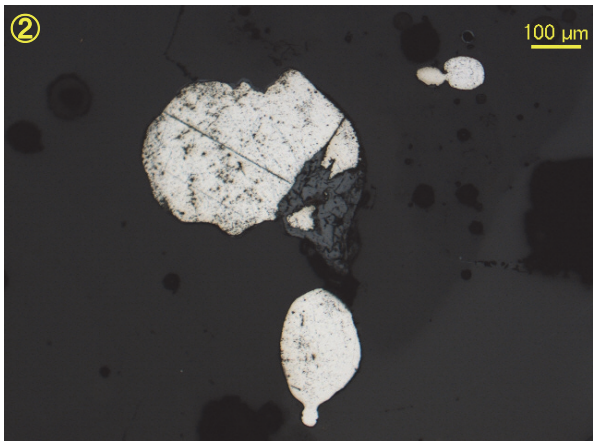
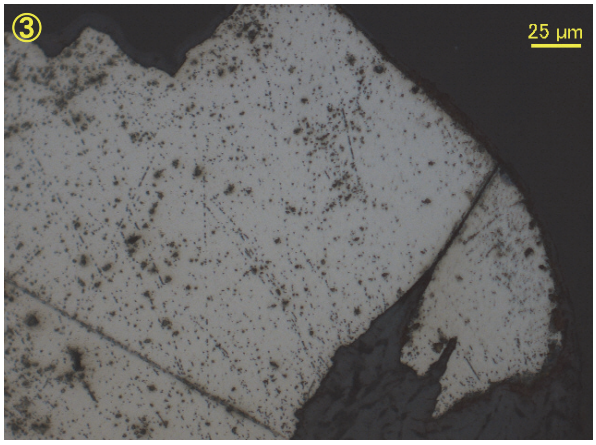


Photo. 4　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

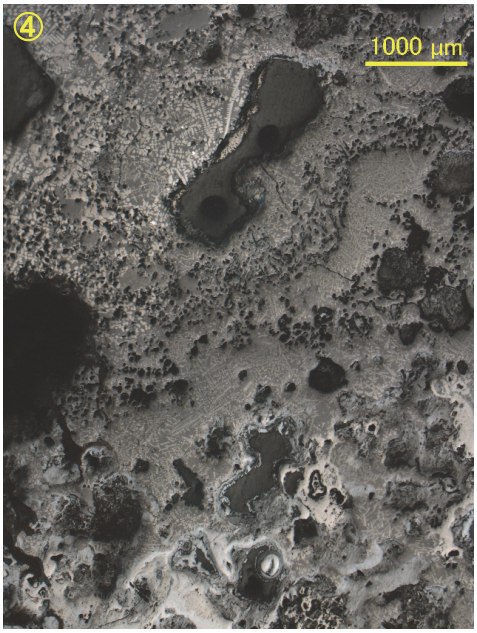
SIB-9
椀形鍛冶滓
(ｶﾞﾗｽ質滓)
①ｶﾞﾗｽ質滓、被熱砂粒散在、明白色粒:金属鉄
②③金属鉄粒、ﾅｲﾀﾙ etch ﾌｪﾗｲﾄ単相

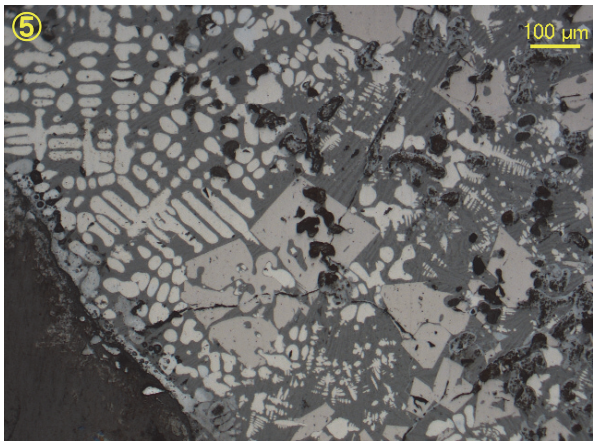






SIB-10
流出孔滓
④～⑥滓部:ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ・ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ





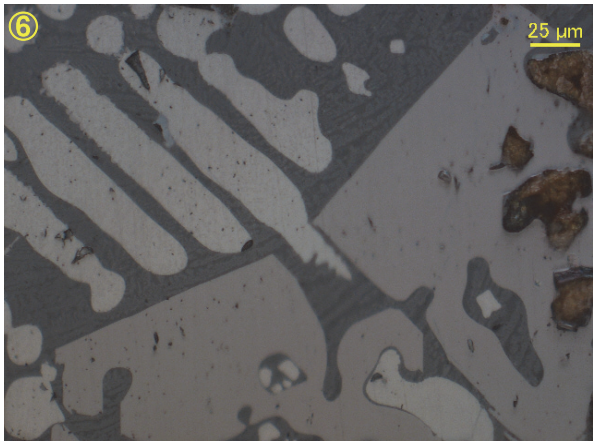
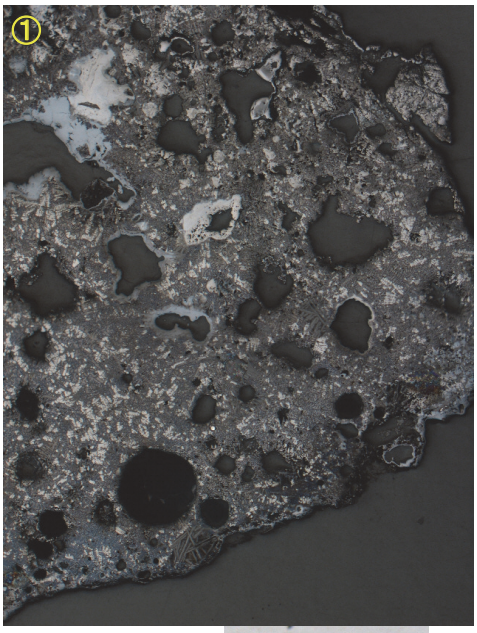
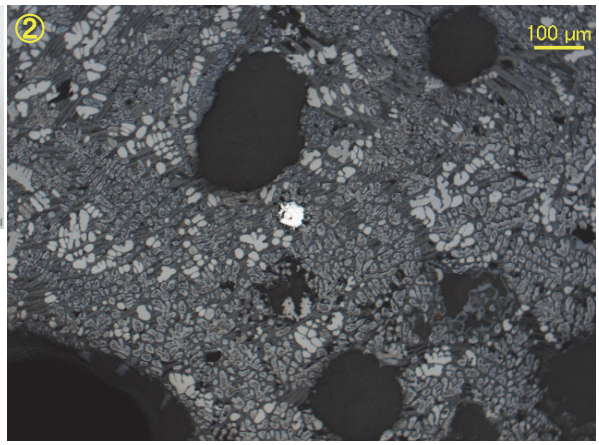
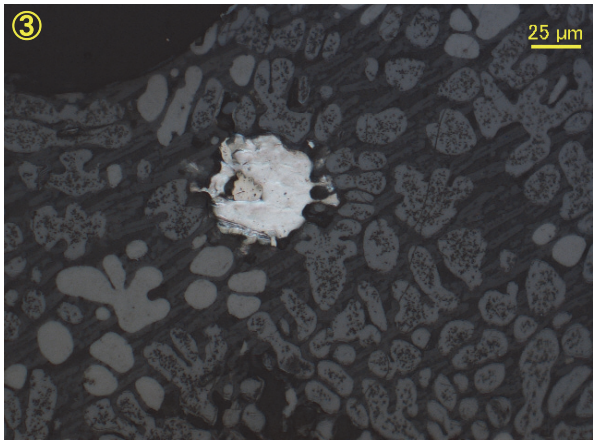


Photo. 5　椀形鍛冶滓・流出孔滓の顕微鏡組織

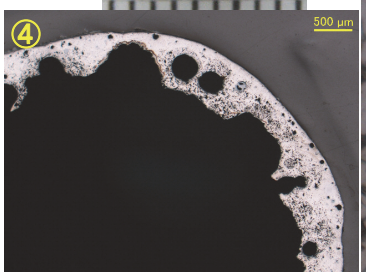
SIB−11
流出孔滓
①〜③滓部:ｳｽﾀｲﾄ･微細ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ
②③中央:微小金属鉄粒、ﾅｲﾀﾙetch ﾌｪﾗｲﾄ単相

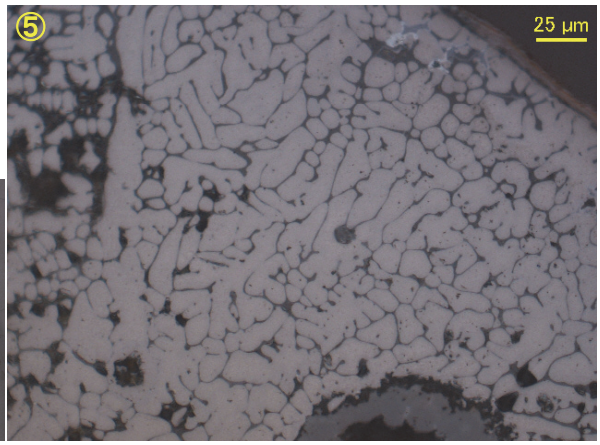




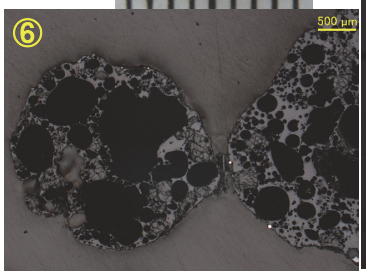


SIB−12−ｲ−1
粒状滓
④⑤ｳｽﾀｲﾄ凝集





SIB−12−ｲ−2
粒状滓
⑥⑦ｶﾞﾗｽ質滓、微小金属鉄粒



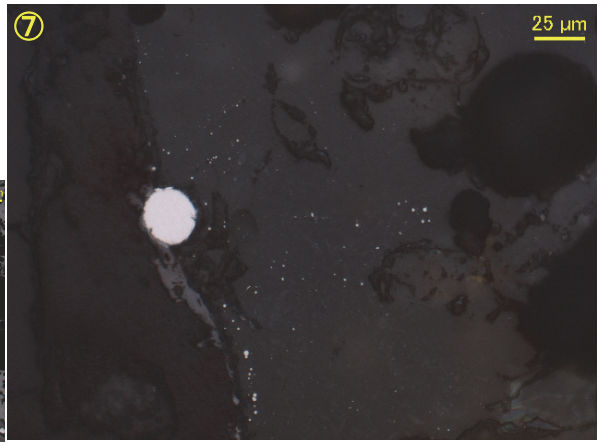
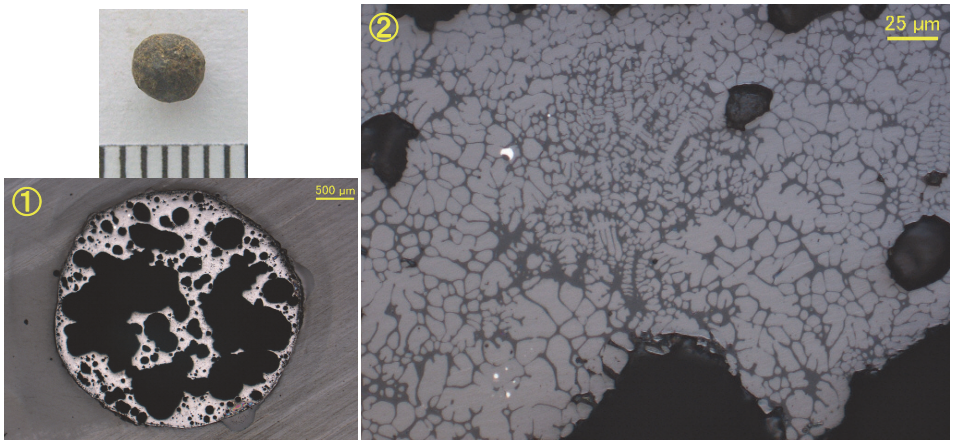
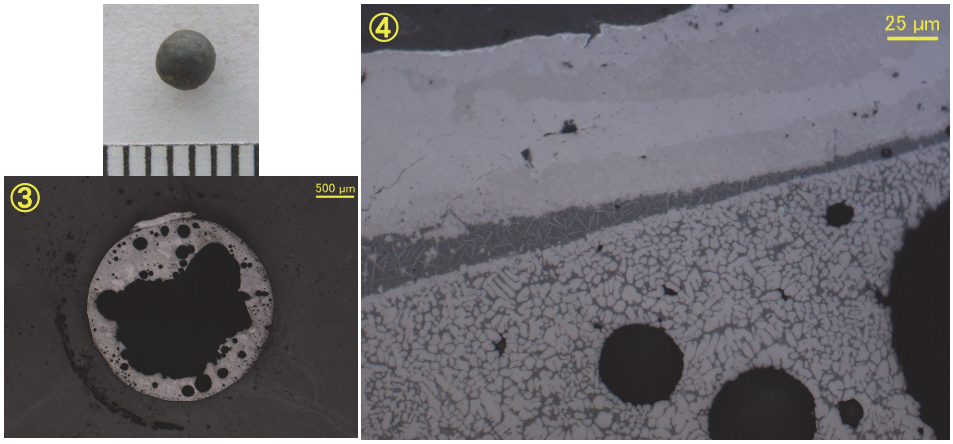


Photo. 6　流出孔滓・粒状滓の顕微鏡組織

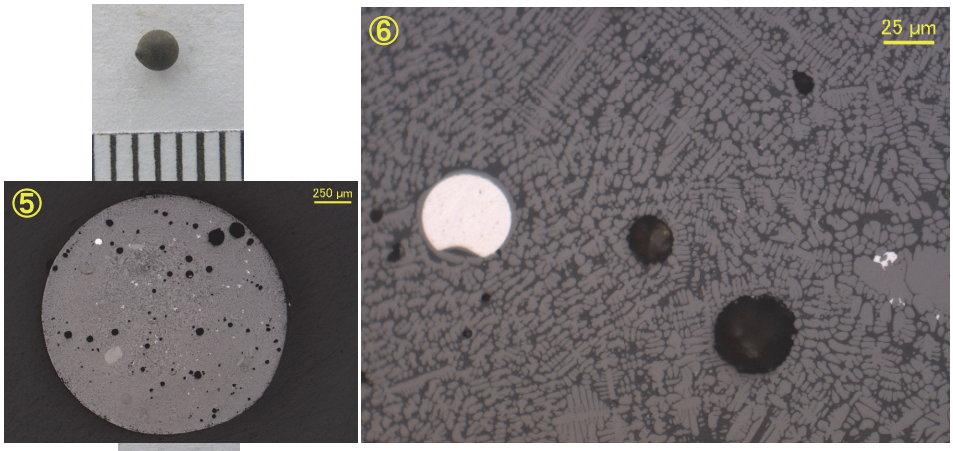
SIB-12-イ-3
粒状滓
①②滓部:ｳｽﾀｲﾄ、微小明白色粒:金属鉄



SIB-12-イ-4
粒状滓
③④上側:鍛造剥片溶着滓部:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-12-イ-5
粒状滓
⑤⑥滓部:ｳｽﾀｲﾄ、微小明白色粒:金属鉄



SIB-12-イ-6
粒状滓
⑦⑧滓部:ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ

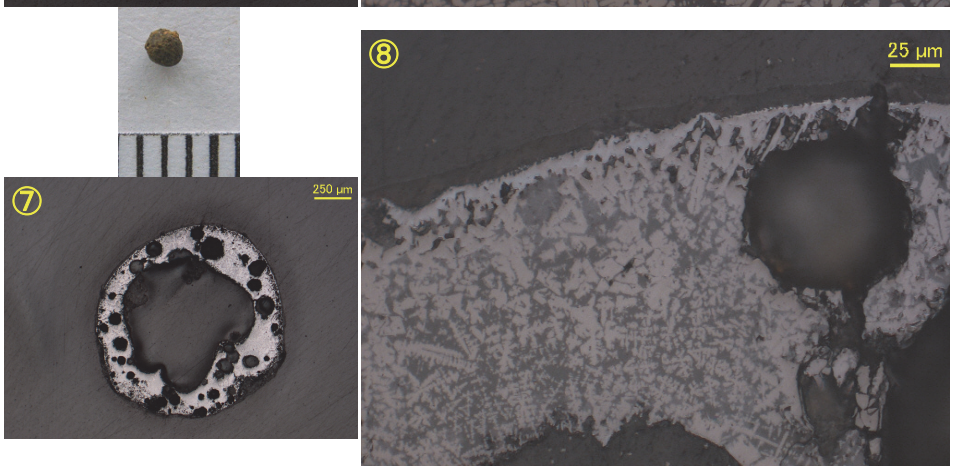
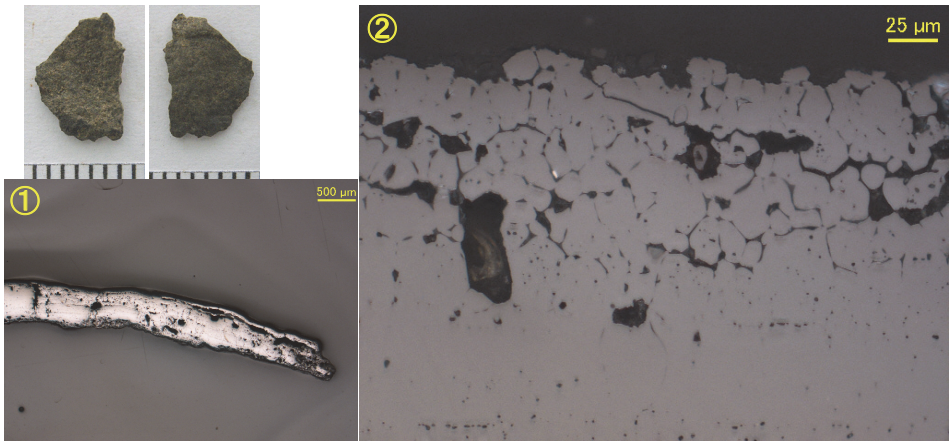
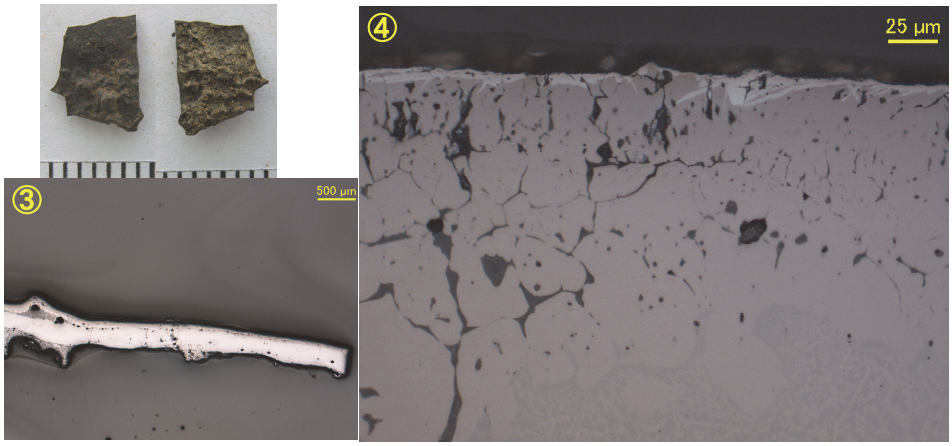


Photo. 7　粒状滓の顕微鏡組織

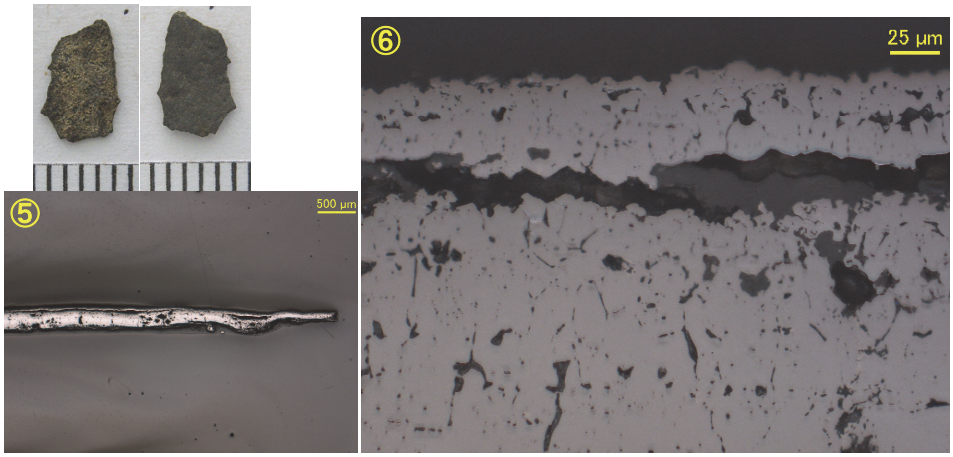
SIB-12-ロ-1
鍛造剥片様遺物
①②ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-2
鍛造剥片
③④明白色層:ﾍﾏﾀｲﾄ、灰褐色結晶ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ、灰色層:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-3
鍛造剥片様遺物
⑤⑥ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-4
鍛造剥片様遺物
⑦⑧明白色部:ﾍﾏﾀｲﾄ、灰褐色部:ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ

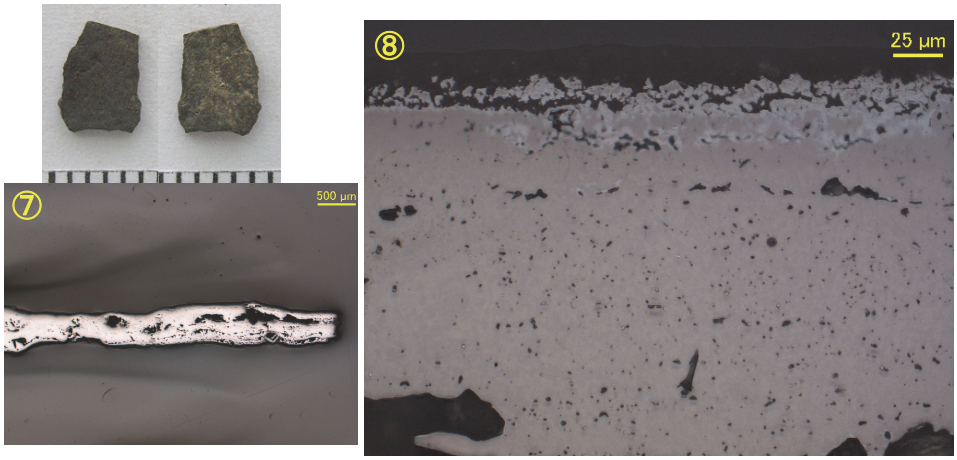
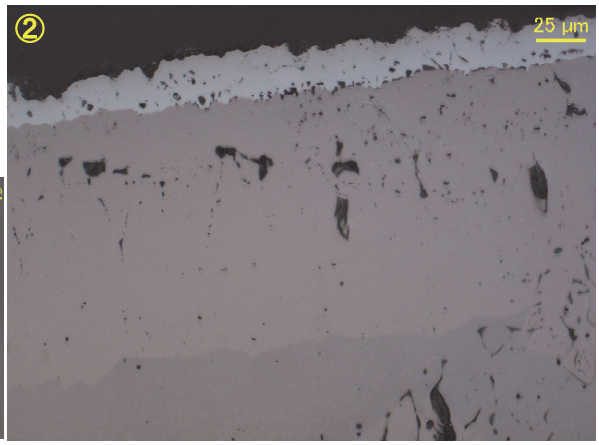
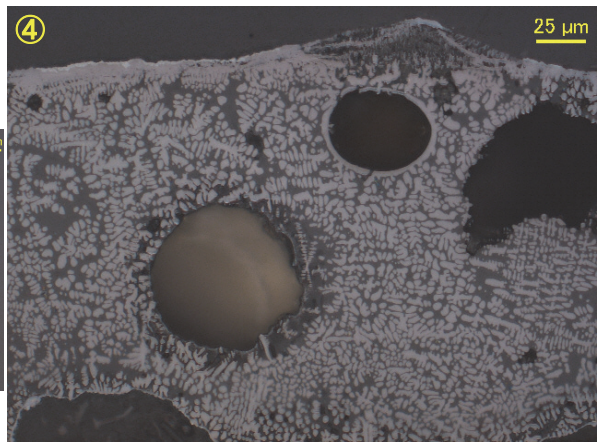


Photo. 8　鍛造剥片の顕微鏡組織

SIB-12-ロ-5
鍛造剥片
①②明白色層:ﾍﾏﾀｲﾄ、灰褐色層ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ、灰色層:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-6
鍛造剥片様遺物
③④鍛冶滓破片、滓部:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-13
鉄塊系遺物
⑤滓部:黒色ｶﾞﾗｽ質滓
金属鉄部:ﾅｲﾀﾙetch
過共析組織～共晶状黒鉛組織
⑥共晶状黒鉛組織拡大
⑦過共析組織拡大

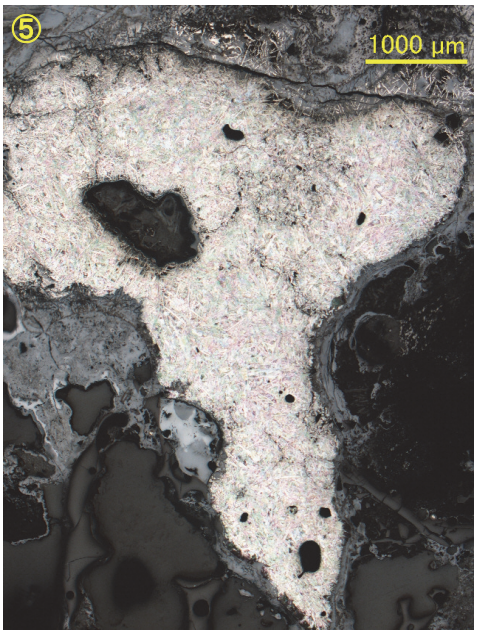
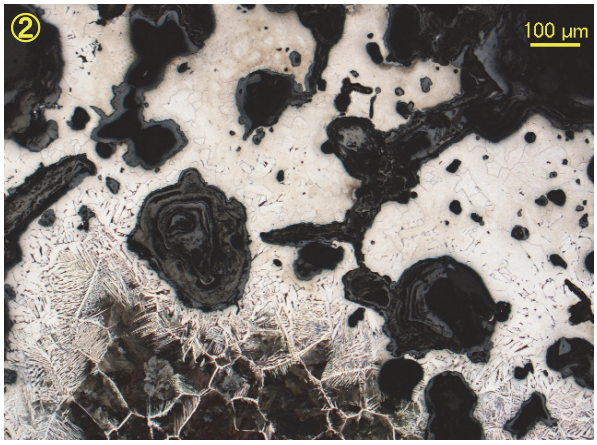
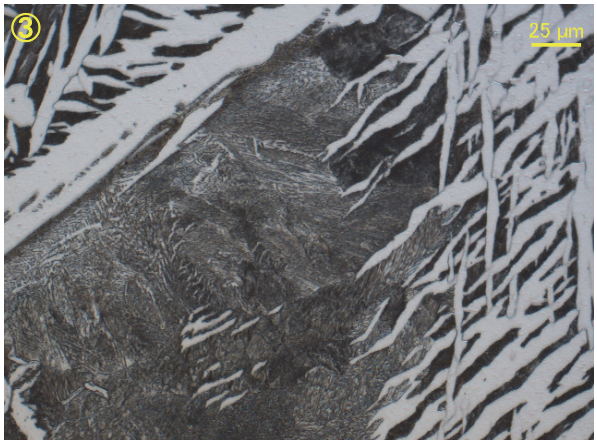
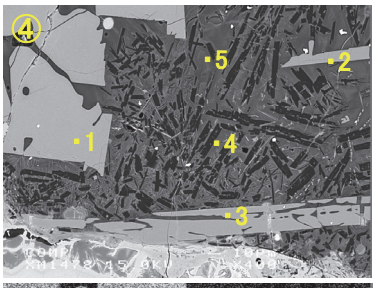


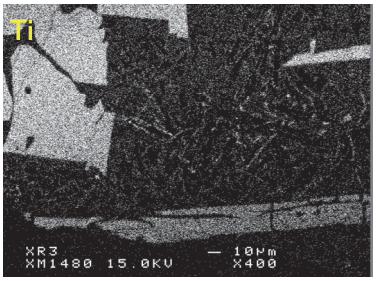
Photo. 9　鍛造剥片・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

SIB−14
鉄塊系遺物
①亜共析組織、燐化鉄共晶、②③フェライト単相〜亜共析組織





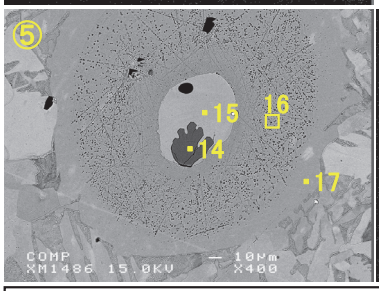


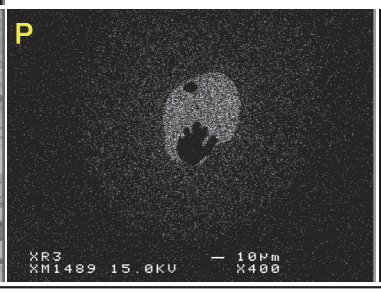


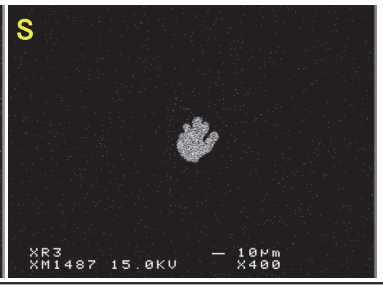
定量分析値

Element	1	2	3	4	5
Na_2O	0.022	–	–	1.960	0.170
MgO	3.248	4.372	4.284	0.407	5.100
Al_2O_3	4.392	4.525	4.352	30.432	10.022
SiO_2	0.121	0.097	0.082	47.963	47.208
P_2O_5	0.008	0.014	–	0.022	0.131
S	–	–	–	0.005	0.029
K_2O	0.011	0.054	0.042	0.890	1.383
CaO	0.019	0.174	0.117	10.474	5.672
TiO_2	79.233	77.083	78.329	2.675	5.164
Cr_2O_3	0.171	0.032	0.112	0.044	–
MnO	0.519	1.102	1.100	0.396	4.236
FeO	9.152	9.255	10.090	1.569	14.116
As_2O_5	0.485	0.458	0.714	–	0.081
V_2O_3	3.506	1.565	1.527	0.021	0.065
PbO	–	–	0.022	–	0.012
CuO	–	0.027	0.003	0.039	0.018
SnO_2	0.068	–	–	–	–
MoO_3	0.007	–	–	–	–
Total	100.962	98.758	100.774	96.897	93.407

Element	14	15	16	17
Cu	0.128	0.056	0.053	–
Pb	–	0.023	0.008	–
Sn	–	0.001	–	–
Zn	–	–	–	–
Fe	61.691	86.357	97.433	99.006
As	–	0.112	0.056	–
Sb	0.029	–	–	0.011
Bi	0.009	–	–	–
Se	0.029	0.027	0.002	–
Ag	–	0.010	–	–
O	0.089	0.301	0.739	0.049
S	35.965	0.230	0.031	0.012
C	0.944	–	–	0.003
P	0.008	21.985	3.143	0.895
Mn	0.377	0.011	0.008	–
Ti	0.047	0.010	0.009	–
V	0.684	0.004	–	0.024
Total	100.000	109.127	101.482	100.000







滓部および鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）・特性X線像

Photo. 10　鉄塊系遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果